

独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
第6冊

# 旧練兵場遺跡 VI

第一分冊

2016.3

香 川 県 教 育 委 員 会  
独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター



第 28 次調査 7-10 ~ 14 区 全景 (北西より)



上：第 28 次調査 7-10・11 区 全景（北西より）

下：第 28 次調査 7-10～14 区 全景（南より）



第 29 次調査 1・2 区 全景 (北より)



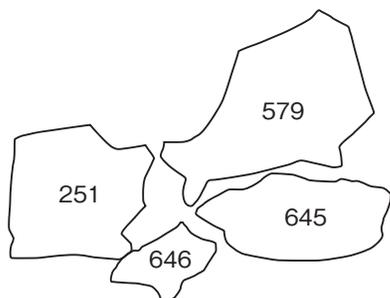
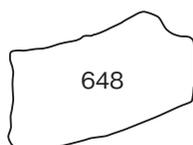
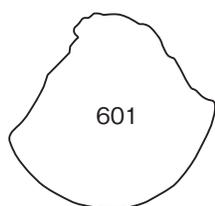
第 30 次調査 1E 区 完掘状況（北より）

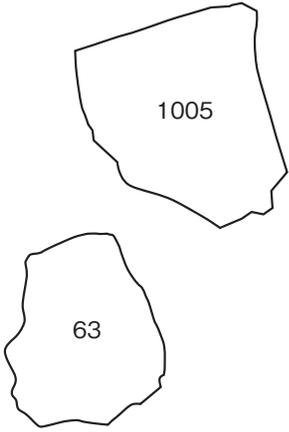


上・下：第28次調査7-11区SK01遺物出土状況（西より）



第 28 次調査 7-11 区 SK01 出土土器





# 序 文

本書は独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴い平成 22 年度から平成 24 年度に実施した旧練兵場遺跡第 28・29・30・36 次調査の報告です。旧練兵場遺跡はすでに刊行されている 5 冊の報告書によって、弥生時代から中世にいたる集落遺跡で、特に弥生時代の集落跡としては西日本でも有数の規模を誇る事が明らかにされています。

今回報告するのは善通寺病院統合事業に伴う調査の中でも西側に当たる調査区、及び南側・東側の小調査区で、他の調査区同様、弥生時代から中世にわたる数多くの遺構・遺物が発掘されました。特に西側に当たる調査区では弥生時代の遺構・遺物だけではなく、古代の土器を焼成した窯跡や掘立柱建物跡などがみつき、古代においても集落が営まれたことがわかりました。これらの成果はこの付近の歴史を復元するうえで重要な資料となるものです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました独立行政法人国立病院機構善通寺病院（現四国こどもとおとなの医療センター）をはじめ関係機関並びに地元関係各位に、厚くお礼申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護について今後ともいっそうのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月

香川県埋蔵文化財センター

所長 真鍋 昌宏

# 例 言

1. 本書は、香川県善通寺市仙遊町に所在する旧練兵場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した調査は、独立行政法人国立病院機構善通寺病院（現、四国こどもとおとなの医療センター）から香川県教育委員会に委託され、香川県教育委員会を調査主体とし、香川県埋蔵文化財センターを調査担当として実施した。調査・報告書作成に伴う費用は、全て独立行政法人国立病院機構善通寺病院が負担した。
3. 現地での第28次調査は平成22年4月1日から平成23年3月31日、第29次調査は平成23年4月1日から8月31日、第30次調査は平成23年11月1日から平成24年2月28日、第36次調査は平成24年9月1日から9月30日まで実施した。整理作業は香川県埋蔵文化財センターにて平成25年4月1日から平成27年3月31日まで実施した。
4. 現地での発掘調査の担当は以下のとおりである。

## 第28次調査

主任文化財専門員	森 格也
主任文化財専門員	木下晴一
文化財専門員	森下友子
文化財専門員	蔵本晋司
文化財専門員	佐藤竜馬
文化財専門員	松本和彦
調査技術員	木全加珠美
調査技術員	白木 亭
調査技術員	東 潤 愛

## 第29次調査

主任文化財専門員	西村尋文
文化財専門員	山元素子
文化財専門員	蔵本晋司
文化財専門員	小野秀幸
調査技術員	塩冶千佳子
調査技術員	白木 亭

## 第30次調査

文化財専門員	信里芳紀
--------	------

## 第36次調査

主任文化財専門員	木下晴一
----------	------

5. 現地調査及び報告書作成に当たって、下記の関係機関や多くの方々の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。  
石丸恵利子（広島大学総合博物館）、平尾政幸（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、畑中英二（滋賀県教育委員会）、善通寺市教育委員会
6. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の整理作業は、第28次調査・第30次調査・第36次調査を森下友子、第29次調査を西村尋文・蔵本晋司・森下が担当した。執筆は第28次調査・第30次調査・第36次調査を森下、第29次調査を蔵本・森下が行い、蔵本の執筆部

分のみ記名した。編集は森下が担当した。

7. 本書で用いる遺構名は、基本的には現地調査で使用了ものを踏襲するが、複数の調査区にまたがる溝や河川は、現地調査の遺構名とは異なる遺構名で報告するものもある。
8. 本報告書の測地系は、既往の調査区との整合を図るため旧来の日本測地系を使用し、平面直角座標は第Ⅳ系を使用した。標高は全て T.P. (東京湾平均海面) により表示した。
9. 収録した写真や図面、自然科学的分析については、下記のように委託した。  
航空写真 (株式会社 四航コンサルタント)、土器実測 (株式会社イビソク)、遺物写真 (岡村印刷工業株式会社)、赤色顔料分析 (株式会社パレオ・ラボ)、玉類材質分析 (株式会社パレオ・ラボ)、花粉分析 (川崎地質株式会社)、植物珪酸体分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)、植物珪酸体分析・樹種同定 (株式会社古環境研究所)、花粉・珪藻分析 (文化財調査コンサルタント株式会社)、樹種鑑定 (パリノ・サーヴェイ株式会社)
10. 本報告書における弥生時代から古墳時代初頭の土器の年代観については、信里芳紀「弥生中期後半から古墳時代初頭の土器編年」(香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ (第19次調査)』2011年)による。
11. 発掘・整理業務で作成した実測図・写真などの記録は全て香川県埋蔵文化財センターで保管しているので、活用されたい。

地図は国土地理院地形図を使用しました。

# 本文目次

## 第一分冊

第1章 調査の経過	1
第1節 発掘調査の経過	1
第2節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の立地と既往調査の概要	6
第3章 第28次調査	15
第1節 層序	15
第2節 遺構・遺物	27
第4章 第29次調査	125
第1節 層序	125
第2節 遺構・遺物	125
第5章 第30次調査	219
第6章 第36次調査	312
第1節 層序	312
第2節 遺構・遺物	312

## 第二分冊

第7章 自然科学的分析	1
第1節 河川SR01内堆積物の植物珪酸体分析	1
第2節 河川SR01内堆積物の花粉分析	6
第3節 河川SR01内堆積物の花粉、珪藻分析	13
第4節 旧練兵場遺跡における自然科学分析報告	21
第5節 旧練兵場遺跡出土土器付着赤色顔料の蛍光X線分析	29
第6節 旧練兵場遺跡出土玉類の蛍光X線分析	36
第7節 第30次調査3A区掘立柱建物SB3001出土柱材の樹種同定	46
第8章 総括	48
第1節 遺構の変遷	48
第2節 弥生時代の人形土製品	71
第3節 旧練兵場遺跡の古代	72

# 挿図目次

図1	調査区割図	5	図55	7-10区 SP127	73
図2	旧練兵場遺跡の位置 (1/25,000)	6	図56	7-10区 SK03	74
図3	多度津町・善通寺市付近航空写真 (1948年 米軍撮影)	7	図57	7-10区 SX01	74
図4	旧練兵場遺跡付近航空写真 (1948年 米軍撮影)	8	図58	7-11区 SK01 (1)	75
図5	善通寺病院統合事業に伴う調査区付近航空写真 (1948年 米軍撮影)	9	図59	7-11区 SK01 (2)	76
図6	既往の調査区	10	図60	7-11区 SK01 (3)	77
図7	既往の調査区 (善通寺病院付近)	11	図61	7-11区 SK01 (4)	78
図8	土層堆積図 (A)	17・18	図62	7-11区 SK03・7-11区 SK04	79
図9	土層堆積図 (B)	19・20	図63	7-11区 SK05	80
図10	土層堆積図 (C)	21・22	図64	7-12区 SK02	80
図11	土層堆積図 (D・E)	23・24	図65	7-12区 SX08・SX1101	81
図12	第28次調査7-10～12区平面図	25・26	図66	7-12区 SX11・SD101	81
図13	SD0719・SD0720・SD0804・SD1121・SD1243	28	図67	SD0709	83
図14	SD0719・SD1008・SD1019・SD1020・ SD1021・SD1022・SD1121	29	図68	SD0817 (1)	84
図15	SD1008・SD1019・SD1020・SD1021・SD0719	30	図69	SD0817 (2)	85
図16	SD1024	31	図70	SD1003	86
図17	SD1435	32	図71	SD1005	86
図18	SR01 (1)	33	図72	SD1006・SD1011 (1)	88
図19	SR01 (2)	34	図73	SD1006・SD1011 (2)	89
図20	SR01 (3)	35・36	図74	SD1012 (1)	90
図21	SR01 (4)	37・38	図75	SD1012 (2)	91
図22	SR01 (5)	39	図76	SD1015	92
図23	SR01 (6)	40	図77	SD1016	93
図24	SR01 (7)	41	図78	SD1112	94
図25	7-12区 SH02	43	図79	SD1211	95
図26	7-10区 SX04	44	図80	SD1217・SD1220	96
図27	7-11区 SK06	44	図81	SD1410 (1)	98
図28	7-11区 SX02 (1)	45	図82	SD1410 (2)	99
図29	7-11区 SX02 (2)	46	図83	SD1438	100
図30	7-11区 SX02 (3)	47	図84	SB01	102
図31	SD1010・SD1107・SD1109・SD1014	48	図85	SB01・SB09	103
図32	SD1113・SD1114・SD1115・SD1117・SD1118	50	図86	SB10	105
図33	7-10区 SH01	51	図87	SB11	106
図34	7-11区 SX03	52	図88	SB12	107
図35	7-12区 SH01	53	図89	SB17	108
図36	SB03	55	図90	SB20	109
図37	SB04 (1)	56	図91	7-10区 SK01	111
図38	SB04 (2)	57	図92	7-12区 SK07・7-12区 SK08	111
図39	SB06	58	図93	7-12区 SX01	112
図40	SB07 (1)	59	図94	7-12区 SX02	112
図41	SB07 (2)	60	図95	SD0702・SD1103	114
図42	SB08 (1)	61	図96	SD1001・SD1002	115
図43	SB08 (2)	62	図97	7-12区 SK04・7-12区 SK06・SD1205	116
図44	SB15	63	図98	柱穴・小穴出土遺物 (3)	118
図45	SB19	64	図99	柱穴・小穴出土遺物 (2)	119
図46	SB21 (1)	65	図100	柱穴・小穴出土遺物 (3)	120
図47	SB21 (2)	66	図101	遺構に伴わない遺物 (1)	121
図48	SB22 (1)	67	図102	遺構に伴わない遺物 (2)	122
図49	SB22 (2)	68	図103	遺構に伴わない遺物 (3)	123
図50	SB23	69	図104	7-8区 SE01	124
図51	SB24	70	図105	第29次調査1・2区平面図	126
図52	SB25	71	図106	第29次調査南部平面図	127・128
図53	SB44	72	図107	西壁土層断面図-1	129
図54	7-10区 SK02	73	図108	西壁土層断面図-2	130
			図109	SB06	131
			図110	SB07	132
			図111	SB08	133

図 112	SB10	134	図 172	SD07・SD08・SD21・SD34・SD64 (2)	180
図 113	SP353・SP354	134	図 173	SD09・SD10・SD11・SD12・SD13B・SD19	182
図 114	SP355・SP356	135	図 174	SD09	184
図 115	SP365	136	図 175	SD09・SD19・SD1433・SD1440	185
図 116	SP426	136	図 176	SD09・SD11・SD19	186
図 117	SP427	137	図 177	SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (2)	187
図 118	SP483	137	図 178	SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (3)	188
図 119	SP484・SP489	138	図 179	SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (4)	189
図 120	SP506	138	図 180	SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (5)	190
図 121	SP514	138	図 181	SD09・SD11・SD12・SD13B・SD19 (6)	191
図 122	SP543	139	図 182	SD10・SD36	192
図 123	SK20	139	図 183	SD26・SD13B	193
図 124	SX19	139	図 184	SD19A・19B	194
図 125	SX25	140	図 185	SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・ SD20・SD22・SD23 (1)	195
図 126	SX40	141	図 186	SD13A・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・ SD20・SD22・SD23 (2)	196
図 127	SD70	143	図 187	SD25	198
図 128	SR01(1)	144	図 188	SD35	198
図 129	1 区 SR01(2)	145	図 189	SD66	199
図 130	1 区 SR01(3)	146	図 190	SB05	200
図 131	1 区 SR01(4)	147	図 191	SK07	201
図 132	1 区 SR01(5)	148	図 192	SK08	201
図 133	1 区 SR01(6)	149	図 193	SX47	202
図 134	1 区 SR01(7)	150	図 194	SD01	202
図 135	1 区 SR01(8)	151	図 195	SD05	203
図 136	1 区 SR01(9)	152	図 196	SD03・SD27・SD28・SD29・SD30・SX04	204
図 137	1 区 SR01(10)	153	図 197	SD43	205
図 138	2 区 SR01(1)	154	図 198	SD46・SD53	205
図 139	2 区 SR01(2)	155	図 199	SD46・SD53 遺物(石)	206
図 140	2 区 SR01(3)	156	図 200	SD57	207
図 141	SH03 (1)	158	図 201	SD58	207
図 142	SH03 (2)	159	図 202	SD60	209
図 143	SP317	160	図 203	SD60 遺物(中層)	210
図 144	SP500	160	図 204	SD60 遺物(下層)	211
図 145	SP510	160	図 205	SK18	212
図 146	SP570	161	図 206	SD65	213
図 147	SK02	161	図 207	SD61	213
図 148	SK03	162	図 208	柱穴・小穴出土遺物	214
図 149	SK04	162	図 209	遺構に伴わない遺物 (1)	215
図 150	SK05	163	図 210	遺構に伴わない遺物 (2)	216
図 151	SK10	163	図 211	遺構に伴わない遺物 (3)	217
図 152	SK13	164	図 212	遺構に伴わない遺物 (4)	218
図 153	SK14	164	図 213	SH1001	219
図 154	SK15	164	図 214	第 30 次調査・第 29 次調査 1・2 区平面図	220
図 155	SK17	165	図 215	第 30 次調査平面図	221・222
図 156	SK19A・SK19B	165	図 216	第 30 次調査・第 29 次調査南部平面図	223・224
図 157	SX44	166	図 217	SP1002	225
図 158	SD41	166	図 218	SH1002・SH1003	226
図 159	SD50	167	図 219	SH1005・SH1006	227
図 160	SB09	168	図 220	SH1007	228
図 161	SB14 (1)	170	図 221	SH1008・SH1009	229
図 162	SB14 (2)	171	図 222	SH1010・SH1012・SH1013	230
図 163	SB15	172	図 223	SH1014	231
図 164	SP161・SP252	173	図 224	SH1015	231
図 165	SK01	174	図 225	SB1002	232
図 166	SP466 等	174	図 226	SB1003	233
図 167	SD51	175	図 227	1B 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない 遺物	234
図 168	SD42	175	図 228	SH1017	234
図 169	SD55	176			
図 170	SD59	177			
図 171	SD07・SD08・SD21・SD34・SD64 (1)	179			

図 229	SB1004	235
図 230	SB1005	236
図 231	SB1006	237
図 232	SH1019・SH1020	238
図 233	1D 区柱穴・小穴出土遺物	238
図 234	1E 区西壁土層堆積図	239・240
図 235	SB1007	241
図 236	SB1008	242
図 237	SB1009	243
図 238	SK1003	244
図 239	SD1003	244
図 240	SD1005	245
図 241	SD1006・SD1007	246
図 242	SD1008・SD1009	247
図 243	SD1433・SD08	248
図 244	1E 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物	249
図 245	SR01 1E 区南部	249
図 246	SR01 1E 区北部	250
図 247	SR01 (1)	251
図 248	SR01 (2)	252
図 249	SR03	253
図 250	1G 区土層堆積図・SH1026・SH1028・SH1029	255
図 251	1H 区土層堆積図	256
図 252	7-9 区 SH12	257
図 253	SH0122・SH1023	259
図 254	SH1025・SH1030・SH1031	260
図 255	SH1032・SH1033	261
図 256	SH1034・SH1035 (1)	262
図 257	SH1034・SH1035 (2)	263
図 258	SH1036	264
図 259	SH1037・SH1038	265
図 260	SB1011	266
図 261	7-2 区 SB08 (1)	267
図 262	7-2 区 SB08 (2)	268
図 263	7-2 区 SB08 (3)	269
図 264	7-2 区 SB12 (1)	270
図 265	7-2 区 SB12 (2)	271
図 266	1H 区柱穴・小穴出土遺物	271
図 267	2A 区・2B 区・2C 区平面図	272
図 268	2D 区・2E 区・2F 区・3A 区平面図	273・274
図 269	2A 区土層堆積図	275
図 270	2B 区・2F 区土層堆積図	276
図 271	2D 区・2E 区土層堆積図	277
図 272	SH2001	278
図 273	SH2002	279
図 274	SH2003	280
図 275	SH2004・SH2005	281
図 276	SH2006	282
図 277	SH2007	283
図 278	SH2008	284
図 279	6-3 区 SH01	285
図 280	SP2001・SP2003・SP2024・SP2028・SP2029・SP2034	286
図 281	SP2010・SP2012・SP2016・SP2021・SP2032	287
図 282	SK2004	288
図 283	ST2001・ST2002・ST2003	289
図 284	ST2001	290

図 285	ST2002	291
図 286	ST2003	292
図 287	SD2001	293
図 288	SD2002・SD2003・SD2004 (1)	294
図 289	SD2002・SD2003・SD2004 (2)	295
図 290	SD2005	296
図 291	SD2005・SD2006・SD2008・SD2009・SD2010・SD3001・SD3002・SD3003・SD3004・SD3005 (1)	297
図 292	SD2005・SD2006・SD2008・SD2009・SD2010・SD3001・SD3002・SD3003・SD3004・SD3005 (2)	298
図 293	SD2005・SD2006・SD2008・SD2009・SD2010・SD3001・SD3002・SD3003・SD3004・SD3005 (3)	299
図 294	2A 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物	300
図 295	SH3001	301
図 296	SH3002・SH3003	302
図 297	SH3004	303
図 298	SH3005	304
図 299	SH3006・SH3007	306
図 300	SB3001 (1)	307
図 301	SB3001 (2)	308
図 302	SB3002	309
図 303	SP3004	309
図 304	SP3042・SP3057	310
図 305	3A 区柱穴・小穴出土遺物及び遺構に伴わない遺物	311
図 306	第 36 次調査平面図	313
図 307	土層堆積図	314
図 308	SK01	315
図 309	SK02	315
図 310	SP01・SP02・SP03・SP04	315
図 311	SP06・SP07・08	316
図 312	SP09・SP10	316
図 313	SP11・SP12・SP13	317
図 314	SD02	317
図 315	SD01・SD03	318
図 316	SD01 出土遺物・遺構に伴わない遺物	319

## 第二分冊

図 320	SR01 埋土の模式断面図および試料採取層準	1
図 321	試料採取地点位置図	2
図 322	試料採取地点断面図	2
図 323	7-10 区 SR01 埋土での植物珪酸体含量の層位的変化	3
図 324	植物珪酸体	5
図 325	花粉分析フローチャート	7
図 326	7-6 区花粉ダイアグラム	7
図 327	7-12 区花粉ダイアグラム	8
図 328	試料採取地点平・断面図	10
図 329	花粉化石	12
図 330	調査区平面図 (試料採取地点)	13
図 331	試料採取地点断面図	13
図 332	花粉分析フローチャート	14
図 333	花粉ダイアグラム (百分率)	14
図 334	花粉ダイアグラム (含有量)	15
図 335	珪藻分析フローチャート	15

図 336	珪藻ダイアグラム	16	図 351	蛍光 X 線分析スペクトル図	41
図 337	珪藻総合ダイアグラム	16	図 352	蛍光 X 線分析スペクトル図	42
図 338	花粉化石	19	図 353	管玉の透過 X 線像 (各直交方向)	43
図 339	珪藻化石	20	図 354	不均質石材の元素マッピング図	44
図 340	炭化材出土状況	21	図 355	不均質石材の元素マッピング図	45
図 341	旧練兵場遺跡のプラント・オパール分析結果	23	図 356	旧練兵場遺跡 3-A 区 SP3015 柱痕 柱材 (管理番号 KZR9-B0063) の木材組織写真	47
図 342	旧練兵場遺跡のプラント・オパール	25	図 357	善通寺病院付近等高線図 『旧練兵場遺跡Ⅳ』掲載図に一部加筆	52
図 343	旧練兵場遺跡の炭化材	28	図 358	縄文時代	53・54
図 344	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (1)	31	図 359	弥生時代中期後半から後期初頭	55・56
図 345	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (2)	32	図 360	弥生時代後期前半から終末期	57・58
図 346	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (3)	33	図 361	古墳時代前期	59・60
図 347	赤色顔料の生物顕微鏡写真 (1) (スケール: 10 $\mu$ m)	34	図 362	古墳時代後期	61・62
図 348	赤色顔料の生物顕微鏡写真 (2) (スケール: 10 $\mu$ m)	35	図 363	古代 1(7 世紀から 8 世紀後半)	63・64
図 349	四国地方の中央構造線 (日本の地質「四国地方」 編集委員会編(1991)より引用)	38	図 364	古代 1(7 世紀から 8 世紀後半)	65・66
図 350	分析を行った玉類	40	図 365	古代 2(8 世紀末から 10 世紀)	67・68
			図 366	中世	69・70

## 表目次

表 1	発掘調査体制一覧表	2	表 11	旧練兵場遺跡のプラント・オパール分析結果	24
表 2	整理調査体制一覧表	4	表 12	旧練兵場遺跡における樹種同定結果	26
表 3	既往の調査一覧	12	表 13	分析結果一覧	30
第二分冊			表 14	分析対象一覧	36
表 4	分析試料一覧	1	表 15	玉類の半定量分析結果 (重量%)	37
表 5	7-10 区 SR01 充填堆積物の植物珪酸体含量	3	表 16	ガラス製小玉の半定量分析結果 (重量%)	37
表 6	微化石概査結果	6	表 17	土器観察表	71
表 7	旧練兵場遺跡花粉組成表	11	表 18	瓦観察表	109
表 8	微化石概査結果 (残存状況)	13	表 19	石器観察表	109
表 9	花粉組成表	18	表 20	金属器観察表	111
表 10	珪藻組成表	19	表 21	玉類観察表	112
			表 22	木器観察表	112
			表 23	動物遺存体一覧	113

## 付図

付図 1	旧練兵場遺跡Ⅵ 遺構平面図 (S=1/200)
付図 2	旧練兵場遺跡Ⅵ 遺構平面図 (S=1/100)

# 第1章 調査の経過

## 第1節 発掘調査の経過

本書では『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 旧練兵場遺跡Ⅳ』（香川県教育委員会ほか 2014.3）・『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 旧練兵場遺跡Ⅴ』（香川県教育委員会ほか 2015.2）で一部を報告した第28次調査のうち10・11・12区（本書では『旧練兵場遺跡Ⅳ』・『旧練兵場遺跡Ⅴ』と同様7-10区、7-11区と表記する）、第29次調査、第30次調査、第36次調査を報告する。

第28次調査は新病院本体部分の調査で、平成22年4月1日から平成23年3月31日まで実施した。発掘調査は4月1日から10月31日までは2班体制、11月からは1班が合流し、3班体制で実施した。調査面積は3,480㎡で、1～14区の14調査区に分けて調査を行った。平成22年4月からは1区・2区、7月からは4区・8区、10月からは6区、11月からは5区・12区・13区、12月からは9区・10区・11区、平成23年1月からは7区・14区の調査を実施した。

第29次調査も新病院本体部分の調査で、平成23年4月1日から平成23年8月31日まで実施した。発掘調査は4月1日から5月31日までは2班体制、6月1日からは1班体制で実施した。調査面積は907㎡で、1～5区の5調査区に分けて調査を行った。平成23年4月からは3～5区、5月からは1区、7月からは2区の調査を行った。

第30次調査は新病院の電気・ガス等の配管敷設や防火水槽設置に伴う附帯施設工事に伴う調査で、平成23年11月1日から平成24年2月28日まで実施した。調査面積は413㎡である。平成13年度から平成23年度上半期に実施した新病院本体部分の外側に当たる部分を調査した。いずれも細長い調査区で、大部分の調査区は幅2～3m以下である。

第36次調査は新病院の南東側の配管工事に伴う調査で、平成24年9月1日から9月30日まで実施した。調査面積は40㎡である。

以上のように本書に掲載する調査は平成22年度から平成24年度に実施したものである。いずれの調査も現地での平面測量は測量業者に打設を委託した基準杭をもとにトータルステーションを使用し、『遺構くん Cubic』（株式会社CUBIC）による図化を行った。なお、第28次・第29次調査は日本測地系、第30次・第36次調査は世界測地系を使用し、平面測量を行ったが、本書作成時に日本測地系に変換した。また、いずれの調査も断面図と一部の遺構の平面図は手描きした。遺構の写真撮影はデジタルカメラ、6×7cm判フィルムカメラ、4×5in判フィルムカメラを使用し、第28次調査ではクレーンを使用した航空写真の撮影を行った。

旧練兵場遺跡第28次調査は善通寺病院統合事業に伴う香川県埋蔵文化財センターが実施した7回目の発掘調査であることからNZR7という略号を使用した。また、第29次調査はNZR8、第30次調査はNZR9、第36次調査は10回目の発掘調査であることからNZR10という略号を使用した<sup>(1)</sup>。

いずれの調査も遺構名は調査区・遺構の種類ごとに1から順に番号を付け、出土遺物は遺構・層位・出土年月日ごとに袋または整理用コンテナに収納し、遺物登録番号を付け、台帳を作成した。

註1 旧練兵場遺跡第31次から第35次調査は善通寺市教育委員会による調査である。

平成 22 年度(第 28 次調査)

香川県教育委員会生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
<p>総括</p> <p>課長 石垣 恵一</p> <p>主幹 藤好 史郎</p> <p>総務・生涯学習推進グループ</p> <p>課長補佐 亀山 隆</p> <p>副主幹 香西としみ</p> <p>主任主事 西本 優子</p> <p>文化財グループ</p> <p>課長補佐 藤好 史郎(兼務)</p> <p>主任文化財専門員 森下 英治</p> <p>文化財専門員 小野 秀幸</p>	<p>総括</p> <p>所長 大山 真充</p> <p>次長 深谷 右</p> <p>総務課</p> <p>課長 深谷 右(兼務)</p> <p>副主幹 林 文夫</p> <p>主任 福井 良子</p> <p>主任 古市 和子</p> <p>調査課</p> <p>課長 西岡 達哉</p> <p>主任文化財専門員 森 格也</p> <p>主任文化財専門員 木下 晴一</p> <p>文化財専門員 森下 友子</p> <p>文化財専門員 蔵本 晋司</p> <p>文化財専門員 佐藤 竜馬</p> <p>文化財専門員 松本 和彦</p> <p>調査技術員 木全加珠美</p> <p>調査技術員 白木 亨</p> <p>調査技術員 東瀬 愛</p>

平成 23 年度(第 29 次・第 30 次調査)

香川県教育委員会生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
<p>総括</p> <p>課長 炭井 宏秋</p> <p>総務・生涯学習推進グループ</p> <p>課長補佐 亀山 隆</p> <p>副主幹 香西としみ</p> <p>主任主事 丸山 千晶</p> <p>文化財グループ</p> <p>課長補佐 西岡 達哉</p> <p>主任文化財専門員 森下 英治</p> <p>文化財専門員 松本 和彦</p>	<p>総括</p> <p>所長 藤好 史郎</p> <p>次長 真鍋 正彦</p> <p>総務課</p> <p>課長 真鍋 正彦(兼務)</p> <p>副主幹 林 文夫</p> <p>主任 古市 和子</p> <p>主任 中川 美江</p> <p>主任 広瀬 健一</p> <p>調査課</p> <p>課長 森 格也</p> <p>第 29 次調査</p> <p>主任文化財専門員 西村 尋文</p> <p>文化財専門員 山元 素子</p> <p>文化財専門員 蔵本 晋司</p> <p>文化財専門員 小野 秀幸</p> <p>調査技術員 塩冶 千佳子</p> <p>調査技術員 白木 亨</p> <p>第 30 次調査</p> <p>文化財専門員 信里 芳紀</p>

平成 24 年度(第 36 次調査)

香川県教育委員会生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
<p>総括</p> <p>課長 炭井 宏秋</p> <p>副課長 木虎 淳</p> <p>総務・生涯学習推進グループ</p> <p>副主幹 松下 由美子</p> <p>主任主事 丸山 千晶</p> <p>文化財グループ</p> <p>課長補佐 西岡 達哉</p> <p>主任文化財専門員 森下 英治</p> <p>文化財専門員 松本 和彦</p>	<p>総括</p> <p>所長 藤好 史郎</p> <p>次長 真鍋 正彦</p> <p>総務課</p> <p>課長 真鍋 正彦(兼務)</p> <p>副主幹 林 文夫</p> <p>主任 宮武 ふみ代</p> <p>主任 中川 美江</p> <p>調査課</p> <p>課長 森 格也</p> <p>主任文化財専門員 木下 晴一</p>

表 1 発掘調査体制一覧表

## 第2節 整理作業の経過

整理作業は平成25年4月1日から平成27年3月31日まで実施した。第28次調査で出土した遺物は28リットル入り整理用コンテナ1134箱であるが、本報告書で報告した調査区の遺物はこのうち300箱程度である。第29次調査で出土した遺物は整理用コンテナ165箱、第30次調査の遺物は48箱、第36次調査の遺物は3箱である。平成25年度は第28次調査・第29次調査・第30次調査の遺物接合と実測対象遺物の抽出を行い、一部の遺物を直営で実測し、第30次調査の土器実測を業者に委託した。平成26年度は第29次調査の土器実測を業者に委託し、石器・金属器などの実測、第36次調査の土器実測、遺構図面の整理、報告書編集作業を行い、遺物・図面を収納した。また、一部の金属器の保存処理、赤色顔料の分析・玉類の材質分析・土壌分析・木製品の樹種鑑定を委託した。

発掘調査時に付けた遺構名は基本的にはそのまま報告書に掲載したが、溝や河川については他調査区で検出された遺構との関連や連続などを考慮して名称を付け替えた。溝や河川は複数の調査区にまたがって検出されたものが多く、同一遺構に複数の遺構名が付いている場合もあった。これらの遺構は複数のうちの1遺構名を採用し、報告遺構名とした。このように本書で報告するにあたり、遺構名を付け替えた遺構に関してはその旨を本文中に明記した。

また、『旧練兵場遺跡Ⅳ』（平成26年3月刊行）では第28次調査（NZR7）の調査区の一部と第27次調査（NZR6）とを掲載したため、第27次調査（NZR6）では調査区の前に6、第28次調査（NZR7）では調査区の前に7を付け、6-1区、7-1区のように表記した。『旧練兵場遺跡Ⅴ』（平成27年2月刊行）でも同様に表記した。本報告書でも『旧練兵場遺跡Ⅳ』にならい、第28次調査は調査区の前に7を付け、7-8区というように調査区を表記する。

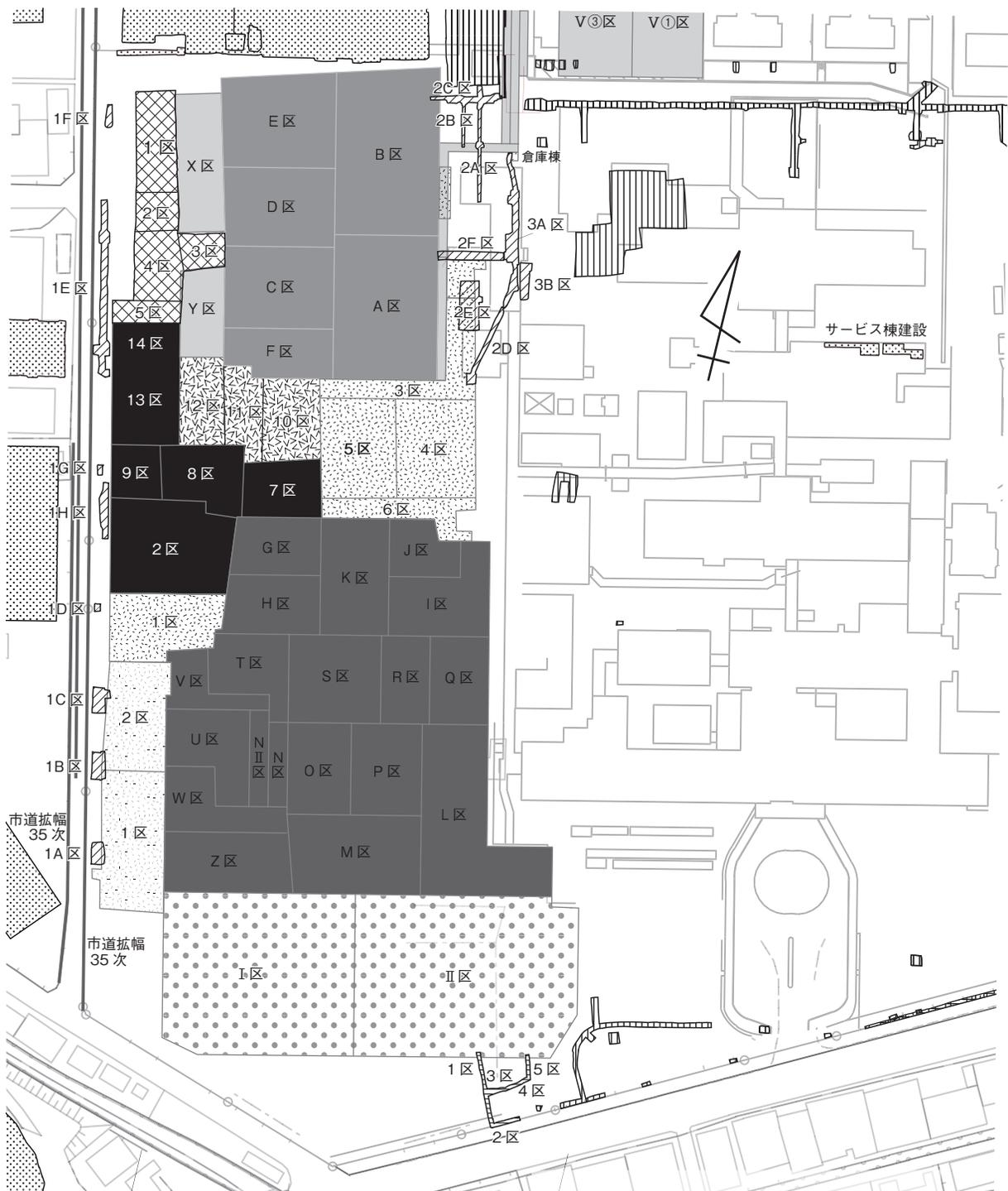
### 平成25年度

香川県教育委員会生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括 課長 増田 宏 副課長 木虎 淳 総務・生涯学習推進グループ 副主幹 松下由美子 主任主事 丸山 千晶 文化財グループ 課長補佐 片桐 孝浩 主任文化財専門員 山下 平重 文化財専門員 松本 和彦	総括 所長 真鍋 昌宏 次長 前田 和也 総務課 課長 前田 和也（兼務） 主任 宮武 ふみ代 主任 俣野 英二 主任 中川 美江 資料普及課 課長 森 格也 主任文化財専門員 木下 晴一 文化財専門員 森下 友子 嘱託 市川 孝子 加藤 恵子 川井 佐織 香西 栄理 高橋 千恵 徳永 貴美 森 后代 森國 愛子

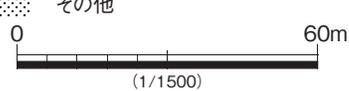
平成 26 年度

香川県教育委員会生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
<p>総括</p> <p>課長 増田 宏</p> <p>副課長 川上 泰</p> <p>総務・生涯学習推進グループ</p> <p>副主幹 松下由美子</p> <p>主任主事 和木 麻佳</p> <p>文化財グループ</p> <p>課長補佐 片桐 孝浩</p> <p>主任文化財専門員 山下 平重</p> <p>文化財専門員 松本 和彦</p>	<p>総括</p> <p>所長 真鍋 昌宏</p> <p>次長 前田 和也</p> <p>総務課</p> <p>課長 前田 和也 (兼務)</p> <p>主任 俵野 英二</p> <p>主任 寺岡 仁美</p> <p>主任 中川 美江</p> <p>資料普及課</p> <p>課長 森 格也</p> <p>主任文化財専門員 西村 尋文</p> <p>主任文化財専門員 蔵本 晋司</p> <p>文化財専門員 森下 友子</p> <p>嘱託</p> <p>猪木原美恵子 高橋 千恵</p> <p>香西 栄理 川井 佐織</p> <p>森 后代 岡崎江伊子</p> <p>山地真理子 加藤 恵子</p> <p>合田 和子 竹村 恵子</p> <p>田中沙千子 正本 由希子</p> <p>岡本 光代 市川 孝子</p> <p>中野 優美 牧野 香織</p> <p>原 節子 青屋 真理</p>

表2 整理体制一覧表



- |                                  |                      |
|----------------------------------|----------------------|
| ■ 旧練兵場遺跡I(平成8,9,15年度 第14・23次調査)  | ■ 平成22年度 第28次調査(本書)  |
| ■ 旧練兵場遺跡II(平成13,14年度 第19次調査)     | ▨ 平成23年度 第29次調査(本書)  |
| ■ 旧練兵場遺跡III(平成14,15年度 第22・23次調査) | ▨ 平成23年度 第30次調査(本書)  |
| ●● 旧練兵場遺跡III(平成16年度 第25次調査)      | ▨ 平成24年度 第36次調査(本書)  |
| ▨ 旧練兵場遺跡IV(平成21,22年度 第27・28次調査)  | ▨ 平成25年度 第37次調査(未報告) |
| ■ 旧練兵場遺跡V(平成22年度 第28次調査)         |                      |
| ●● 其他                            |                      |



『旧練兵場遺跡IV』、『旧練兵場遺跡V』及び本書では編集の都合上  
 第27次調査(略号NZR6)の調査区名は1区を6-1区、  
 第28次調査(略号NZR7)の調査区名は1区を7-1区と表記する

図1 調査区割図

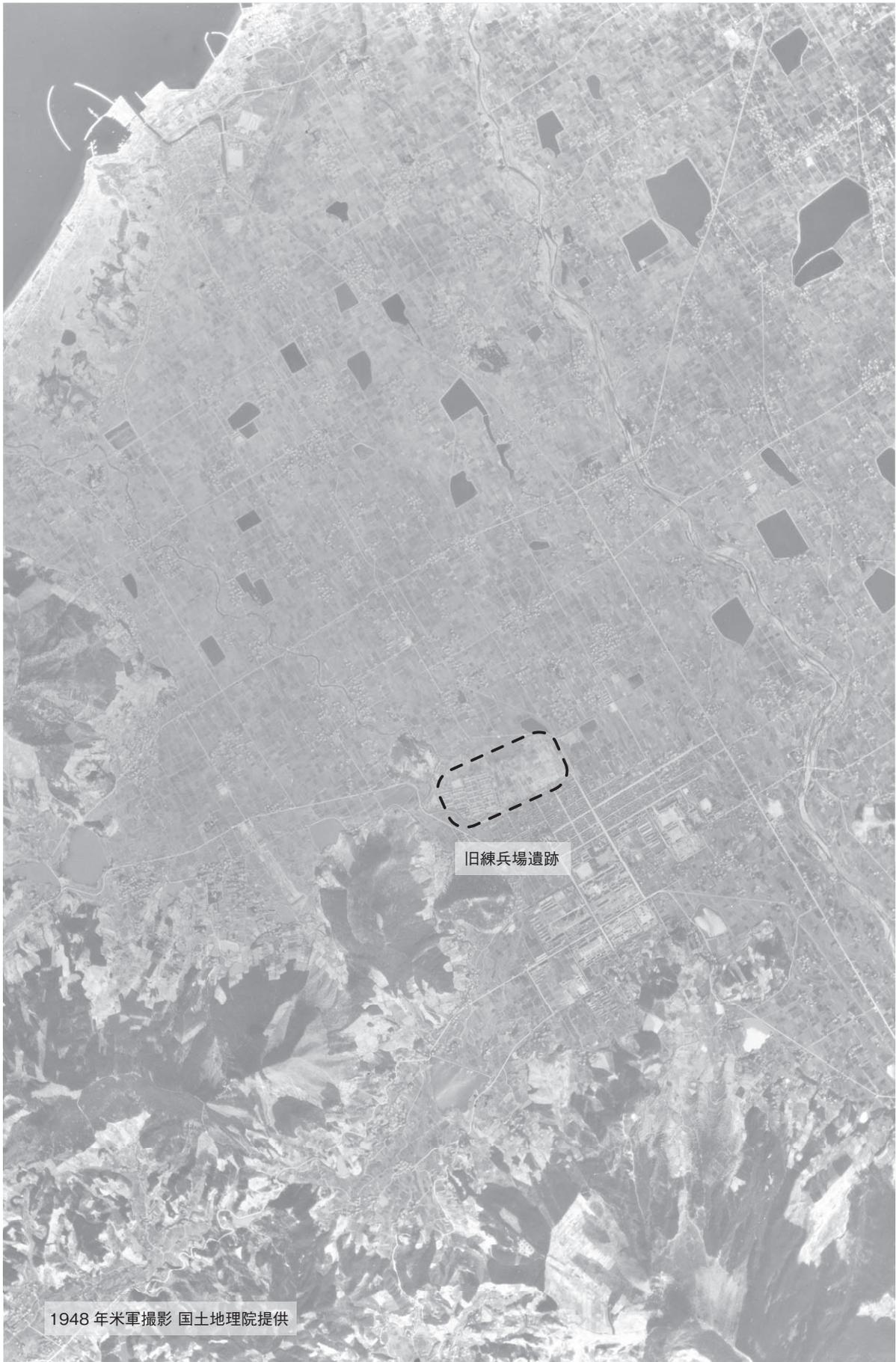
## 第2章 遺跡の立地と既往調査の概要

遺跡周辺の地理的環境、歴史的環境については、既刊の『旧練兵場遺跡Ⅱ』、『旧練兵場遺跡Ⅲ』を参照されたい。なお、図3～5は1948年に米軍が撮影した航空写真で、図5は航空写真に普通寺病院統合事業に伴う発掘の調査区を重ね合わせたものである。調査区と重複する部分には東西に細長い建物がみられるが、この建物は昭和20年まで普通寺陸軍病院、その後国立普通寺病院となった旧病院の建物である。

これまでに調査が行われた地点、概要、文献一覧を図6・7、表3に示す。



図2 旧練兵場遺跡の位置 (1/25,000)



1948年米軍撮影 国土地理院提供

旧練兵場遺跡

図3 多度津町・善通寺市付近航空写真（1948年米軍撮影）



1948年米軍撮影 国土地理院提供

図4 旧練兵場遺跡付近航空写真（1948年米軍撮影）



善通寺病院統合事業に伴う調査区

1948年米軍撮影 国土地理院提供

図5 善通寺病院統合事業に伴う調査区付近航空写真（1948年 米軍撮影）



図6 既往の調査区

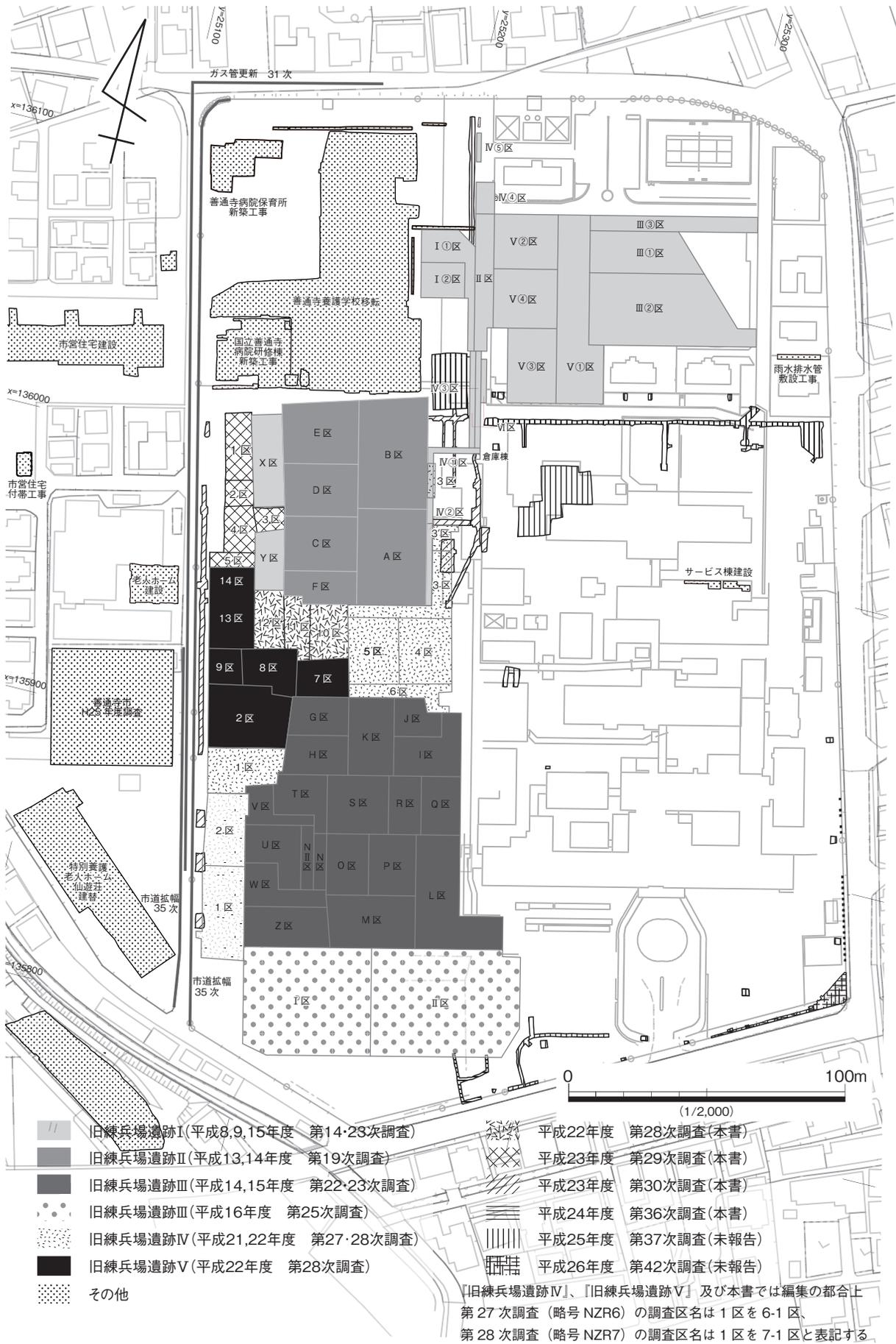


図7 既往の調査区(普通寺病院付近)

表3 既往の調査一覧

調査番号	年度	調査回数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
8308	s58	1	確認調査	範囲確認調査	善通寺市教委	1200	弥生終末期の竪穴住居1棟、古代末～中世の溝を検出	1.10	仲村廃寺
8404	s59	2	本発掘調査	弘田川河川改修	善通寺市教委	3635	弥生中期～終末期の竪穴住居38棟、鏡片・銅鏃・ガラス玉出土	2.11	彼ノ宗
8507	s60	3	本発掘調査	個人住宅建設	善通寺市教委	135	弥生後期後半の箱式石棺・土器棺墓を確認	3.11	仙遊
8703	s62	4	本発掘調査	下水道建設	県教委	22	弥生中期末の竪穴住居1棟・掘立柱建物1棟を確認	11	旧練兵場
8811	s63	5	確認調査	範囲確認調査	善通寺市教委	1137	弥生中期～終末期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居を確認	4.12	仲村廃寺
9109	h3		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	146	弥生時代後期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物を検出	13	
9205	h4		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	66	弥生後期～古墳時代竪穴住居4棟、土坑、柱穴を確認	14	
9204	h4		工事立会	善通寺病院サービス棟建設	県教委	41	古墳時代後期の竪穴住居、平安時代の溝、弥生～古墳時代の土器だまりを検出	14	
9210	h4	6	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	460	弥生後期～古墳時代竪穴住居多数、包含層中から小銅鏃片が出土。	14	弘田川西岸
9305	h5	7	本発掘調査	善通寺病院保育所建設	県教委	305	弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居14棟を検出	15.28	
9309	h5		工事立会	四国農業試験場施設整備	県教委	70	全域で弥生～古代の遺構を確認	15	
9309-2	h5		確認調査	弘田川河川改修	県教委		弘田川の堆積層を確認	28	
9310	h5		工事立会	善通寺病院水道管理設工事	県教委	100	弥生前期末の貯蔵穴2基、弥生後期の竪穴住居4棟検出	28	
9310-2	h5		工事立会	善通寺病院下水道管理設工事	県教委	120	弥生時代後期の竪穴住居5棟、中世の溝等を確認	28	
9310-3	h5	8	本発掘調査	善通寺病院看護学校増築	県教委	150	弥生中期～終末期の竪穴住居9棟、古墳時代の掘立柱建物を確認	15.28	
9404	h6	9	本発掘調査	四国農業試験場品質管理施設建設	県教委	120	弥生中期の掘立柱建物1棟、弥生後期の竪穴住居2棟、古墳時代後期の竪穴住居1棟確認	16.29	
9412	h6	10	本発掘調査	四国農業試験場バイパス設置工事	県教委	100	全域で弥生～中世の遺構を確認	16.29	
9504	h7	11	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	6390	弥生～古墳時代の竪穴住居62棟、弥生中期の独立棟持柱建物を確認	33	弘田川西岸
9504-2	h7	12	本発掘調査	善通寺病院研修棟建設	県教委	690	弥生中期～終末期の竪穴住居群、弥生後期初頭の掘立柱建物群を確認	17.31	
9511	h7	13	本発掘調査	四国農業試験場タンク機能解析実験棟建設	県教委	300	弥生後期の竪穴住居2棟、弥生中期の掘立柱建物1棟、古墳時代後期の溝1条確認。	17.31	
9511-2	h7		工事立会	善通寺病院備蓄倉庫建設	県教委	780	弥生後期から終末期の竪穴住居等を確認	32	
9610	h8	14	本発掘調査	善通寺病院看護学校新築	県教委	6000	弥生後期の竪穴住居・溝跡、条里型地割坪界溝を検出	34	
9710	h9	15	本発掘調査	善通寺病院雨水管敷設工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	32	
9704	h9		工事立会	善通寺病院水源地建設	県教委	300		32	
9809	h10	16	本発掘調査	善通寺病院看護学校付帯工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	20	
9808	h10		確認調査	確認調査	善通寺市教委	30	弥生中期～後期の柱穴群を確認	5	彼ノ宗
9909	h11		工事立会	四国農業試験場排水設備工事	県教委	800	弥生中期後半～後期の竪穴住居を検出	21.42	
9911	h11	17	工事立会	老人ホーム建設	善通寺市教委	201	旧河道から弥生中期が一括出土	21.42	
0006	h12	18	本発掘調査	市営住宅建設	善通寺市教委	1068	弥生後期竪穴住居、旧河道を検出	6	
0101	h12		工事立会	四国農業試験場西門・水路改修	県教委	122592		22	
0104	h13	19	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3250	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物多数、旧河道検出	35.39	
0107	h13	20	本発掘調査	特別養護老人ホーム仙遊荘建替	善通寺市教委	1430		7.23	
0202	h13	21	本発掘調査	市営住宅付帯工事	善通寺市教委	46	弥生後期の竪穴住居3棟確認	8	
0206	h14		工事立会	善通寺病院電柱設置工事	県教委	10		24	
0204	h14	22	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	4854	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居群検出。鏡片出土	24.44	
0504	h15	23	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3616	弥生中期～終末期の竪穴住居72棟をはじめ、掘立柱建物等を多数確認。扁平紐式銅鏃片、船載内行花文鏡片出土。	25.44	

調査番号	年度	調査回数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
0312	h15	24	確認調査	公民館建設	善通寺市教委	70	弥生後期の竪穴住居、古墳時代の包含層を検出	9	
0312-2	h15		工事立会	近畿中国四国農業研究センター下水道建設	県教委	200	弥生後期の竪穴住居、旧河道を検出	25	
0404	h16	25	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3547	弥生後期～終末期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物群を検出。扁平紐式銅鐸片、舶載内行花文鏡片が出土	26.41.44	
0406	h16		工事立会	近畿中国四国農業研究センター電気設備埋設	県教委	6	弥生後期竪穴住居1棟検出	26	
0804	h20	26	本発掘調査	善通寺養護学校移転整備事業	県教委	3200	弥生中期～終末期の竪穴住居多数、黍里型地割に合致する大溝を検出。鏡片が出土。	42.51.52	
0905	h21		確認調査	個人住宅建設	市教委	107.5	弥生後期・古墳後期の包含層検出	43	弘田川西岸
0911	h21	27	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	840	弥生中期～終末期、古墳後期の竪穴住居、掘立柱建物を検出	47	
1004	h22	28	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3480	弥生中期～終末期、古墳後期、古代の竪穴住居、掘立柱建物、溝を検出	47	一部本書
1104	h23	29	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	907	弥生中期～古墳前期の旧河道、古代道路状遺構を検出	46	本書
1111	h23	30	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	413	飛鳥時代の大型総柱建物を検出	46	本書
1205	h24	31	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1205	h24	32	本発掘調査	病院駐車場設置	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1206	h24	33	本発掘調査	ガス管新設	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑		
1209	h24	34	本発掘調査	ガス管更新	善通寺市教委		弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	48	
1207	h24	35	本発掘調査	市道拡幅	善通寺市教委				
1209	h24	36	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	40	中世の溝を検出	48	本書
1304	h25	37	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	1009	弥生時代～古代の竪穴住居・溝・柱穴・土坑	50	
1304	h25	38	工事立会	ガス管更新	善通寺市教委				
1307	h25	39	本発掘調査	市道拡幅	善通寺市教委				
1308	h25	40	確認調査	集会場建設	善通寺市教委				
1308	h25	41	本発掘調査	老人ホーム建設	善通寺市教委				
1311	h25		工事立会	下水道建設	善通寺市教委				
1410	h26	42	本発掘調査	県道善通寺詫間線(善通寺工区道路改修事業)	県教委	112	古墳時代の竪穴住居、古墳時代～中世の溝		

## 参考文献

- 尽誠学園史学会 1959「国立病院前庭遺跡発掘調査概報」『西讃史談』1  
六車恵一 1956「讃岐弥生式土器集成図録」『文化財協会報』特別号1 香川県文化財保護協会  
矢原高幸 1973『善通寺市の古代文化』善通寺市  
1. 善通寺市教育委員会『仲村廃寺発掘調査報告(旧練兵場遺跡内)』1984.3  
2. 善通寺市教育委員会『彼ノ宗遺跡～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』1985.3  
3. 善通寺市教育委員会『仙遊遺跡発掘調査報告書-旧練兵場遺跡仙遊Ⅰ地区-』1986.3  
4. 善通寺市教育委員会『仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』1989.3  
5. 善通寺市教育委員会『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～』1999.3  
6. 善通寺市教育委員会『旧練兵場遺跡 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2001.1  
7. 善通寺市教育委員会『旧練兵場遺跡 特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2002.3  
8. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 旧練兵場遺跡』2002.3  
9. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 旧練兵場遺跡』2004.3  
10. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』1984.12  
11. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度～昭和62年度』1988.3  
12. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和63年度』1989.3  
13. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度』1992.3  
14. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度』1993.3  
15. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度』1994.3  
16. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』1995.3  
17. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』1996.3  
18. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』1997.3  
19. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』1999.2  
20. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』2000.3  
21. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成11年度』2001.3  
22. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度』2002.3  
23. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成13年度』2003.3  
24. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成14年度』2003.11  
25. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成15年度』2005.3  
26. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成16年度』2006.1  
27. 香川県教育委員会『香川県文化財年報 平成19年度』2009.2  
28. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡-平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告-』1994.3  
29. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅱ-平成6年度四国農業試験場内発掘調査報告-』1995.3  
30. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅲ-平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告-』1996.3  
31. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅳ-平成7年度四国農業試験場内発掘調査報告-』1996.3  
32. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅴ-平成9年度国立善通寺病院内発掘調査報告-』1998.3  
33. 香川県教育委員会『広域基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 弘田川西岸遺跡』2008.1  
34. 香川県教育委員会ほか『善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧練兵場遺跡Ⅰ』2009.2  
35. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報1-平成13年度・平成14年度上半期の発掘成果概要報告-』2003.6  
36. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成8年度』1997.5  
37. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成9年度』1998.6  
38. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成13年度』2002.6  
39. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成14年度』2003.6  
40. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成15年度』2005.3  
41. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成16年度』2006.10  
42. 笹川龍一ほか「平成11年度旧練兵場遺跡の調査概要について-善通寺市ふれあいサロン五岳建設工事に伴う発掘調査-『善通寺市文化財保護協会報第29号』善通寺市文化財保護協会 2010.3  
43. 香川県教育委員会『香川県文化財年報 平成21年度』2011.2  
44. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』2011.2  
45. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 旧練兵場遺跡Ⅲ』2013.2  
46. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成23年度』2012.9  
47. 香川県教育委員会ほか『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 旧練兵場遺跡Ⅳ』2014.3  
48. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14』2014.3  
49. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成24年度』2013.9  
50. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成25年度』2014.10  
51. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成20年度』2009.8  
52. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報 平成21年度』2010.9

## 第3章 第28次調査

### 第1節 層序

旧練兵場遺跡の基本層序については、既刊の報告書に詳述されており、本書で報告する調査区の層序も基本的に同じである。『旧練兵場遺跡Ⅲ』は本書に報告する調査区の南東部に隣接する調査区の報告書であるが、ここに掲載された基本層序は、以下のとおりである。

- I層 現代の盛土及び攪乱土
- II層 灰色シルト（中世から近世の耕作土・遺構埋没土）
- III層 黒褐色粘土シルト～粘土（弥生時代中期から古代の堆積土・遺構埋没土）
- IV-1層 黄灰色細粒砂～シルト
- IV-2層 黄褐色粗砂～シルト
- V層 砂礫

土層堆積図A（図8）は善通寺病院統合事業の発掘調査区西端の西壁の土層図である。南部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告した第27次調査の6-1区・6-2区、中部は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した第28次調査の7-2区・7-9区・7-13区・7-14区、北部は本書で遺構・遺物を報告する第29次調査の1・2・4・5区の西壁で、その長さは200mである。南端の6-1区では地表面の標高は24.3mである。北に向かうに従い低くなり、北端の第29次調査1区の北端では23.3mで、南端よりも1m低い。図8で示すように、いずれの調査区でも現地表面の下は盛土・攪乱土（I層）が分厚く堆積する。大部分の調査区では盛土・攪乱土（I層）は0.5～1.0mであるが、病院の建物基礎の掘削による攪乱土の堆積が現地地表下2m近くまで及ぶ箇所もあった。盛土・攪乱土の下には中世から近世の耕作土である灰色シルト層（II層）が堆積するが、上部の攪乱が深く及ぶ調査区もあり、7-13区では灰色シルト層（II層）はみられなかった。また、第29次調査2区では灰色シルト層（II層）は急激に0.3mほど下がっており、2区以北では中近世の田畑が一段下がっていたことがわかる。灰色シルト（II層）の下には黒褐色粘土シルト～粘土（III層）が堆積する。本来はかなり分厚く堆積していたと思われるが、上部は後世の耕作により削平されたと考えられる。

土層堆積図B～E（図8～11）は第28次調査7-10区・7-11区・7-12区の土層堆積図である。土層堆積図Bは7-7区と7-10区・7-11区の境界である7-10区・7-11区側の南壁の土層堆積を示す図である。7-10区・7-11区には弥生時代中期に大部分が埋没する河川SR01がある。SR01は灰オリーブ色シルト（12層）が堆積し、その上部には黒褐色粘質土が0.3m程度堆積する。この黒褐色粘質土を9・10・11層の3層に分層し、9層をSR01埋土最上層、10・11層を上層として調査を進めた。遺構の検出は9層上面（第1面）、11層上面（第2面）、12層上面（第3面）、SR01の埋没土下の黄色粘質土（IV-1層）上面（第4面）で遺構の検出を行った。なお、SR01の東岸に当たる7-10区では第1面・第4面の2面の遺構面を調査した。南西部に位置する7-8区では12層上面（第3面）で弥生時代中期後半の土坑が検出されていることから、12層の堆積は弥生時代中期後半には終わったことがうかがわれる。また、7-11区では11層上面（第2面）で8世紀から9世紀の土師器焼成土坑、9層上面（第1面）では中世の遺構が検出された。

土層堆積図Cは7-10区～7-13区の土層堆積図である。東部の7-10・7-11区ではSR01、西部の7-13

区部分でも 7-10 区・7-11 区から南方の 7-7 区・7-8 区に向かい蛇行して北西に向かう SR01 がみられる。7-12 区・7-13 区でも 7-10 区・7-11 区と同様の堆積であるが、7-12 区・7-13 区では SR01 埋土上層を 2 層に分層できず、7-10 区・7-11 区の第 1・3・4 面に相当する遺構面の調査を行った。

土層堆積図 D は 7-10 区の東端の西壁である。北部には SR01 がみられる。土層堆積図 E は 7-12 区東端の西壁で、SR01 が蛇行する U 字の内部にあたる。黒褐色粘質土の堆積は厚さ 0.1 m ほどで、SR01 の凹みはみられなかった。土層堆積図 E は 7-11 区と 7-12 区の間の際の東壁である。

なお、第 7 章第 1 節に詳述しているが、SR01 の埋没土を採取して土中の植物珪酸体分析した結果、SR01 の下層と上層にはイネ属の珪酸体が含まれていた。また、SR01 下層・中層・上層のいずれの土層からもメダケ属・ススキ属・イチゴツナギ亜科など比較的乾いた場所に生育するイネ科植物がみられ、ヨシ属などの湿地植物が全くみられなかったことから、SR01 の凹地は高燥な場所であったと推定されている。また、花粉分析の結果でも SR01 下層ではイネ属の花粉が検出された。

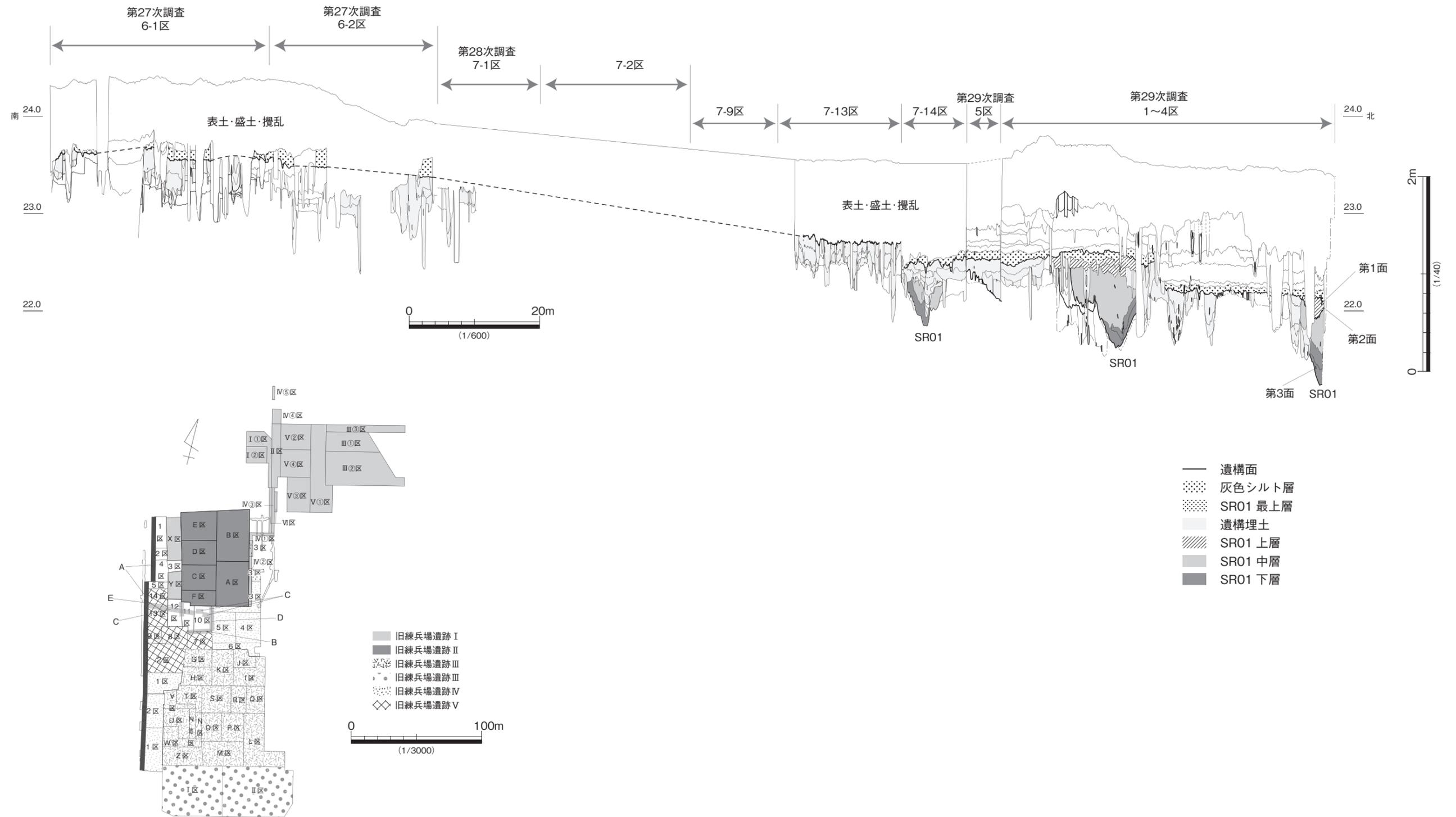
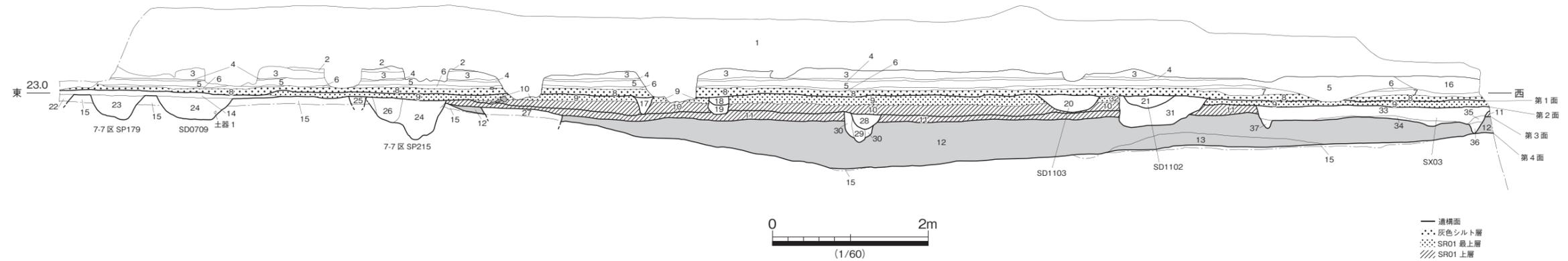


図8 土層堆積図 (A)



- 1 造成土 攪乱土
- 2 10YR7/1 灰白色粘土シルト (全体に鉄分の沈着による変色を認める)
- 3 5Y5/1 灰色粘土シルト (わずかに炭化物を含む)
- 4 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分により変色)
- 5 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト (鉄分により変色)
- 6 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分により変色)
- 7 5Y7/2 灰白色粘質シルト (鉄分により変色)
- 8 5Y8/1 灰白色粘質シルト、中世包含層
- 9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (土器を含む、上位は変色あり) 古代包含層か、SR01 最上層
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質土 (土器の細片を多く含む) SR01 上層
- 11 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (上面に沿ってこぶし大以下の線や土器が多く堆積する、焼土塊 (5mm程) をごく少量含む) SR01 上層
- 12 5Y5/2 オリーブ色粘質土 (2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトや 2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む) SR01 中層
- 13 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) SR01 中層
- 14 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (8層の影響で上位に変色、径1cm以下の地山ブロックを少量含む)
- 15 地山土 2.5Y7/3 浅黄色粘質土
- 16 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト
- 17 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
- 18 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (8層の影響で上位は変色)
- 19 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 20 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (全体に鉄分マンガが沈着)
- 21 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト (全体に鉄分マンガが沈着)
- 22 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (径1cm以下の地山ブロックを少量含む)
- 23 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (径3cm以下の地山ブロックを多く含む)
- 24 10YR3/1 黒褐色粘質土 (径1cm以下の地山ブロックを少量含む)
- 25 10YR3/1 黒褐色粘質土 (径1cm以下の地山ブロックを少量含む)
- 26 10YR3/1 黒褐色粘質土 (径3cm以下の地山ブロックを少量含む)
- 27 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (地山ブロックと10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む)
- 28 2.5Y3/2 黒色粘質土 (土器を多く包含、抜き取り痕か)
- 29 10YR3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) 柱痕
- 30 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) 埋め土
- 31 5Y2/1 黒色粘質土 (全体に土器を包含)
- 32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトブロックを多く含む)
- 33 2.5Y3/1 黒色粘質土 (南壁12層ブロックを少量含む、土器細片を多く含む)
- 34 2.5Y6/2 暗灰黄色粘質土
- 35 5Y4/1 灰色粘質シルト
- 36 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (径1cm以下の地山ないし南壁12層ブロックをまばらに多く含む)
- 37 5Y2/1 黒色粘質土

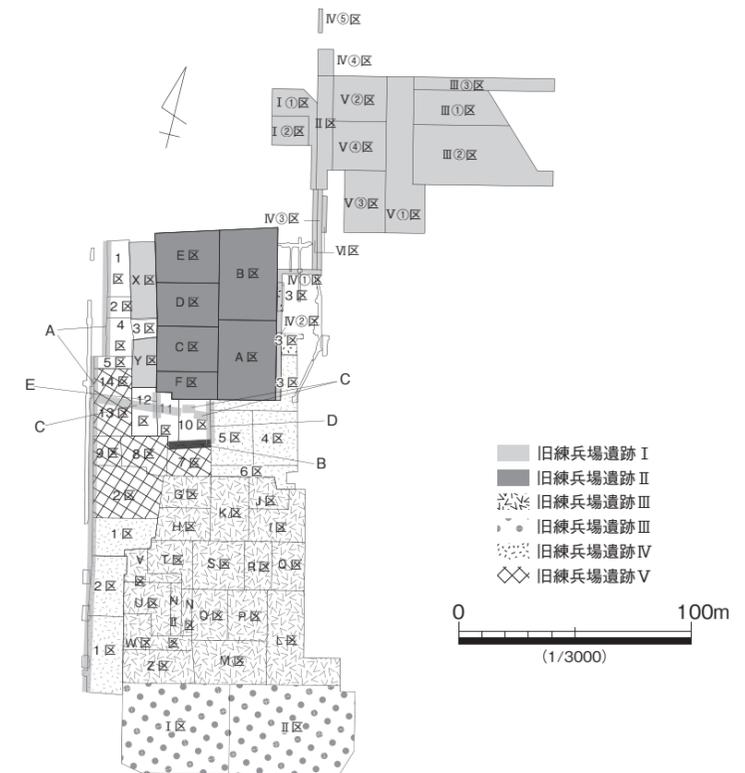
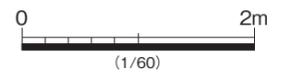
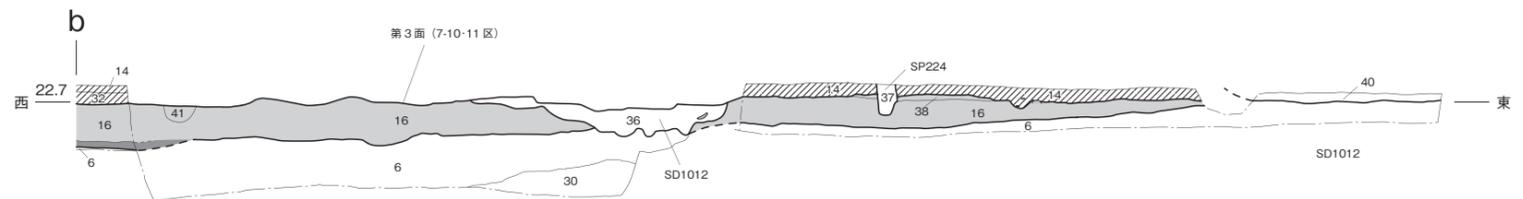
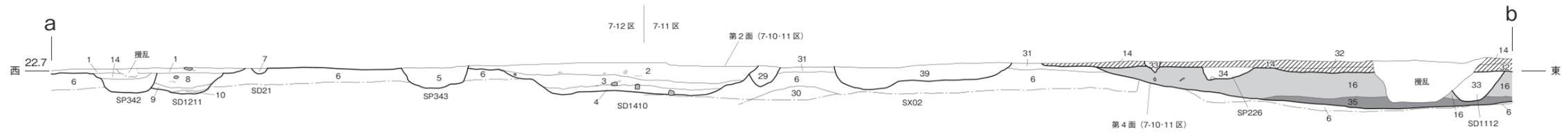
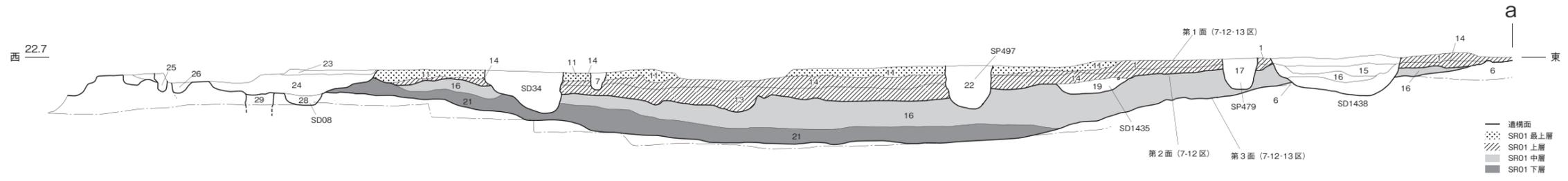


図9 土層堆積図 (B)



- 12-13区東西壁
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径1~2cmのブロック土を少量含む) SR01 上層
  - 2 10YR2/2 ~ 3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。SD1410 上層)
  - 3 10YR2/1 黒色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径1~2cmのブロック土を少量含む) SD1410 中層
  - 4 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物を少量含む。粒径1~5cmのブロック土をやや多量に含む) SD1410 下層
  - 5 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土。地山
  - 6 10YR7/6 明黄褐色シルト (Fe・Mn) ベース層
  - 7 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径1~2cmのブロック土を若干量含む)
  - 8 10YR2/2 ~ 3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む)
  - 9 10YR2/1 黒色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径1~2cmのブロック土を少量含む)
  - 10 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Mn・粒径1~3cmのブロック土をやや多量含む)
  - 11 10YR4/1 褐色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む) SR01 最上層
  - 12 10YR3/1 黒褐色粘質土 SR01 上層
  - 13 10YR3/1 黒褐色粘質土 SR01 上層
  - 14 10YR3/1 ~ 4/1 黒褐色シルト (Mn・Fe・炭化物を少量含む) SR01 上層
  - 15 10YR4/1 ~ 5/1 褐色シルト (Mn・Fe・炭化物・焼土細粒を若干量含む。粒径1~3cmのブロック土を少量含む)
  - 16 2.5Y5/4 黄褐色シルト (Fe・Mn。下面付近に粒径5~6cmのブロック土を少量含む) SR01 中層
  - 17 2.5Y4/2 ~ 4/1 暗灰黄色シルト (Fe・Mn・炭化物粒を少量含む。粒径1cm程度のブロック土を底面付近に少量含む) SP479
  - 18 10YR4/1 褐色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む) SR01 最上層
  - 19 2.5Y4/1 ~ 4/2 暗灰黄色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径1cm程度のブロック土を少量含む) SD
  - 20 2.5Y3/1 黒色粘土 (Fe。粒径1~2cm程度のブロック土を少量含む) SR01 下層

- 21 2.5Y3/1 黒色粘土 (Fe。粒径1~2cm程度のブロック土を少量含む) SR01 下層
- 22 10YR5/1 褐色シルト (径2~3cm大のベースブロック・Mn粒を多く含む)
- 23 10YR5/1 褐色シルト SD08
- 24 10YR4/1 褐色シルト (径5cm大のベースブロックを少量含む) SD08
- 25 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 26 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- 27 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 28 10YR3/3 暗褐色シルト SD08
- 29 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む) 遺構埋土
- 30 5Y5/2 灰オリブ色粘質砂 (径1cm以下の礫・砂層)
- 31 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを少量含む)
- 32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (上面に沿ってこぶし大以下のレキや土器が多く堆積する。焼土塊 (5mm程) をごく少量含む) SR01 上層
- 33 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土
- 34 5Y2/2 オリブ色粘質土。地山 (ブロックを少量含む)
- 35 5Y3/1 オリブ黒粘質土 (地山土ブロックを少量含む) SR01 下層
- 36 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土 (粗砂~1cm以下の礫を含む。Feを含む。径0.5cm前後の地山ブロックわずかに含む)
- 37 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土 (小礫を含む。Feを含む) SP224
- 38 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土
- 39 2.5Y3/1 黒褐色粘質土。地山 (6層ブロックを多く含む)
- 40 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土 (小礫を含む。Fe・Mnを含む)
- 41 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土 (小礫~粗砂を含む。Feを含む)

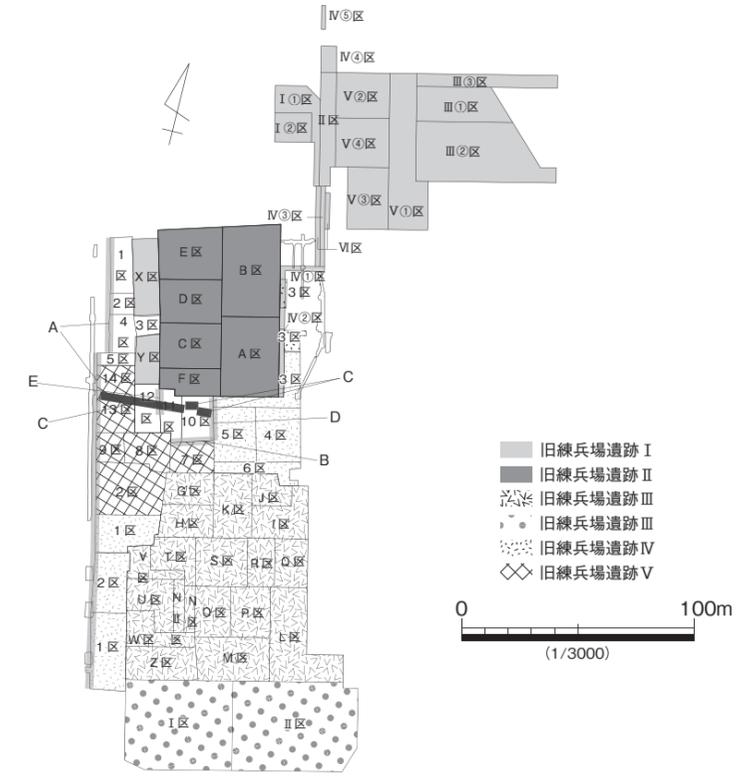


図 10 土層堆積図 (C)

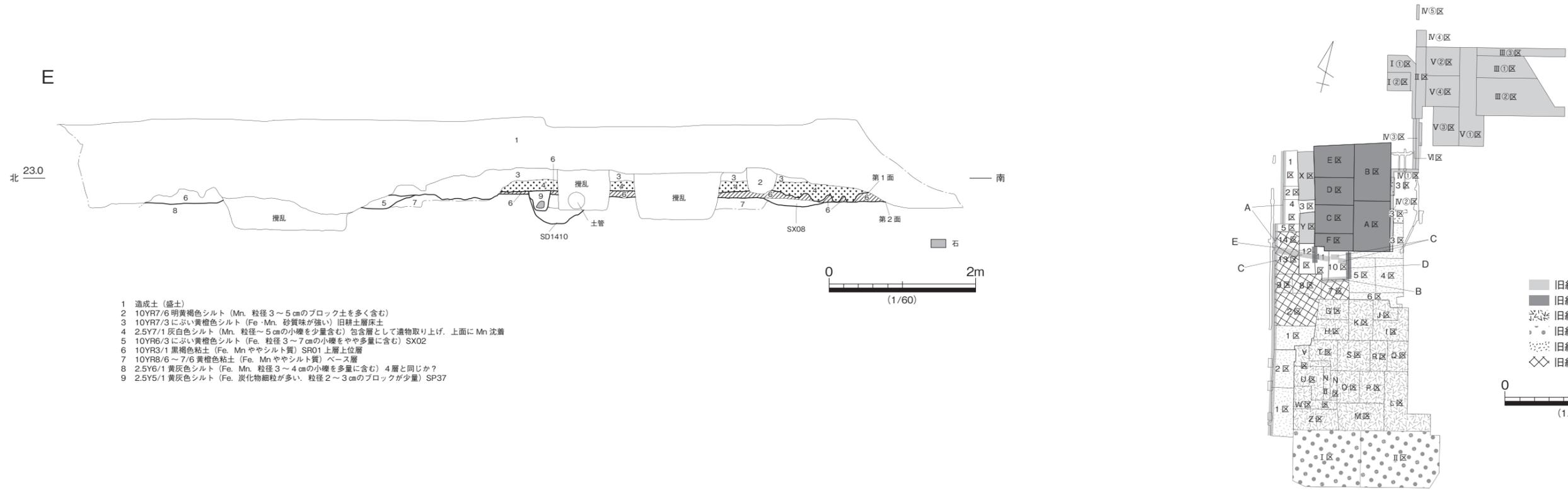
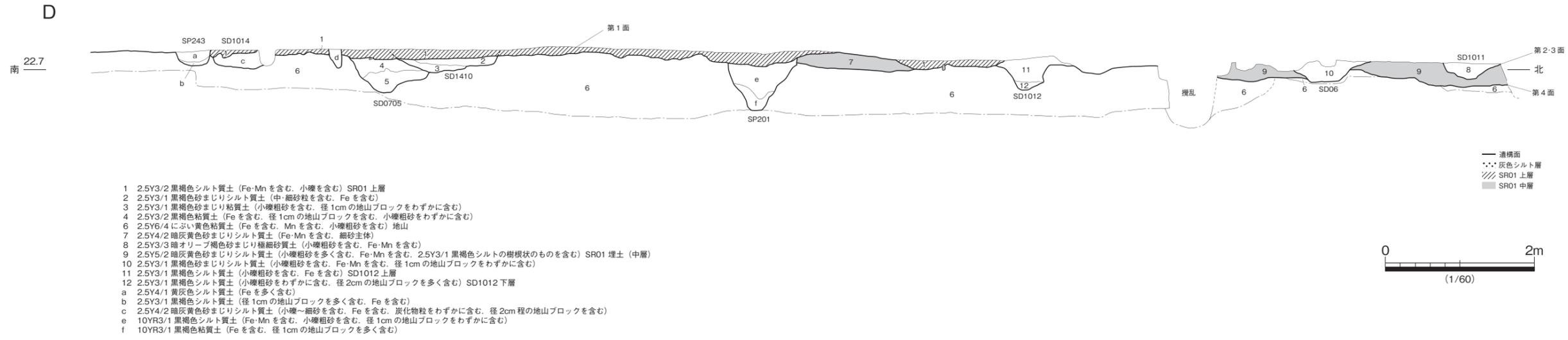


図 11 土層堆積図 (D・E)

X=135950

X=1375940

Y=25170

Y=25180

Y=25190

Y=25200



図 12 第 28 次調査 7-10 ~ 12 区平面図

## 第2節 遺構・遺物

### 1. 弥生時代中期から弥生時代後期初頭

#### 溝

##### SD1008 (図14・15)

7-10区東部第3面(Ⅳ層上面)で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は上部をSD08、下部をSD23として調査したが、整理時の検討で、同一溝と判断した。北東から南西(N25°E)に向かう。溝の北部は古代・中世の柱穴SP58と重複し、削平される。溝の南部は古代の溝SD1410と重複し、削平され、一部途切れるが、SD1410の南側の溝SD0719と連続する可能性が高い。SD1008の検出長は3.2m、溝幅0.3～0.5mである。断面形はややいびつな三角形で、最深部の深さは0.2mである。埋土は黒褐色シルトで、弥生土器などが整理箱1箱程度出土した。1～11はSD1008から出土した土器である。3は弥生土器甕の口縁部片で、焼成破裂痕がある。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1008は弥生時代中期後半のものと考えられる。

##### SD1019 (図14・15)

7-10・7-11区南部第4面(Ⅳ層上面)で検出された溝である。発掘調査時の遺構名はSD19である。SD1019は東側の溝SD0719とほぼ平行して北東から南西に向かう。北端は古代の溝SD1410と重複し、削平される。南部はいったん途切れて、南東から北西に向かって蛇行する。検出長5.7m、幅0.3m、断面形は皿状で、深さ0.15mである。遺物は弥生土器片などが少量出土した。12はSD1019から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1019は弥生時代中期後半のものと考えられる。

##### SD1020 (図14・15)

7-10区東部第4面(Ⅳ層上面)で検出された溝である。発掘調査時の遺構名はSD20である。東側の溝SD1008とほぼ平行して北東から南西に向かう。検出長2.2m、幅0.5m、断面形は皿状で、深さ0.15mである。遺物は弥生土器片などが少量出土した。13・14はSD1020から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1020は弥生時代中期後半のものと考えられる。

##### SD1021 (図14・15)

7-10区東部第4面(Ⅳ層上面)で検出された溝である。発掘調査時の遺構名はSD21である。西側の溝SD0719とほぼ平行して北東から南西に向かう。検出長6.0m、幅0.2～0.7m、断面形は皿状で、深さ0.15mである。遺物は弥生土器片などが少量出土した。15～17はSD1021から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD1021は弥生時代中期後半のものと考えられる。

##### SD0719 (図13・14・15)

7-10区第4面(Ⅳ層上面)、7-7区・7-8区の第3面(Ⅳ層上面)、7-12区の第2面(Ⅳ層上面)で検出した溝である。発掘調査時の遺構名は7-10区ではSD18、7-12区ではSD41であるが、『旧練兵場遺跡V』(平成27年2月刊行)で報告した7-7区で検出された溝SD0719と連続するため、同名を使用する。SD0719はSD0720とほぼ平行して北東から南西に向かい、北西方向に円弧を描く。検出長33m、幅0.3～1.2mである。断面形は浅い皿状で、深さ0.1～0.2mである。遺物は弥生土器などが少量出土した。18～23はSD0719から出土した土器である。いずれも弥生時代中期後半に属することから、SD0719は弥生時代中期後半のものと考えられる。

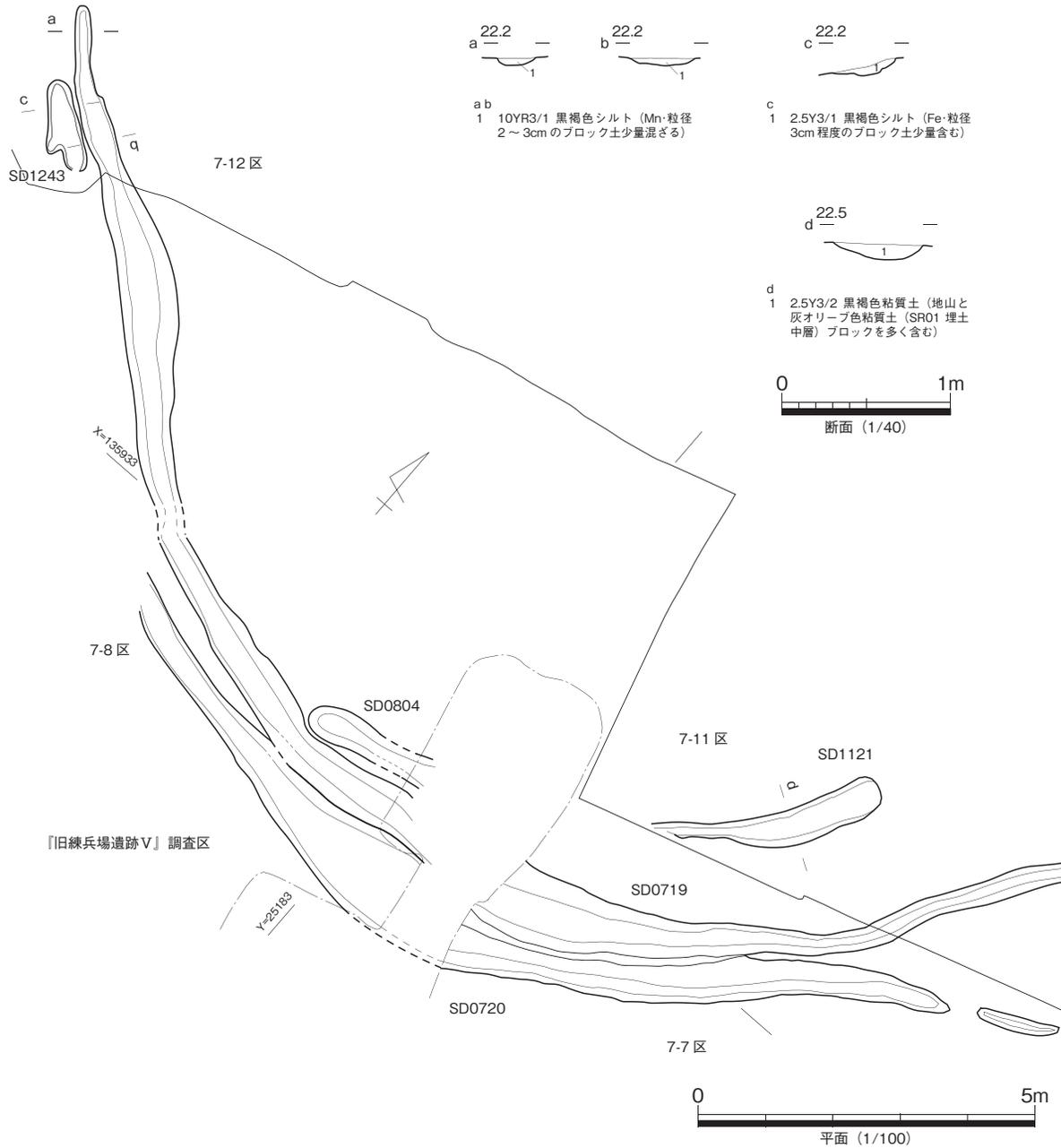


図 13 SD0719・SD0720・SD0804・SD1121・SD1243

SD1022 (図 14)

7-10 区西部第 4 面 (IV 層上面) で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD22 である。北から南に向かう。検出長 1.3 m、幅 0.3 m、断面形は皿状で、深さ 0.15 m である。遺物は出土しなかったが、埋土の色調・土質から SD1022 は弥生時代中期のものと考えられる。

SD1121 (図 13・14)

7-11 区南部第 4 面 (IV 層上面) で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD21 である。北東から南西に向かう。幅 0.2 ~ 0.5 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。検出長は 3.5 m と短く、7-11 区と 7-7 区の境界付近で終息するが、攪乱坑の西側の溝 SD0804 に連続する可能性が高い。遺物は土器細片が数点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、埋土の色調・土質から SD1121 は弥生時代中期のものと考えられる。

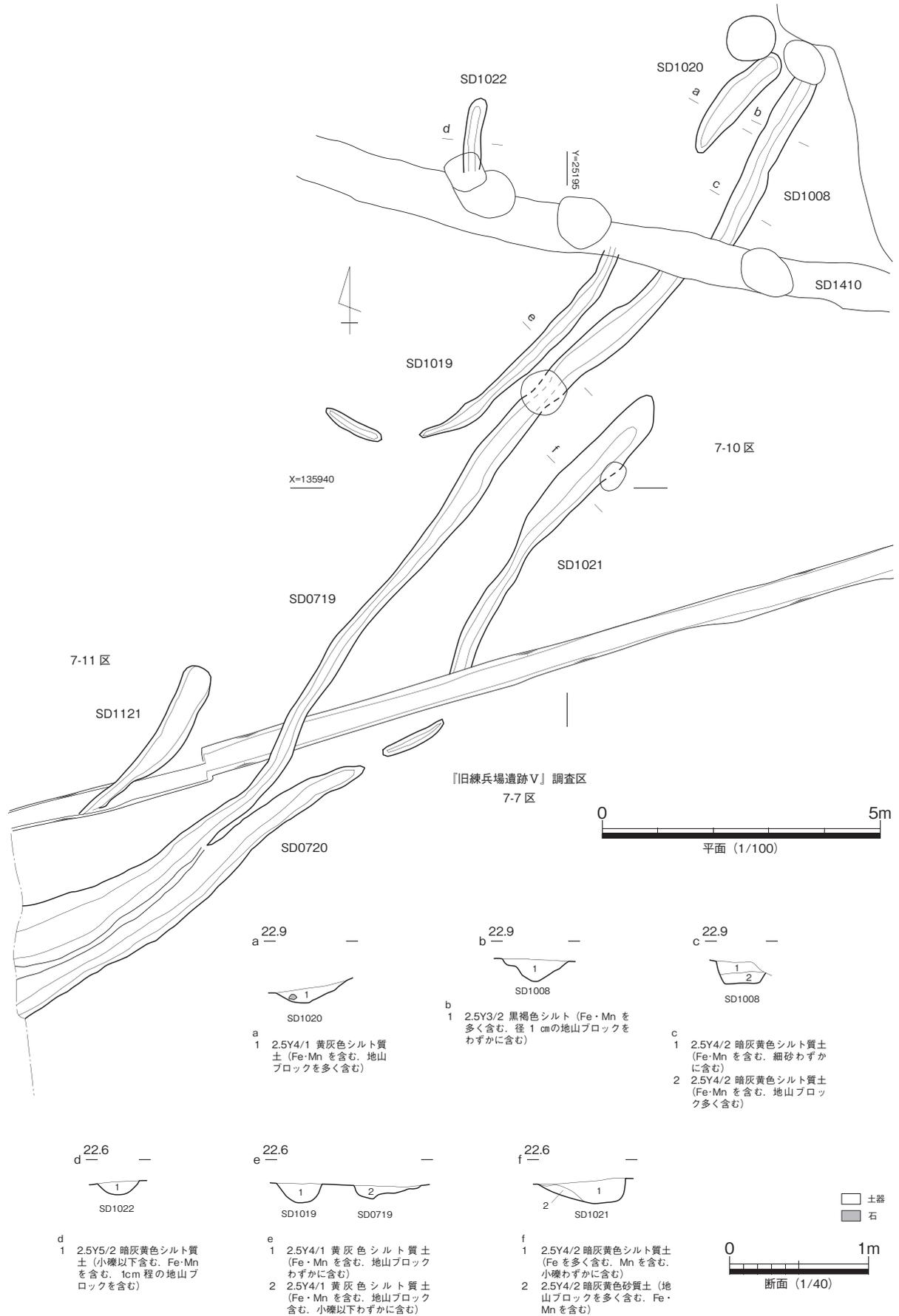


図 14 SD0719・SD1008・SD1019・SD1020・SD1021・SD1022・SD1121

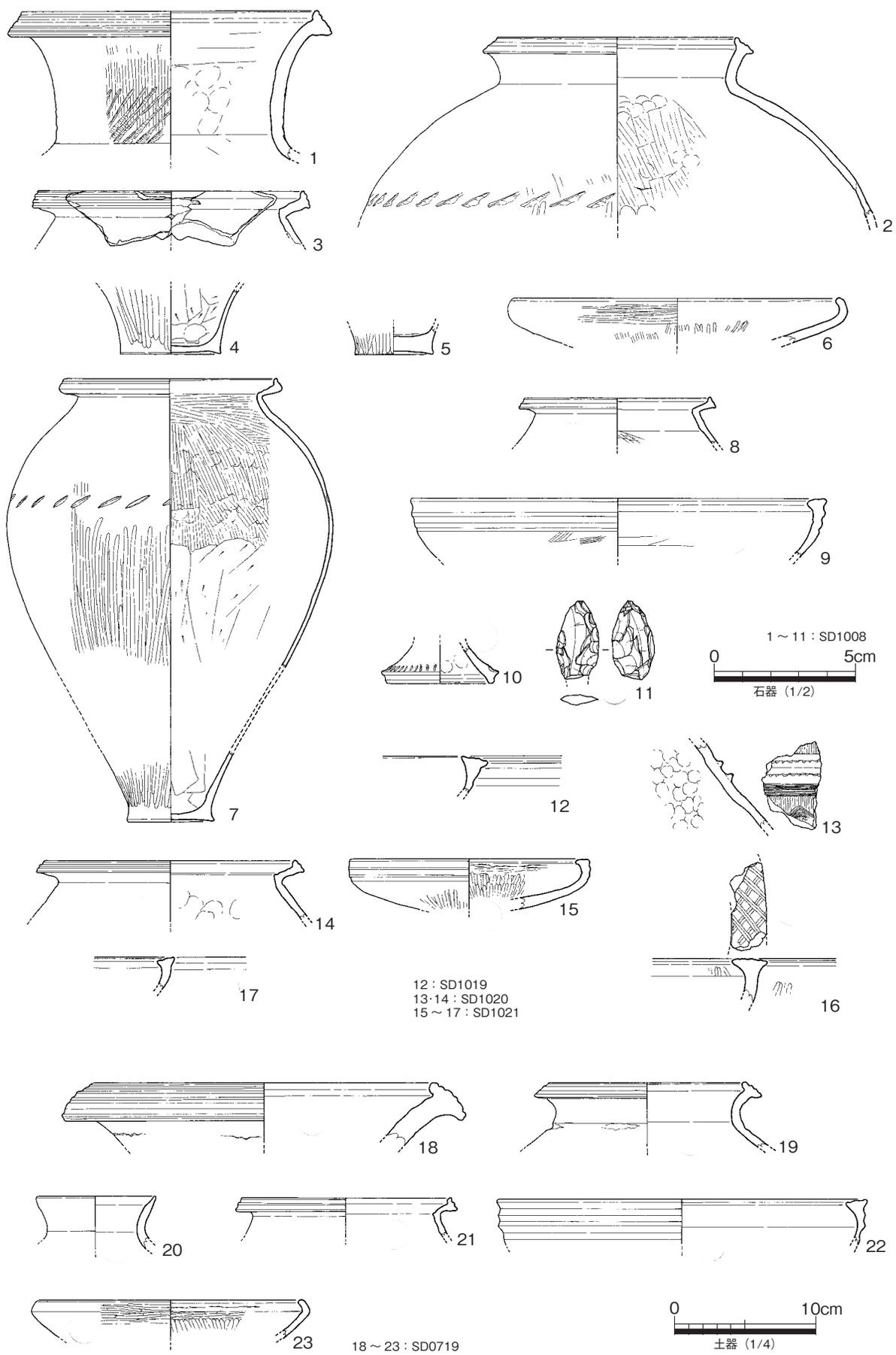
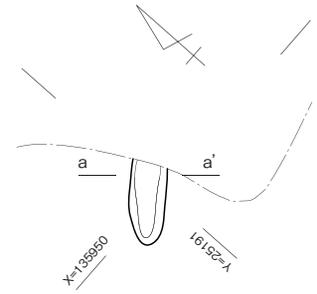


图 15 SD1008 · SD1019 · SD1020 · SD1021 · SD0719

### SD1243 (図 13)

7-12 区南西部第 2 面 (IV 層上面) で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD43 である。7-11 区から 7-7 区、7-8 区にかけて円弧状を描く溝 SD0719 と平行して走る。SD1243 は検出長 1.4 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m である。SD0719 と平行する溝 SD0720 に続く可能性が高い。遺物は出土しなかったが、埋土の色調・土質や SD0719 と平行することから弥生時代中期のものと考えられる。



### SD1024 (図 16)

7-10 区西部第 4 面 (IV 層上面) で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD24 である。北東から南西に向かう。北東端は攪乱によって削平される。検出長 0.5 m、幅 0.2 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。遺物は出土しなかったが、埋土の色調・土質から SD1024 は弥生時代中期のものと考えられる。

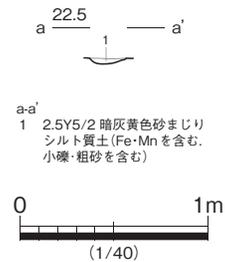


図 16 SD1024

### SD1435 (図 17)

7-12 区の第 3 面 7-13 区・7-14 区の第 2 面 (いずれも IV 層上面) で検出された溝である。発掘調査時の遺構名は SD35 であるが、『旧練兵場遺跡 V』では SD1435 の遺構名で報告したので、ここでも同名を使用する。SD1435 は 7-12 区の南西部からやや蛇行しながら北西に向かい、北西端は古墳時代後期の溝 SD1433 と重複し、削平される。検出長 18.0 m、幅 0.4 ~ 0.6 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.3 m である。出土遺物は弥生土器、サヌカイト片が少量出土した。本書で図化した土器はいずれも弥生時代中期後半のものであるが、『旧練兵場遺跡 V』で報告した調査区から出土した遺物に弥生時代中期後半から弥生時代後期初頭のものが含まれることから、SD1435 は弥生時代後期初頭のものと考えられる。

## 河川

### SR01 (図 18 ~ 24)

SR01 は第 28 次調査では、7-10 区・7-11 区・7-12 区で検出された河川である。SR01 は『旧練兵場遺跡 II』で SR02・SR01、『旧練兵場遺跡 III』で J 区 SR4002・J 区 SR4001、『旧練兵場遺跡 IV』でも SR01 と報告された河川であるが、第 28 次調査によってこれらの河川が連続することがわかった。

SR01 は『旧練兵場遺跡 III』に掲載された調査区の北端では幅 5.0 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.3 m である。この河川は『旧練兵場遺跡 IV』でも SR01 と報告されているが、同書で報告された 7-3 ~ 6 区では南から北西に向かう。この付近では幅 5 ~ 9 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.5 ~ 0.7 m、底面の標高は 22.3 ~ 22.6 m である。北西に向かった SR01 は北接する第 19 次調査区の南部(『旧練兵場遺跡 II』で報告)に入る。第 19 次調査区では南向きに蛇行して、第 28 次調査 7-10 区・7-11 区(本書報告)に入り、『旧練兵場遺跡 V』で報告した第 28 次調査 7-7 区・7-8 区・7-13 区・7-14 区を通過して、善通寺市教育委員会が平成 11 年度に老人ホーム建設に伴って調査した第 17 次調査区の北東部、第 30 次調査・第 29 次調査区(本書報告)を通り、再び第 19 次調査区の北部(『旧練兵場遺跡 II』で報告)に入る。『旧練兵場遺跡 II』では第 19 次調査の北部で検出された河川は両河川の関係が不明であったため、南部で検出された河川とは別名で、SR02 と報告されている。

本書に掲載する第 28 次調査区では、SR01 は U 字状に蛇行し、検出長 85 m、幅 8 ~ 13 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.6 ~ 0.7 m である。図 19・20 は SR01 の土層断面図である。図 19 a a' は第 1 節

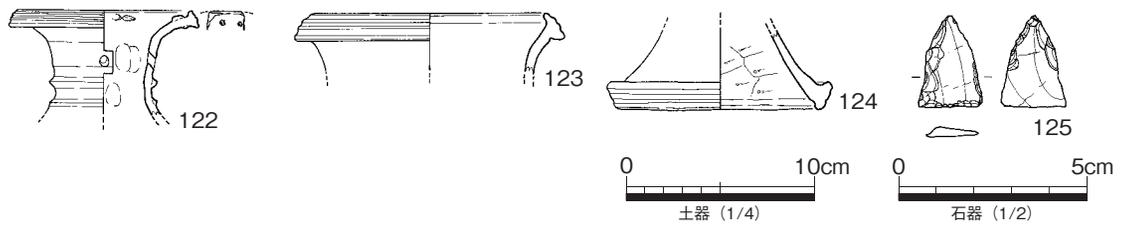
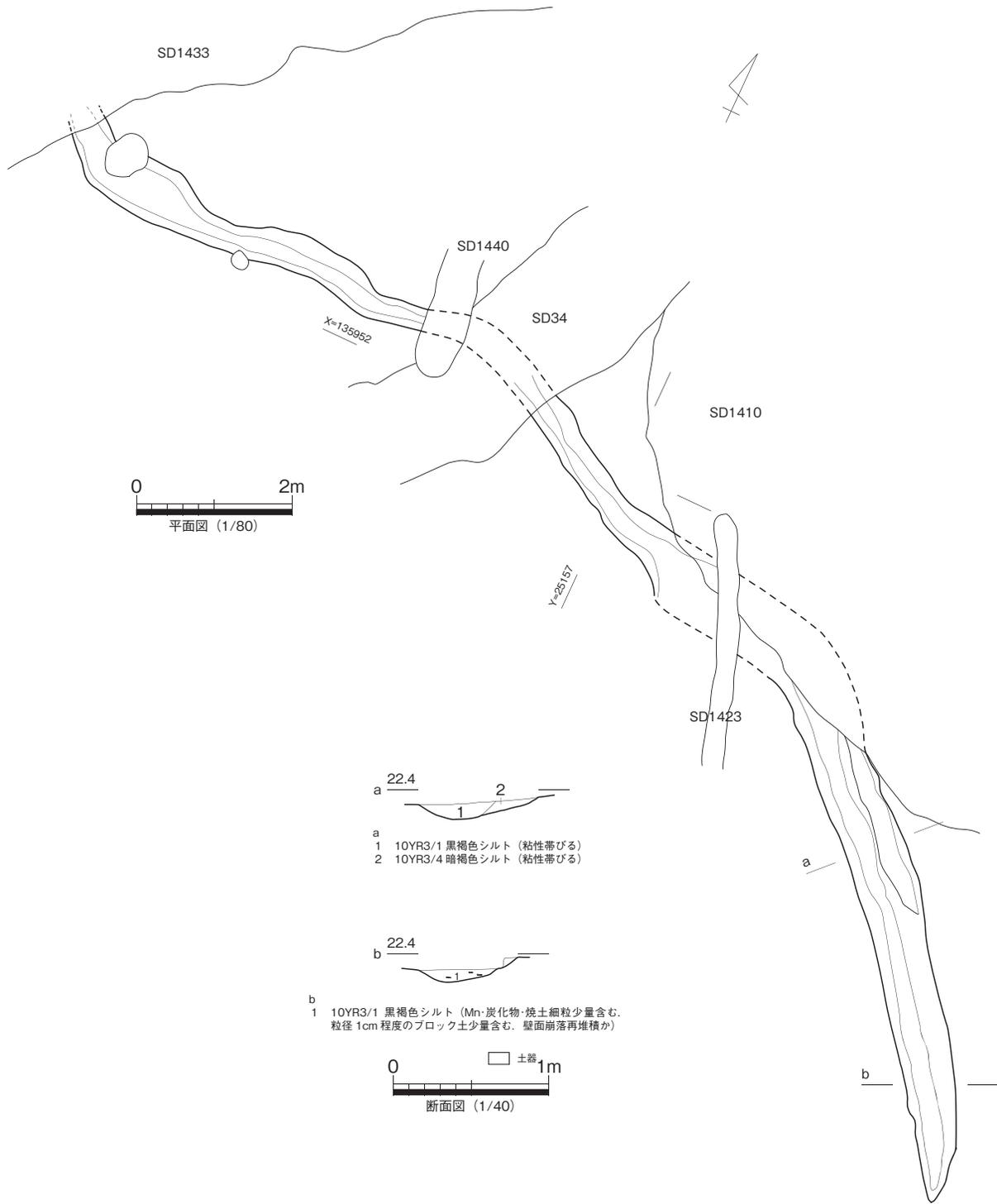


図 17 SD1435

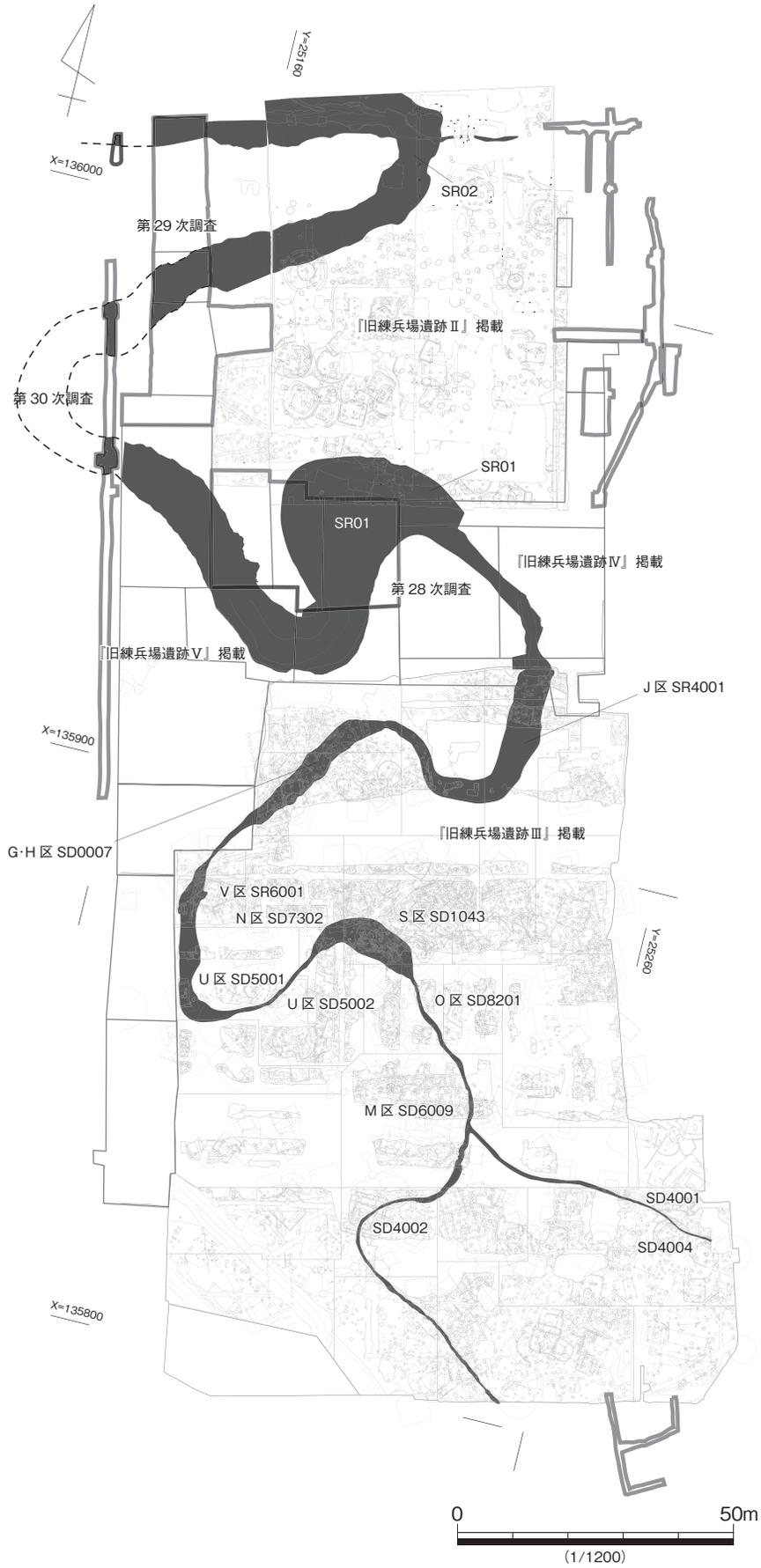


図 18 SR01(1)

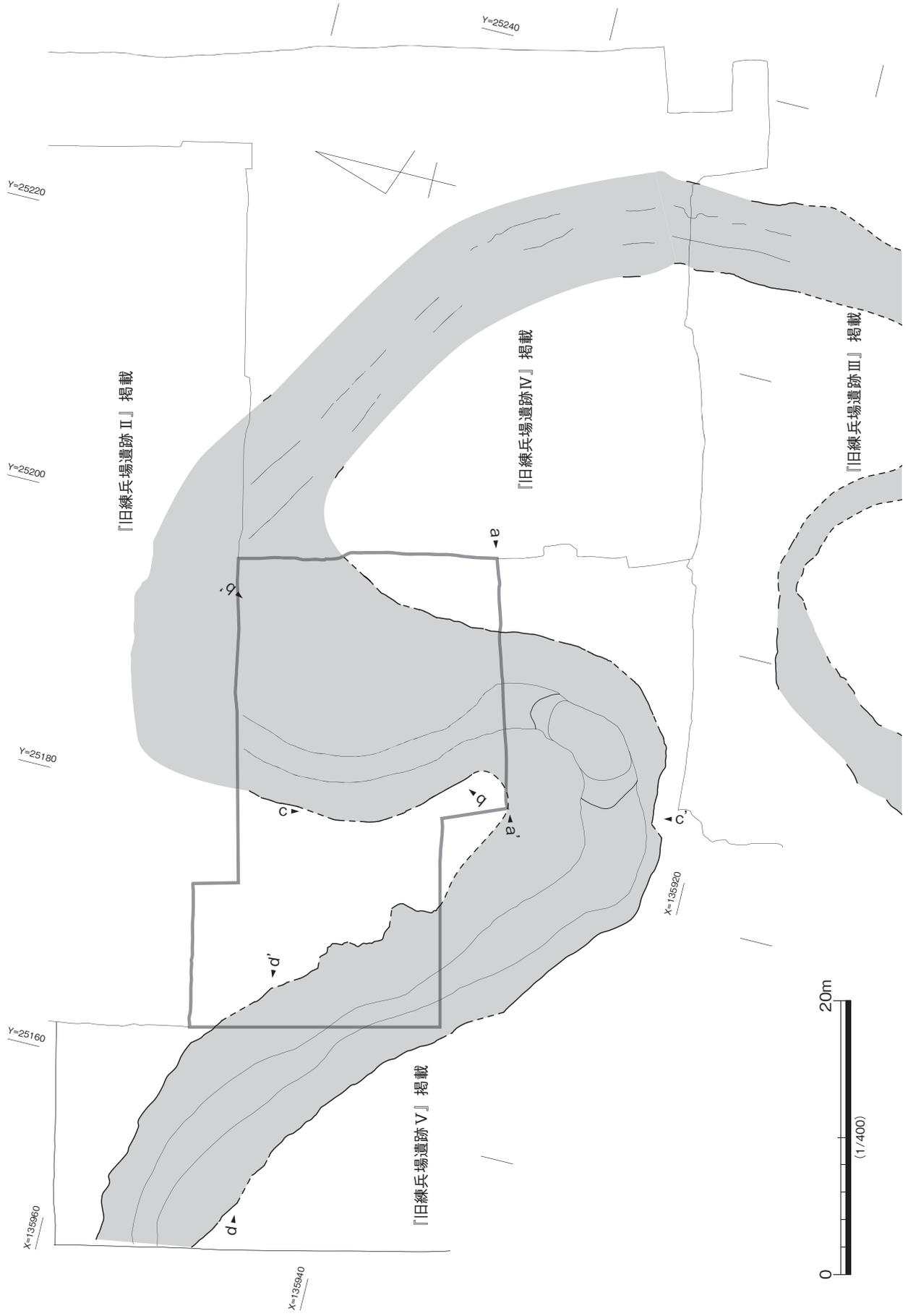
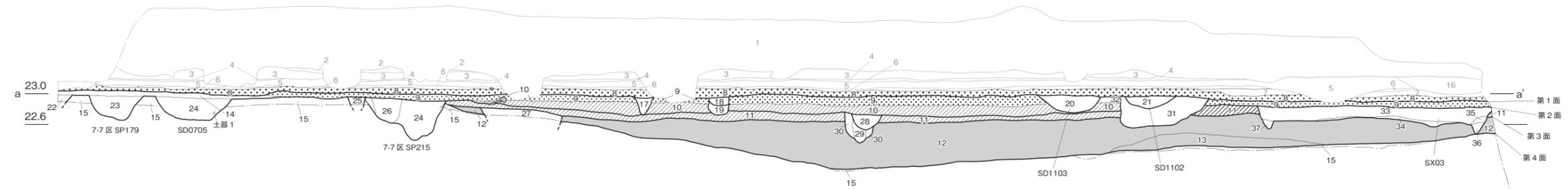
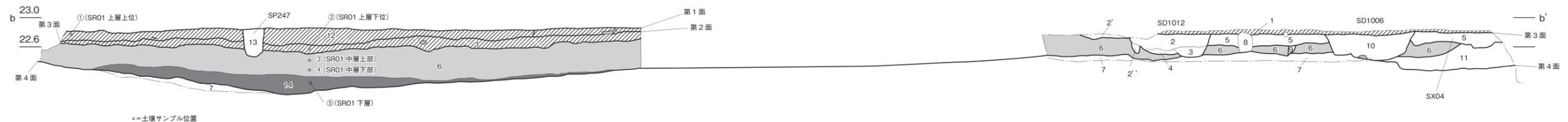


図 19 SR01 (2)



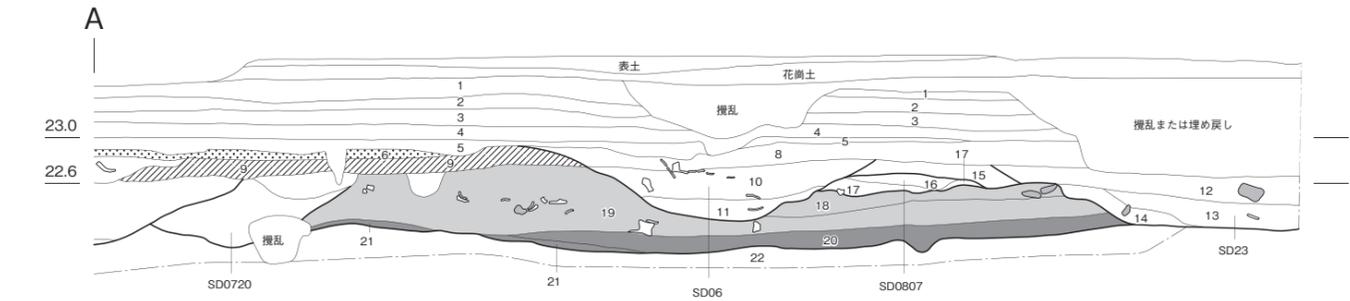
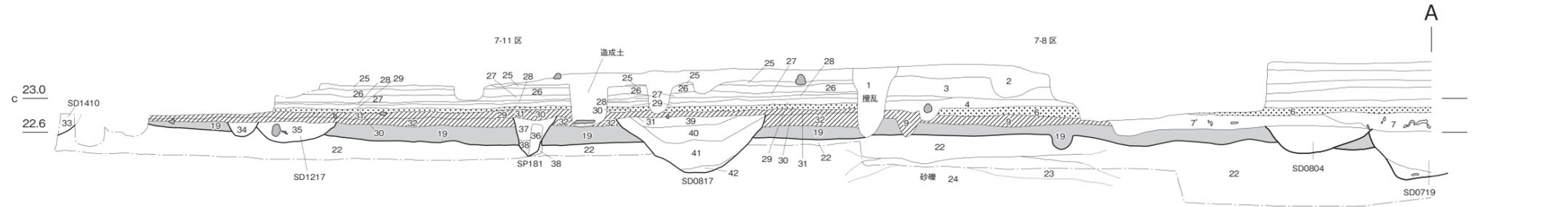
a-a'

- 1 造成土 掘乱土
- 2 10YR7/1 灰白色粘土シルト (全体に鉄分の沈着による変色を認める)
- 3 5Y5/1 灰白色粘土シルト (わずかに炭化物を含む)
- 4 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分により変色)
- 5 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト (鉄分により変色)
- 6 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分により変色)
- 7 5Y7/2 灰白色粘質シルト (鉄分により変色)
- 8 5Y8/1 灰白色粘質シルト (中世包含層)
- 9 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (土器を含む。上位は変色あり) 古代包含層か。SR01 最上層
- 10 10YR3/1 黒褐色粘質土 (土器の細片を多く含む) SR01 上層
- 11 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (上面に沿ってこぶし大以下の礫や土器が多く堆積する。焼土塊 (5mm程) をごく少量含む) SR01 上層
- 12 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 (2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトや 2.5Y6/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む) SR01 中層
- 13 2.5Y6/3 に近い黄灰色粘質土 (2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) SR01 中層
- 14 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (8層の影響で上位に変色。径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む)
- 15 地山土 2.5Y7/3 浅黄色粘質土
- 16 2.5Y7/1 灰白色粘質シルト
- 17 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
- 18 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (8層の影響で上位は変色)
- 19 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 20 10YR5/1 褐灰色粘質シルト (全体に鉄分マンガが沈着)
- 21 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト (全体に鉄分マンガが沈着)
- 22 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む)
- 23 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (径 3cm 以下の地山ブロックを多く含む)
- 24 10YR3/1 黒褐色粘質土 (径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む)
- 25 10YR3/1 黒褐色粘質土 (径 1cm 以下の地山ブロックを少量含む)
- 26 10YR3/1 黒褐色粘質土 (径 3cm 以下の地山ブロックを少量含む)
- 27 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (地山ブロックと 10YR3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む)
- 28 2.5Y3/2 黒色粘質土 (土器を多く包含、抜き取り痕か)
- 29 10YR3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) 柱痕
- 30 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) 埋め土
- 31 5Y2/1 黒色粘質土 (全体に土器を包含)
- 32 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトブロックを多く含む)
- 33 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (南壁 12層ブロックを少量含む。土器細片を多く含む)
- 34 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 35 5Y4/1 灰白色粘質シルト
- 36 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (径 1cm 以下の地山ないし南壁 12層ブロックをまばらに多く含む)
- 37 5Y2/1 黒色粘質土

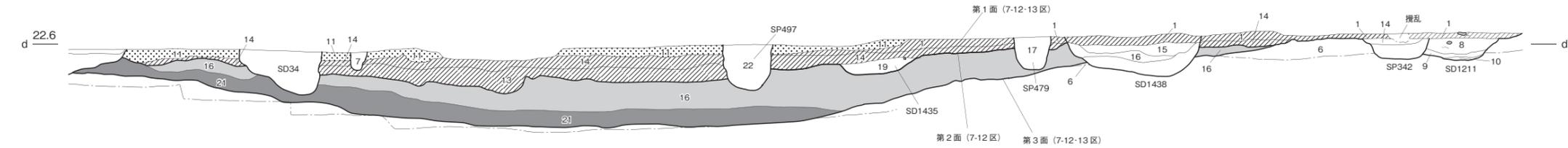


- b-b'
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂まじりシルト質土 (Fe・Mn を多く含む。小礫粗砂を含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂まじりシルト質土 (Fe・Mn を含む。小礫粗砂を含む) SD1012 上層
- 2' 10YR3/2 黒褐色砂まじりシルト質土 (2層と同一層と考えられる)
- 2'' 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (杭か?)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト質土 (2層より粘質。細砂粒粗砂を含む。Fe をわずかに含む) SD1012 下層
- 4 2.5Y5/3 黄褐色砂質土と 2.5Y3/1 (黒褐色シルト質土が混在するように堆積) SD1012 下層
- 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土 (小礫わずかに含む。Fe を含む。細砂を含む) SX04
- 6 2.5Y3/1 黒褐色極細砂質土 (小礫粗砂を含む。Fe を含む)
- 7 2.5Y5/6 黄褐色極細砂質土 (Fe・Mn を含む) 地山
- 8 10YR3/2 黒褐色シルト質土 (2cm 以下地山ブロックをわずかに含む。Fe・Mn を多く含む)
- 9 2.5Y3/1 黒褐色極細砂まじり粘質土
- 10 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土 (Fe・Mn を多く含む。小礫粗砂を含む。1cm 以下地山ブロックをわずかに含む)
- 11 10YR4/3 に近い黄褐色砂質土 (中～極細砂主体。2cm 以下の礫をわずかに含む) SR01 中層
- 12 2.5Y3/2 黒褐色砂まじりシルト質土 (土器片多数包含。小礫粗砂を多く含む。Fe・Mn を含む) SR01 上層上位
- 13 2.5Y5/2 暗灰黄色砂まじりシルト質土 (Fe・Mn を多く含む。小礫粗砂を多く含む) SP247
- 14 2.5Y3/1 黒褐色砂まじりシルト質土 (4mm 以下の礫を多く含む。Fe・Mn を含む)

図 20 SR01 (3)



- c-c'
- |    |  |    |   |
|----|--|----|---|
| 1  | 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト   | 24 | 2.5Y6/1 黄灰色砂礫層  |
| 2  | 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト                                       | 25 | 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分により変色)   |
| 3  | 5Y7/1 灰白色砂質シルト (Mn 粒含む)                                  | 26 | 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト。鉄分をまばらに多く含む  |
| 4  | 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト (酸化鉄粒含む)                                | 27 | 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト。2.5Y7/1 灰白色粘質シルトブロックをまばらに多く含む                        |
| 5  | 5Y7/1 灰白色砂質シルト (Mn 粒含む)                                  | 28 | 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト (鉄分により変色)   |
| 6  | 5Y7/1 灰白色砂質シルト混じり 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト                       | 29 | 5Y3/1 灰白色粘質シルト。中世包含層  |
| 7  | 2.5Y2/1 黒色粘質シルト  | 30 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (土器を含む。上位は変色あり) 古代包含層か。SR01 最上層                        |
| 7' | 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト   | 31 | 10YR3/1 黒褐色粘質土 (土器の細片をまばらに多く含む) SR01 上層                               |
| 8  | 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト混じり粘質シルト                                 | 32 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (上面に沿ってこぶし大以下のレキや土器が多く堆積する。焼土塊 (5mm程) をごく少量含む) SR01 上層 |
| 9  | 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト   | 33 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y 灰黄色粘質土ブロックを少量含む)                                 |
| 10 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト (2.5Y7/4 浅黄色粘質シルトブロック微量混じり)             | 34 | 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (地山土ブロックを多く含む)   |
| 11 | 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルトブロック少量混じり 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト               | 35 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (地山土ブロックを多量に含む。こぶし大の礫と土器を多量に含む)                       |
| 12 | 2.5Y3/1 黒褐色小礫混じり砂質シルト                                    | 36 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト (径 1cm 以下の 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む)                |
| 13 | 2.5Y3/1 黒褐色小礫混じり砂質シルト (12 よりやや淡い)                        | 37 | 5Y4/1 灰黄色粘質土 (地山土なし 10 層ブロックを多く含む)                                    |
| 14 | 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルトブロック混じり 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト                 | 38 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (地山土なし 10 層ブロックを少量含む)                                  |
| 15 | 2.5Y3/1 黒褐色小礫微量混じり砂質シルト                                  | 39 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (径 2cm 以下の地山土ブロックないし SR01 中層ブロックを少量含む)             |
| 16 | 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト   | 40 | 5Y4/1 灰黄色粘質シルト (地山土ブロックを一部ラミネーション状に含む)                                |
| 17 | 2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルトブロック混じり 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト (小礫・土器片多量に混じる) | 41 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (上面に沿ってこぶし大以下の礫や土器が多く堆積する。焼土塊 (5cm程) をごく少量含む)          |
| 18 | 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト                                       | 42 | 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 (2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトで 2.5Y5/2 灰黄色粘質土ブロックを多く含む)           |
| 19 | 2.5Y5/2 暗灰黄色小礫混じり砂質シルト                                   |    |   |
| 20 | 2.5Y6/4 にぶい黄色混じり 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト                        |    |   |
| 21 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトブロック混じり 2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルト (地山)           |    |   |
| 22 | 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト (地山)                                   |    |   |
| 23 | 2.5Y6/2 灰黄色粘質砂   |    |   |



- d-d'
- |    |   |    |  |
|----|---|----|--|
| 1  | 10YR2/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1~2cm のブロック土を少量含む) SR01 上層          | 23 | 10YR5/1 褐色シルト SD08   |
| 2  | 10YR2/2 ~ 3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。SD10 上層)                         | 24 | 10YR4/1 褐色シルト (径 5cm 大のベースブロックを少量含む) SD08                            |
| 3  | 10YR2/1 黒色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1~2cm のブロック土を少量含む) SD10 中層           | 25 | 10YR4/2 灰黄褐色シルト  |
| 4  | 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物を少量含む。粒径 1~5cm のブロック土をやや多量に含む) SD10 下層            | 26 | 10YR4/2 灰黄褐色シルト  |
| 5  | 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土。地山   | 27 | 10YR5/2 灰黄褐色シルト  |
| 6  | 10YR7/6 明黄褐色シルト (Fe・Mn) ベース層  | 28 | 10YR3/3 暗褐色シルト SD08  |
| 7  | 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1~2cm のブロック土を若干量含む)                 | 29 | 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む) 遺構埋土                       |
| 8  | 10YR2/2 ~ 3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む)                                 | 30 | 5Y5/2 灰オリーブ色粘質砂 (径 1cm 以下の礫・砂層)                                      |
| 9  | 10YR2/1 黒色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1~2cm のブロック土を少量含む)                   | 31 | 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを少量含む)                             |
| 10 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Mn・粒径 1~3cm のブロック土をやや多量含む)                              | 32 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (上面に沿ってこぶし大以下の礫や土器が多く堆積する。焼土塊 (5mm程) をごく少量含む) SR01 上層 |
| 11 | 10YR4/1 褐色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む) SR01 最上層                             | 33 | 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土   |
| 12 | 10YR3/1 黒褐色粘質土。SR01 上層  | 34 | 5Y2/2 オリーブ色粘質土。地山 (ブロックを少量含む)  |
| 13 | 10YR3/1 黒褐色粘質土。SR01 上層  | 35 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (地山土ブロックを少量含む) SR01 下層                               |
| 14 | 10YR3/1 ~ 4/1 黒褐色シルト (Mn・Fe・炭化物を少量含む) SR01 上層                           | 36 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト質土 (粗砂~1cm 以下の礫を含む。Fe を含む。径 0.5cm 前後の地山土ブロックわずかに含む)    |
| 15 | 10YR4/1 ~ 5/1 褐色シルト (Mn・Fe・炭化物・焼土細粒を若干量含む。粒径 1~3cm のブロック土を少量含む)         | 37 | 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (小礫を含む。Fe を含む) SP224                                  |
| 16 | 2.5Y5/4 黄褐色シルト (Fe・Mn。下面付近に粒径 5~6cm のブロック土を少量含む) SR01 中層                | 38 | 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土  |
| 17 | 2.5Y4/2 ~ 4/1 暗灰黄色シルト (Fe・Mn・炭化物粒を少量含む。粒径 1cm 程度のブロック土を底面付近に少量含む) SP479 | 39 | 2.5Y3/1 黒褐色粘質土。地山 (6層ブロックを多く含む)                                      |
| 18 | 10YR4/1 褐色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土粒を少量含む) SR01 最上層                             | 40 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土 (小礫を含む。Fe・Mn を含む)                                   |
| 19 | 2.5Y4/1 ~ 4/2 暗灰黄色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む。粒径 1cm 程度のブロック土を少量含む) SD     | 41 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土 (小礫~粗砂を含む。Fe を含む)                                   |
| 20 | 2.5Y3/1 黒色粘土 (Fe。粒径 1~2cm 程度のブロック土を少量含む) SR01 下層                        |    |  |
| 21 | 2.5Y3/1 黒色粘土 (Fe。粒径 1~2cm 程度のブロック土を少量含む) SR01 下層                        |    |  |
| 22 | 10YR5/1 褐色シルト (径 2~3cm 大のベースブロック・Mn 粒を多く含む)                             |    |  |

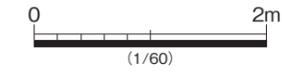


図 21 SR01 (4)

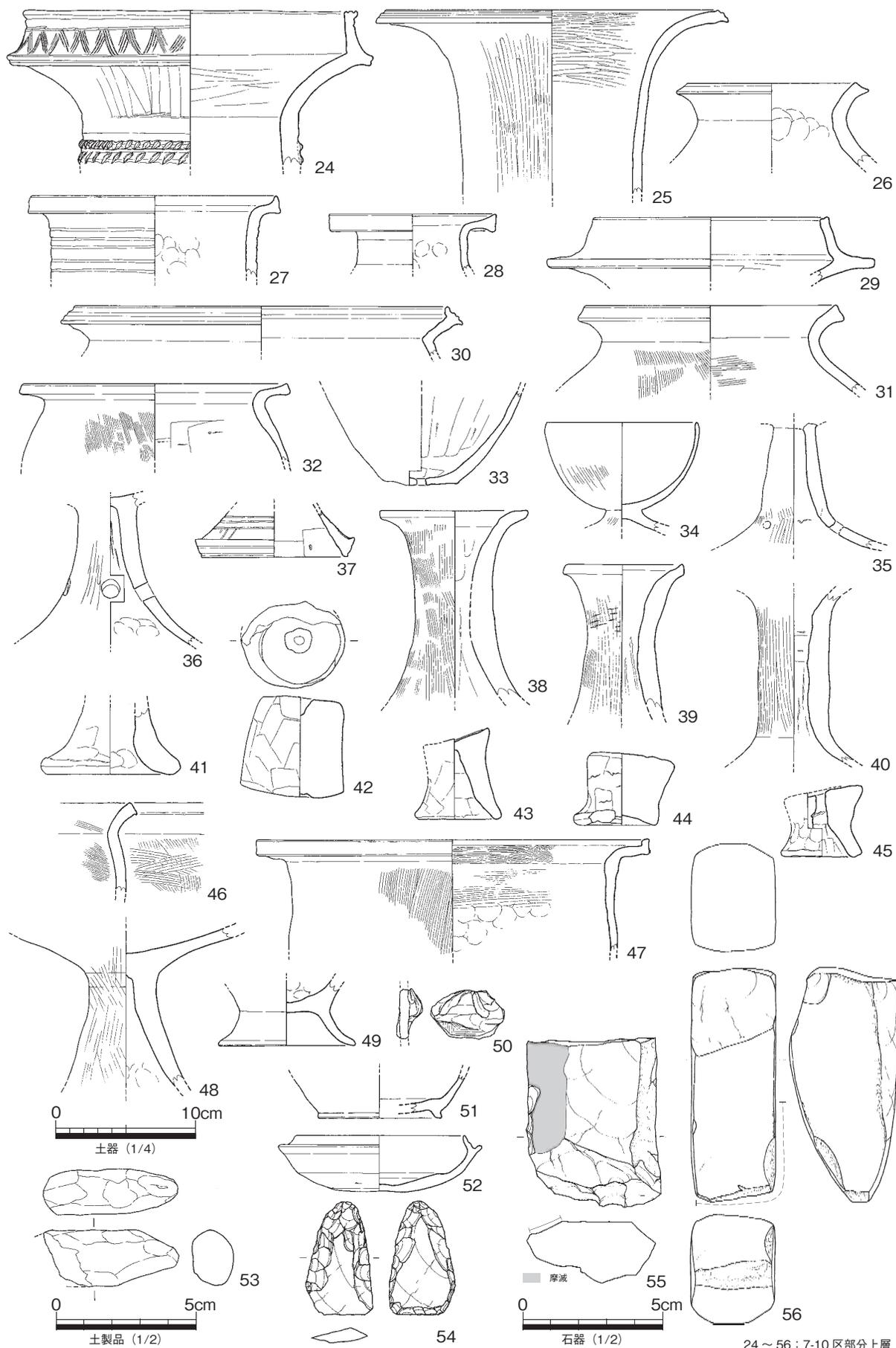


图 22 SR01 (5)

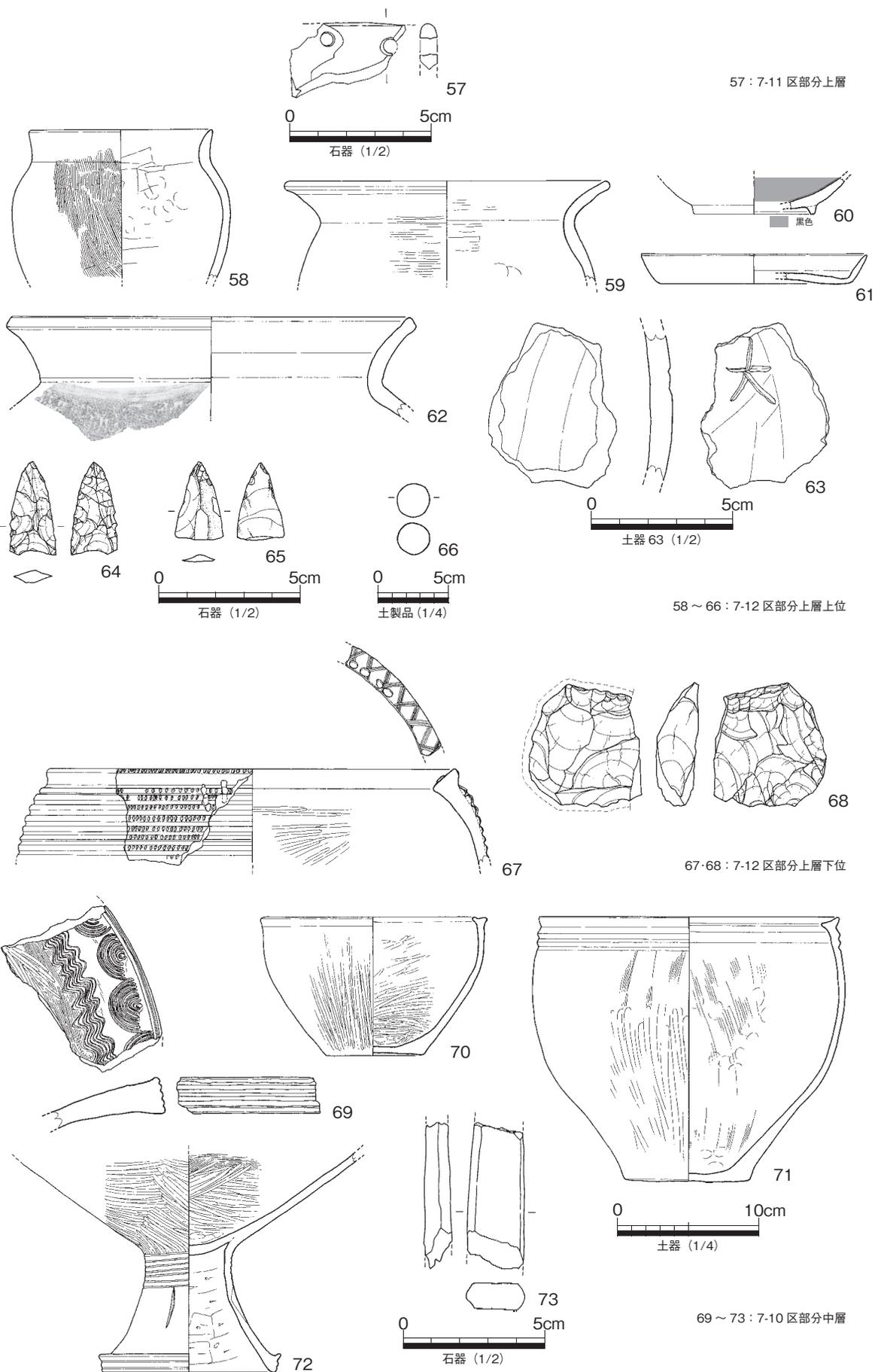


図 23 SR01 (6)

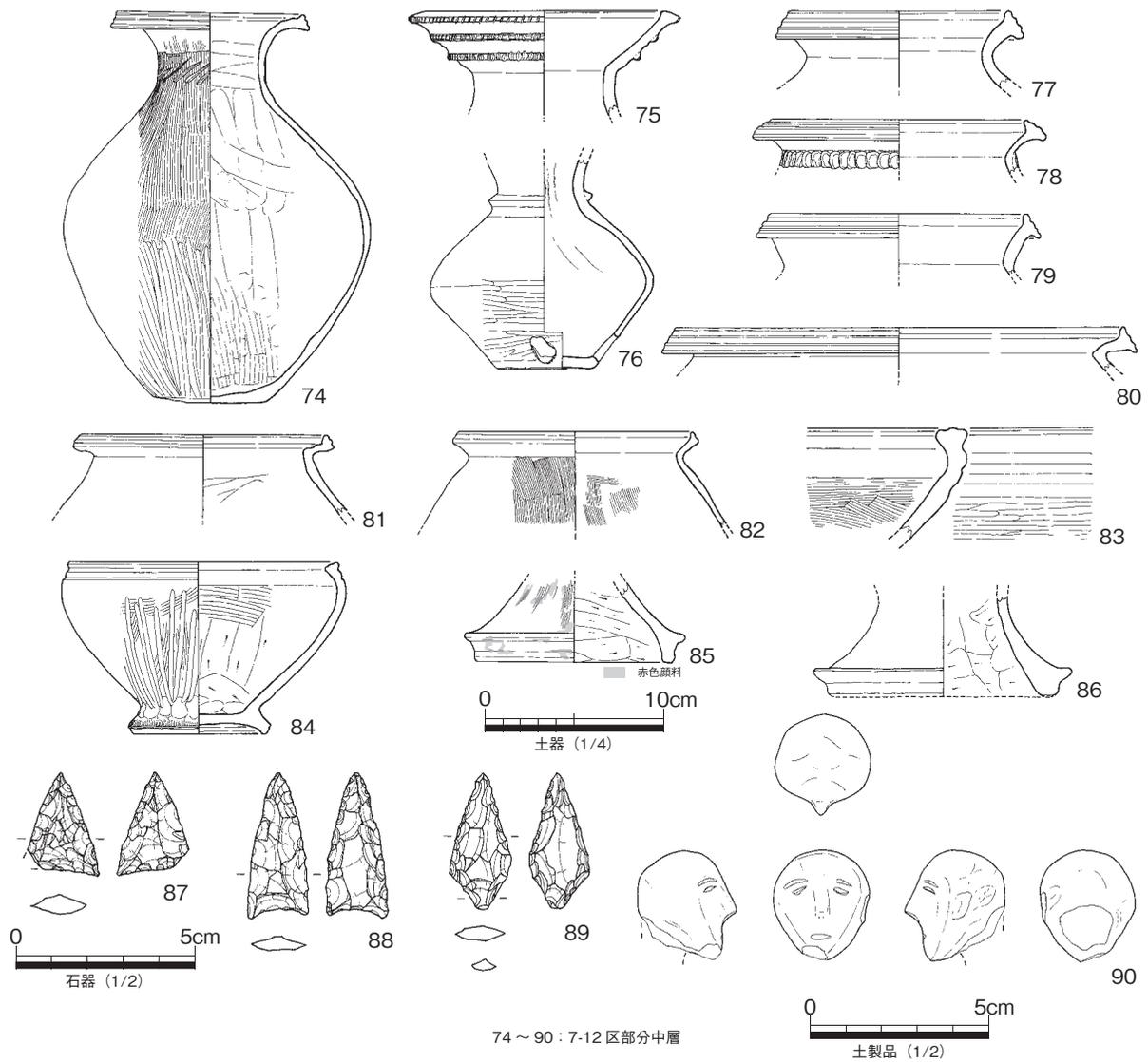


図 24 SR01 (7)

にも掲載したが、7-10区・7-11区の南壁の土層断面図である。また、図 20 c c' は『旧練兵場遺跡 V』に掲載した7-8区東壁と7-11区の土層断面図である。そのほか、7-12区・7-13区部分 (d d')、7-10・11区部分 (b b') の土層断面図を掲載した。発掘調査では SR01 の埋土を下層・中層・上層・最上層の4層に大別した。各調査区によって微妙に土色・土質は異なるが、いずれの調査区でも下層は厚さ 0.2～0.3 m の黒褐色粘質シルトで、弥生時代前期から中期後半の土器を含む。中層は厚さ 0.3～0.5 m のにぶい黄褐色粘質シルトで、弥生時代中期後半の土器を含む。SR01 は中層の堆積で埋土の堆積はほぼ終了するが、若干の凹みが後世まで残り、凹みには黒褐色粘質シルト (上層)、その上部には7-13区・7-14区では褐灰色シルト～黒褐色粘質シルト (最上層) が堆積する。第1節でも報告したが、上層を2層に分けて、上層下位の上面から8世紀末の土坑7-11区 SK01、最上層上面には中世の遺構が掘られていることから、上層下位は8世紀末以前、最上層は中世以前の堆積であることがうかがわれる。なお、第7章第1節の分析によると、上層上位・下位のいずれの層からもイネの植物珪酸体が多量に検出されたことから、これらの土層は耕作土層の可能性が高い。また、中層からは検出されなかった。

遺物は下層から上層のいずれの層位からも多量に出土した。24～56は7-10区部分の上層から出土し

た遺物である。7-10 区部分の上層から出土した 29 は弥生土器壺口縁部である。複合口縁で、複合部が突出し、弥生時代後期の西部瀬戸内に多く見られる形態であるが、土器胎土は旧練兵場遺跡で一般的にみられるものである。そのほか土師器甕（46・47）や須恵器底部片（51）、須恵器杯（52）などがある。47 は土師器甕で、9 世紀に属する。52 は須恵器杯で、陶邑編年 TK217 型式に属し、7 世紀前葉から中葉のものである。56 は結晶片岩製の柱状片刃石斧を叩き石に転用したものである。57 は 7-11 区部分の上層から出土した。57 は磨製石包丁の背部付近で、石材は輝緑凝灰岩の可能性が高い。2 個の円孔がある。58～66 は 7-12 区部分の上層の上位から出土した。60 は黒色土器椀で 10 世紀前半、61 は須恵器皿で、8 世紀後半に属する。63 は須恵器甕の体部片で、外面に「大」の字が窺描きされる。67・68 は 7-12 区部分上層下位から出土した遺物である。上層と各遺構の埋土の区別は付き難く、上部から掘り込まれている遺構の遺物が混入している可能性も否定できないが、上層には弥生時代中期から後期の土器のほか古代の土師器・須恵器が含まれる。特に 7-12 区上層上位には 7～10 世紀の遺物が含まれる。

69～73 は 7-10 区部分中層、74～90 は 7-12 区部分中層から 7-12 区部分の上層上位から出土した遺物である。73 は刃部・基部を欠損するが、結晶片岩製の扁平片刃石斧である。85 は高杯脚部で、赤彩がみられる。土器胎土は茶褐色で、角閃石・雲母を含む。吉備地方からの搬入品であろう。90 は土製品で、人の頭部を象ったものである。下部には剥離痕があり、剥離面は円形で、首が付いていたことがうかがわれる。頭部の長さは 3.1cm、幅 2.6cm。顔は逆三角形で、鼻は高く、頭部には髪の毛の表現はない。ヘラ状工具により線状の凹みで眉・目・口を表現している。顔の左側面の耳に当たる場所には凹みがあり、耳を表現している可能性もあるが、右側面には凹みはみられない。同じような土製品は岡山市南方（済生会）遺跡から出土している<sup>(1)</sup>。南方（済生会）遺跡例は頭部の長さは 2.4cm、幅 2.6 cm とほぼ同じ大きさである。このように中層から出土した土器はいずれも弥生時代中期後半のものである。本書で掲載した調査区では下層から出土した遺物は図化可能なものはみられなかった。

このように SR01 の埋没は弥生時代中期から始まり、大部分は弥生時代中期後半までに埋没している。また、上層下位層上面からは 8 世紀末ごろの土師器焼成土坑が検出されていることから、上層下位の堆積は 8 世紀末以前、上層上位の堆積は 10 世紀ごろであると考えられる、なお、本書 7 章に自然科学的分析の結果を掲載しているが、分析の結果上層の黒褐色粘質シルト層にはイネ科の植物珪酸体が含まれることが指摘されているから、上層は古代の耕作による攪拌層の可能性が高い。

## 2. 弥生時代後期

### 竪穴建物

#### 7-12 区 SH02（図 25）

7-12 区東部第 2 面（Ⅳ層上面）で検出された遺構である。周辺は現在の建物基礎の攪乱や古代の柱穴や溝によって削平され、遺構の全体は不明瞭であるが、溝が弧状に巡ることから、竪穴建物と考えた。建物の平面形はややいびつな円形と推定される。壁溝は幅 0.1～0.3 m、深さ 0.5 m である。柱穴は SP319・SP176・SP178・SP240 がある。いずれも平面形は円形で、径 0.2～0.3 m、深さ 0.05～0.2 m である。遺物は土器片が少量出土した。小片のため詳細な時期は不明であるが、平面形が円形であることから SH02 は弥生時代のもと考えられる。

#### 7-10 区 SX04（図 26）

7-10 区北東部第 3 面（Ⅳ層上面）で検出された遺構である。古代の溝 SD1006・SD1012・SD1015、

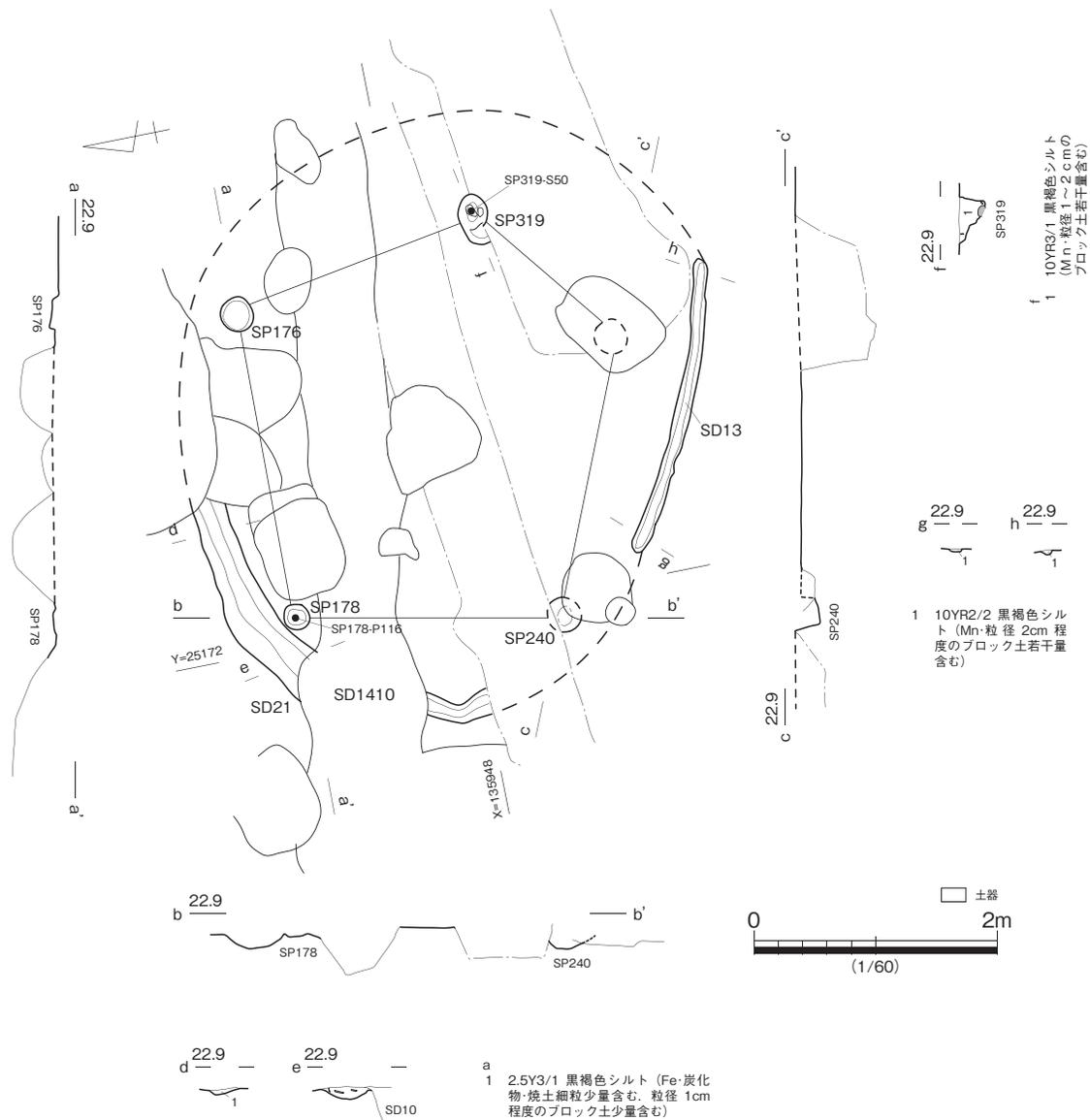


図 25 7-12 区 SH02

古代の柱穴 SK02 と重複し、削平されるため、SX04 の西部・北部・南部は不明であるが、残存する遺構の東部の輪郭が円弧状で、底面は平坦であることから、平面形円形の竪穴建物と考えた。東壁際には壁溝 SD17 がある。SD17 は幅・深さとも 0.1 m 前後である。遺構の底面から柱穴は検出されず、主柱穴は不明である。遺物は少量の土器片が出土しただけであるが、平面形が円形であることから SX04 は弥生時代の竪穴建物と考えられる。

#### 土坑

##### 7-11 区 SK06 (図 27)

7-11 区西部第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された土坑である。古代の掘立柱建物 SB07 の柱穴 SP146 と重複し、西部は削平される。平面形は楕円形で、長軸 1.6 m、短軸 0.8 m である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。遺物は土器片が少量した。須恵器片はみられないことから、SK06 は弥生時代のもと考えられる。

##### 7-11 区 SX02 (図 28 ~ 30)

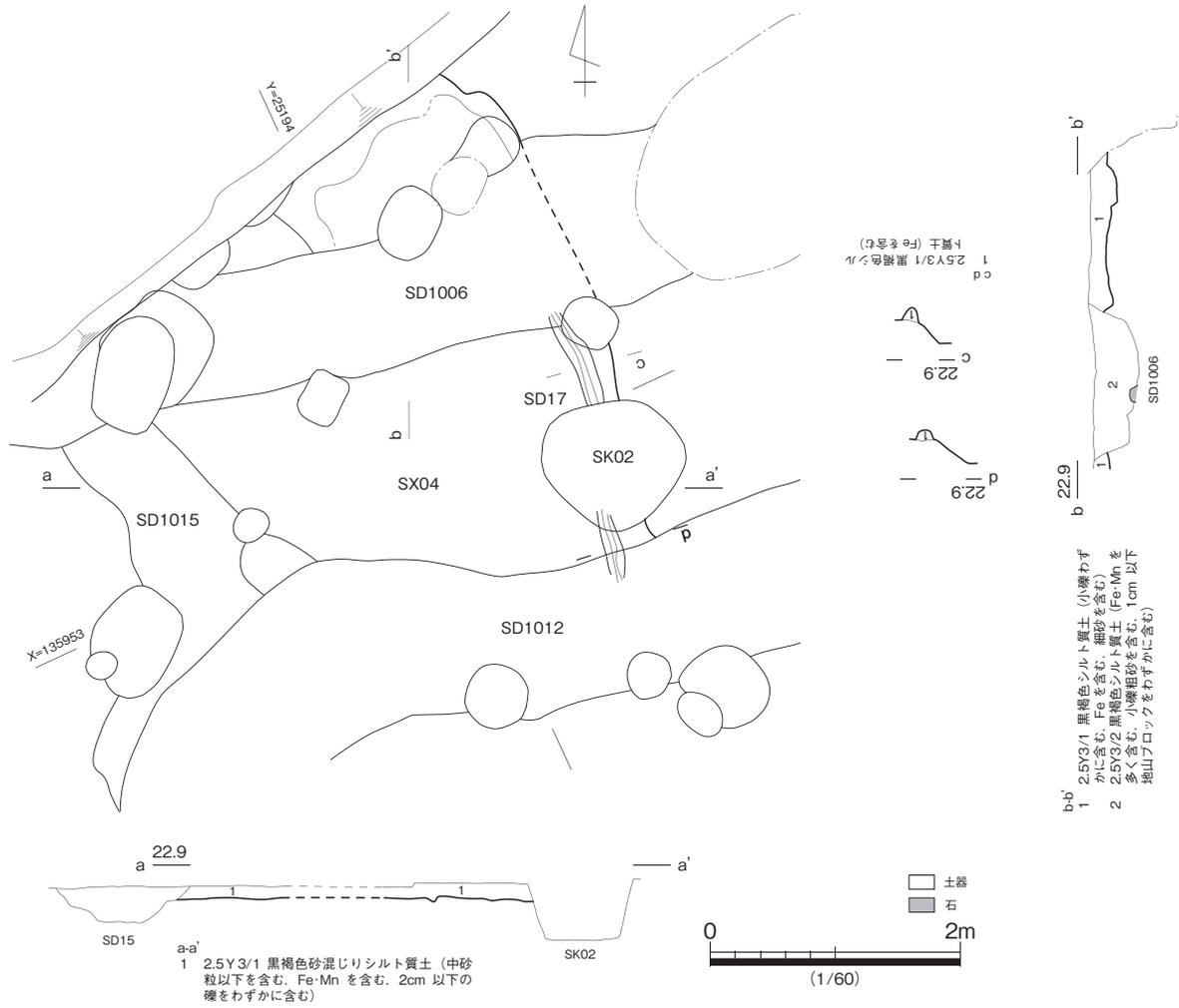


図 26 7-10 区 SX04

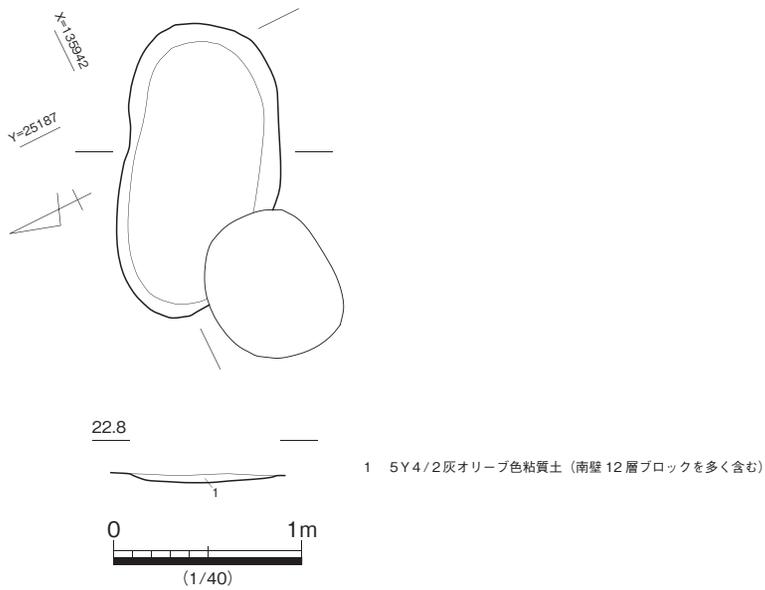


図 27 7-11 区 SK06

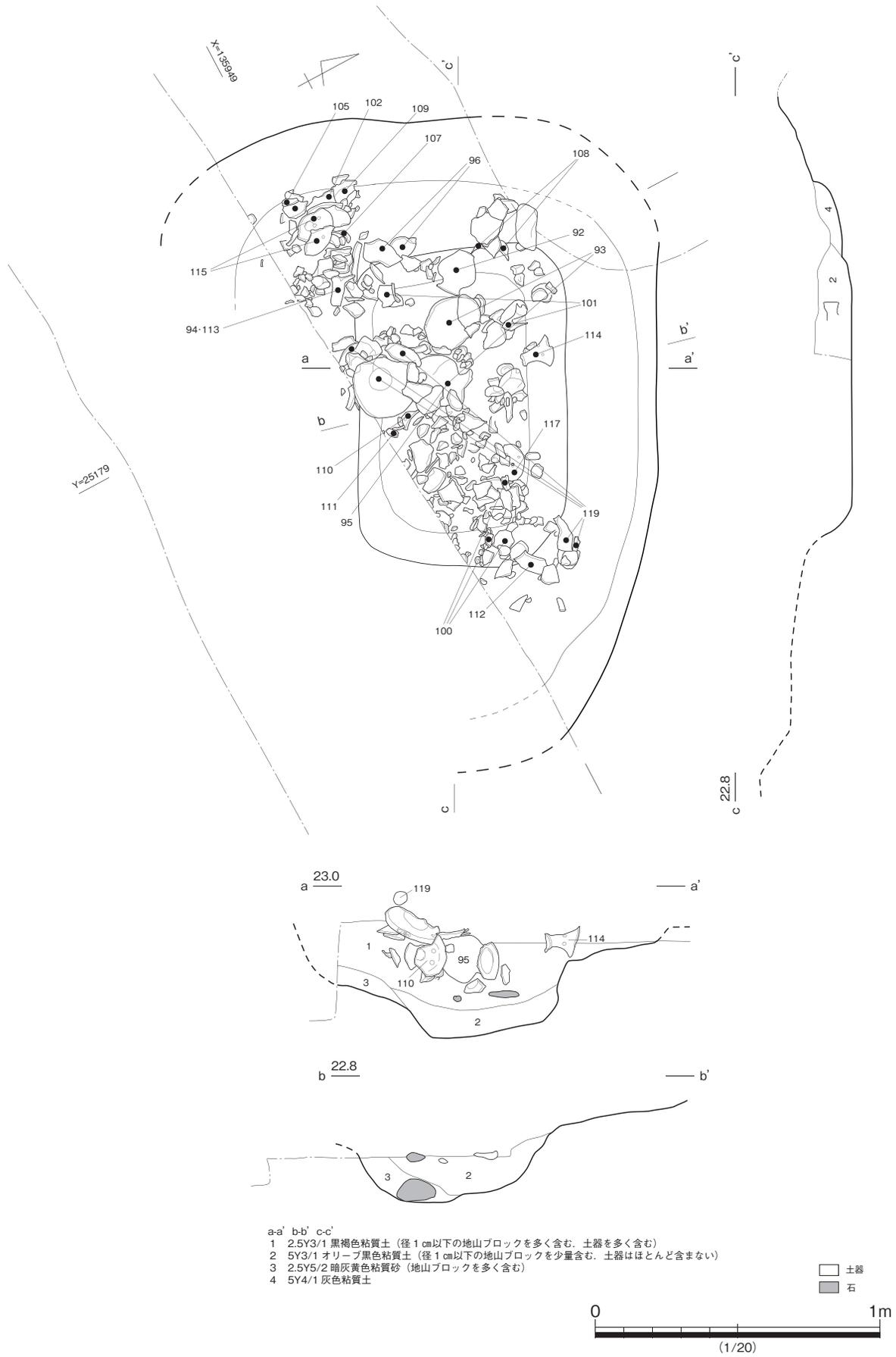


図 28 7-11 区 SX02 (1)

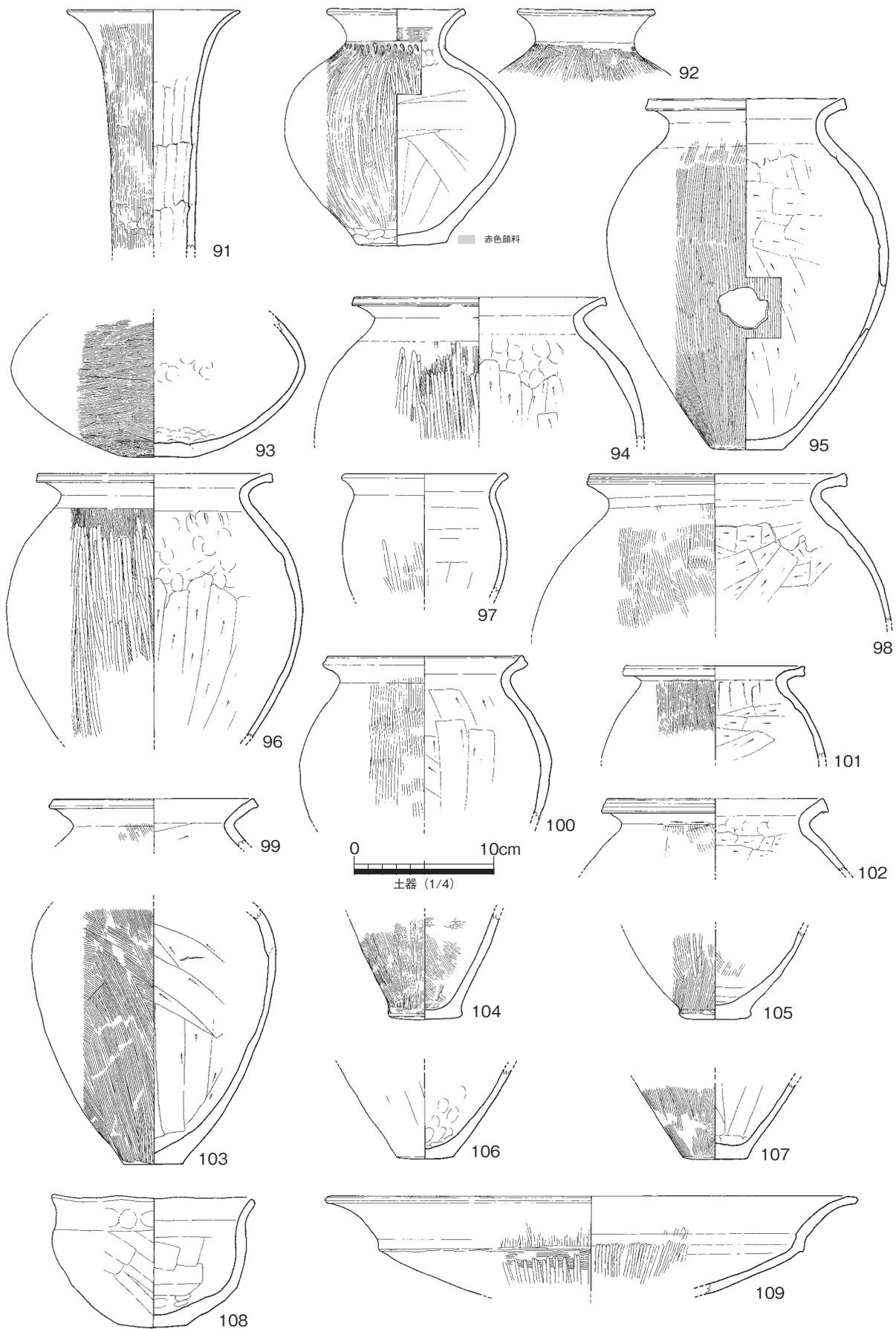


图 29 7-11 区 SX02 (2)

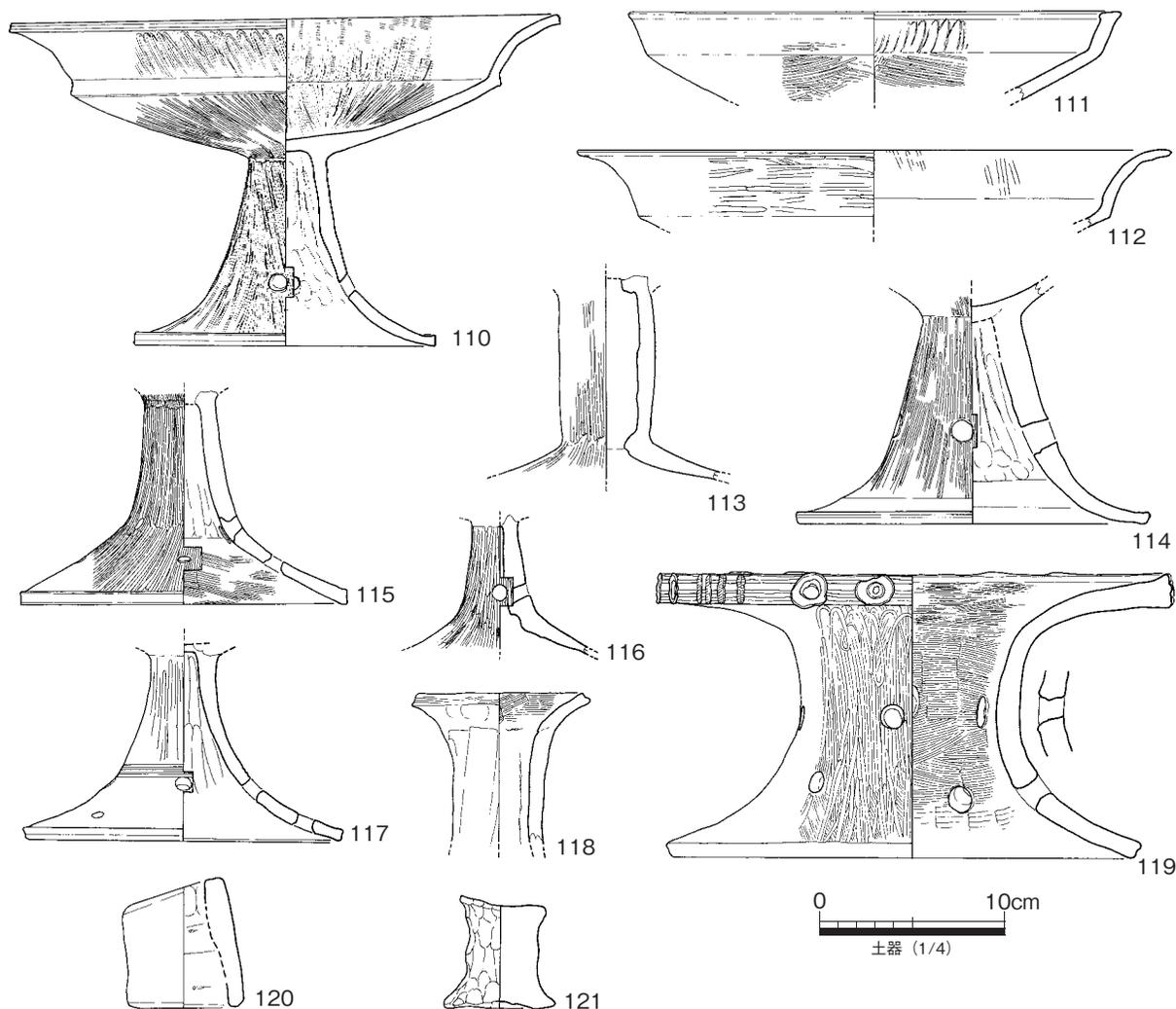


図 30 7-11 区 SX02 (3)

7-11 区北西部第 3 面 (IV 層上面) で検出された土坑である。南部は攪乱によって削平されるため、不明である。残存部分から平面形はややいびつな隅丸長方形で、長軸 2.1 m 以上、短軸 1.4 m 以上と考えられる。底面は二段になり、最深部の深さは 0.4 m である。SX02 の中からは多量の弥生土器が出土した。いずれも破片の状態出土したことから、廃棄されたものと考えられる。91 ~ 121 は SX02 から出土した土器である。91 は長頸壺の口頸部、93 は壺の体部から底部である。接合点はなかったが、胎土が類似しており、同一個体の可能性が高い。92 は頸部外面の一部に刻み目があり、赤彩が施される。これらの土器はいずれも弥生時代後期中葉に属することから、SX02 も同時期のものと考えられる。

#### 溝

##### SD1010 (図 31)

7-10 区南東部第 3 面 (IV 層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD10 である。SD10 は南西から北東 (N60° E) に向かう。SD10 の中央部は中世の柱穴 SP11 に削平され、SP11 の東でいったん途切れるが、これらを合わせた検出長 2.8 m、幅 0.15 m、深さ 0.5 m である。遺物は少量の弥生片が出土した。竪穴建物の壁溝の一部の可能性もある。遺物は土器小片が少量出土した。須恵器はみられな

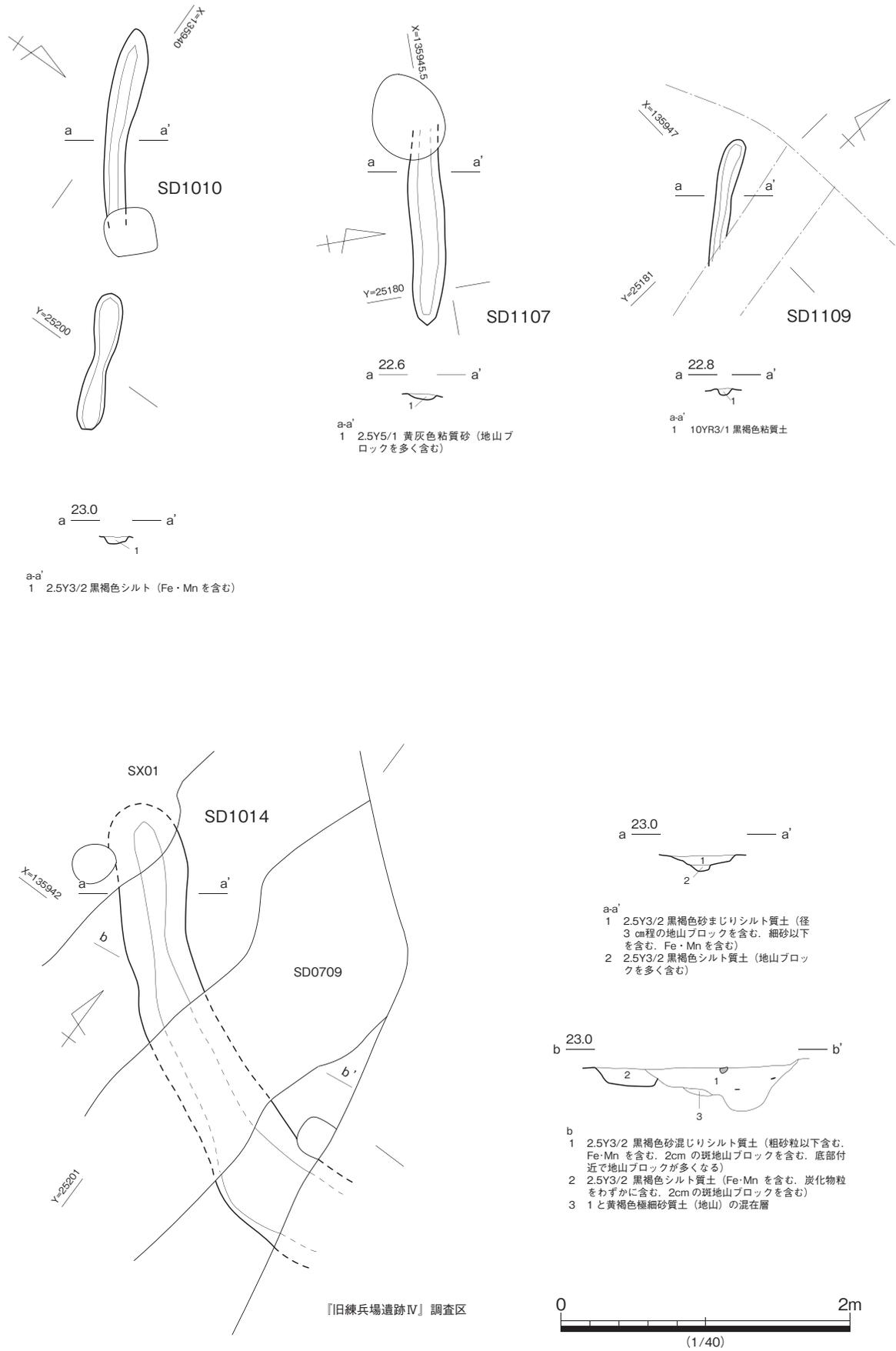


図 31 SD1010・SD1107・SD1109・SD1014

いことから、弥生時代のものと考えられる。

#### SD1014 (図 31)

7-10 区南東部第 3 面 (IV 層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD14 である。東から北西 (W50° N) に向かう。東端に隣接する調査区は『旧練兵場遺跡Ⅳ』(平成 26 年 3 月刊行) で報告した 7-5 区であるが、7-5 区西部は攪乱によって大きく削平されており、SD1014 の東端は不明である。SD1014 は北西端では古代の土坑 7-11 区 SX01、中央部では古代の溝 SD0709 と重複し、削平される。いずれも SD1014 のほうが古い。SD1014 の検出長は 3.0 m、溝幅 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.15 m である。弥生土器片が少量出土したことから、SD1014 は弥生時代の溝と考えられる。

#### SD1107 (図 31)

7-11 区の西部第 3 面 (IV 層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD07 である。南東から北西方向に走る。溝の北西端は中世の柱穴 SP10 と重複し、削平される。検出長 1.2 m、幅 0.2 m、断面形は浅い皿状で、深さは 0.05 m である。土器小片が 1 点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、SD1107 は弥生時代の溝と考えられる。

#### SD1109 (図 31)

7-11 区の西部第 3 面 (IV 層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD09 である。南東から北西方向に走る。南東端は攪乱によって削平される。検出長 2.2 m、幅 0.15 m で、断面形は皿状で、深さ 0.05 m である。土器小片が 1 点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、弥生時代の竪穴建物の壁溝の可能性が高い。

#### SD1113 (図 32)

7-11 区の西部第 3 面 (IV 層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD13 である。ほぼ東西に向かう。東端は古代から中世の柱穴 SP134、西端は古代の溝 SX1101 と重複し、削平される。SD1113 は検出長 0.8 m、幅 0.15 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。土器体部小片が 1 点出土しただけで、詳細な時期は不明であるが、弥生時代の竪穴建物の壁溝の可能性が高い。

#### SD1115 (図 32)

7-11 区の南西部第 3 面 (IV 層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD15 である。南東から北西 (N65° W) に向かう。南東端は中世の柱穴 SP160 と重複し、削平される。北西端は 7-12 区に連続するがこの付近は削平されているため不明である。SD1115 は検出長 4.1 m、幅 0.4 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。遺物は土器片・サヌカイト片が少量出土しただけである。須恵器は含まないことから、弥生時代の溝と考えられる。

#### SD1117 (図 32)

7-11 区南東部第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD17 である。南南東から北北西 (N22° W) に向かう。北西端は古代から中世の柱穴 SP200 と重複し、削平される。検出長 1.2 m、幅 0.15 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。竪穴建物の壁溝の可能性が高い。土器小片が 10 点程度出土した。須恵器は含まないことから、弥生時代の溝と考えられる。

#### SD1118 (図 32)

7-11 区南西部第 3 面 (SR01 中層上面) SX03 の底面で検出された溝である。調査時の遺構名は SD18 である。南西から北東 (N43° E) に向かう。南西端は攪乱によって大きく削平される。検出長 1.2 m、幅 0.2 m、断面形は浅い皿状で、深さ 0.05 m である。遺物は土器小片が 1 点出土した。遺物の詳細な時

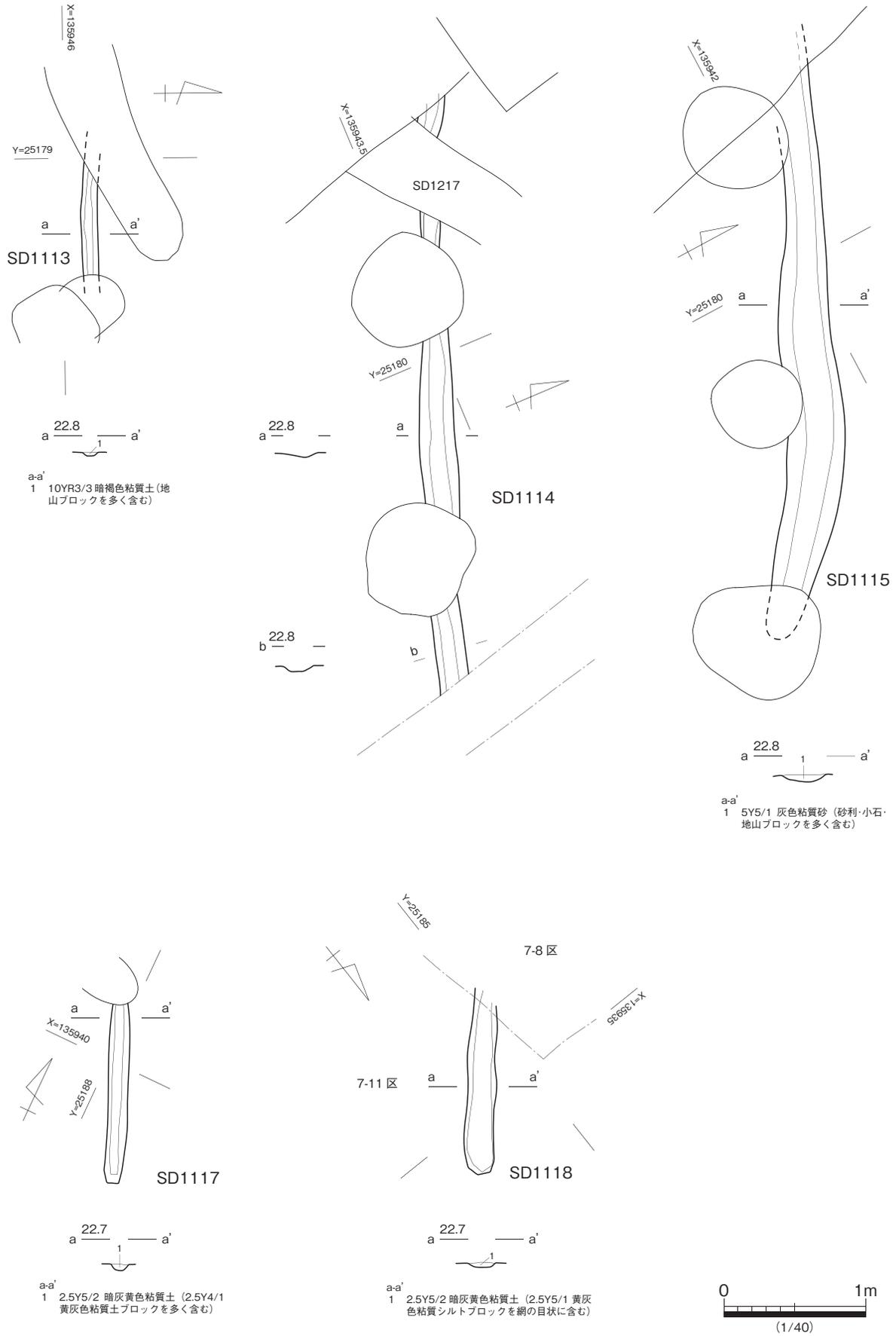


図 32 SD1113・SD1114・SD1115・SD1117・SD1118

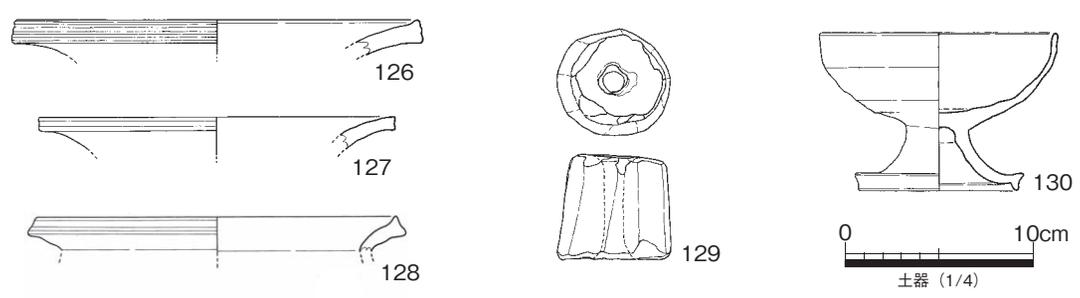
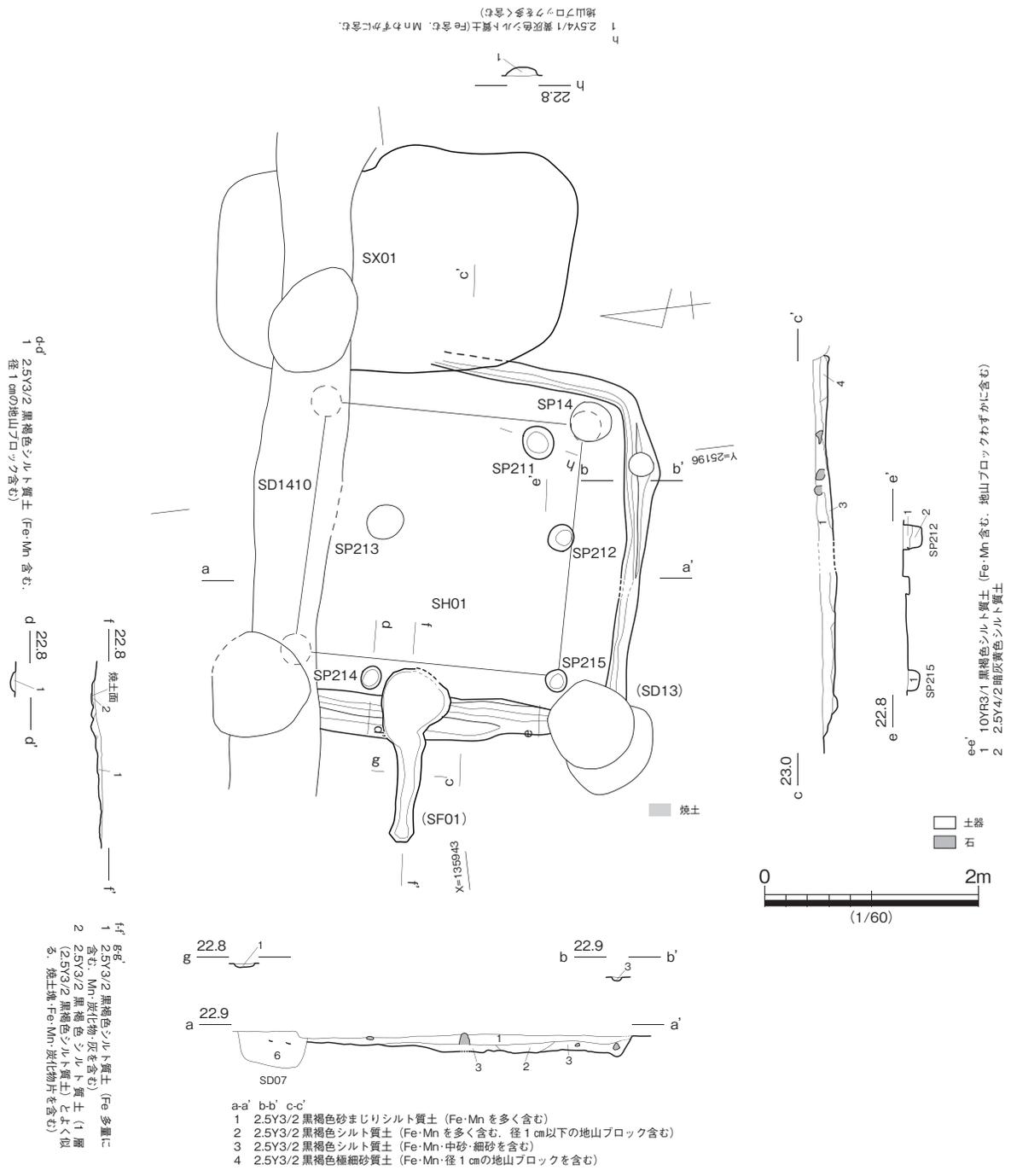


図 33 7-10 区 SH01

期は不明であるが、SR01 中層上面で検出されたことから、弥生時代の溝と考えられる。

### 3. 古代

#### 竪穴建物

##### 7-10 区 SH01 (図 33)

7-10 区南部で検出された竪穴建物である。建物の北部は古代の溝 SD1410、東部は 7 世紀の土坑 SX01 と重複し、削平される。建物の平面形は方形で、東西長は 3.5 m、南北長は 3.5 m 前後、深さは 0.2 m である。壁沿いには幅 0.2 m、深さ 0.05 m の壁溝が巡り、西壁中央付近には竈がある。竈は残存状態が悪く、焚き口と考えられる浅い落ち込みと煙道と考えられる浅い溝が検出されただけで、竈の袖は残存していなかった。煙道の長さは住居の壁から測ると 1.0 m である。焚き口の底面には焼土が貼り付いていた。支柱穴は SP215 をはじめ 4 個で構成されると推定されるが、北部は古代の溝 SD1410 によって削平される。また、東南に当たる柱穴の場所には中世の柱穴 SP14 があり、支柱穴は SP14 と重複している可能性が高い。遺物は土器・須恵器片などが整理箱 1 箱程度出土した。126～130 は SH01 から出土した遺物である。126～128 は弥生土器の口縁部、129 は弥生時代から古墳時代の支脚である。130 は須恵器高杯で陶器編年 TK217 型式に属し、7 世紀中葉のものである。弥生土器片も含まれるが、130 の時期から SH01 は 7 世紀中葉のものであると考えられる。

##### 7-11 区 SX03 (図 34)

7-11 区南西端の第 2 面 (SR01 上層下位上面)、7-8 区北東端・7-7 区北西端で検出された竪穴建物である。

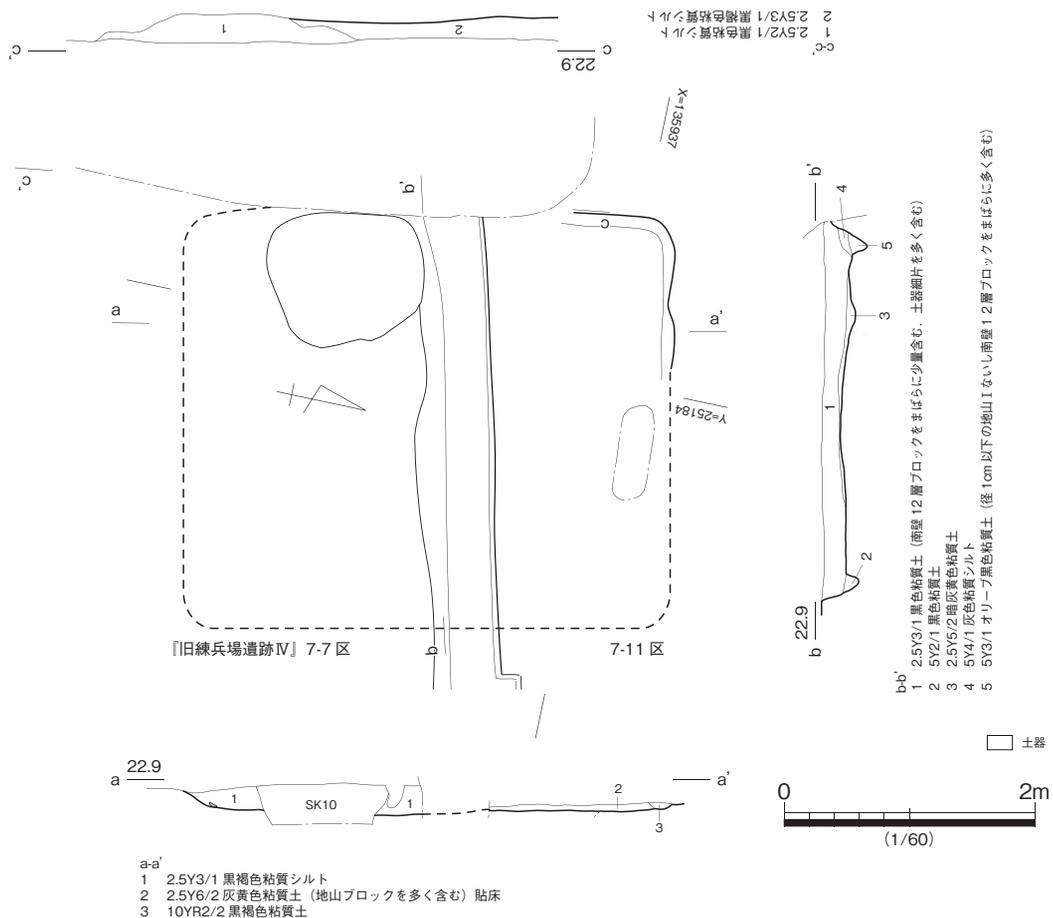


図 34 7-11 区 SX03

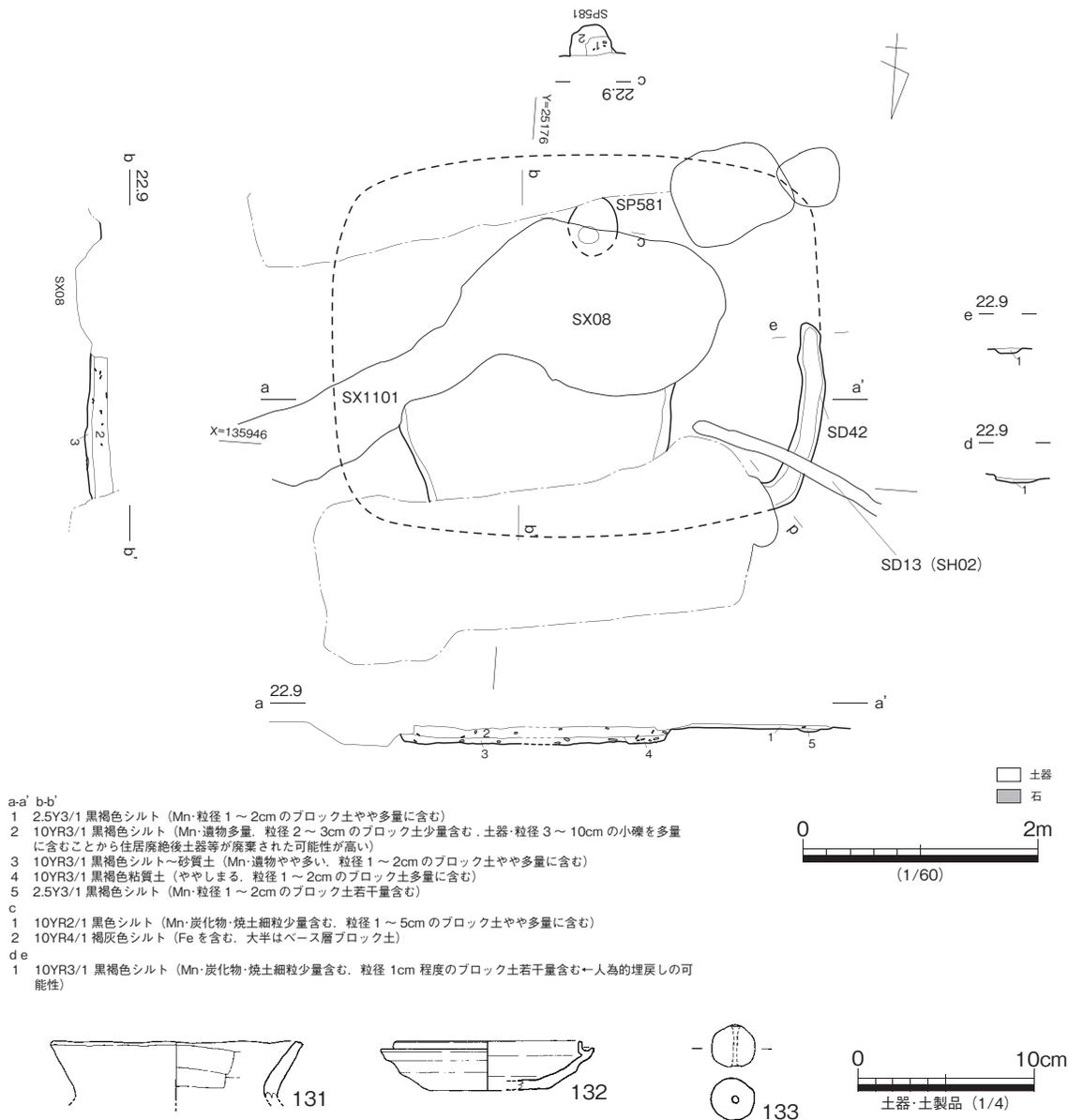


図 35 7-12 区 SH01

SX03 は 3 調査区の境界にあり、遺構全体を同時に調査しておらず、整理時に図面上で復元した竪穴建物である。7-11 区では建物の北部が検出された。7-8 区では攪乱のため大きく削平されており、西端は不明であるが、7-7 区と 7-8 区の調査区境に設定した土層断面用の畦（7-8 区東壁）で建物の断面が確認できた。また、発掘調査時に 7-7 区では建物の東部を検出できなかったが、整理時に土層断面（7-7 区西壁）図や写真を観察し、建物の断面を確認した。7-11 区で確認されている建物の北西隅の形状から、平面形は隅丸方形と考えられる。遺構の東部は平面的な検出はできなかったが、7-11 区の南壁の観察から東西長は 3.0 m、7-7 区西壁の観察から南北長は 3.7 m で、平面形は長方形と考えられる。また、床面は平坦で、床面までの深さは 0.2 m である。主柱穴は未検出である。遺物は土器片が少量出土した。7-11 区では SR01 上層下位上面で検出されていることから、SX03 は 7 世紀ごろのものと考えられる。

#### 7-12 区 SH01 (図 35)

7-12 区東部で検出された竪穴建物である。周辺は現代の建物基礎の攪乱により削平され、中央部には古代の溝 SX1101、古代の土坑 SX08 と重複し、削平されるため建物の全体は不明瞭である。建物の壁

は未検出であるが、壁溝 SD42 の形状から SH01 の平面形は方形と考えられる。SD42 の内側には幅 1.0 m のベッド状遺構があり、その内側の床面は 0.1 m 下がる。壁溝 SD42 は幅 0.2 m、深さ 0.5 m である。床面からは柱穴 SP581 が検出された。SP581 の平面形は円形で、径 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.25 m である。遺物は土器・須恵器片が整理箱 1 箱程度出土した。いずれも小破片である。131 ～ 133 は SH01 から出土した遺物である。131 は土師器甕、132 は須恵器杯、133 は土製の玉である。132 は陶邑編年 TK217 型式に属する。これらの遺物から SH01 は 7 世紀中葉のものと考えられる。

#### 掘立柱建物

##### SB03 (図 36)

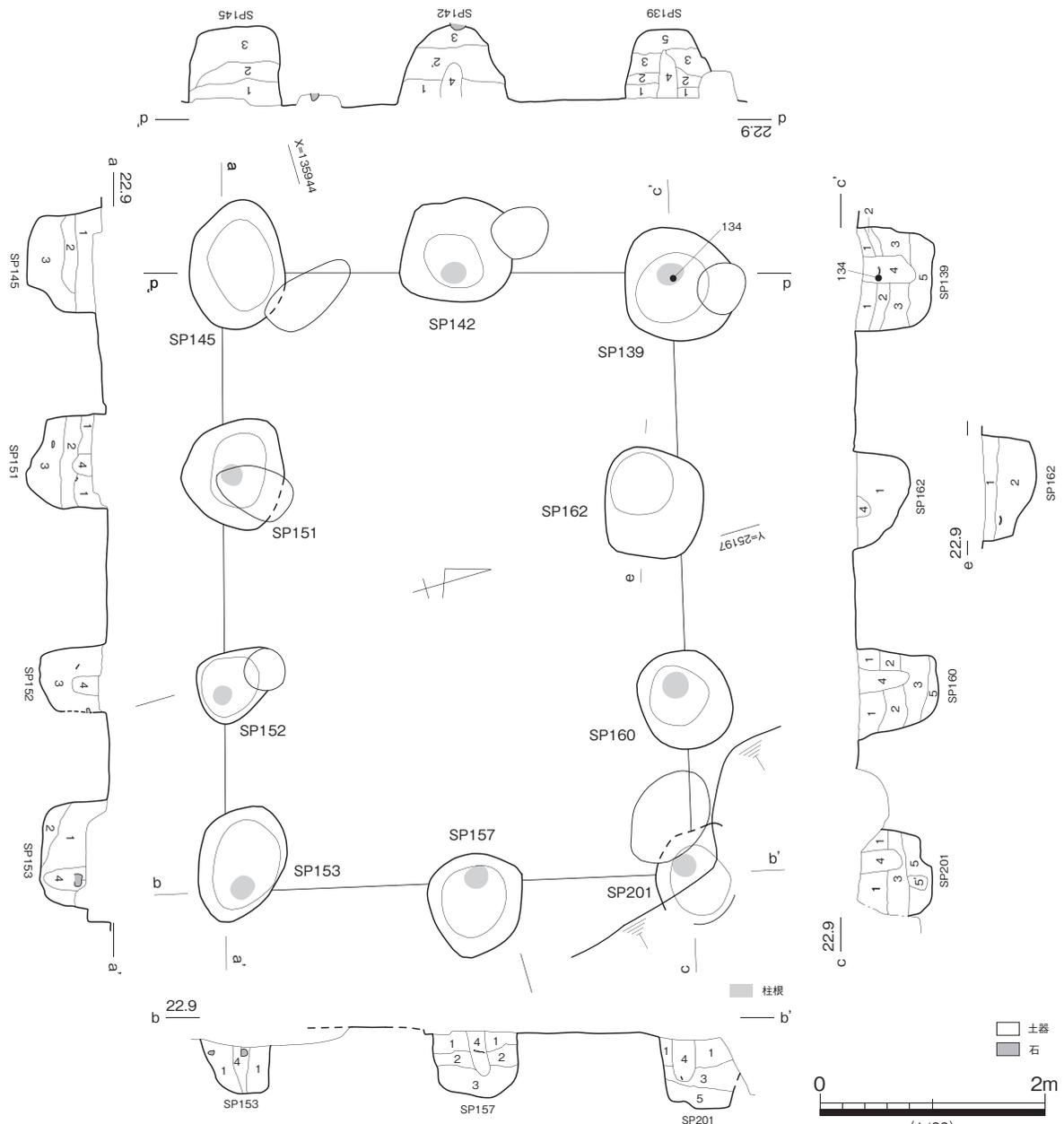
7-10 区第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された掘立柱建物である。桁行 3 間 (5.3 m)、梁間 2 間 (3.8 m)、桁行の方向は E 16° S で、周辺の条里地割の方向とは異なる。南側の桁行の柱穴 SP145・SP151・SP152・SP153 は 8 世紀に埋没する溝 SD1410 埋土上面で検出された。建物の柱穴は円形またはややいびつな方形である。南側の中ほどの柱穴 SP152 は径 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.6 m とやや小さいが、他の柱穴は径 0.8 ～ 1.0 m、深さ 0.6 ～ 0.7 m である。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とする土層である。各柱穴からの出土遺物は整理箱 5 箱と多いが、大半が弥生土器の細片である。SP139 の柱痕から出土した 134 は須恵器高杯脚部、SP145 から出土した 135・136 は須恵器甕口縁部、SP152 から出土した 140 は須恵器壺の体部である。これらの須恵器は 7 世紀に属する。SP151 から出土した 137 は須恵器の口縁部、138 は土師器甕の口縁部で、10 世紀から 11 世紀に属する。また、SP201 からは鉄釘 (141) が出土した。SP151・SP201 は中世の柱穴と重複しており、遺物が混入した可能性がある。SB03 は付近の条里地割の方向とは異なり、SB06・SB07 とほぼ同じ方向である。これらの建物は 8 世紀のものであることから、SB03 も同時期のものと考えられる。

##### SB04 (図 37・38)

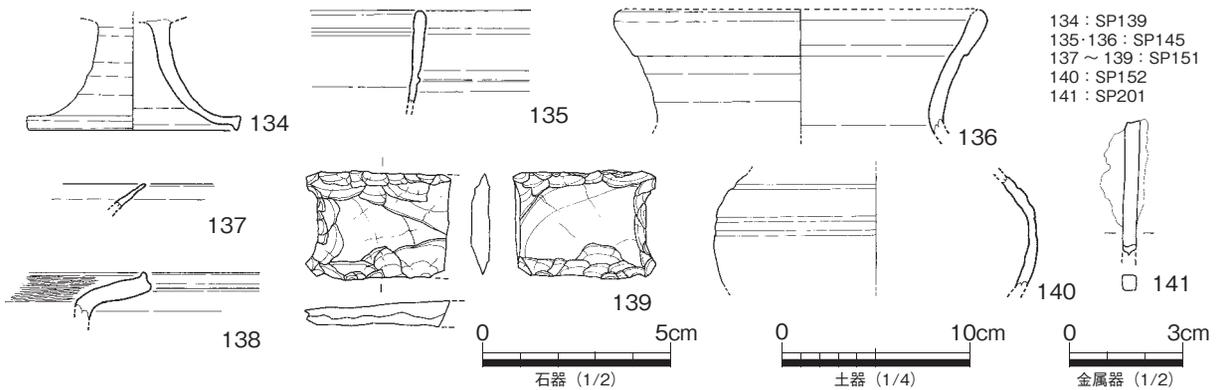
7-12 区南部で検出された掘立柱建物である。SB22 と重複する。建物の方向や出土遺物から SB04 のほうが古いと考えられる。SB04 は桁行 3 間 (6.3 m)、梁間 2 間 (4.4 m) で、桁行の方向は N 21° W である。柱穴の平面形は隅丸方形またはいびつな円形である。建物の北東隅にある SP304 は 1 個の柱穴として調査しているが、底面の形状から 2 個の柱穴が重複していると考えられる。柱穴の新旧関係は不明であるが、SB04 の柱穴は東側と考えられる。また、SP304 の南側に位置する SP127 も 2 個の柱穴が重複している可能性が高い。柱穴の直径または 1 辺の長さは 0.5 ～ 0.9 m、深さ 0.2 ～ 0.7 m である。柱穴の埋土は黄灰色シルト・黒褐色シルトを中心とする。各柱穴からの出土遺物は合計整理箱 1 箱程度である。SP60 の掘り方から出土した 142 は土師器杯で 10 世紀中葉から後半に属する。SP62 から出土した 144 は弥生土器の体部片で、外面にヘラ描きの文様がみられる。SP157 から出土した 147 は須恵器杯口縁部、SP472 から出土した 150 は須恵器皿で、いずれも 9 世紀前半に属する。これらの出土遺物から SB04 は 10 世紀後半のものと考えられる。

##### SB06 (図 39)

7-11 区南西部から 7-12 区南東部第 2 面 (SR01 中層上面) にかけて検出された掘立柱建物である。7 世紀の溝 SD0817 と重複するが、SB06 のほうが新しい。また、10 世紀の掘立柱建物 SB08 と重複するが、SB06 のほうが古い。SB06 は桁行 3 間 (4.7 m)、梁間 2 間 (3.4 ～ 3.7 m) の総柱の建物である。桁行の方向は N20° E である。柱穴の平面形は円形で、径 0.6 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.6 m である。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とし、一部の柱の抜き取り痕に灰色シルトが堆積する。各柱穴からの出土遺物は



- a-a' b-b' c-c' d-d' e
- 1 2.5Y3/1 黒褐色極細砂質土 (Fe 多く含む、Mn 含む、径 1 cm 以下の地山ブロックを含む)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト質土と地山土 (砂質) の互層状堆積
  - 3 10YR3/1 黒褐色シルト質土 (径 1cm 程度の地山ブロックをわずかに含む)
  - 4 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土
  - 5 10YR3/1 黒褐色砂礫まじりシルト質土 (地山土 (砂質) を多く含む)
  - 5' 10YR3/1 黒褐色シルト質土 (径 1cm 程度の地山ブロックをわずかに含む)



- 134 : SP139
- 135-136 : SP145
- 137 ~ 139 : SP151
- 140 : SP152
- 141 : SP201

図 36 SB03



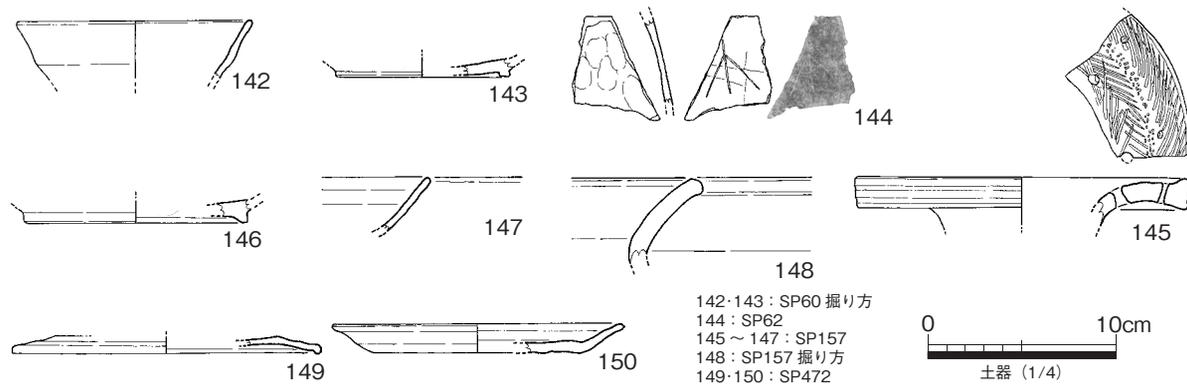


図 38 SB04 (2)

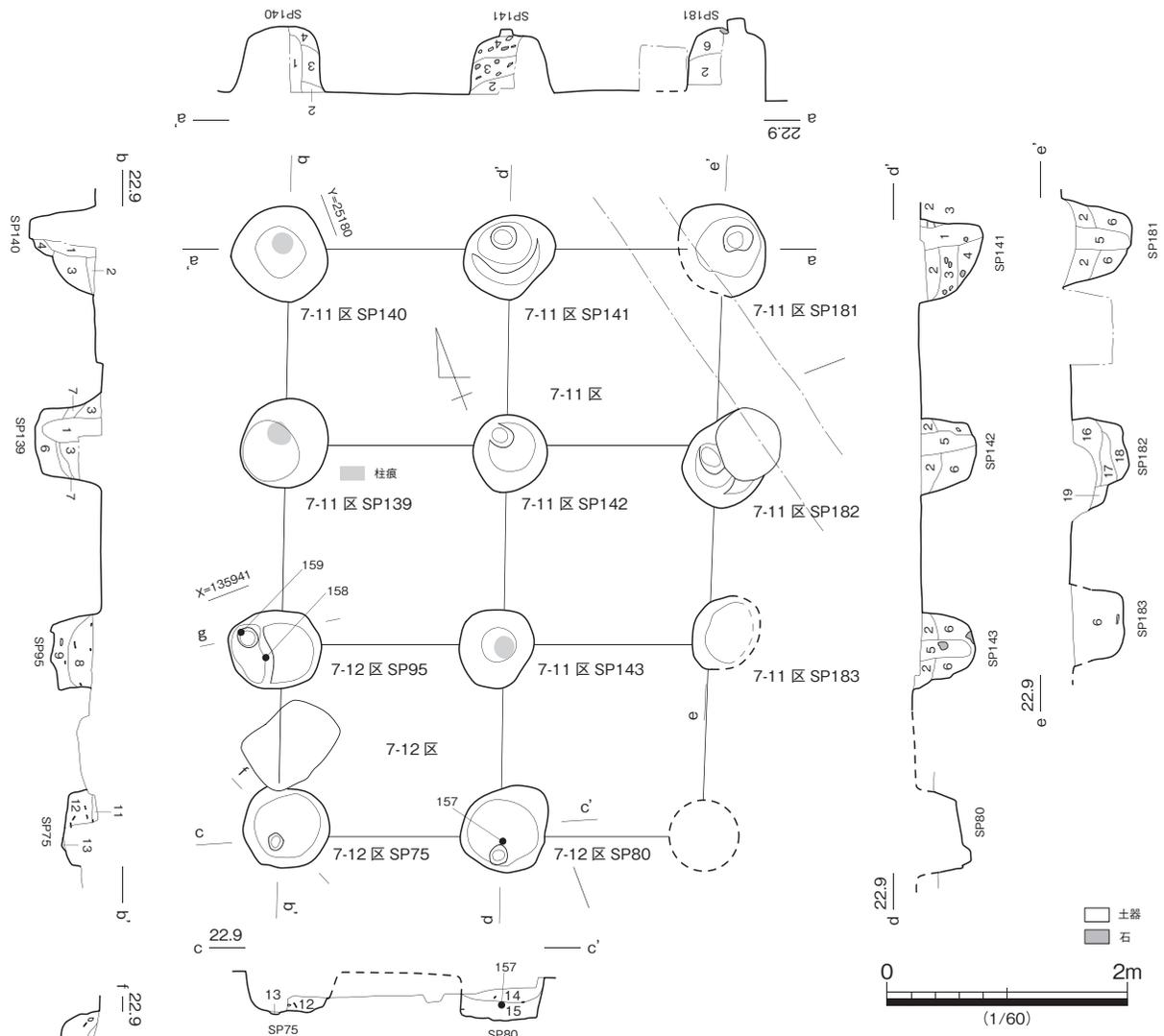
整理箱 5 箱と多いが、大半が弥生土器の細片である。7-12 区 SP75 から出土した 151 は須恵器甕の口縁部、7-11 区 SP182 から出土した 152、7-11 区 SP182 から出土した 153 と 7-10 区 SP142 から出土した 156 は土師器甕、7-11 区 SP183 から出土した 154 は土師器高杯である。7-12 区 SP80 から出土した 157 は管玉で、材質は超塩基性岩である。7-11 区から出土した 155 は須恵器壺体部片で、8 世紀に属することから、同方位の SB03・SB07 と同様 SB06 は 8 世紀のものと考えられる。

SB07 (図 40・41)

7-12 区南部第 2 面 (SR01 上層下位上面) で検出された掘立柱建物である。中世の溝 SD1102・SD1103、掘立柱建物 SB01 と重複する。これらの遺構よりも SB07 のほうが古い。SB07 は桁行 3 間 (4.7 m)、梁間 2 間 (3.1～3.3 m) の総柱の建物で、桁行の方向は N24° E である。柱穴の平面形は円形またはややいびつな円形である。桁行・梁間の柱穴は径 0.7～0.8 m、深さ 0.2～0.5 m であるが、束柱の柱穴は径 0.5～0.6 m、深さ 0.1～0.15 m とやや小さい。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とし、一部の柱痕に灰色シルトが堆積する。各柱穴からの出土遺物は整理箱 4 箱程度であるが、大半が弥生土器細片である。SP146 から出土した 160 は土師器高杯の脚部、SP150 から出土した 161 は土師器甕、SP151 から出土した 163 と SP188 から出土した 165 は須恵器杯、SP188 から出土した 164 は弥生土器甕底部、SP191 から出土した 166 は土師器鉢、167 は須恵器杯、168 は須恵器甕口縁部である。SP150 から出土した 162 は土製品であるが、種類は不明である。165 は 8 世紀に属することから、同方位の SB06・SB03 と同様 SB07 は 8 世紀のものと考えられる。

SB08 (図 42)

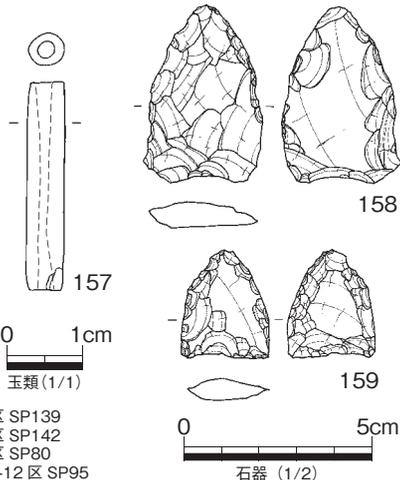
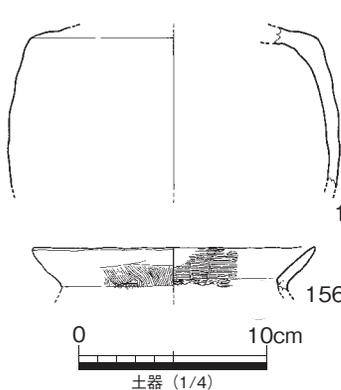
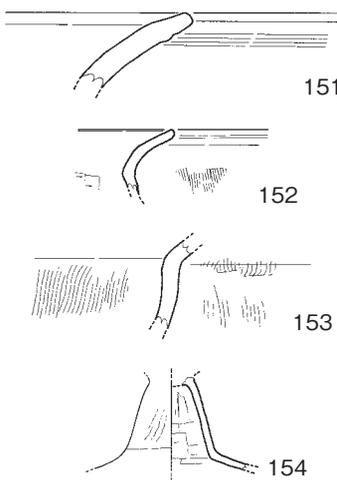
7-11 区東部から 7-12 区西部第 2 面 (SR01 上層下位上面) にかけて検出された掘立柱建物である。8 世紀の掘立柱建物 SB06、8 世紀の溝 SD0817 と重複する。これらの遺構よりも SB08 のほうが新しい。また、中世の溝 SD1102 と重複するが SB08 のほうが古い。SB08 は桁行 4 間 (7.2～7.9 m)、梁間 3 間 (4.6～4.8 m) で、桁行の方向は E32° N である。柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな隅丸方形で、径または長軸は 0.6～1.0 m、深さ 0.1～0.5 m である。柱穴の掘方の埋土は黒色粘質シルトを中心とし、柱痕は黄灰色または灰色シルトである。また、7-11 区 SP177・7-12 区 SP125・7-12 区 SP74・7-11 区 SP161・7-11 区 SP160・7-11 区 SP157 からは厚さ 5～10cm の平石が検出された。各柱穴からの出土遺物は整理箱 6 箱と多いが、大部分が弥生土器細片であった。7-11 区 SP156 から出土した 173 は須恵器杯で 9 世紀前半、7-11 区 SP159 から出土した 174 も須恵器杯で、10 世紀前半に属する。7-11 区 SP178 から出土した 177 も須恵器杯である。176 は土師器皿で 8 世紀から 9 世紀に属する。これ



a-a' b-b' c-c' d-d' e-e' f-f' g-g'

- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (径 1cm 以下の 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルトブロックを少量含む) 柱痕
- 2 5Y4/1 灰色粘質土 (地山土なし南壁 12 層ブロックを多く含む)
- 3 7.5Y2/1 黒色粘質土 (5Y5/2 灰オリーブ色粘質土ブロックを多く含む)
- 4 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 (5Y5/2 灰オリーブ色粘質土ブロックを多く含む)
- 5 7.5Y4/1 灰色粘質シルト (径 1cm 以下の地山と南壁 12 層ブロックをまばらに少量含む) 柱痕
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (地山と南壁 12 層ブロックを多量に含む)
- 7 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土 (2.5Y5/1 黄灰色粘質土ブロックを多く含む)
- 8 10YR3/2 黒褐色シルト (Mn: 炭化物・焼土細粒少量含む)
- 9 2.5Y3/1 黒褐色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む、層底面を中心に 3cm 程度のブロック土若干量含む)

- 10 10YR2/1 黒色粘土 (Fe: 粒径 1cm 以下のブロック土を極少量含む)
- 11 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn: 粒径 1 ~ 2cm のブロック土多量に含む) 人為的埋め戻し土か
- 12 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Mn: 炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1cm 程度のブロック土を底面付近に少量含む)
- 13 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn: 粒径 1cm 程度のブロック土少量含む)
- 14 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn: 炭化物・焼土細粒を少量含む)
- 15 10YR2/1 黒色シルト (Mn: 炭化物・焼土細粒を少量含む)
- 16 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (径 2cm 以下の地山ブロックを多く含む)
- 17 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土
- 18 2.5Y2/1 黒色粘質土
- 19 5Y2/1 黒色粘質土



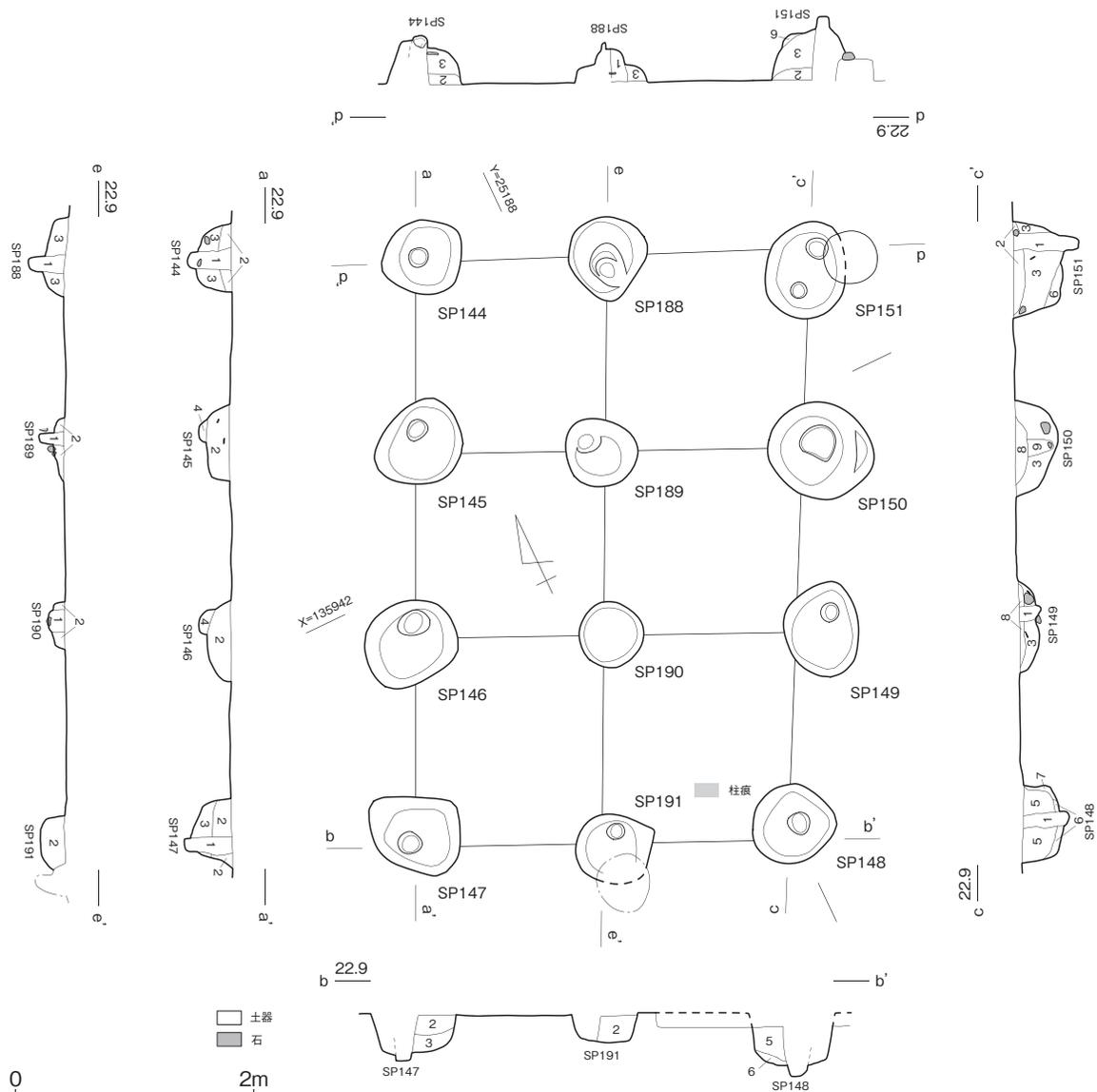
0 10cm  
土器 (1/4)

0 1cm  
玉類 (1/1)

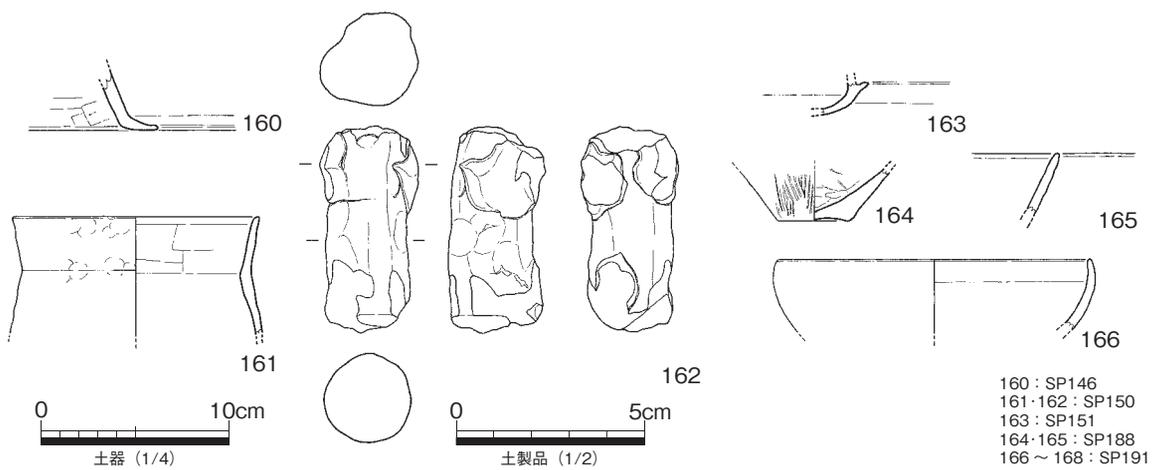
0 5cm  
石器 (1/2)

- 151 : 7-12 区 SP75      155 : 7-11 区 SP139  
 152 : 7-11 区 SP181      156 : 7-10 区 SP142  
 153 : 7-11 区 SP182      157 : 7-12 区 SP80  
 154 : 7-11 区 SP183      158・159 : 7-12 区 SP95

図 39 SB06



- a-a' b-b' c-c' d-d' e-e'
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト (径1cm以下の地山土と南壁12層ブロックを少量含む) 柱痕
  - 2 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む 2.5Y2/1 黒色粘質土
  - 3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (地山と南壁12層ブロックを多く含む)
  - 4 5Y4/1 灰色粘質シルト (径1cm以下の地山土ブロックを少量含む) 柱痕
  - 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む 5Y2/1 黒色粘質土
  - 6 2.5Y3/1 黒褐色粘質土ブロックを多く含む 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト
  - 7 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
  - 8 2.5Y2/1 黒色粘質土 (地山土と南壁12層ブロックを多量に含む)
  - 9 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (径1cm以下の地山土と南壁12層ブロックを少量含む)



- 160 : SP146  
 161・162 : SP150  
 163 : SP151  
 164・165 : SP188  
 166 ~ 168 : SP191

図 40 SB07 (1)

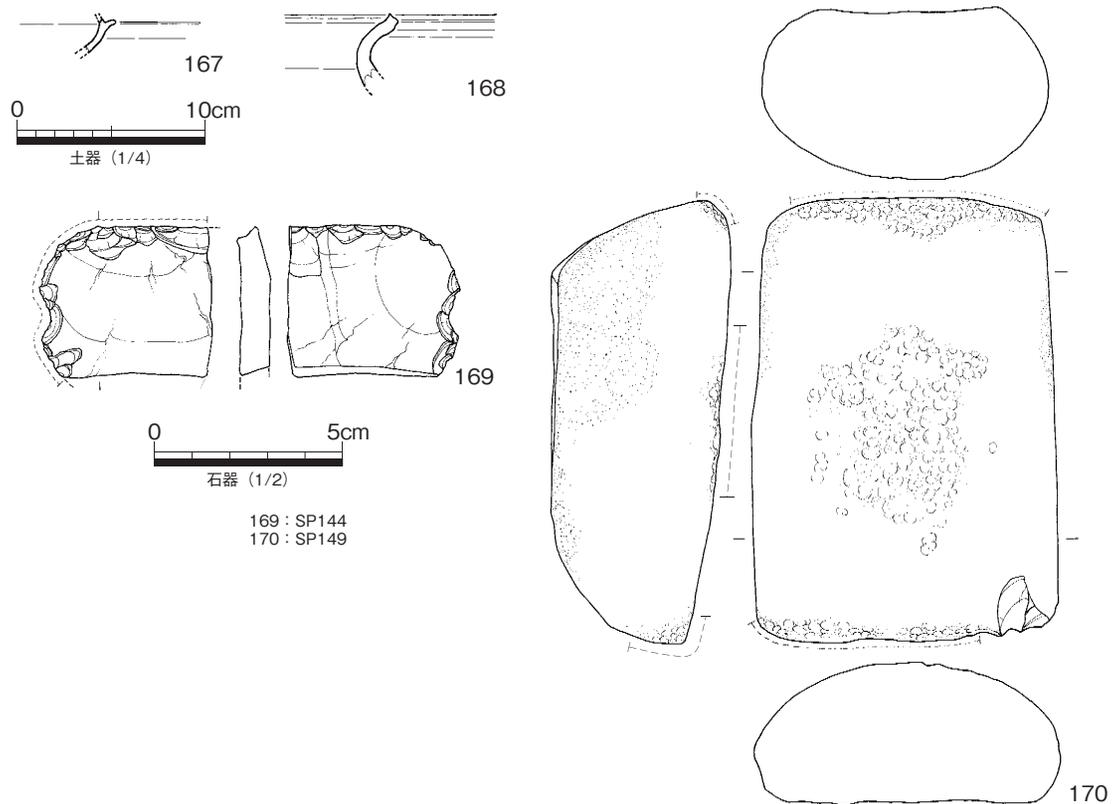


図 41 SB07 (2)

らの遺物から SB08 は 10 世紀前半のものと考えられる。

SB15 (図 44)

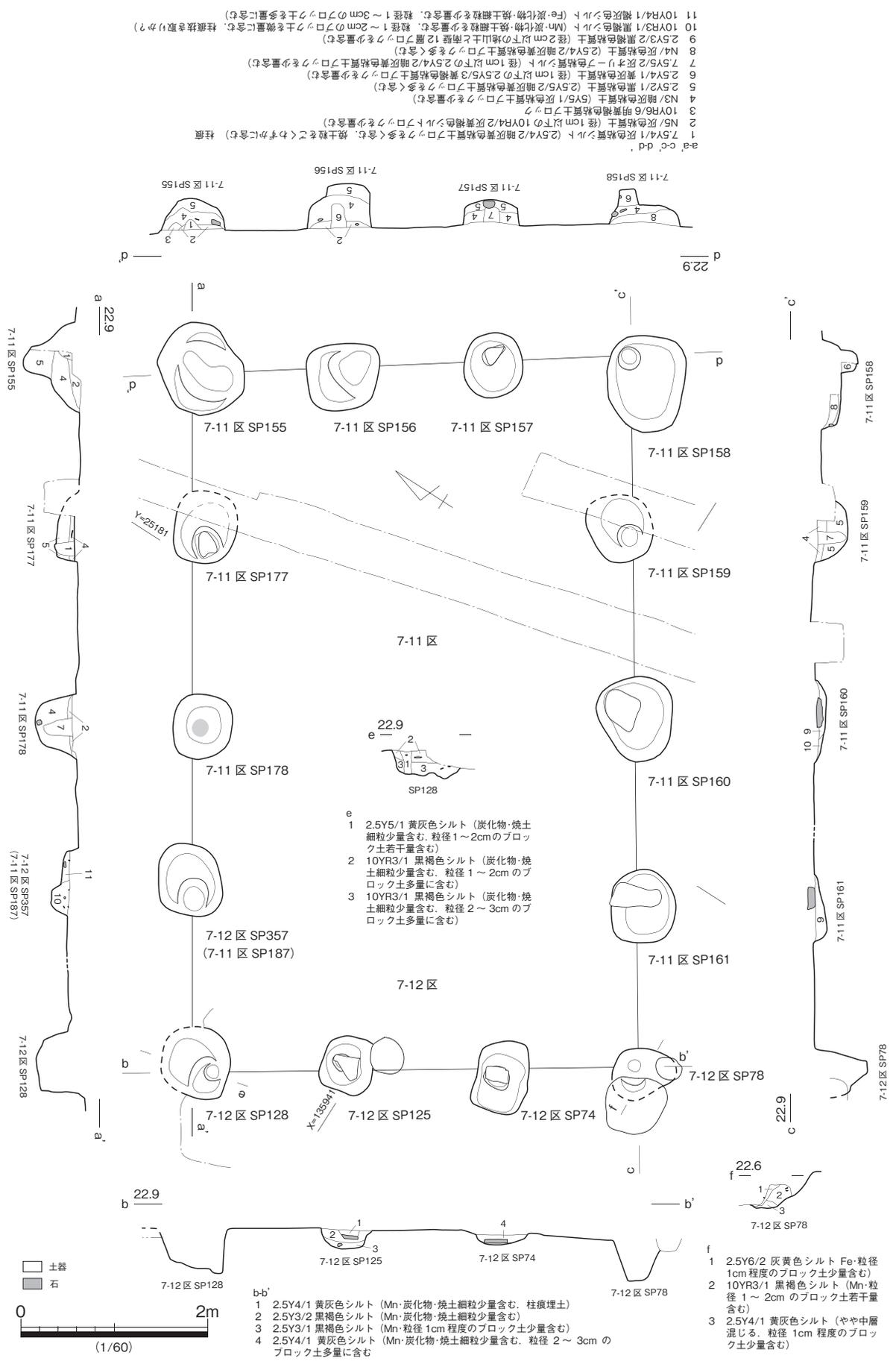
7-10 区南部から 7-7 区北部にかけて検出された掘立柱建物である。9 世紀の掘立柱建物 SB19、中世の掘立柱建物 SB12 と重複する。SB15 は桁行 3 間 (6.5 m)、梁間 2 間 (4.3 m) で、桁行の方向は N35° W である。柱穴の平面形は円形またはややいびつな方形で、径または 1 辺 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.4 ~ 0.7 m である。各柱穴からの遺物は整理箱 1 箱程度である。弥生土器細片が多い。7-11 区 SP153 から出土した 178・179 は須恵器杯で、いずれも焼成不良である。178 は 8 世紀後半に属する。7-11 区 SP153 から出土した 180・181、7-11 区 SP170 から出土した 182 は土師器杯である。これらは赤彩が施され、7-11 区 SK01 から出土した土師器と類似しており、8 世紀末から 9 世紀初頭のものと考えられる。これらの遺物から SB15 は 9 世紀のものと考えられる。

SB19 (図 45)

7-10 区から 7-11 区にかけて検出された掘立柱建物である。9 世紀の掘立柱建物 SB15、中世の掘立柱建物 SB12 と重複する。SB19 は桁行 2 間 (3.6 ~ 3.9 m)、梁間 1 間 (2.7 m) で、桁行の方向は N62° W である。柱穴の平面形は円形で、径 0.3 ~ 0.7 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m である。各柱穴からは整理箱 1 箱程度の遺物が出土したが、弥生土器細片が多い。7-10 区 SP35 から出土した 183 は須恵器蓋である。184 は須恵器皿で 9 世紀前半に属する。185 は須恵器甕口縁部である。7-10 区 SP194 から出土した 186 は土師器鉢で、7 世紀から 8 世紀初頭に属する。これらの遺物から SB19 は 9 世紀のものと考えられる。

SB21 (図 46・47)

7-11 区北端で検出された掘立柱建物である。建物の北側は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区で



a-a' c-c' d-d' 1 75Y4/1 灰黄色粘質シルト (2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む、焼土粒を多く含む) 柱痕 2 NS/ 灰黄色粘質土 (径 1cm 以下の 10YR4/2 灰黄色シルトブロックを少量含む) 3 10YR6/6 明褐色粘質土ブロックを少量含む 4 NS/ 暗灰色粘質土 (5Y/1 灰黄色粘質土ブロックを多く含む) 5 2.5Y2/1 黒色粘質土 (2.5Y/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む) 6 2.5Y4/1 灰黄色粘質土 (径 1cm 以下の 2.5Y/3 黒褐色粘質土ブロックを少量含む) 7 7.5Y5/2 灰黄色粘質シルト (径 1cm 以下の 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを少量含む) 8 N4/ 灰黄色粘質土 (2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土ブロックを多く含む) 9 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (径 2cm 以下の地山土を南壁 1.2 層ブロックを少量含む) 10 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1~2cm のブロック土を微量に含む、柱痕抜き取りか?) 11 10YR4/1 暗灰色シルト (Fe・炭化物・焼土細粒を少量含む、粒径 1~3cm のブロック土を多量に含む)

e 1 2.5Y5/1 黄灰色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1~2cm のブロック土若干量含む) 2 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1~2cm のブロック土多量に含む) 3 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 2~3cm のブロック土多量に含む)

f 1 2.5Y6/2 灰黄色シルト Fe・粒径 1cm 程度のブロック土少量含む 2 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土若干量含む) 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト (やや中層混じる、粒径 1cm 程度のブロック土少量含む)

図 42 SB08 (1)

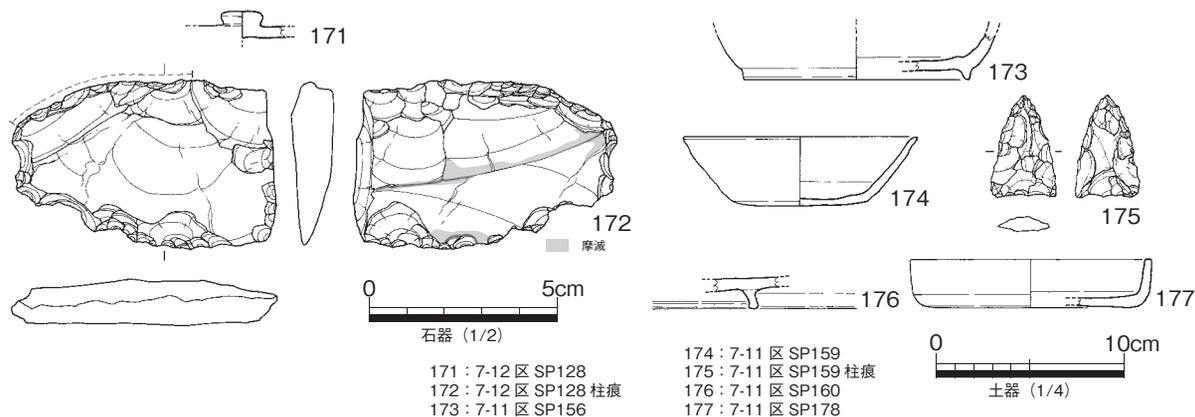


図 43 SB08 (2)

ある。建物の南東部は現代の建物基礎の攪乱で削平され、不明であるが、桁行3間(5.5～6.1m)、梁間2間(3.2～3.5m)である。桁行の方向はN30°Wである。柱穴の平面形は隅丸方形または円形である。東側の桁行のSP112だけは1辺1.0m、深さ0.4mと大きい、その他の柱穴は1辺または直径0.6～0.7m、深さ0.2～0.3mである。各柱穴からは整理箱1箱程度の遺物が出土した。SP82からは187～192が出土した。187は須恵器杯の口縁部片で、口縁部端が黒い。十瓶山付近で生産された須恵器で、中世に属する。188・189は須恵器杯底部である。189は焼成不良で、9世紀前半に属する。190～192は須恵器杯底部で、190・192は8世紀後半から9世紀前半に属する。SP84から出土した193は土師器杯で、赤彩がみられる。おそらく7-11区SK01と同じようなこの付近の窯で焼成されたものであろう。8世紀末から9世紀初頭のものである。SP85から出土した194～199は土師器杯である。194・195のような形態の杯は京都で多量に出土する。京都では194は10世紀後半、195は9世紀後半に比定される。196は10世紀に属する。197は底部外面にへら切り痕の上に板状の工具痕が残る。200は土師器碗、201は土師器甕、202～204は須恵器杯である。202・204は9世紀後半から10世紀中葉に属する。SP89からは205～208が出土した。205～207は須恵器杯、208は蓋のつまみである。207は須恵器杯で、9世紀後半から10世紀中葉に属する。SP125から出土した210は黒色土器碗で、10世紀に属する。187のような中世の須恵器片も含まれるが、小片であることから混入の可能性が高い。これらの遺物からSB21は10世紀のものと考えられる。

SB22 (図 48・49)

7-12区南部から7-8区にかけて検出された掘立柱建物である。桁行5間(7.8m)、梁間2間(4.2m)で、桁行の方向はN28°Wである。柱穴の平面形は隅丸方形またはいびつな円形である。柱穴の直径または1辺の長さは0.5～0.7m、深さ0.2～0.3mである。柱穴の埋土は灰黄色シルトから黒褐色シルトである。各柱穴からは整理箱1箱程度の遺物が出土した。SP52から出土した212は須恵器蓋である。SP89からは213～216が出土した。213は土師器皿で10世紀前半に属する。214は土師器碗で10世紀後半、216は須恵器蓋である。SP97から217・218、SP98から219・220、SP121の掘り方から221、SP153の掘り方から224・225、SP267から227～229が出土した。215・217・218・220・221・225・227は須恵器杯である。215は10世紀前半、221は9世紀に属する。219は土師器甕で9世紀、222～224は土師器杯で、222・223は10世紀後半、224は10世紀前半に属する。228は緑釉陶器碗で10世紀前半、229は須恵器甕の口頸部で、古墳時代後期のものである。これらの遺物からSB22は10世紀後半のものと考えられる。

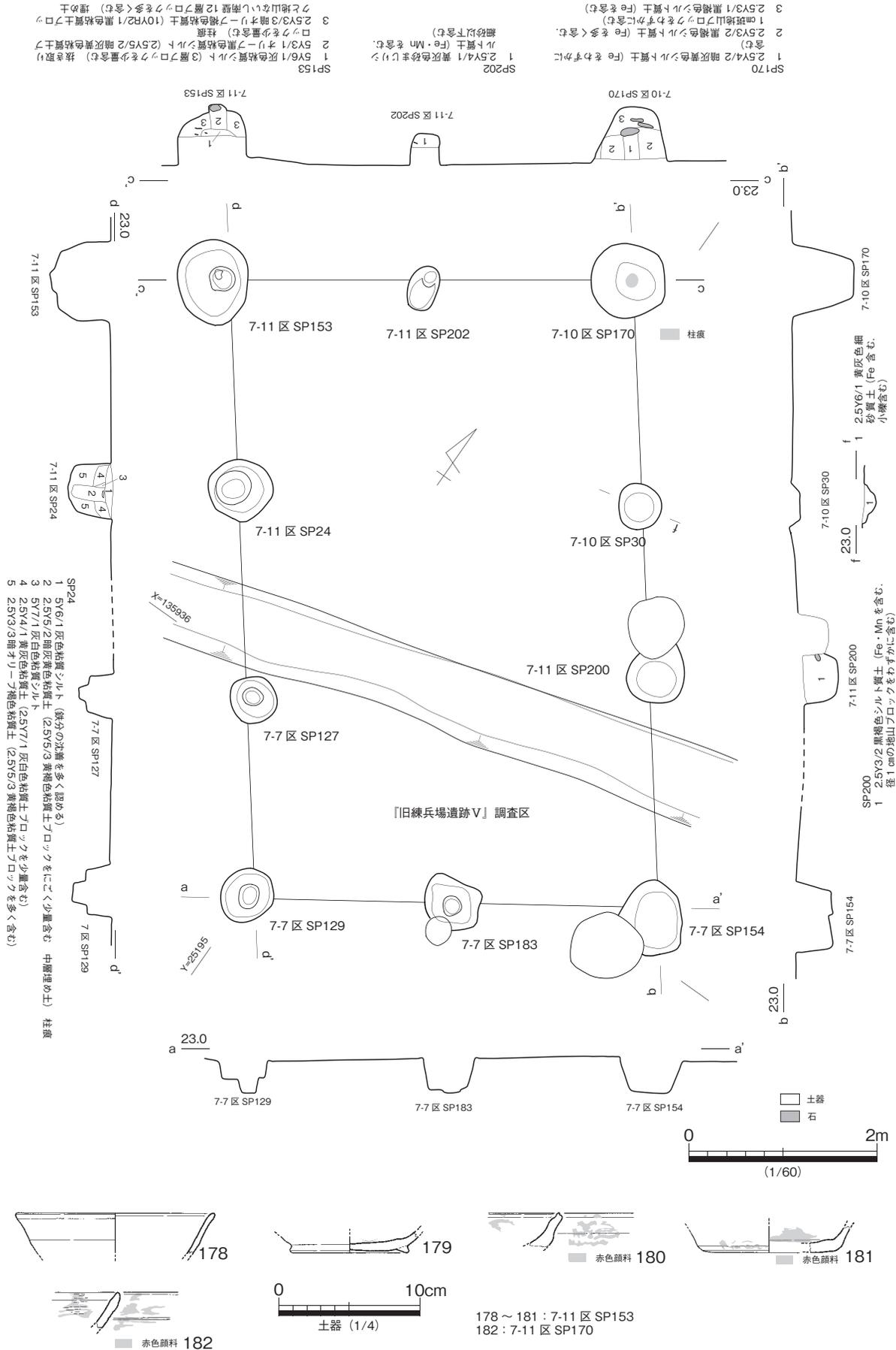


図44 SB15

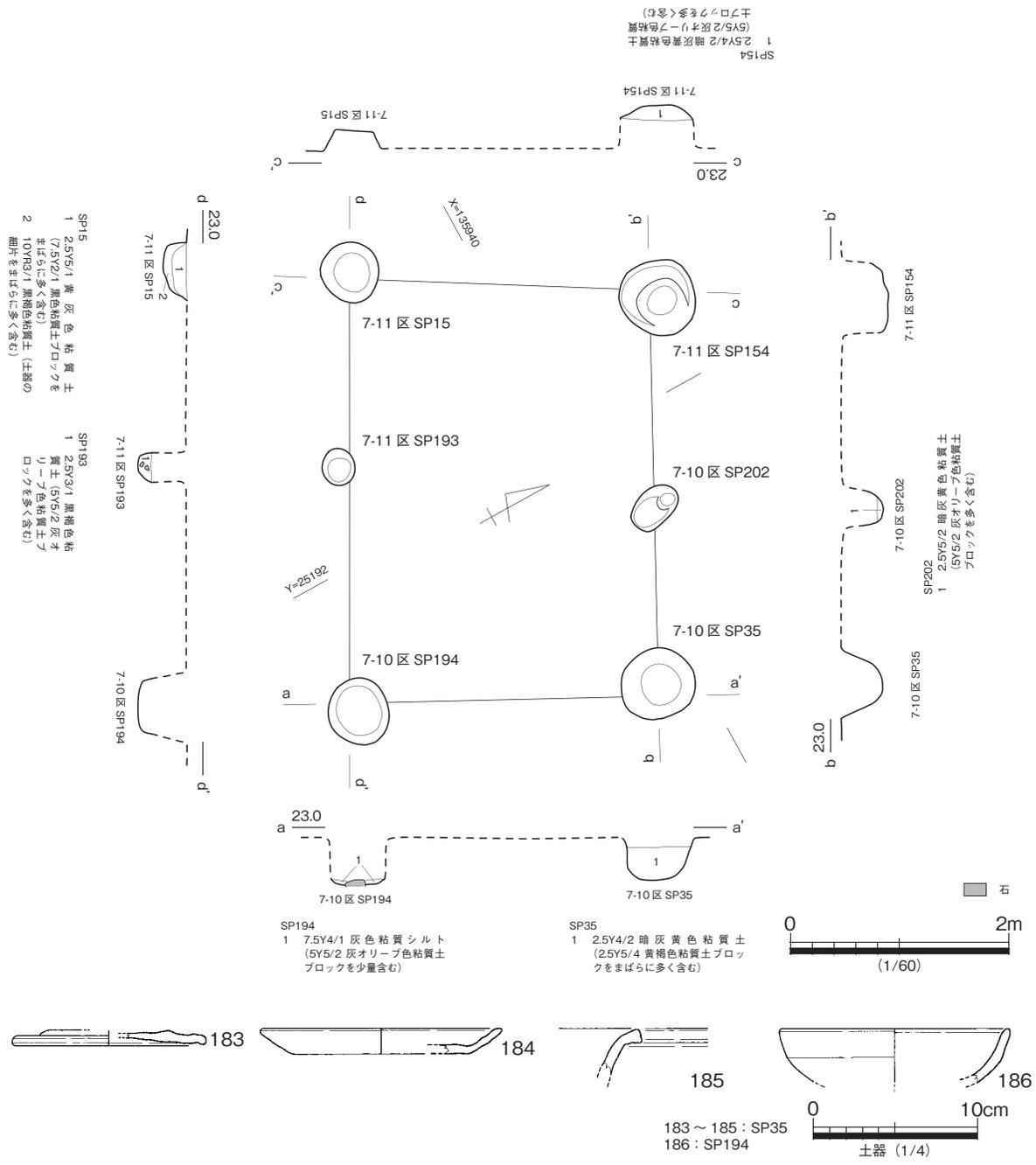


図 45 SB19

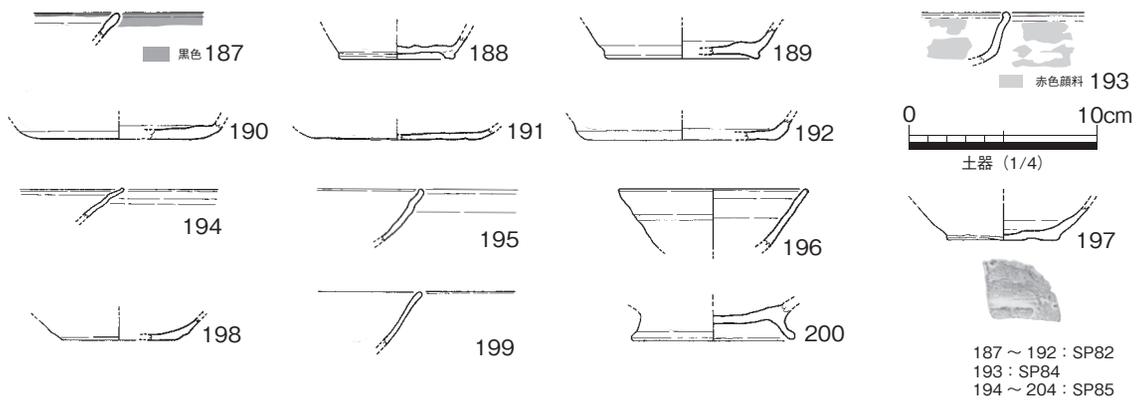
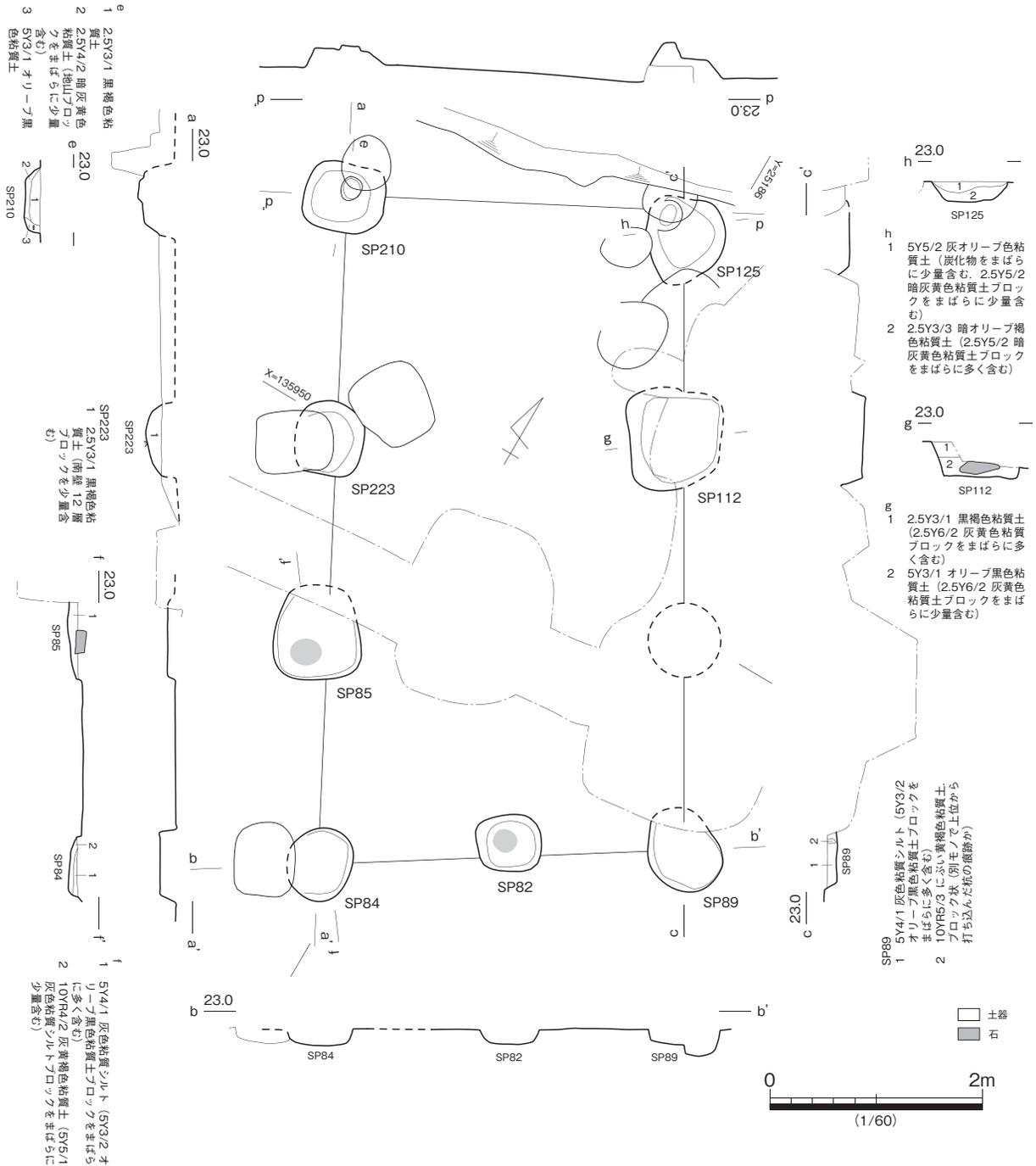


図 46 SB21 (1)

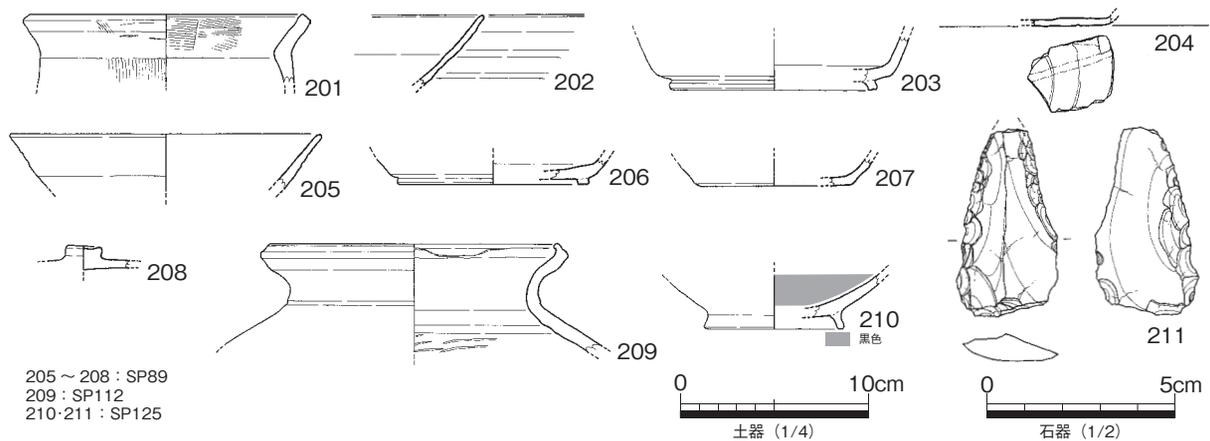


図 47 SB21 (2)

SB23 (図 50)

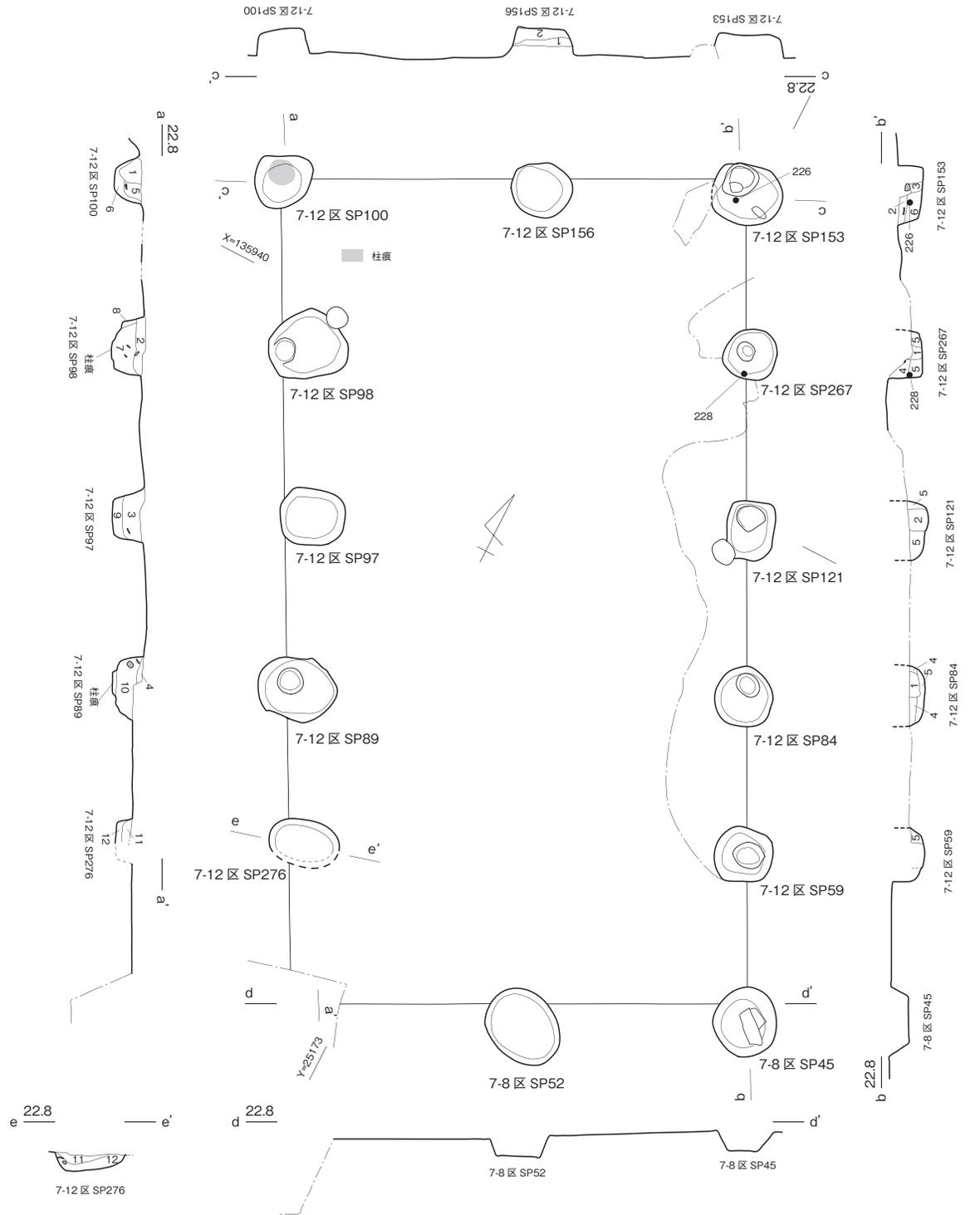
7-12 区北部で検出された掘立柱建物である。古代の溝 SD1410・SD1211 と重複する。SB23 のほうが新しい。SB23 は桁行 3 間 (4.5 m)、梁間 2 間 (3.5 m) で、桁行の方向は N25° W である。柱穴の平面形はややいびつな方形で、長軸 0.5 ~ 1.2 m、深さ 0.3 ~ 0.6 m である。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とする。各柱穴からは整理箱 1 箱程度の遺物が出土した。SK09 から 230 ~ 232、SK11 から 233 ~ 235、SK12 から 236、SP347 から 237、SP358 から 238 が出土した。230・231 は土師器杯である。230 は底部がやや突出し、底部が薄く、10 世紀前半に属する。232 は須恵器杯である。233 は土師器皿である。233 は赤彩がある。赤彩された土器が多量に出土した 7-11 区 SK01 から出土した土器にも同形態の皿があることから、8 世紀末から 9 世紀初頭に属すると考えられる。234・235 は滑石製の白玉である。237 は土師器羽釜で、9 世紀に属する。238 は石製の有孔円盤である。表面は研磨されるが、端部付近は研磨が不十分で、端面には線状痕がみられる。表面には 2 個の孔があり、貫通する。石材は蛇紋岩または滑石であろう。これらの遺物から SB23 は 10 世紀のものと考えられる。

SB24 (図 51)

7-10 区北部で検出された掘立柱建物である。古代の溝 SD1012 と重複するが、SB24 のほうが新しい。SB24 は桁行 3 間 (5.5 m)、梁間 1 間 (2.4 m) で、桁行の方向は N25° W である。北西隅に当たる柱穴付近には現代の建物基礎による攪乱があり、削平されているため柱穴は不明である。柱穴の平面形は隅丸方形または円形である。東側の桁行の柱穴 SP100・SP132・SP65 は平面形円形で、径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m と小さいが、その他の柱穴の長軸または径は 0.7 ~ 0.9 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m である。SP48 の柱痕埋土は黄灰色シルトであるが、その他の柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とするものである。各柱穴からは土器・須恵器が少量出土した。SP43 から 489 ~ 492、SP46 から 493、SP65 から 494・495、SP77 から 496 ~ 498 が出土した。489・492・493・495・496 は須恵器椀、490 は須恵器杯、491 は須恵器皿、494 は土師器杯、497・498 は緑釉陶器碗である。494 は赤彩が施されており、7-11 区 SK01 で焼成された土師器の形態と類似することから、8 世紀末から 9 世紀初頭に属すると考えられる。490・496・497・498 は 10 世紀、493 は 9 世紀に属する。これらの遺物から SB24 は 10 世紀のものと考えられる。

SB25 (図 52)

7-11 区北部で検出された掘立柱建物である。梁間 2 間 (3.8 m)、桁行 1 間以上 (2.5 m 以上) である。



a-a' e-e'

- 1 2.5Y6/1 黄灰色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土細粒少量含む。粒径2~3cmのブロック土少量含む。柱痕埋土)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (Fe・Mnを含む)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Fe・Mnを含む。粒径1~3cmのブロック土少量含む。炭化物粒少量含む)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト (Fe・Mnを含む。炭化物粒・焼土細粒少量含む。粒径2cm程度のブロック土少量含む)
- 5 10YR4/1 褐色シルト (Fe・Mn・炭化物粒少量含む。粒径2~3cmのブロック土少量含む)
- 6 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Fe・Mn・炭化物・焼土細粒若干量含む。粒径2~3cmのベースブロック若干量含む)
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト (Fe・Mnを含む。粒径2~3cmのベースブロック少量含む。炭化物粒若干量含む)
- 8 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (Fe・Mnを含む。粒径2~3cmのブロック土多量に含む)
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (Feを含む。粒径1~2cmのブロック土多量に含む。ベース層に近似)
- 10 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (Fe・Mnを含む。炭化物粒・焼土細粒若干量含む。粒径3cm程度のブロック土若干量含む)
- 11 10YR4/1 褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量。粒径1cm前後のブロック土少量含む)
- 12 2.5Y5/1 黄灰色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量。粒径1~2cmブロック土少量含む)

b-b'

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒極少量含む)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒若干量含む。底面付近に10YR3/1 黒褐色シルトブロック状に含む)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む。粒径1~3cmのブロック土若干量含む)
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト (粒径1~2cmのブロック土やや多量に含む)
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む。粒径1~3cmのブロック土多量に含む)

c-c'

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (Fe・粒径1~5cmのブロック土若干量含む。炭化物・焼土細粒少量含む)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Fe・炭化物・焼土細粒少量含む。粒径1~5cmのブロック土多量に含む)

□ 土器  
■ 石

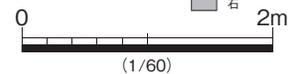


図 48 SB22 (1)

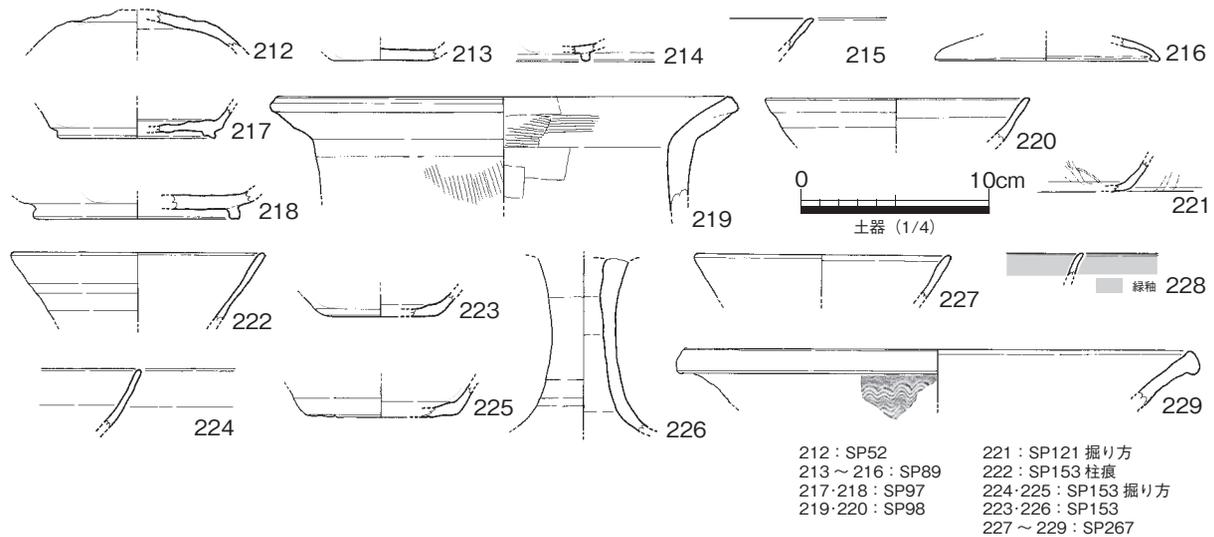


図 49 SB22 (2)

建物は北部に延びる可能性があるが、柱穴は未検出である。桁行の方向は N32° W である。柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな隅丸方形で、長軸 0.6 ~ 1.2 m、深さ 0.1 ~ 0.5 m である。SK02 から 239 ~ 242、SP83 から 243 ~ 245、SP83 柱痕から 246 が出土した。239 は土師器碗、240 は土師器杯で、9 世紀末から 10 世紀初頭に属する。241・242 は須恵器口縁部片である。243・245 は須恵器杯、244 は土師器杯、245 は須恵器杯、246 は須恵器皿である。243 は 9 世紀前半、246 は 9 世紀後半に属する。これらの遺物から SB25 は 10 世紀のものと考えられる。

#### SB44 (図 53)

7-11 区北部から『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された F 区にかけて検出された掘立柱建物で、整理時に図上復元したものである。『旧練兵場遺跡Ⅱ』では SB44 と報告されており、本書でも同名で報告する。梁間の 1 間が 2.7 m とやや長いが、桁行の柱穴列がそろっていることから、建物を復元した。桁行 3 間 (5.5 m)、梁間 2 間 (4.5 m) で、桁行の方向は N52° E である。柱穴の平面形はいびつな円形またはいびつな隅丸方形で、長軸 0.5 ~ 0.9 m、深さ 0.4 ~ 0.9 m である。各柱穴からは整理箱 1 箱の遺物が出土した。SP99 から 247 ~ 251 が出土した。247 は土師器甕の底部、248 は黒色土器碗で、10 世紀後半に属する。249・250 は須恵器杯である。いずれも体部が直線的で、焼成不良である。10 世紀前半に属する。251 は中国越州窯産の青磁水注の底部片である。体部外面には青磁釉が施される。底部付近は無釉である。体部には 1 条の凹みが見られる。底部はやや上げ底であることから、9 世紀前半のものと考えられる。これらの遺物から SB44 は 10 世紀のものと考えられる。

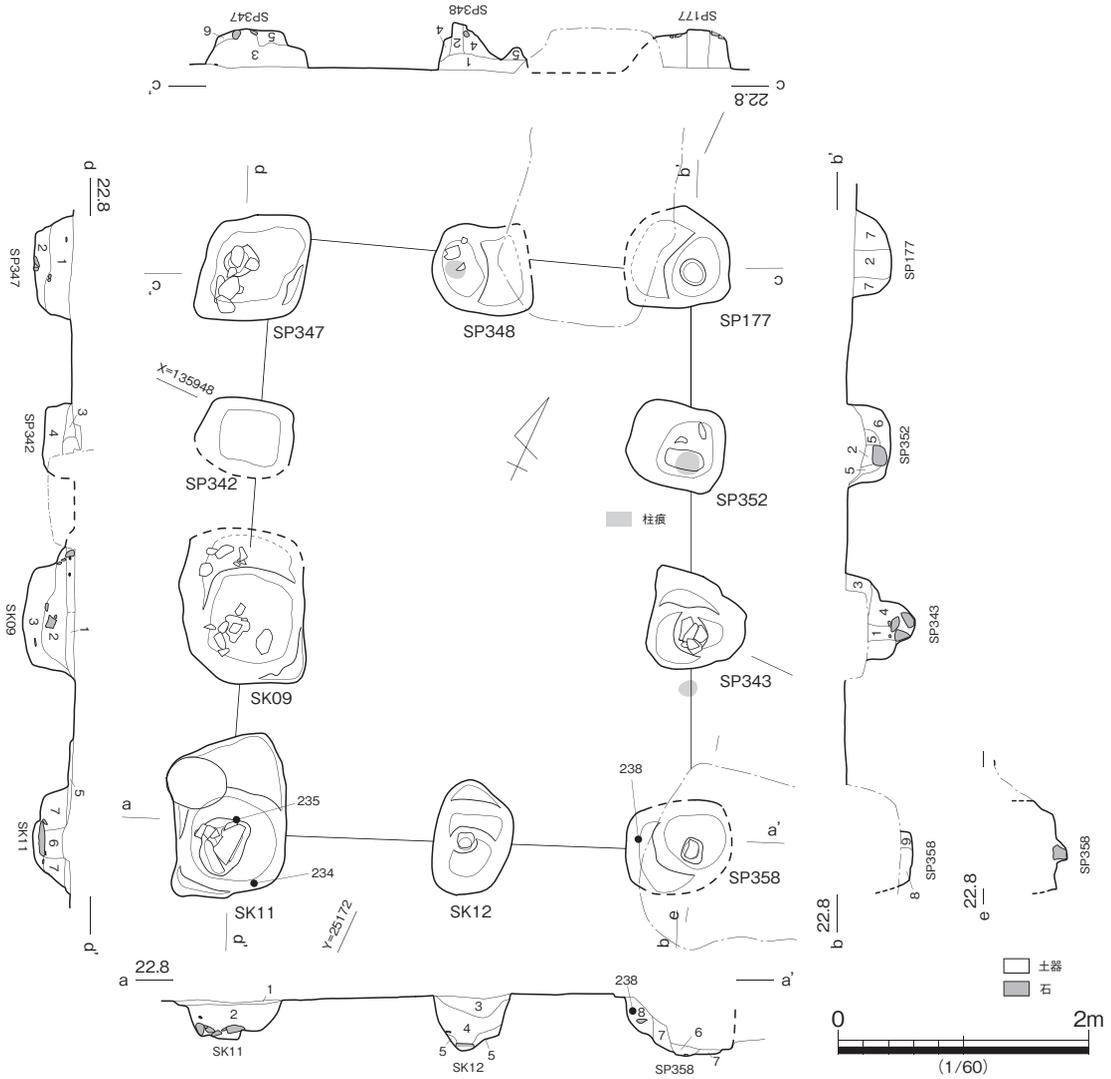
#### 柱穴・小穴・土坑

##### SK02 (図 54)

7-10 区の北部第 1 面 (Ⅲ層上面) で検出された柱穴である。掘立柱建物を構成する柱穴と考えられるが、建物は復元できなかった。平面形はややいびつな円形で、径 1.0 m、深さ 0.5 m である。底面には礫が置かれていた。252 は埋土 1 層から出土した須恵器杯で 10 世紀、253・254 は須恵器蓋のつまみで 6 世紀から 7 世紀に属する。これらの遺物から SK02 は 10 世紀のものと考えられる。

##### 7-10 区 SP127 (図 55)

7-10 区の北東部第 1 面 (Ⅲ層上面) で検出された土坑である。周辺には攪乱坑があり、上部は削平を



- a-a'
- 10YR3/2 黒褐色シルト (Fe・Mn・粒径 2~7cm のブロック土をやや多量に含む)
  - 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Fe・Mn・粒径 2~7cm のブロック土を多量に含む)
  - 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量、粒径 1~2cm のブロック土多量に含む)
  - 2.5Y4/1 黄灰色シルト (炭化物・焼土細粒少量、粒径 1~2cm のブロック土若干量含む)
  - 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (Fe・粒径 10cm のブロック土多量、ほとんどがブロック土層)
  - 2.5Y3/1 黒褐色シルト (粒径 1cm 程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Fe を少量含む…人為的埋戻し土、粒径 1~5cm のブロック土やや多量に含む、遺物やや多い)
  - 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Fe・粒径 1~5cm のブロック土非常に多量に含む)
- b-b'
- 2.5Y4/1 黄灰色シルト (炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn)
  - 10YR4/1 褐灰色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1~2cm のブロック土若干量含む)
  - 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 2~3cm のブロック土やや多量に含む)
  - 2.5Y5/1~6/1 黄灰色シルト (Mn・粒径 1cm 程度のブロック土少量含む)
  - 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土若干量含む)
  - 5Y4/1 灰黄色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土少量含む)
  - 2.5Y3/1 黒褐色シルト (粒径 1cm 程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 2.5Y4/1 黄灰色シルト (粒径 1~5cm のブロック土やや多量に含む、遺物やや多い)

- c-c'
- 10YR4/1 褐灰色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土少量含む)
  - 10YR4/2 灰黄褐色シルト (Mn)
  - 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn・粒径 1cm 程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 10YR3/2 黒褐色シルト (粒径 1~2cm のブロック土多量に含む、炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 10YR3/1 黒褐色シルト (Fe・粒径 2~3cm のブロック土やや多量に含む)
  - 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土やや多量に含む)
- d-d'
- 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn・粒径 1cm 程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土やや多量に含む)
  - 10YR3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 10YR3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、粒径 1~2cm のブロック土多量に含む…人為的埋戻し土)
  - 10YR3/2 黒褐色シルト (Fe・Mn・粒径 2~7cm のブロック土をやや多量に含む)
  - 10YR4/2 灰黄褐色シルト (Mn・粒径 1~2cm のブロック土少量含む…SK11 柱痕埋土)
  - 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Fe・Mn・粒径 2~7cm のブロック土を多量に含む)

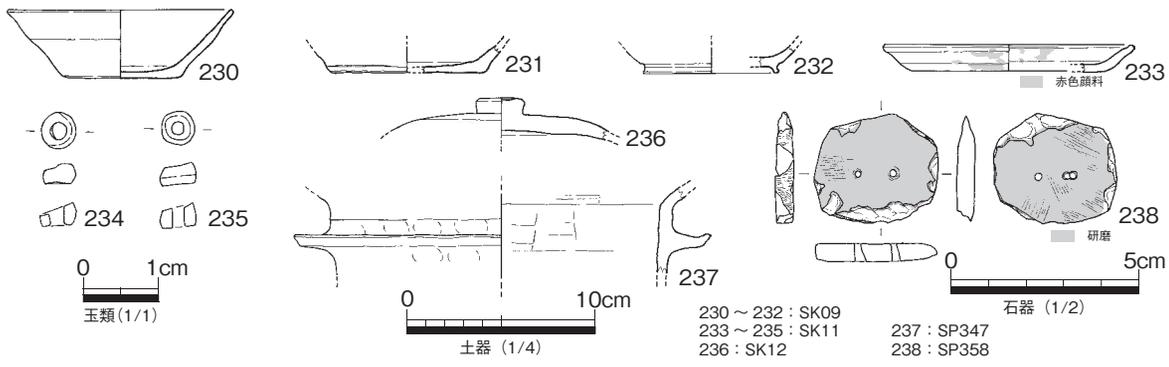


図 50 SB23

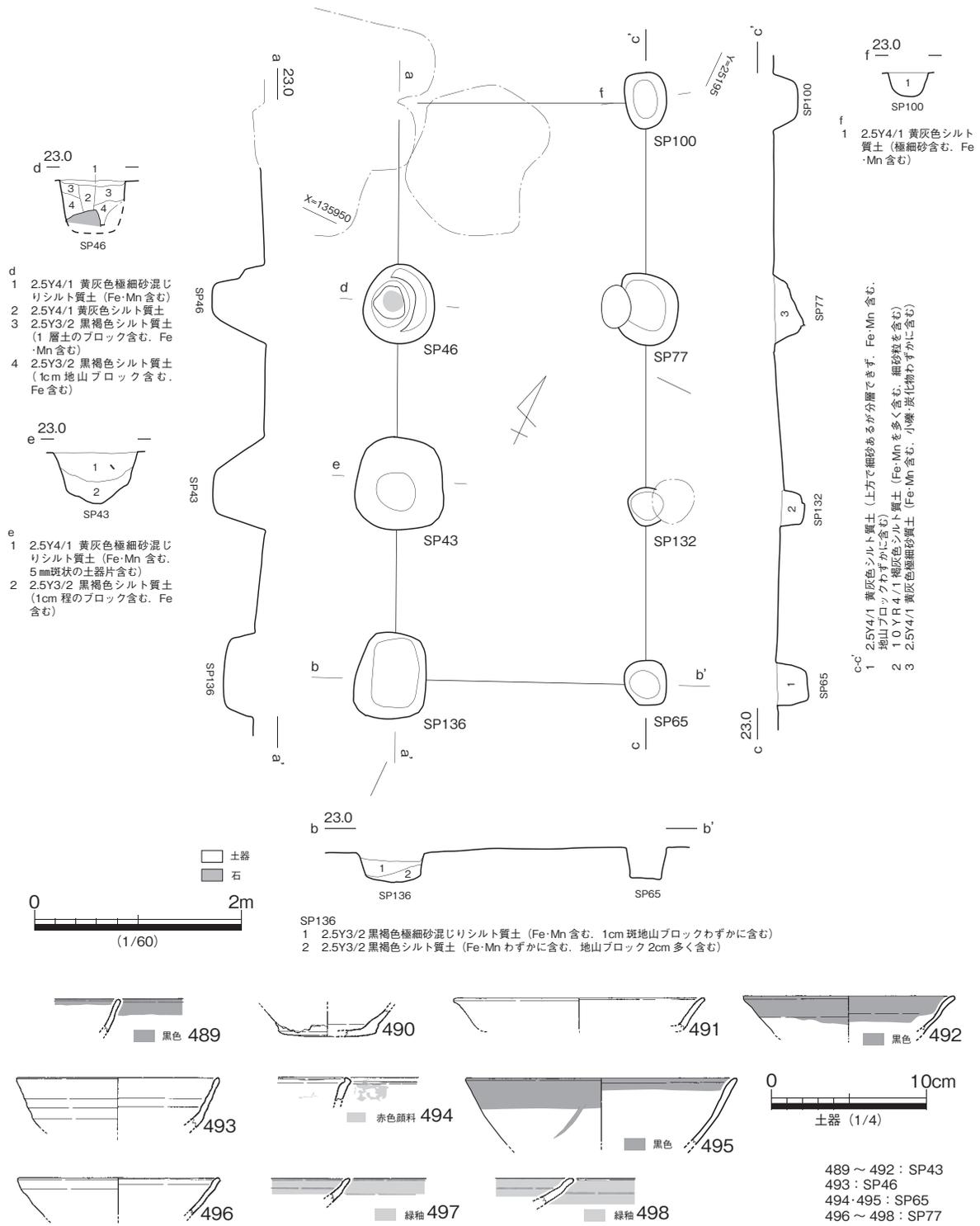
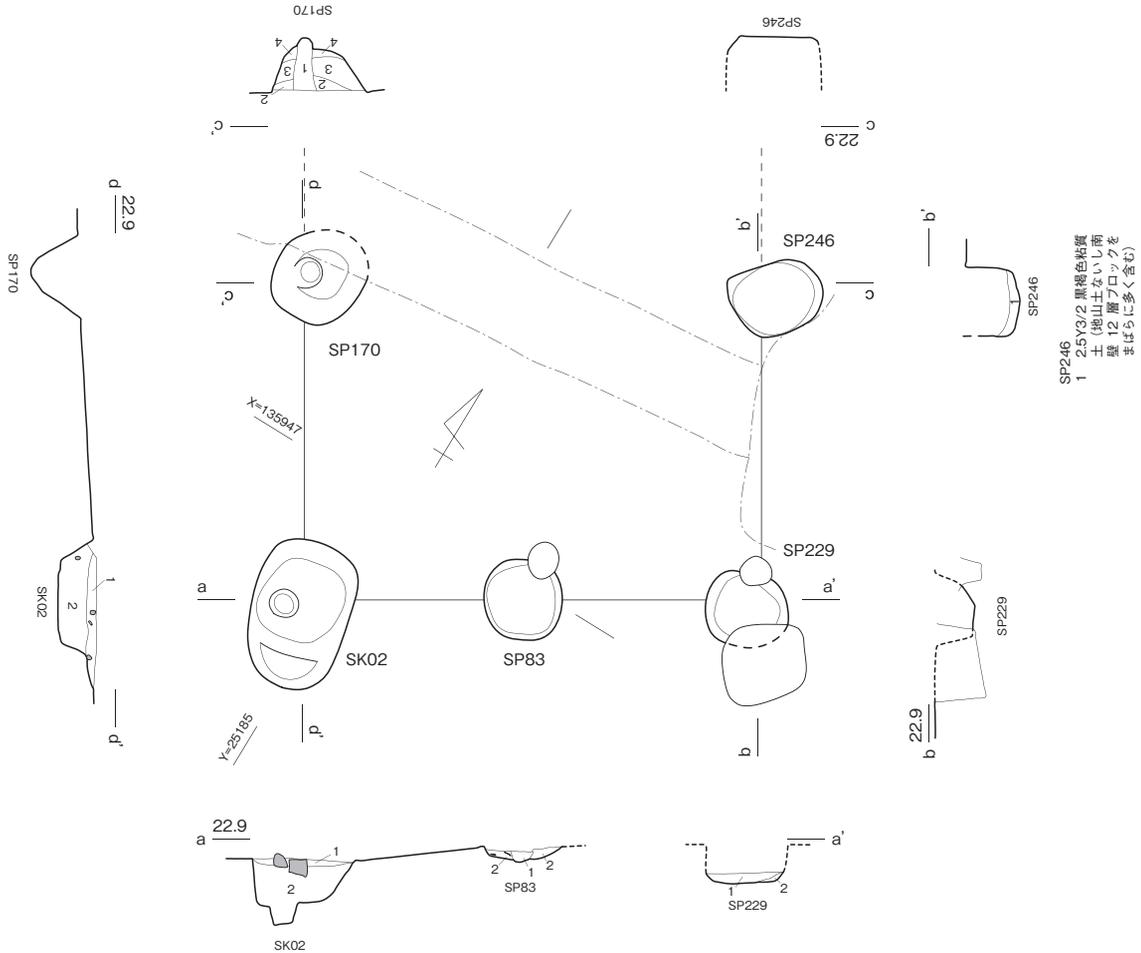


図 51 SB24

SP170  
 1 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト (径 1cm 以下の 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む)  
 2 5Y4/1 灰黄色粘質土 (径 1cm 以下の 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む)  
 3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (径 1cm 以下の 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む)  
 4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質砂 (地山ブロックをまばらに多く含む)

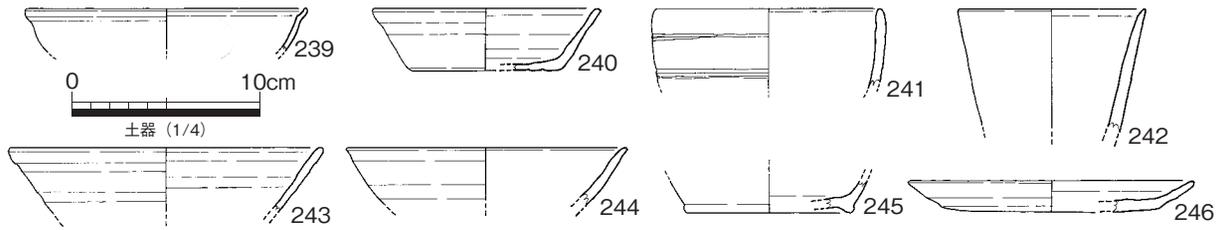


SP246  
 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (地山土をいし南壁 12 層ブロックをまばらに多く含む)

SK02  
 1 10YR5/1 褐灰色粘質土 (焼土粒・塊・炭化物をまばらに一定量含む)  
 2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 (焼土粒・塊・炭化物・地山土ブロックをまばらに多く含む)

SP83  
 1 5Y 5/1 灰黄色粘質シルト (2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロックをわずかに含む)  
 2 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (2.5Y7/1 灰白色粘質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロックをまばらに多く含む)

SP229  
 1 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (南壁 12 層ブロックをまばらに多く含む)  
 2 2.5Y5/3 黄褐色粘質土



239 ~ 242 : SK02  
 243 ~ 245 : SP83  
 246 : SP83 柱痕

図 52 SB25

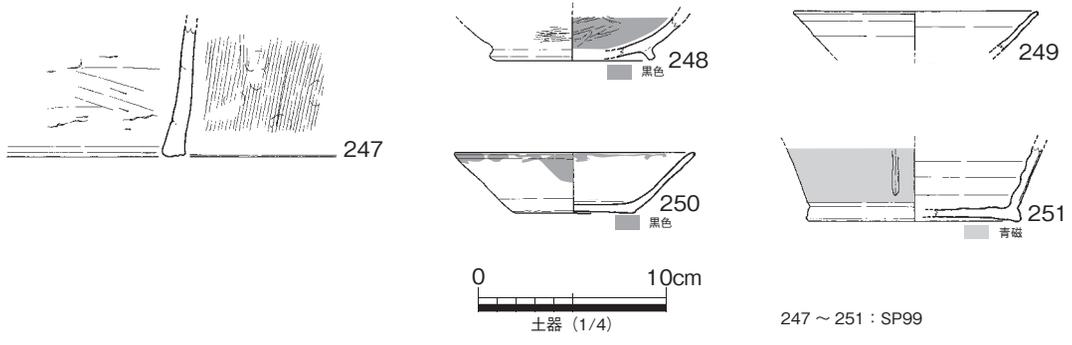
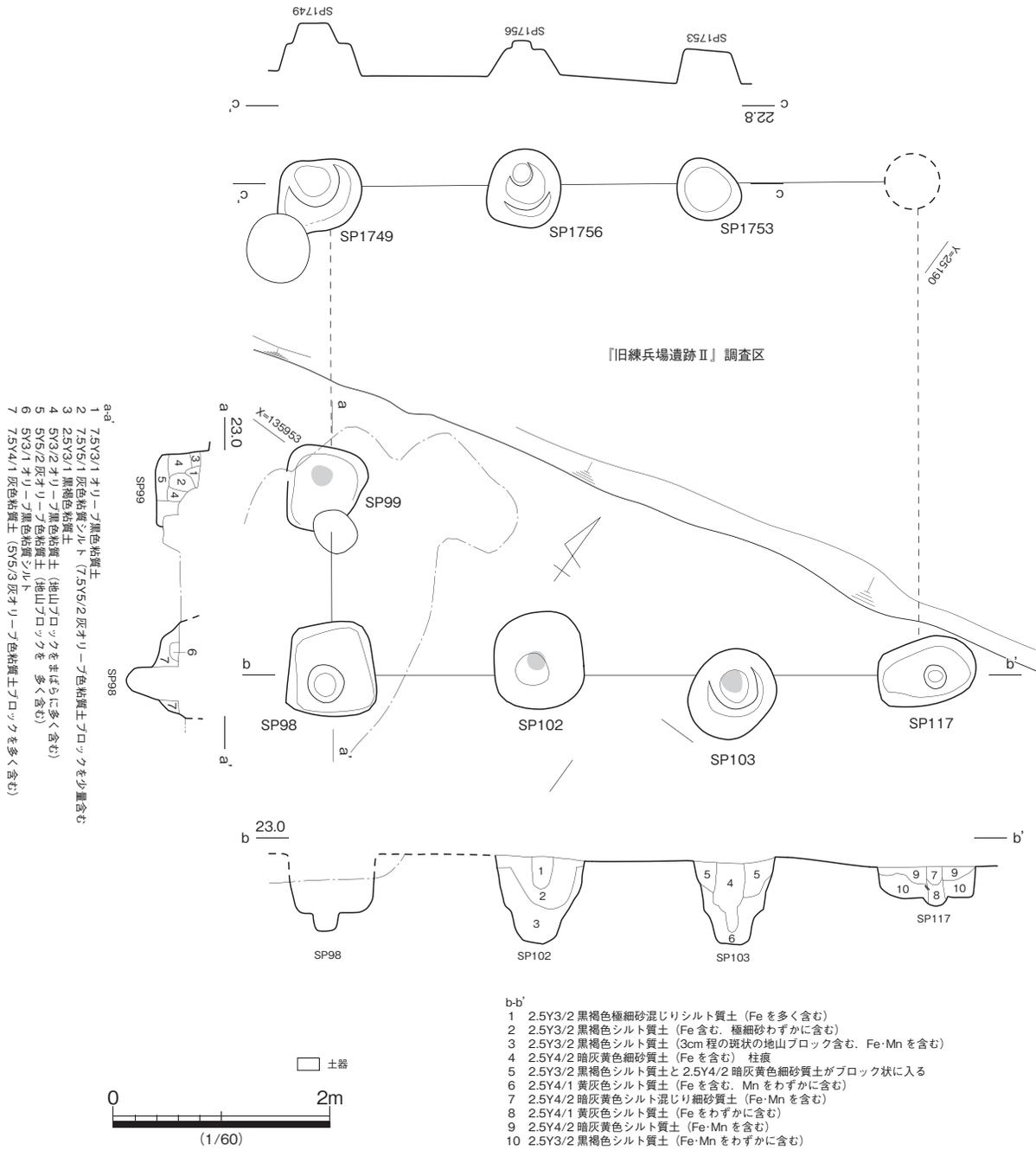


図 53 SB44

受ける。平面形は下端の形状からややいびつな楕円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.4 m 程度で、深さ 0.25 m である。埋土からは 255 ~ 258 が出土した。255 ~ 257 は土師器杯、258 は土師器羽釜である。いずれも 10 世紀前半に属することから、SP127 は同時期のものと考えられる。

7-10 区 SK03 (図 56)

7-10 区南部第 2 面(SR01 上層下位上面)で検出された遺構である。両端は中世の柱穴と重複しており、削平される。残存部分から平面形は長楕円形と推定される。長軸 0.8 m 以上、短軸 0.6 m、深さ 0.2 m である。遺物は瓦・土器・須恵器小片が少量出土した。259 は平瓦で、凸面には格子状のタタキ目があり、瓦質である。SK03 の詳細な時期は不明であるが、中世の柱穴に削平されることや埋土の土質から古代または中世の可能性が高い。

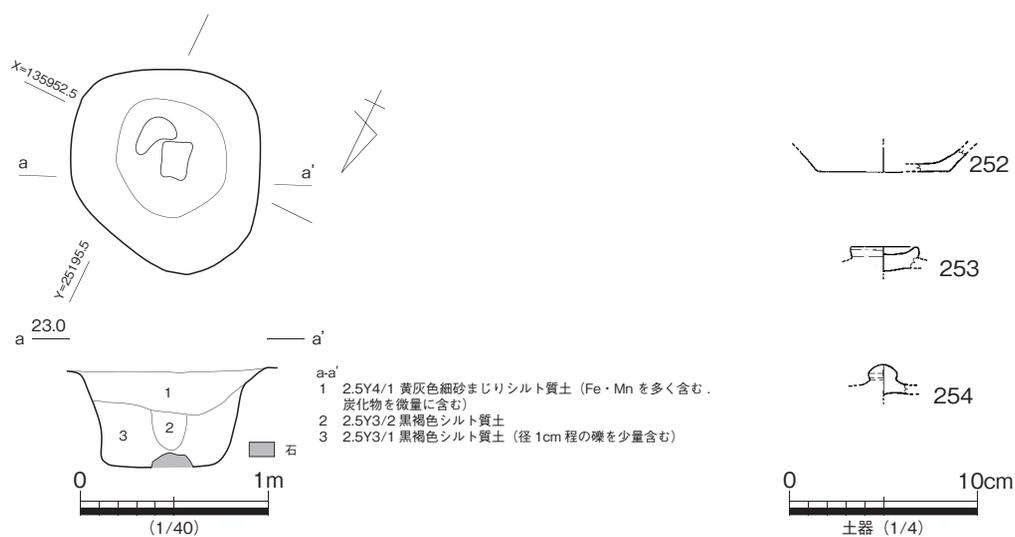


図 54 7-10 区 SK02

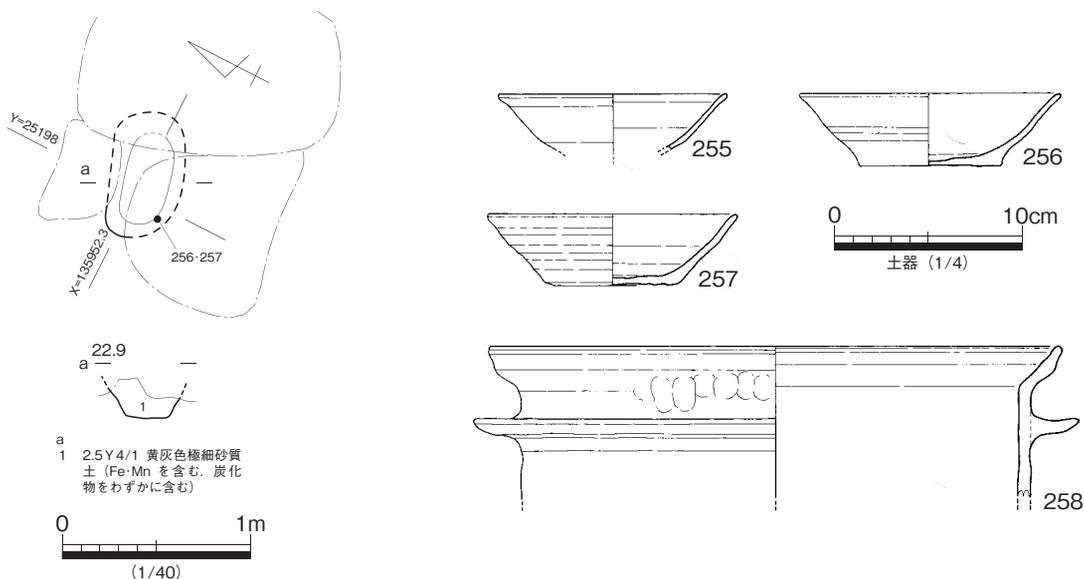


図 55 7-10 区 SP127

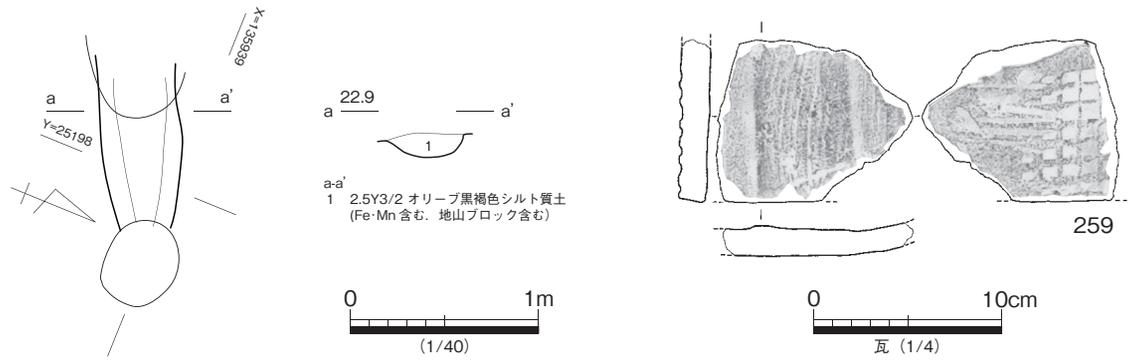


図 56 7-10 区 SK03

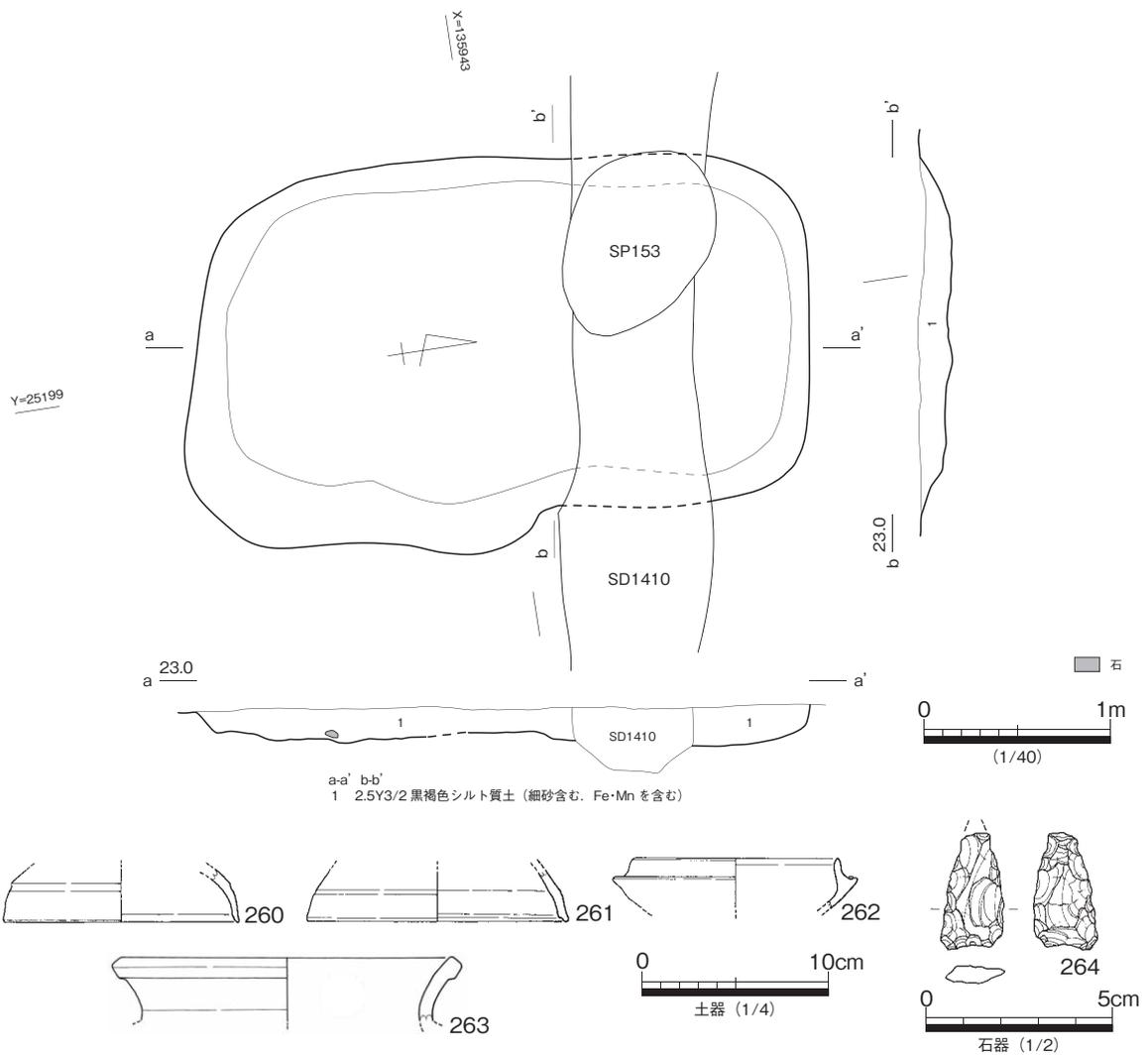


図 57 7-10 区 SX01



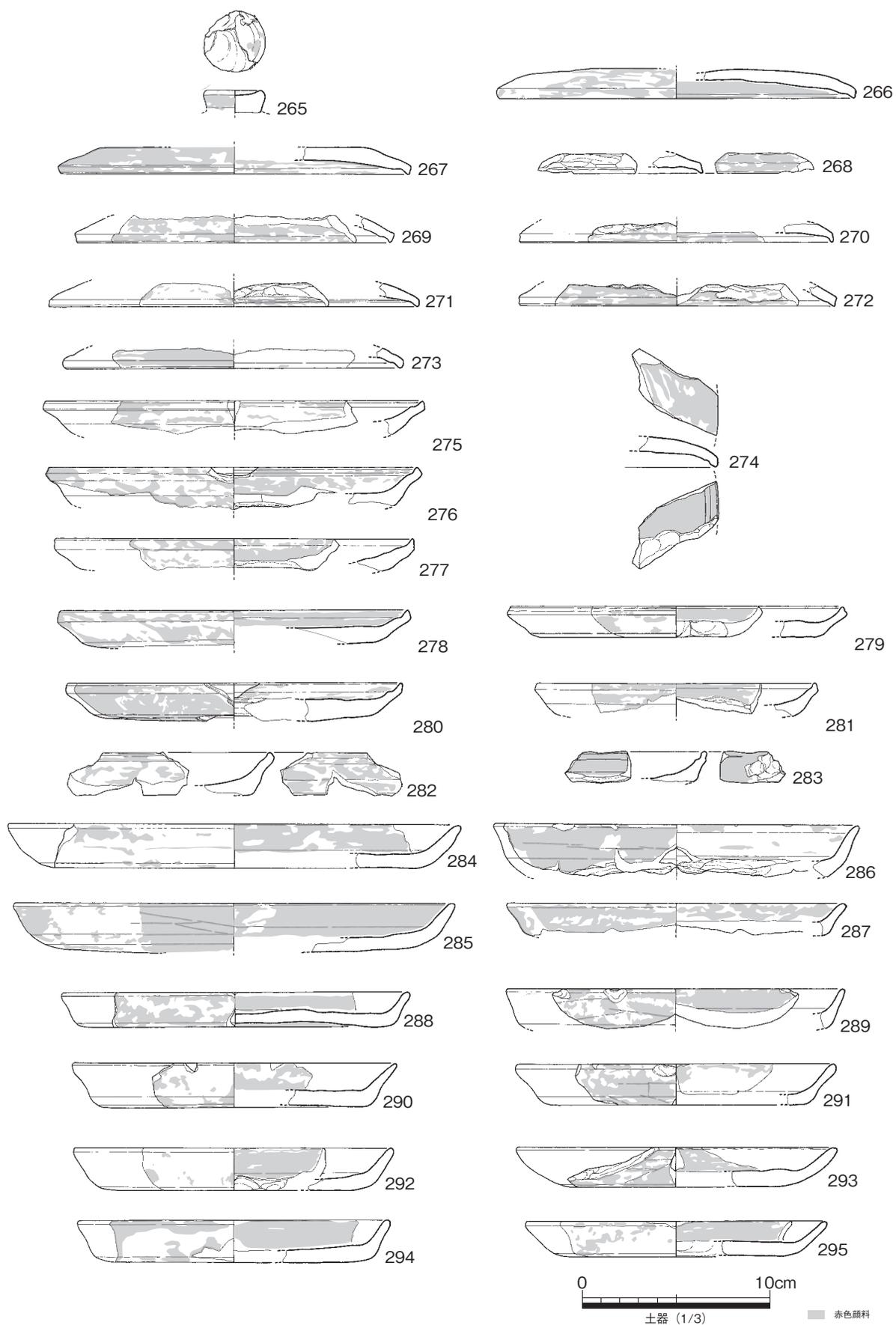


图 59 7-11 区 SK01 (2)

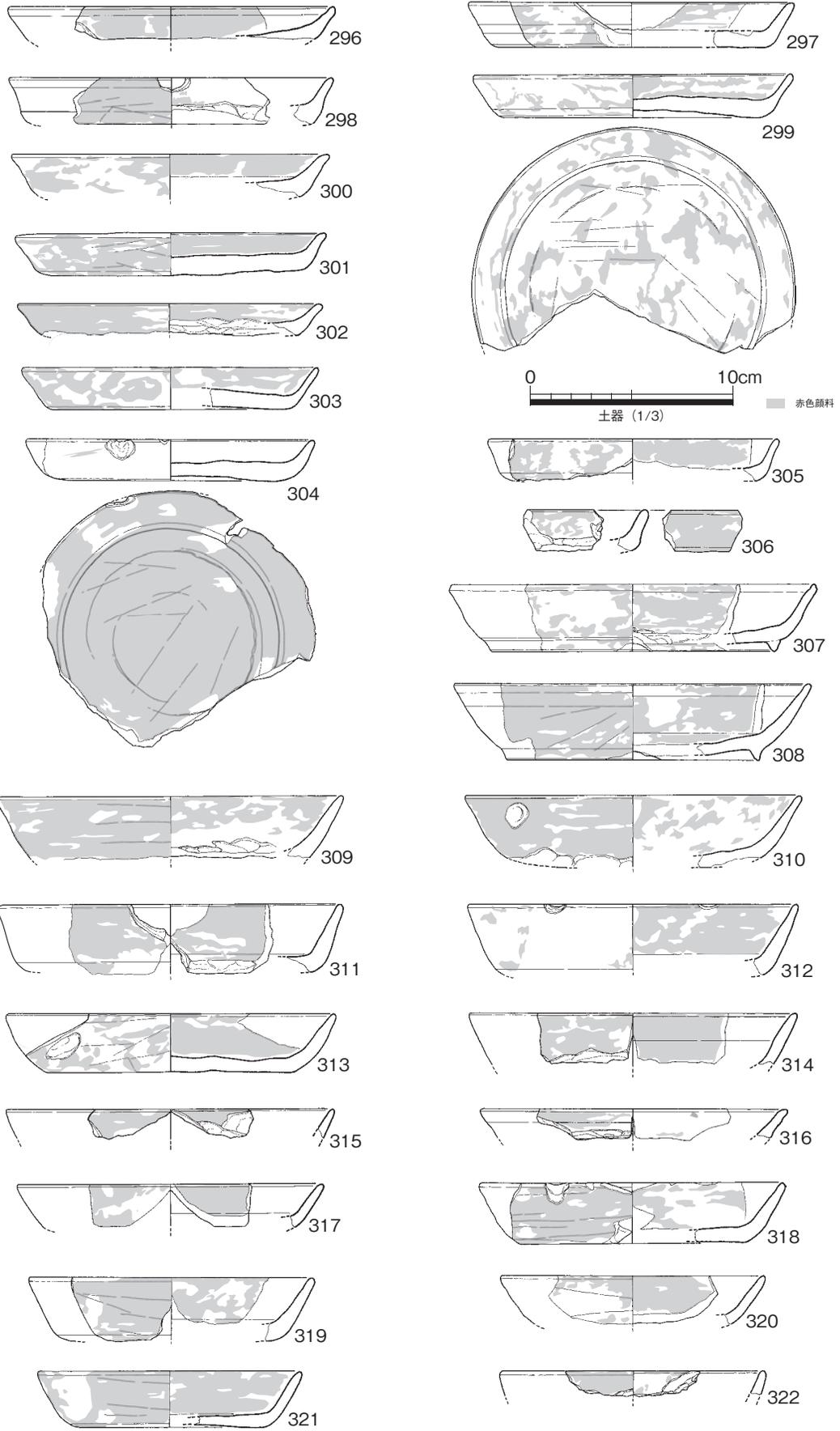


图 60 7-11 区 SK01 (3)

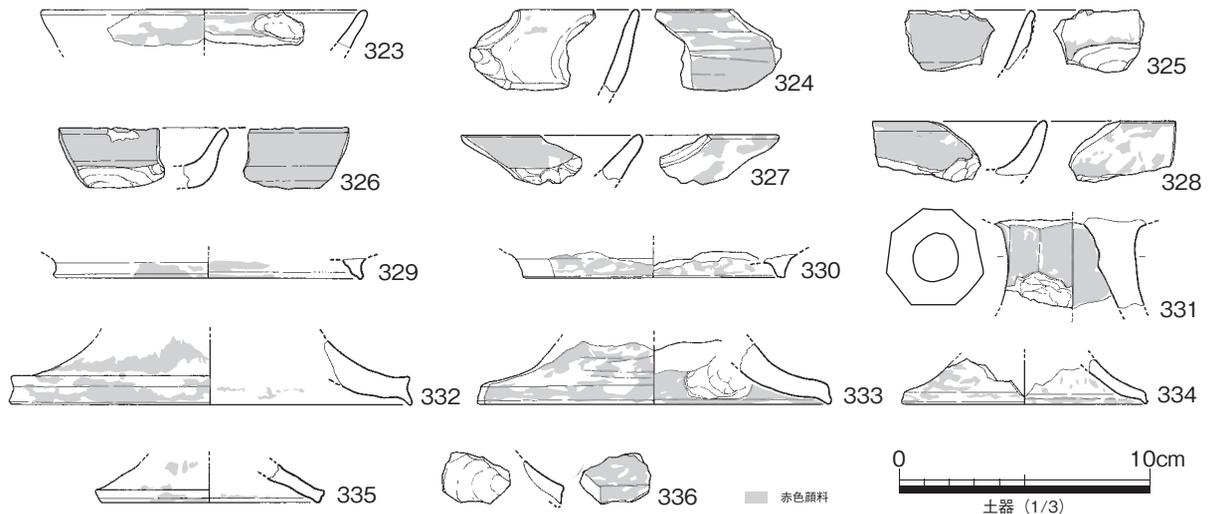


図 61 7-11 区 SK01 (4)

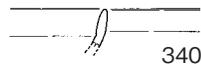
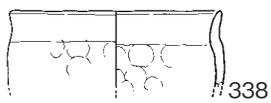
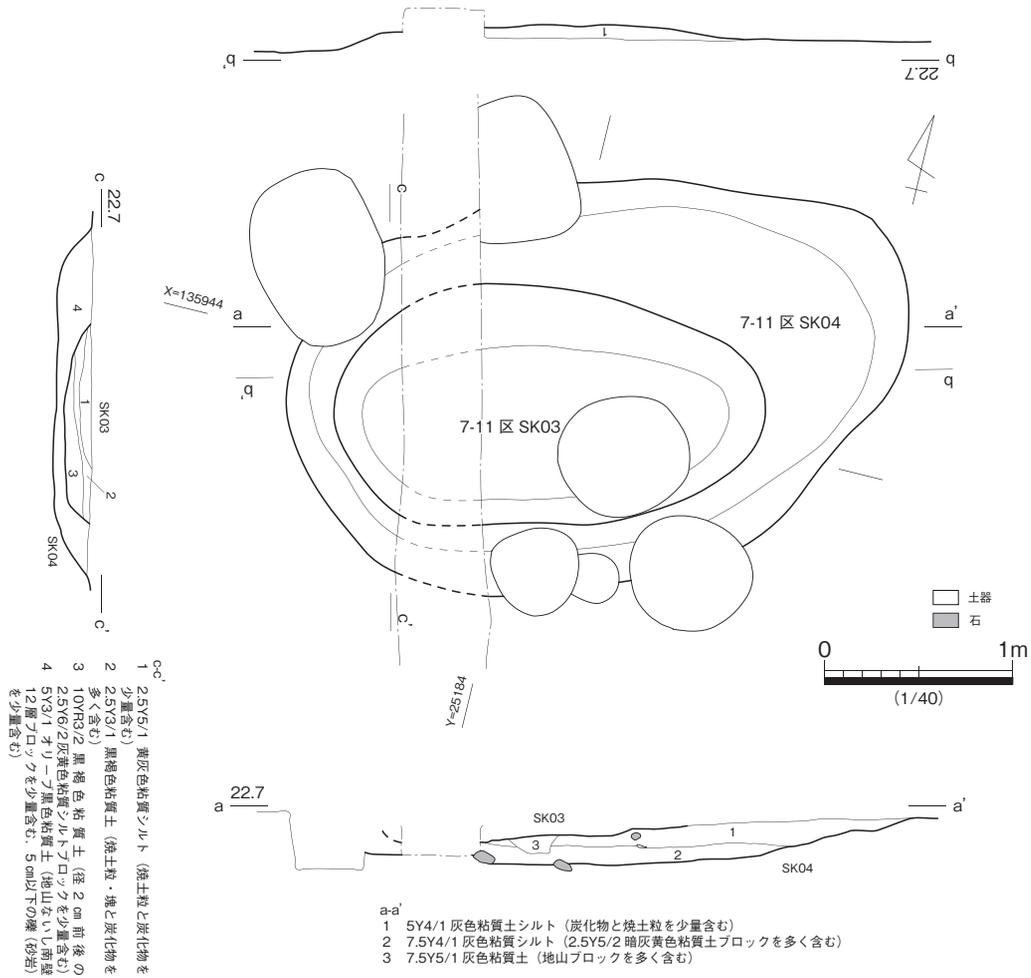
7-10 区 SX01 (図 57)

7-10 区南部第 2 面 (SR01 上層下位上面) で検出された土坑である。8 世紀の掘立柱建物 SB03 の柱穴 SP153、8 世紀の溝 SD1410 と重複し、削平される。また、7 世紀の竪穴建物 SH01 と重複するが、SX01 のほうが新しい。SX01 の平面形は隅丸長方形で、長軸 3.3 m、短軸 2.0 m である。底面はほぼ平坦で、深さは 0.2 m である。埋土は黒褐色シルト質土で、整理箱半分程度の土器・須恵器片が出土した。260・261 は須恵器蓋、262 は須恵器杯、263 は須恵器甕である。これらの須恵器は陶邑編年 TK217 型式に属することから、SX01 は 7 世紀前半から中葉のものと考えられる。

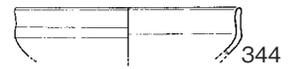
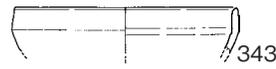
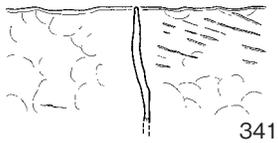
7-11 区 SK01 (図 58 ~ 61)

7-11 区北部第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された土坑である。8 世紀に埋没する溝 SD1410 の埋土上面で検出された。中世の掘立柱建物 SB01 の柱穴 7-11 区 SP12・7-11 区 SP07 と重複し、一部が削平される。SK01 の平面形は卵形で、長軸 1.6 m、短軸 1.2 m である。断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。最深部の深さは 0.07 m で、土坑内からは多量の土器片と焼土塊や炭化材が出土した。土器片は規則正しく並べられたような状態ではなく、小破片が混在したような状態で出土した。これらはいずれも赤彩が施された土師器で、破裂痕がみられるものが多い。焼土塊は少量であったが、遺構内のほぼ全面から出土した。床面や壁、土器の上部・下部の両方から出土した。焼土の一部には面をもつものもあり、表面が凸凹しているものも多く、藁状の圧痕があるものもみられる。床面は平坦である。床面でも北端と南半分には僅かな被熱痕がみられる。壁には被熱痕はみられない。南西部の底面には数本の炭化材が平行に並べた状態で出土した。また、SK01 内の北東部では土器や焼土の上からも炭化材が少量出土した。炭化材はいずれも枝状で、太さは径 1 ~ 4cm 程度、最も長いもので 22cm 程度である。このように焼土・炭化材・焼成破裂痕のある土器片が多数出土していることから、SK01 は土師器を焼成した土坑と考えられる。土器は多量に出土したが、完形品はなく、いずれも焼成破裂痕のある土器片ばかりであることから、これらの土器は SK01 内で焼かれたが、焼成に失敗したため取り上げられることなく、そのまま廃棄されたものと考えられる。SK01 での土器焼成は浅い土坑を掘削後、燃料の木を置き、その上に赤色顔料が塗られた土器を置き、さらにその上に燃料の木や藁を置き、土をかぶせて焼成したと推定される。

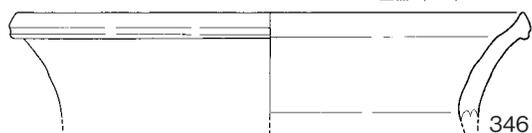
b-b' 1 10YR5/1 褐色粘質土 (焼土粒と炭化物を含む。10YR5/2 灰黄褐色粘質土をまばらに多く含む)



338 ~ 340 : SK03



0 10cm  
土器 (1/4)



341 ~ 346 : SK04

図 62 7-11 区 SK03・7-11 区 SK04

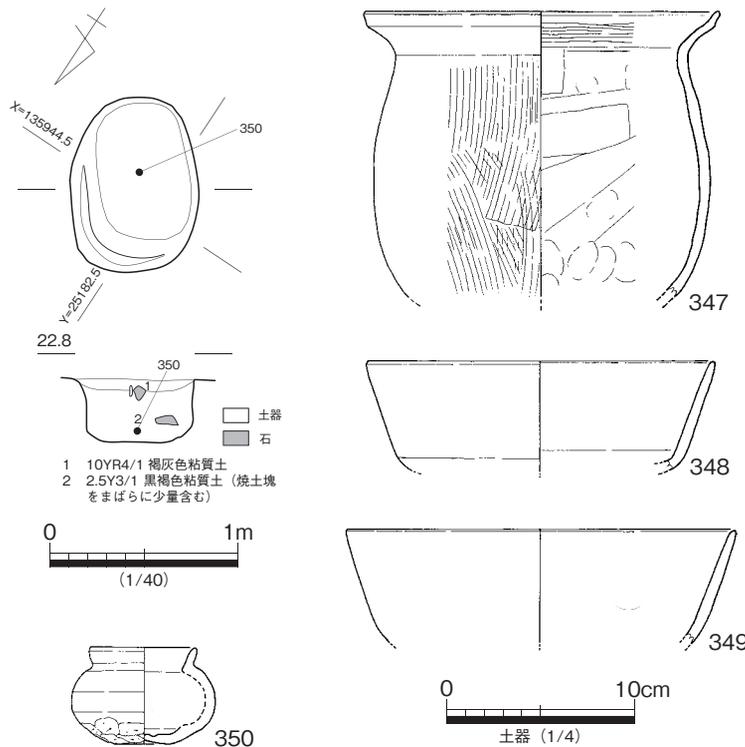
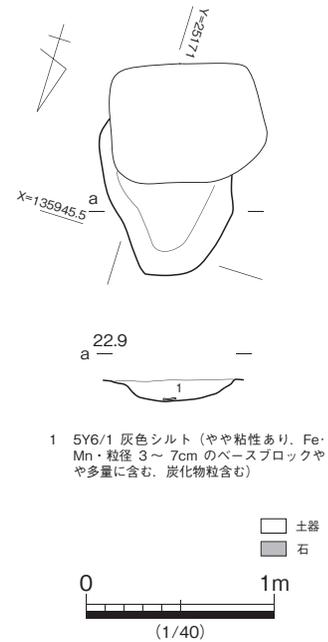


図 63 7-11 区 SK05



1 5Y6/1 灰色シルト (やや粘性あり、Fe・Mn・粒径 3~7cm のベースブロックや多量に含む、炭化物粒含む)

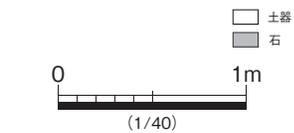
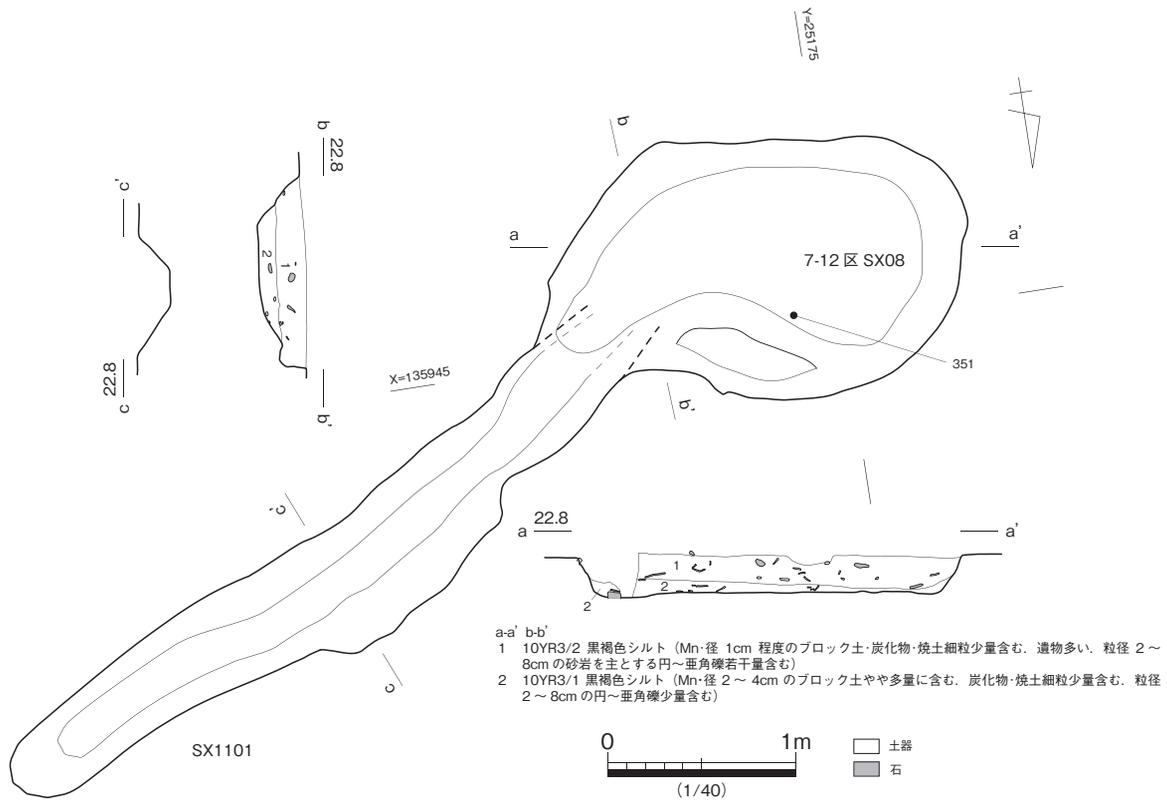


図 64 7-12 区 SK02

265～336はSK01から出土した遺物である。これらの中には完形品はなく、いずれも赤彩されている。第4章第5節で詳述するが、SK01出土土器のうち14点の土器を分析した結果、土器に付着した赤色顔料の原料はベンガラであった。これらの中には天地が不明瞭なものもあるが、265～274は蓋、275～306は皿、307～330は杯、331～336は高杯の脚部と考えた。圧倒的に皿・杯が多い。265のようにつまみが出土していることから、蓋はいずれもつまみが付いていたと考えられる。天井部は平坦で、口縁部は下方に僅かに突出する。いずれも回転ナデを施したあとで、赤色顔料を塗布する。皿は蓋と形態が類似するが、蓋としたものより深いものを皿とした。皿も口縁端部を上方に摘み上げたような形状で面をもつものと、丸いものの2種類がある。いずれも外面にはヘラケズリやヘラミガキが施されず、ナデ調整が施される。杯も皿同様口縁端部に面をもつものと丸いものの2種類があり、外面にはナデ調整が施される。また、底部は307・308のように高台をもつものと高台をもたないものがある。高杯は少量みられる。331は脚部片で、外面に面をもち、断面形は八角形である。これらの土器はいずれも赤色顔料が塗布されている。SK01から須恵器は出土しておらず、同時期に存在した須恵器の様相はつかめていない。本書で報告した遺構の中には赤色顔料が塗布された土器が含まれている遺構もあるが、須恵器と共伴する良好な資料はなく、SK01の実年代については今後の課題である。なお、このような赤色顔料を塗布する土器は京都府の長岡京跡で多く出土することから、SK01は長岡京跡とほぼ同時期の8世紀末頃から9世紀初頭のものである可能性が高い。

#### 7-11 区 SK03 (図 62)

7-11 区西部第3面 (SR01 中層上面) で検出された土坑である。平安時代の掘立柱建物 SB08 と重複し、削平される。また、土坑 SK04 と重複するが、SK03 のほうが新しい。SK03 の平面形は楕円形で、長軸 2.2



- a-a' b-b'
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (Mn・径 1cm 程度のブロック土・炭化物・焼土細粒少量含む。遺物多い。粒径 2~8cm の砂岩を主とする円~垂角礫若干量含む)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・径 2~4cm のブロック土やや多量に含む。炭化物・焼土細粒少量含む。粒径 2~8cm の円~垂角礫少量含む)

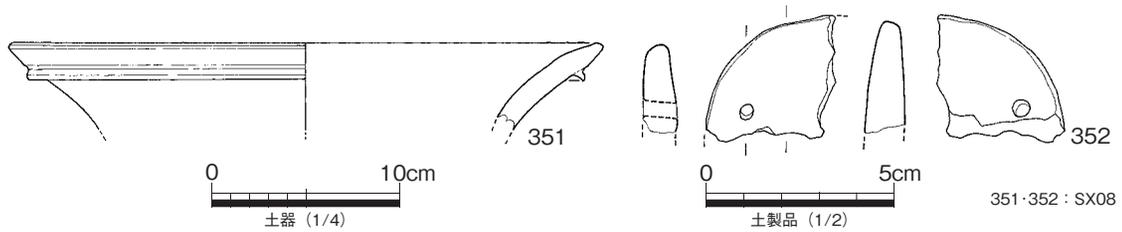
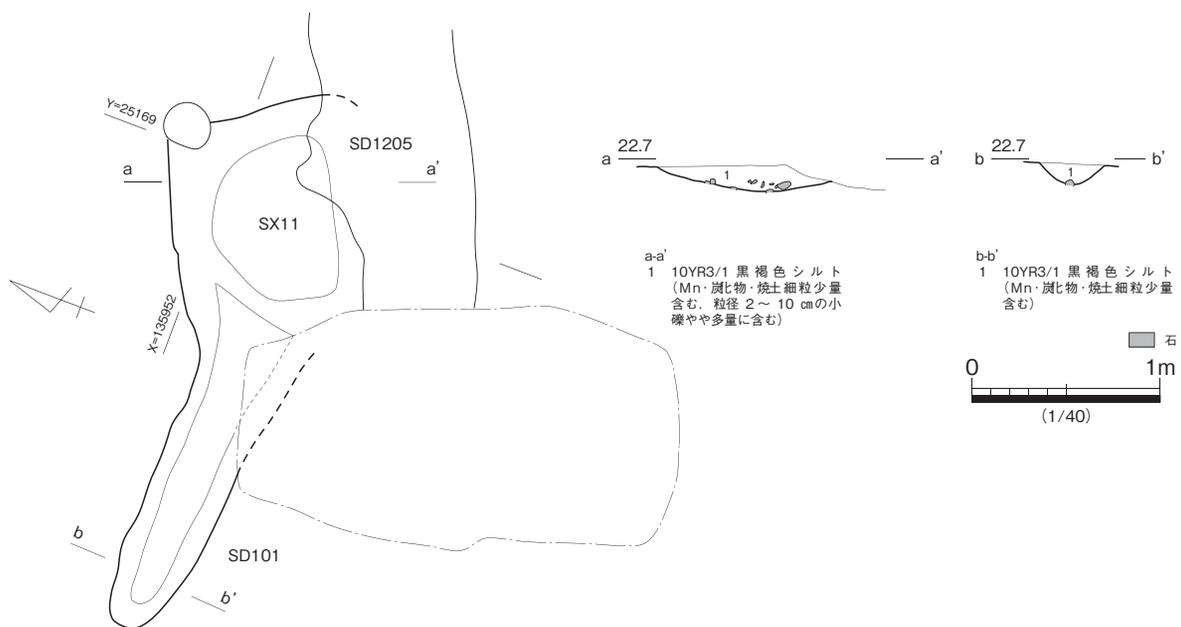


図 65 7-12区 SX08・SX1101



- a-a'
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む。粒径 2~10 cm の小礫やや多量に含む)
- b-b'
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む)

図 66 7-12区 SX11・SD101

m、短軸 1.2 m である。断面形は浅い皿状で、深さは 0.15 m である。埋土には焼土粒と炭化物が多く含まれる。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。338 は土師器甕、339・340 は須恵器杯である。これらの遺物から SK03 は 7 世紀のものと考えられる。

#### 7-11 区 SK04 (図 62)

7-11 区西部第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された土坑である。土坑 SK03 と重複する。SK04 のほうが古い。SK04 の平面形はややいびつな楕円形で、長軸 3.4 m、短軸 2.1 m である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。341 は製塩土器、342 ~ 344 は須恵器杯、345・346 は須恵器甕である。これらの遺物から SK04 は 7 世紀のものと考えられる。

#### 7-11 区 SK05 (図 63)

7-11 区西部第 2 面 (SR01 上層下位上面) で検出された土坑である。平面形は楕円形で、長軸 0.9 m、短軸 0.6 m である。断面形は箱形で、深さ 0.35 m である。遺物は土器・須恵器が出土した。347 は土師器甕、348・349 は須恵器鉢、350 は須恵器小壺である。350 は SK05 のほぼ中央の底面付近から出土した。これらの遺物から SK05 は 7 世紀後半のものと考えられる。

#### 7-12 区 SK02 (図 64)

7-12 区のほぼ中央部第 1 面 (Ⅲ層上面) で検出された土坑である。SK02 の南部は掘立柱建物 SB23 の柱穴 SK01 と重複し、削平される。SK01 のほうが新しい。SK02 の平面形はいびつな楕円形で、長軸 0.9 m 前後、短軸 0.7 m である。平面形は浅い皿状で、深さ 0.15 m である。遺物は土器片・須恵器片が少量出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構と同様古代のものと考えられる。

#### 7-12 区 SX08 (図 65)

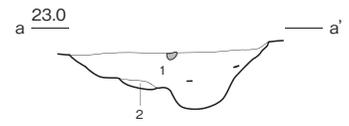
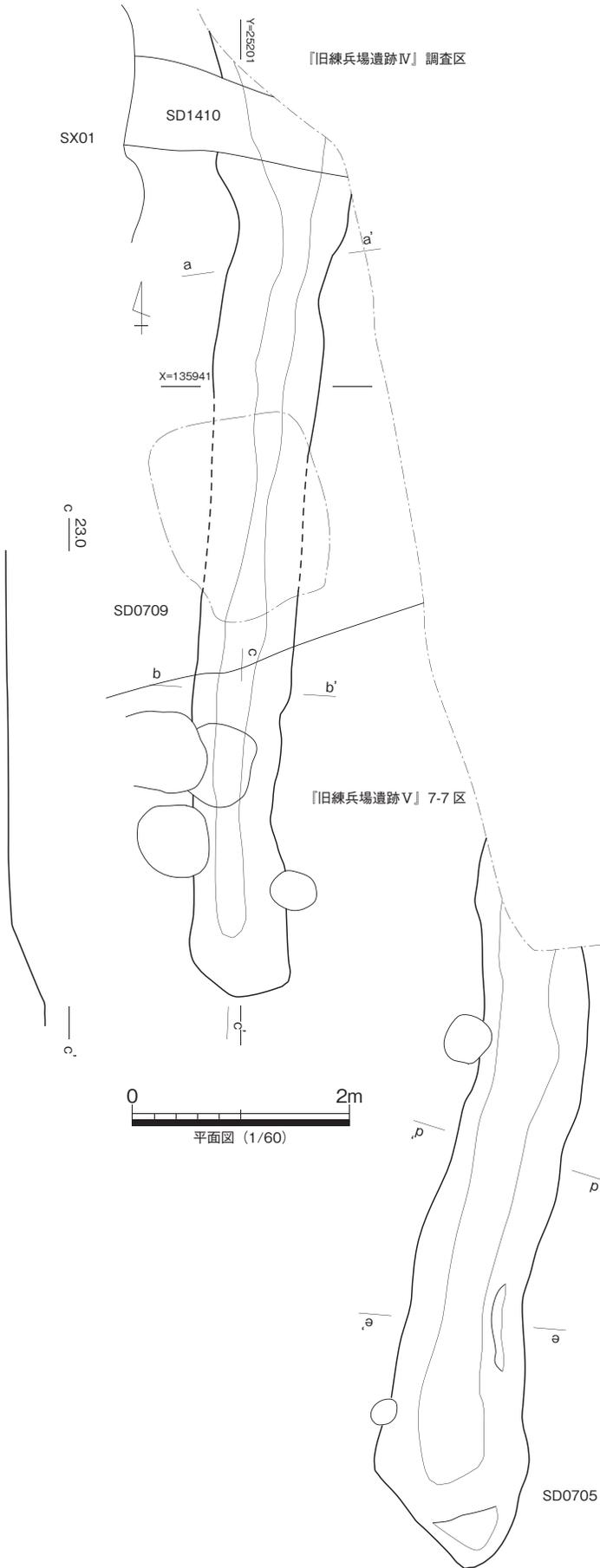
7-12 区東部第 2 面 (Ⅳ層上面) で検出された土坑である。7-11 区から南西に向かう溝 SX1101 と重複する。SX1101 のほうが新しい。発掘調査時には SX08 と SX1101 を連続する同一遺構と考え、両遺構とも SX08 としていたが、調査後に別遺構と考え、土坑を SX08、溝を SX1101 とした。SX08 の平面形はややいびつな楕円形で、長軸 2.4 m、短軸 1.4 m、断面形は箱形で、最深部の深さは 0.2 m である。遺物は整理箱 1 箱程度出土した。351 は須恵器甕、352 は分銅形土製品である。須恵器が出土していることから古墳時代後期から 7 世紀頃のものと考えられる。

#### SX1101 (図 65)

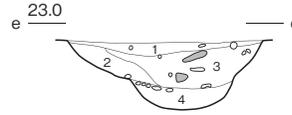
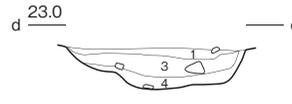
7-12 区の東部から 7-11 区西部第 2 面 (Ⅳ層上面) で検出された溝である。西端は土坑 7-12 区 SX08 と重複し、削平される。SX1101 のほうが新しい。発掘調査時には SX08 と SX1101 を連続する同一遺構と考え、両遺構とも SX08 としていたが、調査後に別遺構と考え、土坑を SX08、溝を SX1101 とした。なお、7-11 区で検出された SX08 の溝部分は 7-12 区では SX01 (発掘時の遺構名) と連続する。このため、SX08 の溝部分を SX1101 とした。SX1101 の方向は N75° E で、幅 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.4 m、検出長 3.6 m である。遺物は少量出土した。図化していないが、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る須恵器小片が出土していることから、古代のものと考えられる。

#### 7-12 区 SX11・SD101 (図 66)

7-12 区の北部第 2 面 (Ⅳ層上面) で検出された土坑である。西端は溝 SD101 と重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時には SX11 と SD101 を連続遺構と考え、両遺構とも SX11 としていたが、調査後に別遺構と考え、土坑を SX11、溝を SD101 とした。また、SX11 の南部は近世の溝 SD1205 と重複し、削平され、攪乱によって削平される。SX11 の平面形はややいびつな方形で、残存部分の長軸

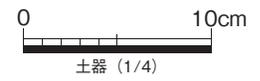
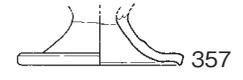
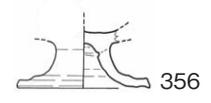
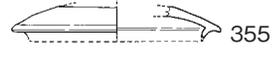
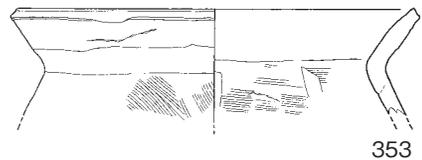
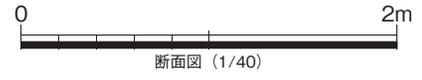


- a-a'
- 1 2.5Y3/2 黒褐色砂混じりシルト質土 (粗砂粒以下含む。Fe・Mn を含む。2cm の斑地山ブロックを含む。底部付近で地山ブロックが多くなる)
  - 2 1と黄褐色極細砂質土 (地山) の混在層



- d-d' e-e'
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 (Mn 含む。1~2cm 大細礫含む)
  - 2 黄褐色粘土ブロックを含む 10YR3/2 黒褐色粘質土
  - 3 10YR3/1 黒褐色粘質土 (2~10cm 大の礫少々含む)
  - 4 10YR3/3 暗褐色粘質土

□ 土器  
■ 石



353 ~ 357 : SD0709 (7-10 区部分)

図 67 SD0709

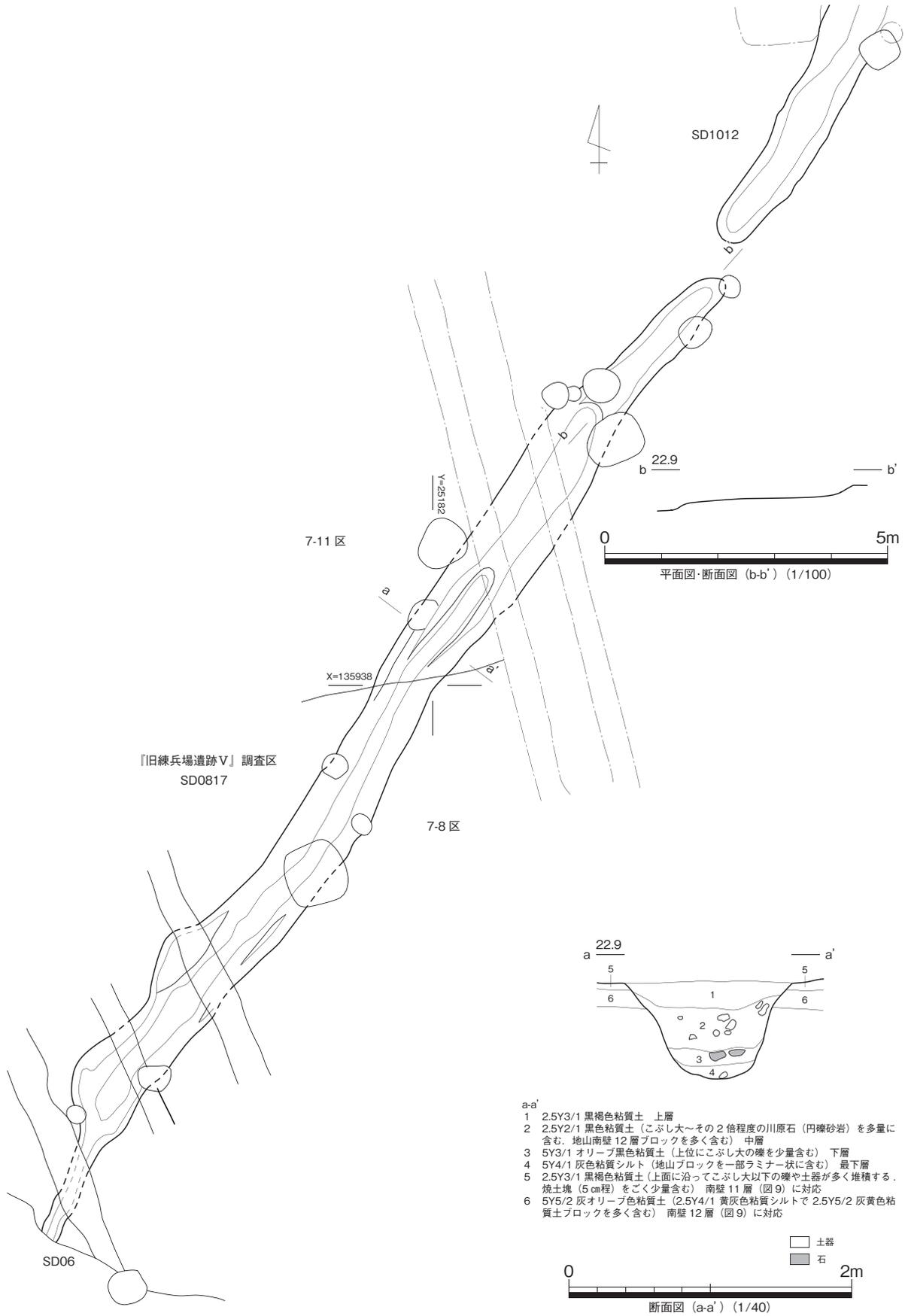


図 68 SD0817 (1)

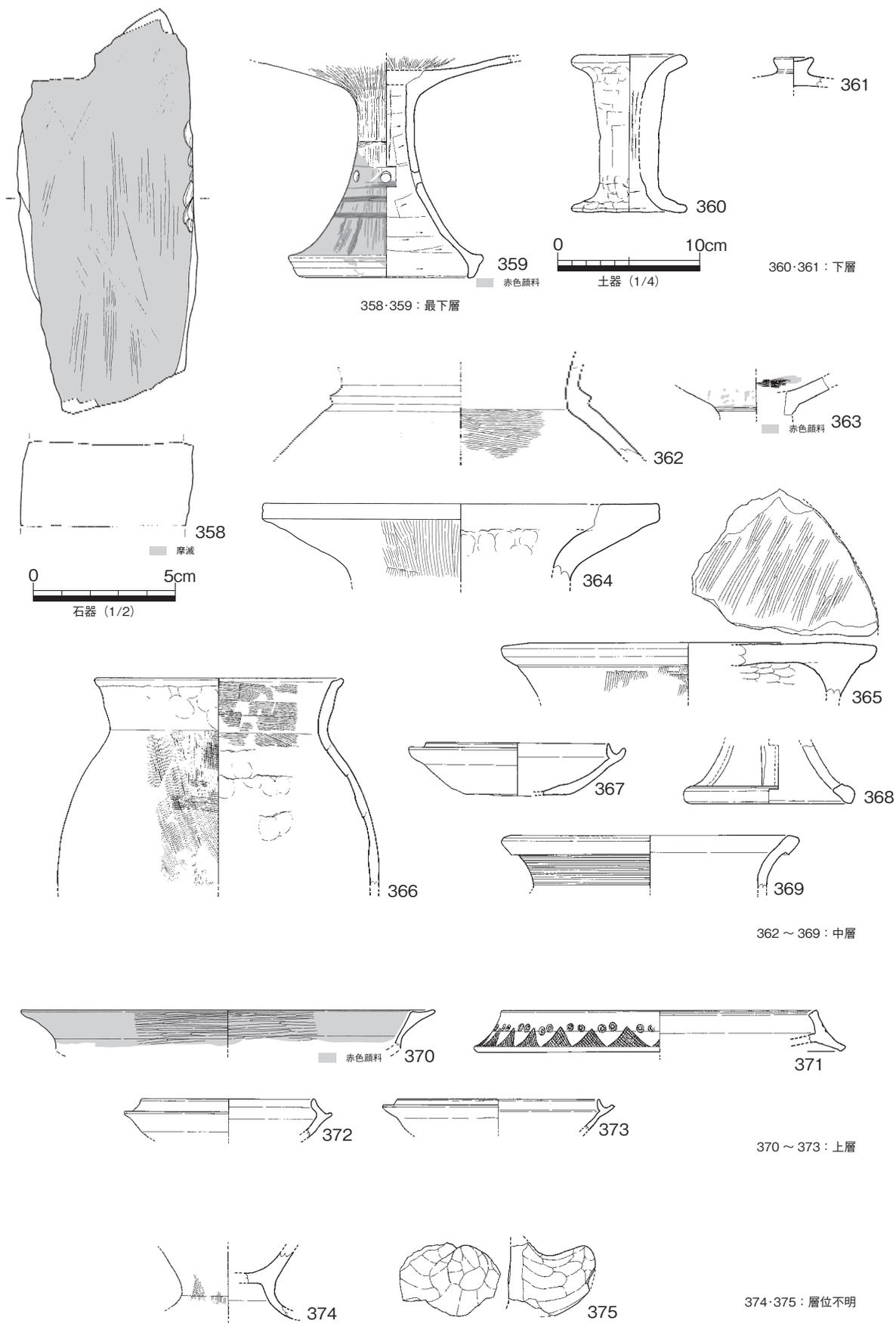


图 69 SD0817 (2)

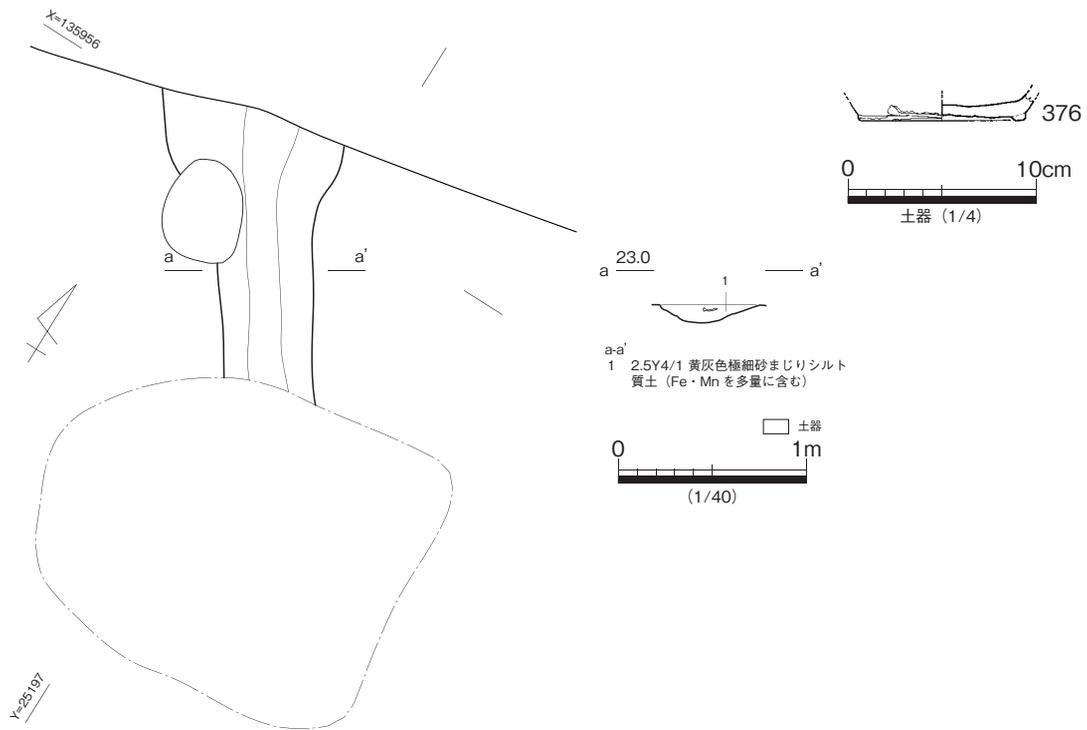


図 70 SD1003

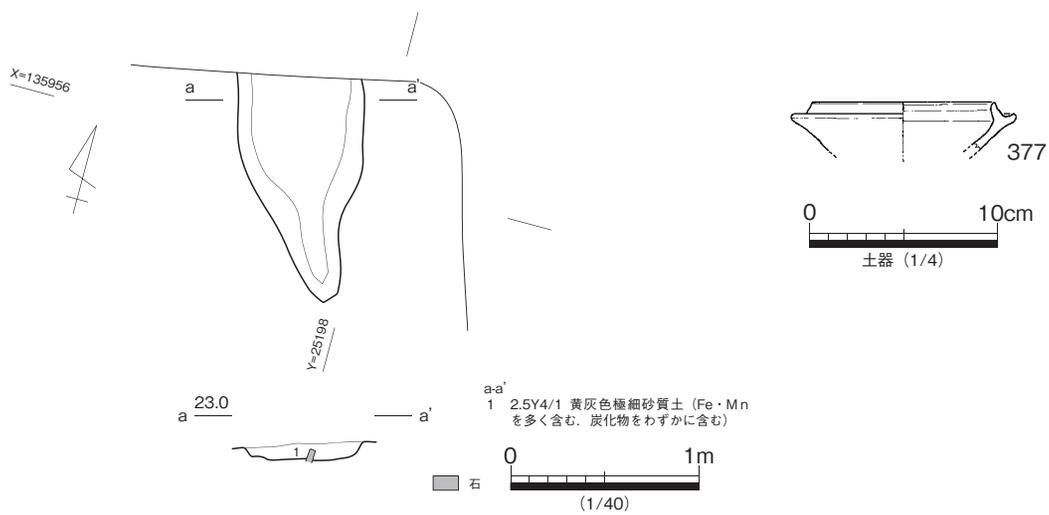


図 71 SD1005

は 1.2 m である。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは 0.25 m である。SD101 はほぼ東西方向で、検出長 1.8 m、幅 0.4 m、断面形は浅い皿状で、最深部の深さは 0.2 m である。これらの遺構からは土器・須恵器片が少量出土した。図化していないが、須恵器の様相から両遺構は古代のものと考えられる。

### 溝

#### SD0709 (図 67)

7-10 区東部第 2 面 (IV 層上面) で検出された溝である。溝の南部は『旧練兵場遺跡 V』で報告した 7-7 区に連続する。この溝は『旧練兵場遺跡 V』では SD0709 として報告されたことから、同名を踏襲

するが、調査時の遺構名はSD09である。SD0709は南北(N3°E)に延び、北端は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告した7-5区に入る。7-5区の西端付近は攪乱によって大きく削平されており、SD0709の北端は確認できなかった。また、7-7区では8世紀の掘立柱建物7-7区SB03の柱穴SP166、溝SD1410と重複しており、削平される。これらよりもSD0709のほうが古い。7-7区から7-10区にかけての検出長は8.6m、幅0.9～1.2m、深さ0.3mである。7-7区で検出されたSD0709の南端は急傾斜である。また、埋土は黒褐色シルトで、流水の痕跡は認められない。これらのことから、SD0709は用水路ではなく、区画のために掘られた溝の可能性が高い。なお、SD0709の東1.8mにはSD0709と平行して南北に延びる溝SD0705がある。SD0705は7-7区で検出された溝で、北部は7-5区に延びるが、攪乱によって大きく削平されており、北端は未検出である。SD0705もSD0709と同様、南端は急傾斜で、流水痕跡は認められない。これらの溝は平行することから、これらの間は道の可能性もある。SD0709の埋土からは土器・須恵器片が少量出土した。353・354は土師器甕、355は須恵器蓋、356・357は須恵器高杯の脚部である。これらの須恵器は7世紀に属することから、SD0709は7世紀のものと考えられる。

#### SD0817 (図68・69)

7-8区第2面(SR01中層上面)、7-11区第2面(SR01上層下位上面)で検出された溝である。調査時の遺構名は7-11区ではSD01であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した溝SD0817と同一遺構であるため、同名を使用する。SD0817は南西から北東(N35°E)に向かう。南端は7世紀ごろ埋没する溝SD06と重複する。最終埋没はSD06のほうが新しい。南端付近は溝幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.15mであるが、中央部は幅広で深くなり、幅1.2～1.5m、深さ0.6～0.7mとなる。また、溝の北端は幅狭で浅くなり、幅0.7m、深さ0.2～0.3mとなる。北端の0.6m北方には南西から北東に向かい、東南東に向かう溝SD1012(図74)がある。SD1012の南端は幅0.8m、深さ0.2mと浅く、SD0817はSD1012と連続する可能性が高い。遺物は多量の土器・須恵器が出土した。358・359は底面付近、360・361は下層、362～369は中層、370・373は上層、374・375はSD0817から出土したが、層位不明である。358は砥石で、石材は安山岩の可能性が高い。359は弥生土器高杯の脚部である。櫛状工具による直線文と赤彩がみられる。胎土は茶褐色である。岡山県備中地方産で、搬入品である。弥生時代後期初頭に属する。360は弥生土器支脚、361は須恵器蓋である。362は弥生土器壺、363は高杯の杯部である。363も茶褐色で、359と胎土が類似する。岡山県備中地方産で搬入品である。364・365は弥生土器器台、366は土師器甕、367は須恵器杯、368は須恵器高杯の脚部、369は須恵器甕である。370は弥生土器高杯の杯部で赤彩がある。胎土は茶褐色である。胎土や形態から岡山県備中地方産で、弥生時代後期初頭に属する。371は器台の口縁部である。胎土は茶褐色である。口縁部外面には丁寧なヘラ描きによる鋸歯文と円形竹管文がみられる。372・373は須恵器杯である。374は弥生土器の脚部、375は土師器の把手である。弥生土器も混じるが、須恵器はいずれも陶邑編年TK217型式に属することから、SD0817は7世紀のものと考えられる。

#### SD1003 (図70)

7-10区北東隅第1面(Ⅲ層上面)で検出された溝である。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』(平成23年2月刊行)で報告された調査区であるが、攪乱によって大きく削平されているため溝SD1002の北端は検出されていない。南部は攪乱によって大きく削平される。SD1003は南東から北西(N25°W)に向かう。溝幅は0.5～1.0m、断面形は浅い皿状で、最新部の深さは0.1mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。376は須恵器の底部で、8世紀から9世紀に属する。SD1003は付近の条里地割に平行する。この付近

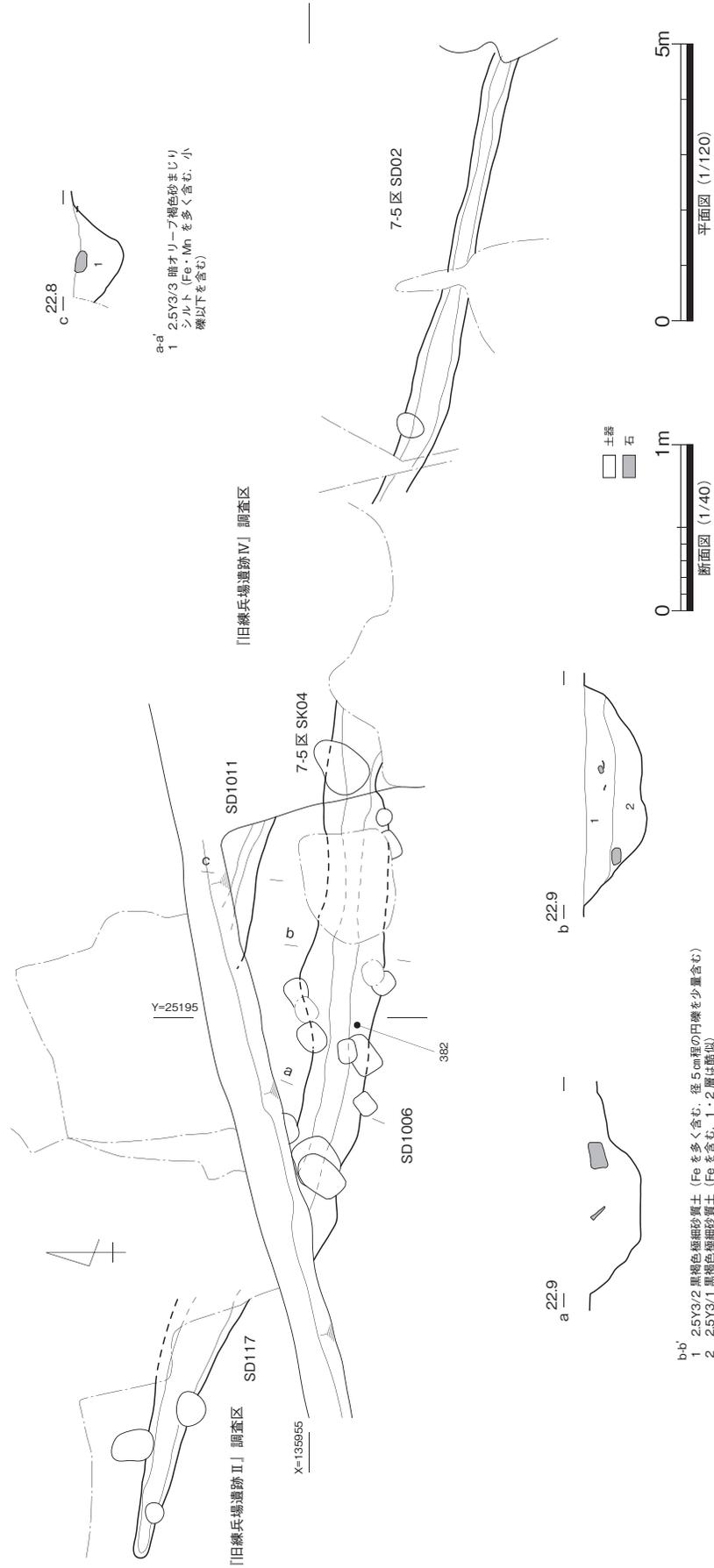


図 72 SD1006・SD1011 (1)

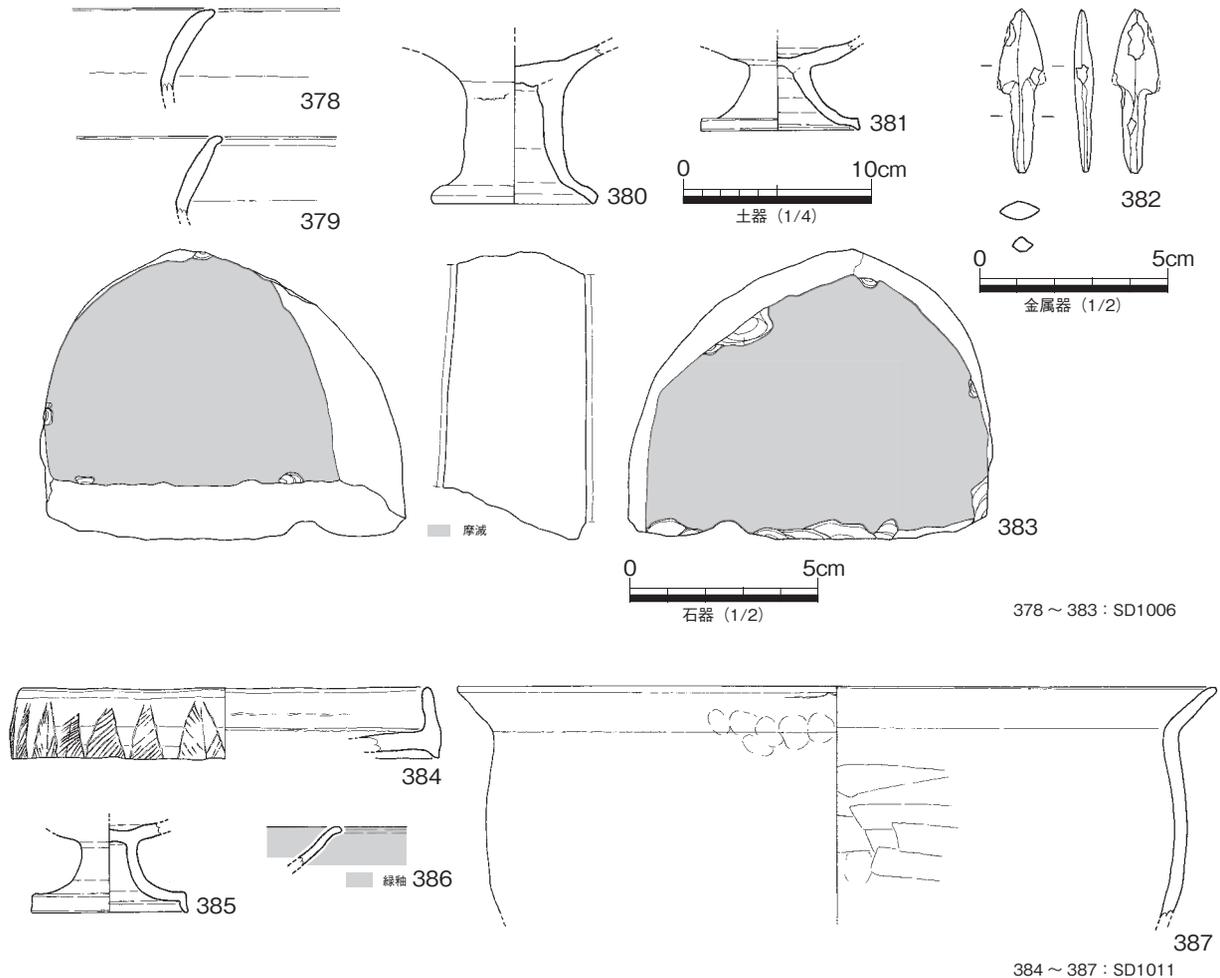


図 73 SD1006・SD1011 (2)

では条里地割に平行する遺構は9世紀以降のものであることから、SD1003は9世紀頃のものと考えられる。

#### SD1005 (図 71)

7-10区北東隅第1面(Ⅲ層上面)で検出された溝である。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区であるが、攪乱によって大きく削平されているため溝SD1005の北端は検出されていない。SD1005は南東から北西(N20°W)に向かう。溝幅は0.3~1.4mである。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは0.1mである。遺物は須恵器・土師器が少量出土した。377は須恵器杯で、陶邑編年TK217型式に属することから、SD1005は7世紀のものと考えられる。

#### SD1006 (図 72・73)

7-10区北東端第3面(SR01中層上面)で検出された溝である。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区である。調査区の境界付近は攪乱によって削平されるが、『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された溝SD117に連続する可能性が高い。また、東部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された7-5区SK04に連続し、攪乱を挟んだ東側の7-5区SD002に連続する可能性が高い。SD1006は南東から北西(N20°W)に向かう。東接調査区と合わせると検出長は21m、溝幅は0.6~1.5mである。断面形はU字形で、最新部の深さは0.4mである。遺物は土器・須恵器片が整理箱半分程度出土した。378~383はSD1006から出土し

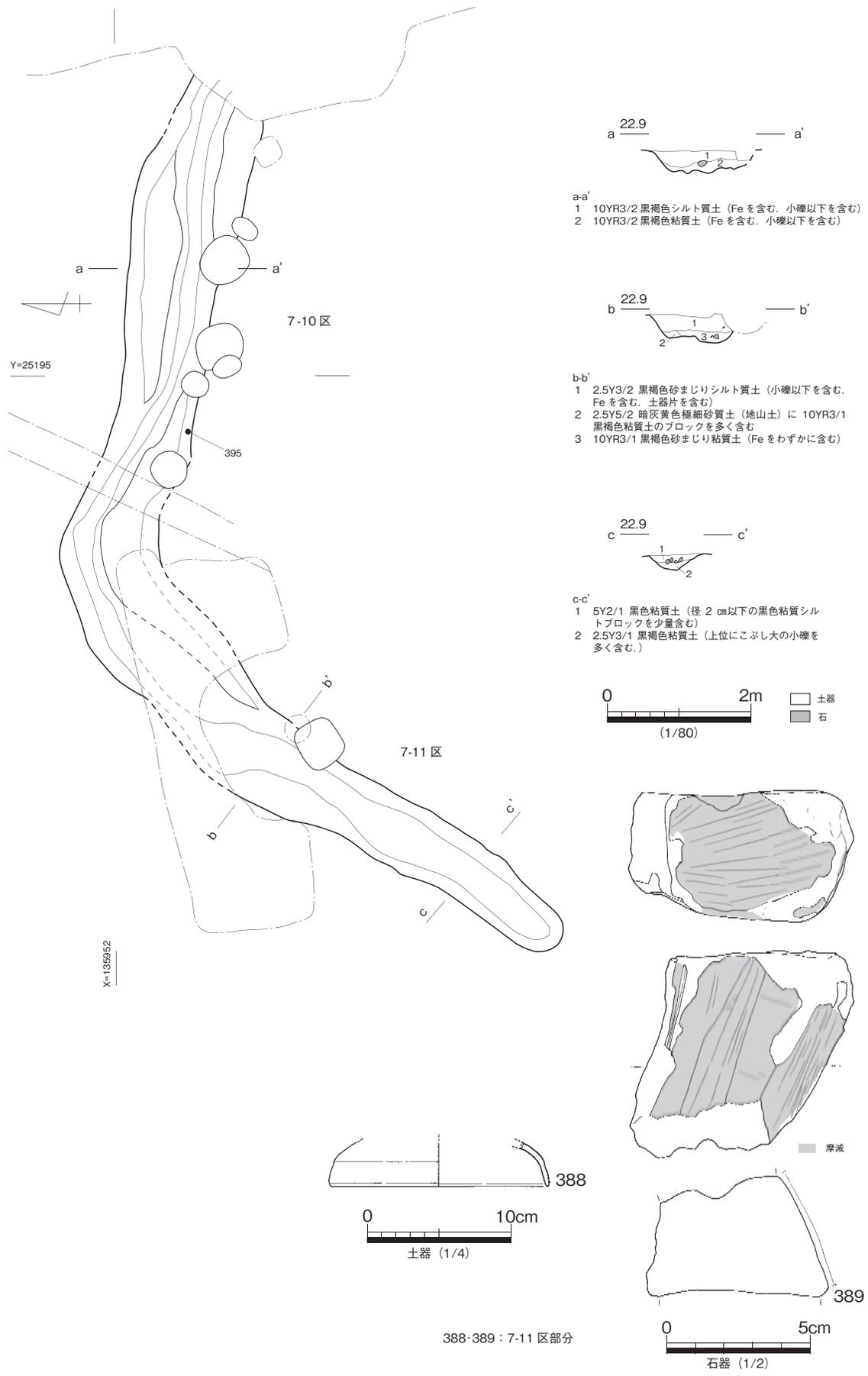


図 74 SD1012 (1)

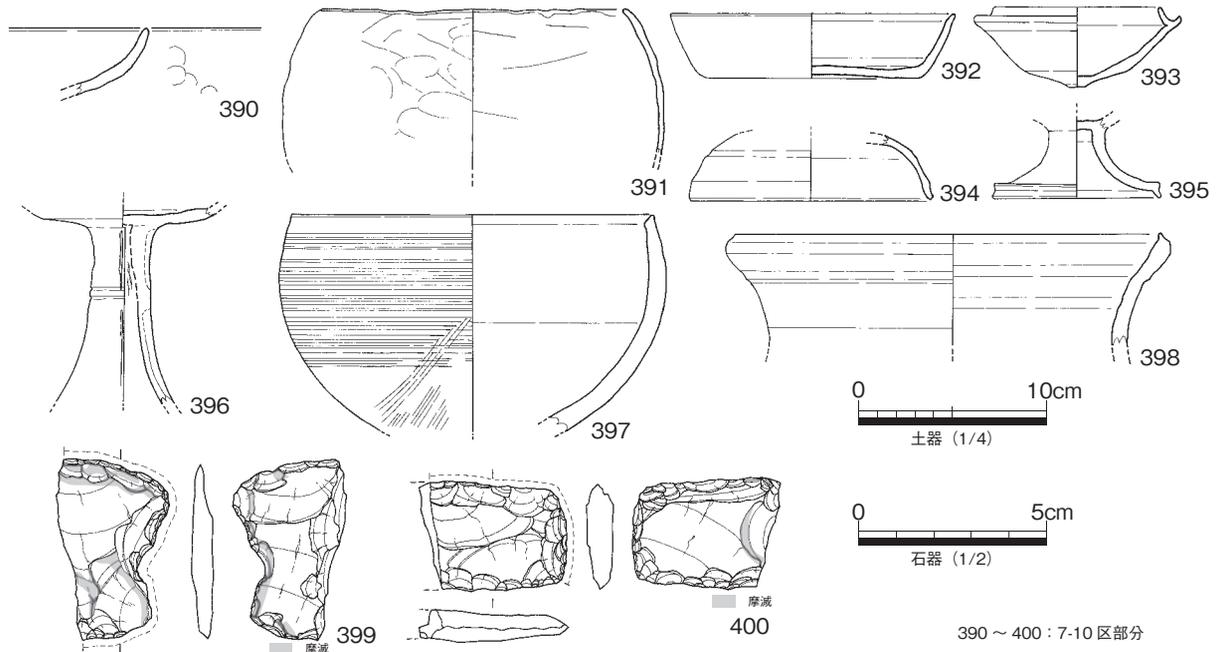


図 75 SD1012 (2)

た遺物である。378・379 は土師器甕、380 は土師器高杯の脚部、381 は須恵器高杯の脚部、382 は銅鏃、383 は砥石である。383 の石材は砂岩である。382 は弥生時代のものであるが、土師器・須恵器の様相から SD1006 は 7 世紀のものと考えられる。

#### SD1011 (図 72・73)

7-10 区北東隅第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された溝である。調査区北東隅で検出されたため、溝の北端は検出されていない。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区である。調査区の境界付近は攪乱によって削平される。また、東部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された 7-5 区であるが、攪乱が深く、SD1011 に連続する溝は検出されていない。SD1011 は SD1006 と平行して南東から北西 (N20° W) に向かう。7-10 区での検出長 2.4 m、現存溝幅 0.5 m、断面形は V 字形で、最新部の深さは 0.3 m である。遺物は土器・須恵器片などが少量出土した。384 は弥生土器器台、387 は土師器甕、385 は須恵器高杯の脚部、386 は緑釉陶器碗の口縁部である。385 は 7 世紀に属し、386 は 9 世紀に属する。386 は小破片であることから、混入した可能性が高い。SD1006 と平行することや須恵器の様相から SD1011 も 7 世紀のものと考えられる。

#### SD1012 (図 74)

7-11 区と 7-10 区第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は 7-11 区では SD11、7-10 区では SD12 である。SD0817 の北方の延長線上にあり、7-11 区では南西から北東 (N35° E) に向かい、7-10 区に入ると L 字状に屈曲して、東南東 (E10° S) に向かう。検出長 15 m、溝幅 1.0 ~ 1.6 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m である。埋土は黒褐色シルトを中心とし、砂層の堆積はみられなかった。遺物は土器・須恵器片などが整理箱 2 箱程度出土した。388・389 は 7-11 区部分から出土した。388 は須恵器蓋、389 は砥石で、石材は凝灰岩である。390 ~ 400 は 7-10 区部分から出土した。390 は土師器杯、391 は土師器鉢、392・393 は須恵器杯、394 は須恵器蓋、395・396 は須恵器高杯、397 は須恵器鉢、398 は須恵器甕である。392 は 8 世紀に属するが、他は 7 世紀に属する。SD1012 の南延長上にある SD0817 も 7 世紀の溝と考

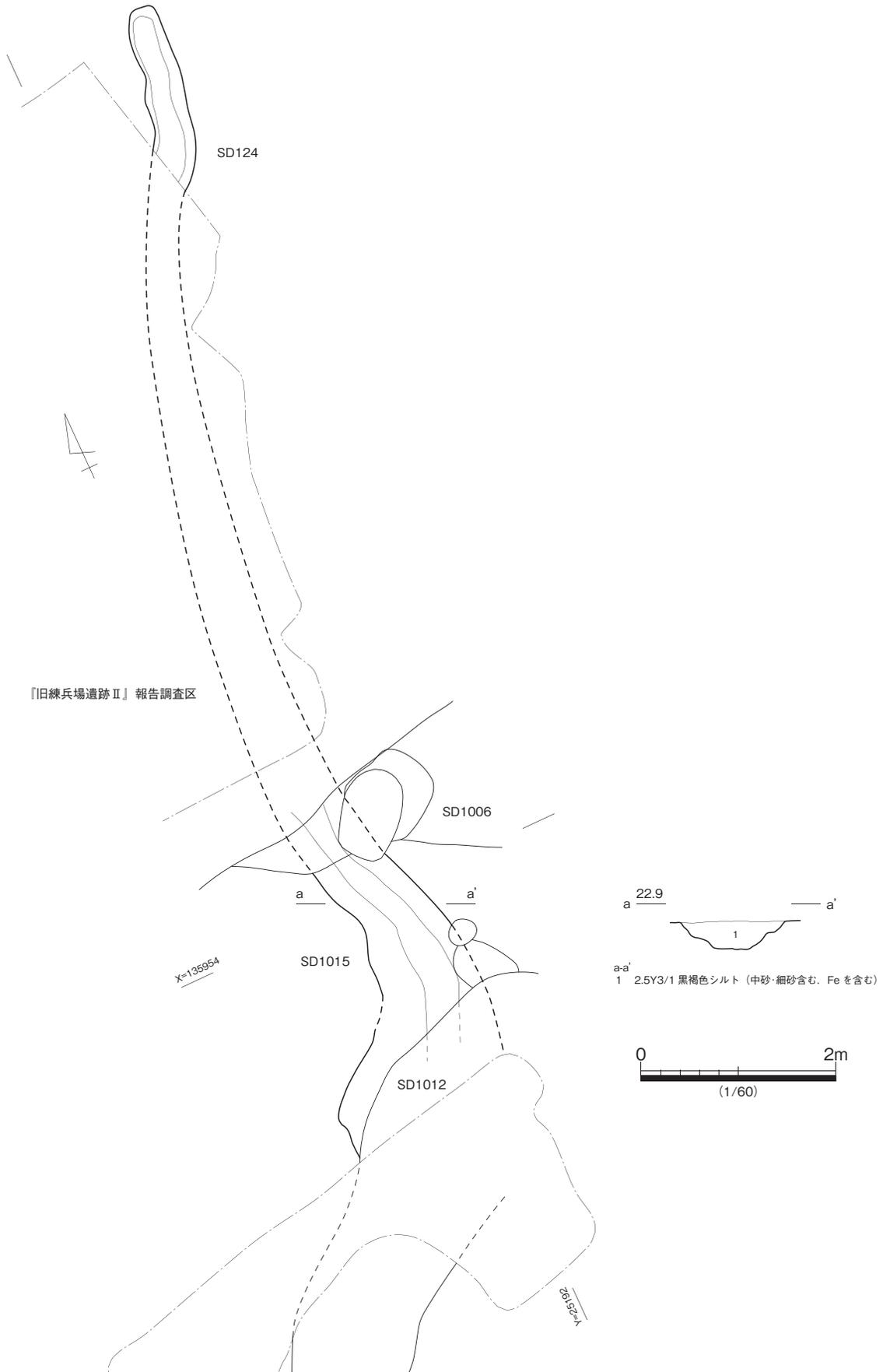


図 76 SD1015

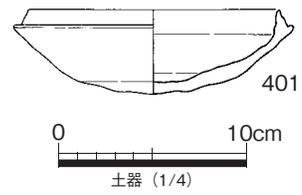
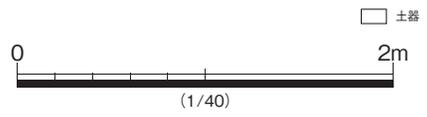
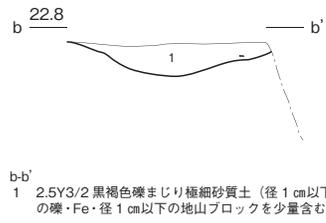
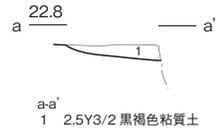
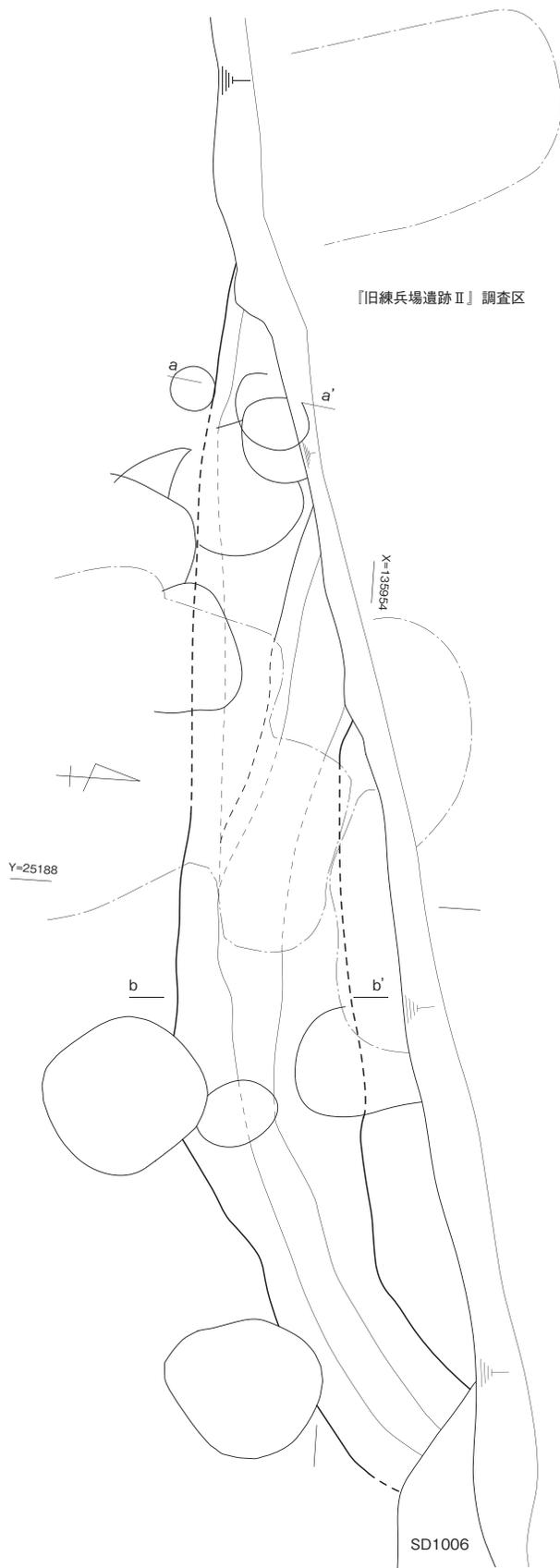


図 77 SD1016

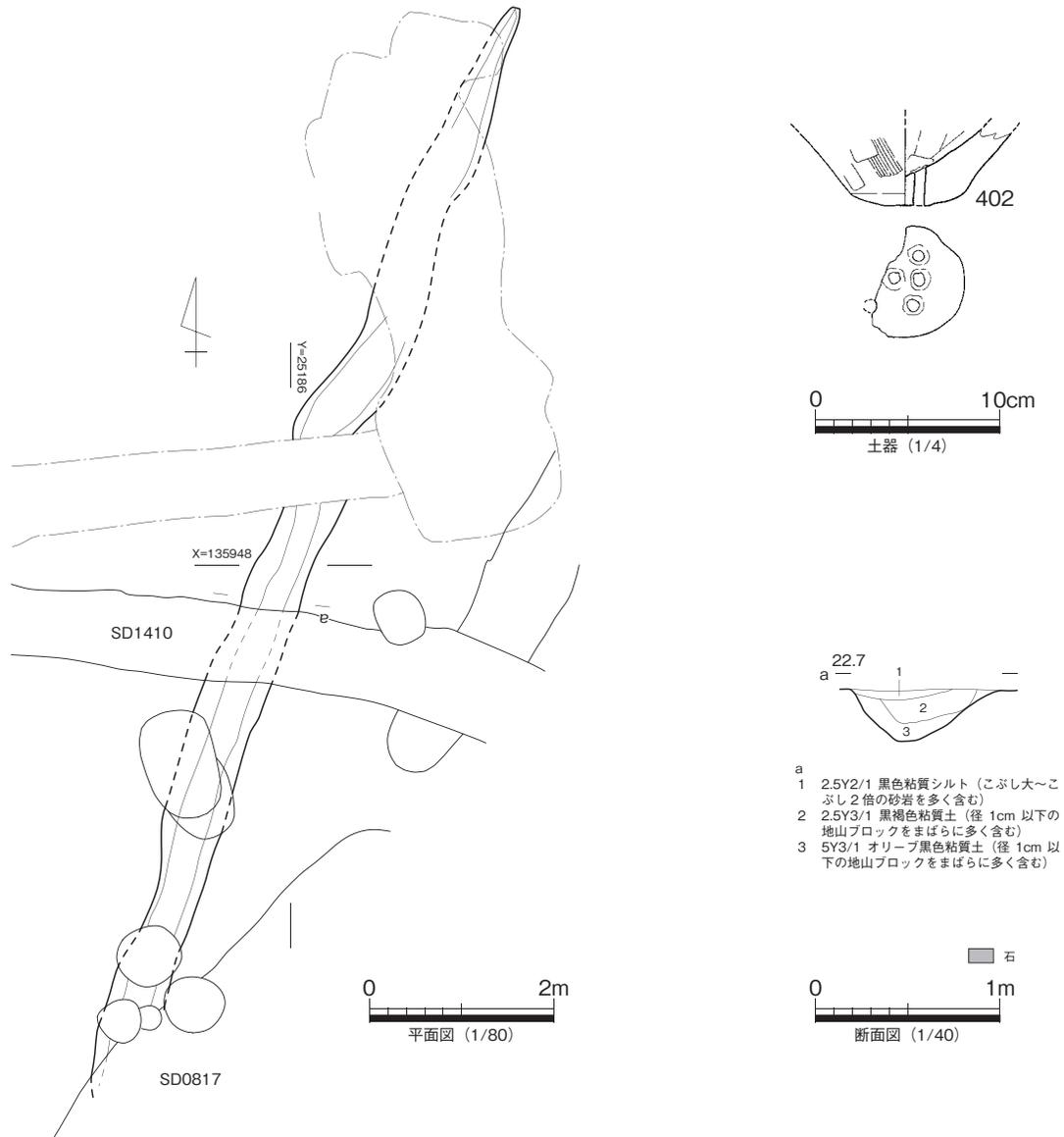


図 78 SD1112

えられることから、SD1012 も同時期のものと考えられる。

#### SD1015 (図 76)

7-10 区北西部第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は SD15 である。北端は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区である。この付近には攪乱があり、大きく削平されているが、その北方には SD124 があり、SD1015 はこの溝に連続するものと考えられる。また、7-10 区の北端では 7 世紀の溝 SD1006、10 世紀の掘立柱建物 SB44 の柱穴 SP117 と重複し、削平される。南部は 7 世紀の溝 SD1012 と重複し、削平される。これらの遺構は SD1015 よりも新しい。SD1015 は 7-10 区では検出長 3.3 m、溝幅 0.7 ~ 1.0 m 前後、深さ 0.3 m である。断面形は皿状で、埋土は黒褐色シルトである。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。図化していないが、陶邑編年 TK217 型式の須恵器高杯脚部片が出土していることから、SD1015 は 7 世紀のものと考えられる。

#### SD1016 (図 77)

7-10 区北西部から 7-11 区北東部第 3 面 (SR01 中層上面) で検出された溝である。調査時の遺構名は

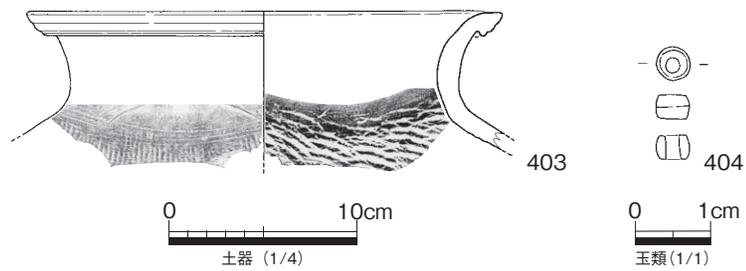
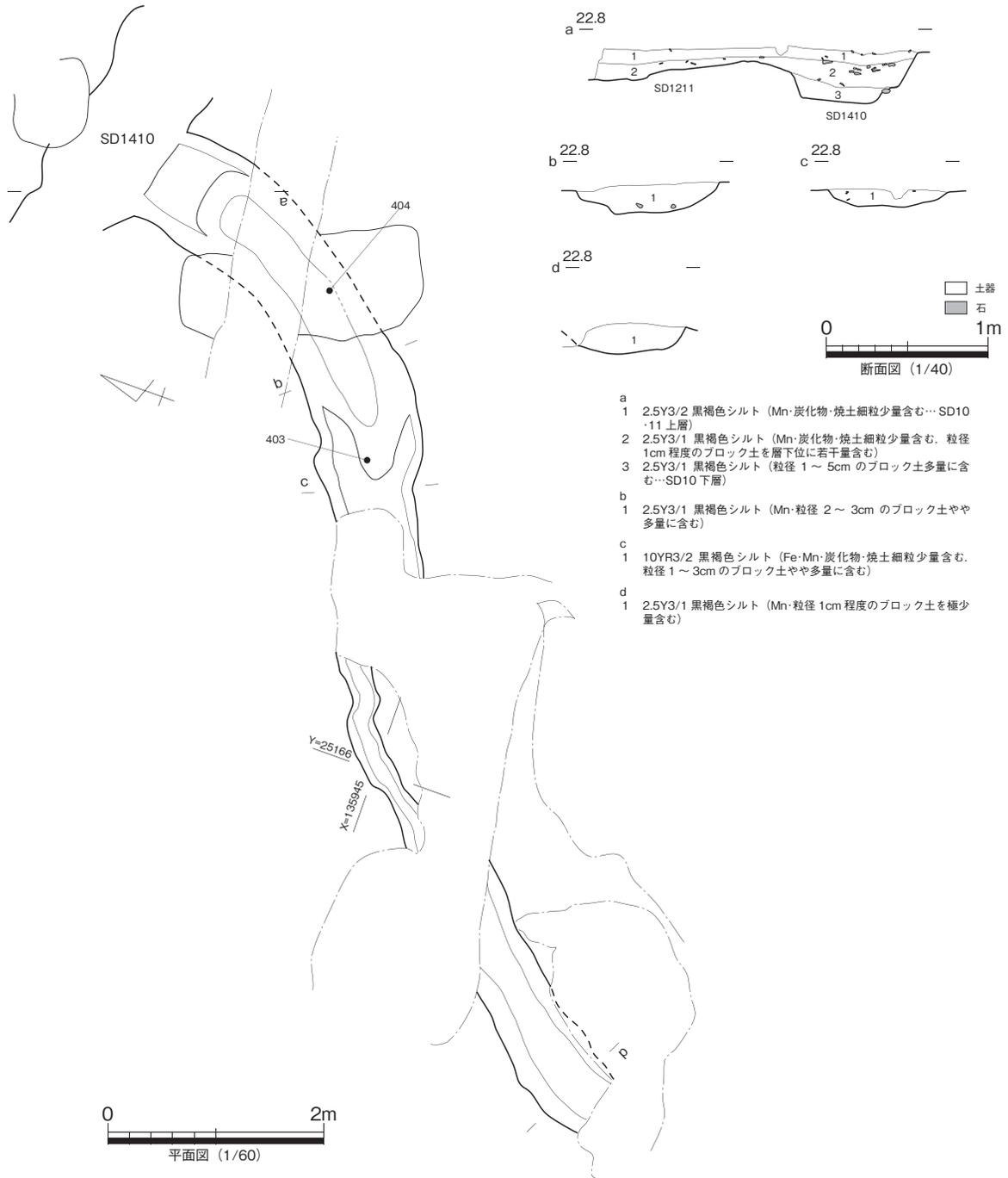
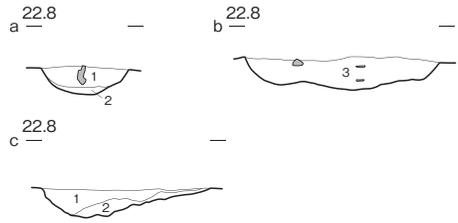
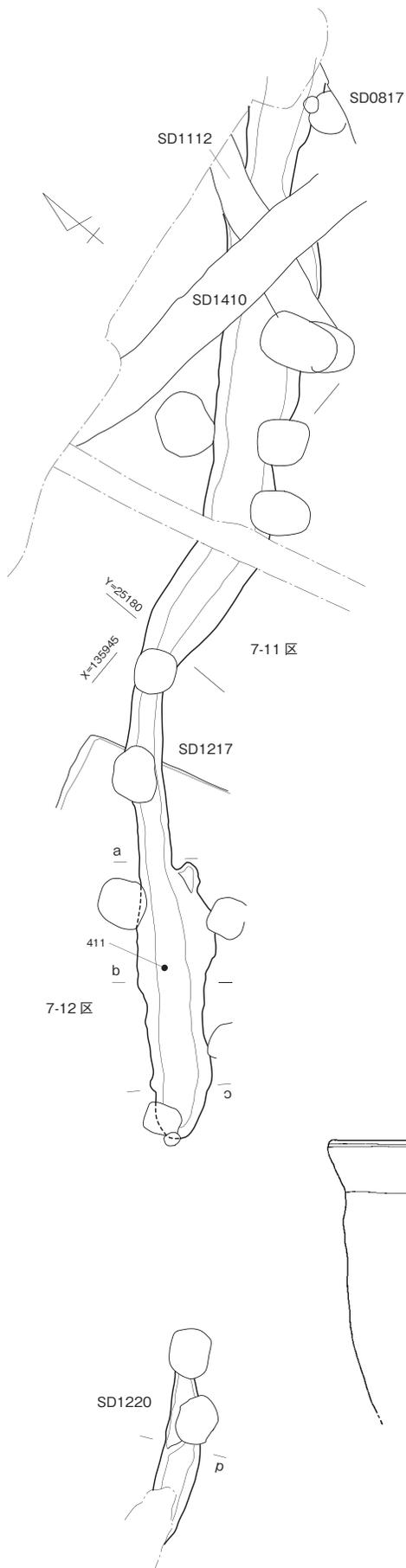


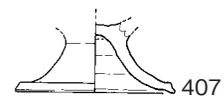
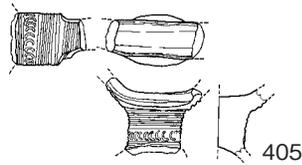
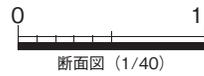
図 79 SD1211



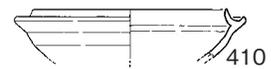
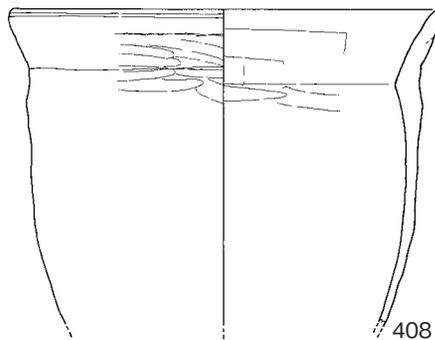
- a b c
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量、粒径 1 ~ 3cm のブロック土少量)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn・粒径 1 ~ 4cm のブロック土多量に含む)
  - 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む、底面付近に粒径 1 ~ 2cm のブロック土混じる)



- 1 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn・炭化物粒少量含む、粒径 2 ~ 3cm のブロック土若干量含む)



405 ~ 407 : SD1217 7-11 区部分



408 ~ 412 : SD1217 7-12 区部分

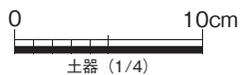


図 80 SD1217・SD1220

7-10区ではSD16、7-11区ではSD08である。SD1016は北東から北西に向かって円弧を描く。北東端は7世紀の溝SD1006と重複し、削平される。また、北西端は10世紀の掘立柱建物SB44の柱穴SP99と重複し削平される。また、北西端は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区であるが、この付近は攪乱されており、連続する遺構は検出されていない。SD1016は幅0.6～1.0mで、断面形は浅い皿状で、深さ0.1～0.2mである。遺物は整理箱半分程度出土した。401は須恵器杯である。出土遺物からSD1016は7世紀のものと考えられる。

#### SD1112 (図78)

7-11区第3面(SR01中層上面)で検出された溝である。調査時の遺構名はSD12である。南南西から北北東(N20°E)に向かう。溝の中央部は古代の溝SD1410や攪乱によって削平される。また、南端は7世紀の溝SD0817と重複する。最終埋没はSD0817が新しい。SD1112の検出長は12.5m、溝幅0.5～0.7m、断面形は半円形で、深さ0.35mである。遺物は土器・須恵器片が整理箱半分程度出土した。いずれも小片で、形態がわかるものは僅かである。SD0817よりも古いことや遺物の時期からSD1112は7世紀のものと考えられる。

#### SD1211 (図79)

7-13区西部から7-12区の第2面(SR01中層上面)で検出された溝である。調査時の遺構名はSD11である。ゆるく蛇行しながら南西から北東に向かう。南西端は攪乱によって大きく削平される。北東は南東から北西にはほぼ直線状に走る溝SD1410と連続する。土層堆積の検討から両溝は同時期に機能したと考えられる。SD1211は検出長10m、幅0.3～1.0m、深さ0.2mである。遺物は整理箱1箱程度出土した。403は須恵器甕、404は滑石製白玉である。出土遺物からSD1211は7世紀から8世紀のものと考えられる。

#### SD1217 (図80)

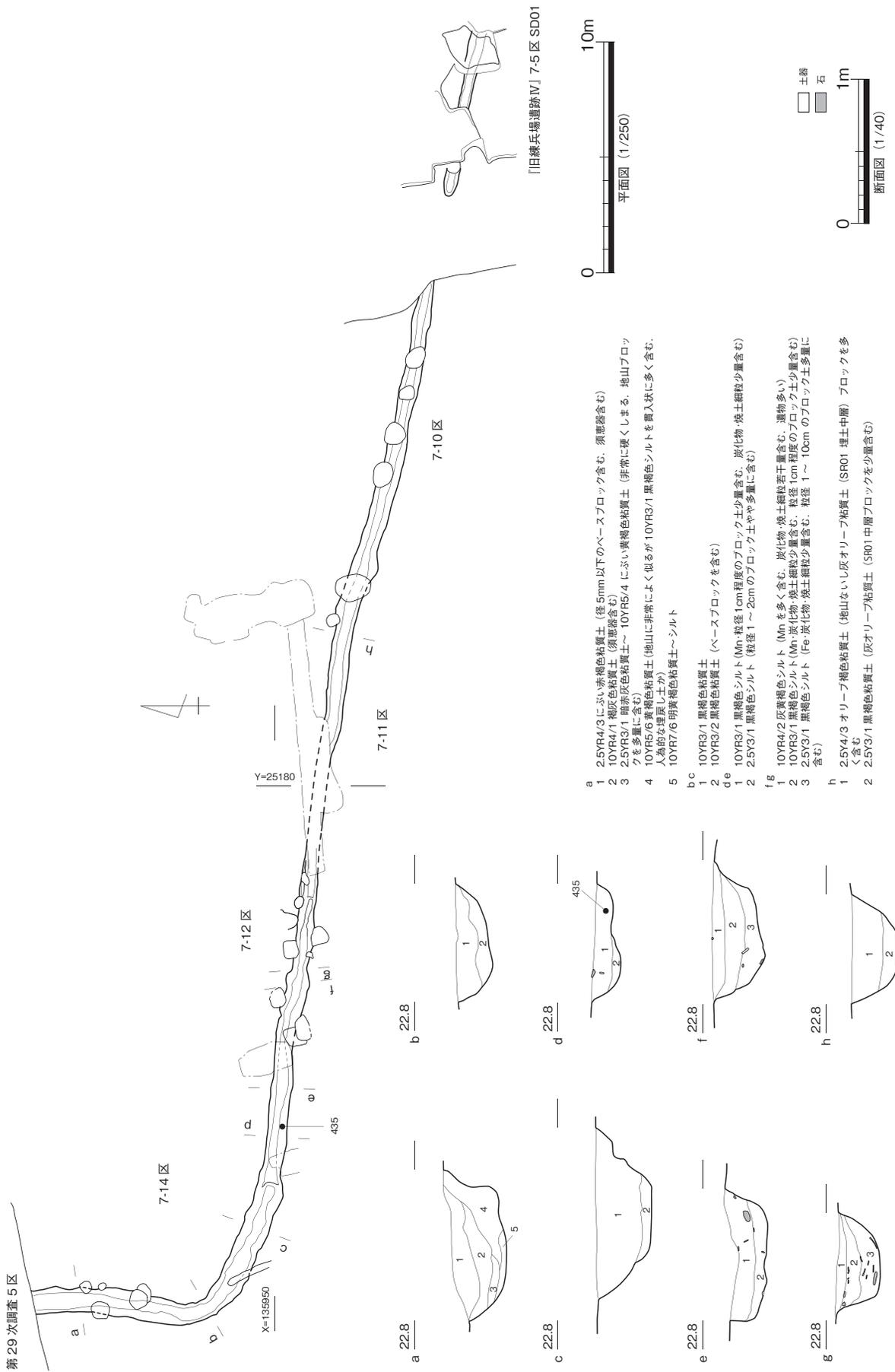
7-12区の東部から7-11区で検出された溝である。調査時の遺構名は7-12区ではSD17、7-11区ではSD04である。SD1217はやや蛇行しながら南西から北東(N45～60°E)に向かう。SD1217の北東端は攪乱によって削平されており、付近の溝との連続関係は不明であるが、攪乱坑を挟んで北側にあるSD1015に連続する可能性が高い。途中で7世紀から8世紀の溝SD1410、7世紀の溝SD1112と重複し、削平される。これらの溝はSD1217よりも新しい。SD1217の検出長は17m、幅0.4～1.1m、深さ0.15～0.2mである。遺物は土器・須恵器などが整理箱1箱程度出土した。405～407は7-11区部分、408～412は7-12区部分から出土した。405は土製品であるが、種類・用途は不明である。上部はU字状であるが、U字の先端は欠損する。U字の下部には数条のへら描き沈線、半裁竹管文が施される。下部も欠損するため、全体の形状は不明である。施文方法から弥生時代のものと考えられる。406は須恵器杯、407は須恵器高杯、408・409は土師器甕、410は須恵器杯、411は須恵器高杯脚部、412は須恵器壺である。これらの須恵器は陶邑編年TK217型式に属することから、SD1217は7世紀のものと考えられる。

#### SD1220 (図80)

7-12区で検出された溝である。調査時の遺構名はSD20である。南西から北東方向、SD1217の南西端に向かうことから、SD1217に連続すると考えられる。検出長は1.7m、幅0.6m、深さ0.1mである。遺物は土器・須恵器片が少量出土しただけである。SD1220はSD1217と同時期で、7世紀のものと考えられる。

#### SD1410 (図81・82)

第29次調査5区



【旧練兵場遺跡W】7-5区 SD01

- a
  - 1 2.5YR4/3 にぶい赤褐色粘質土 (径5mm以下のベースブロック含む、須恵器含む)
  - 2 10YR4/1 褐色粘質土 (須恵器含む)
  - 3 2.5YR3/1 明赤灰色粘質土～10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 (非常に硬くしまる、地山ブロックを多量に含む)
  - 4 10YR5/6 黄褐色粘質土 (地山に非常によく似るが10YR3/1 黒褐色シルトを貫入状に多く含む、人為的な埋戻し土か)
  - 5 10YR7/6 明黄褐色粘質土～シルト
- b,c
  - 1 10YR3/1 黒褐色粘質土
  - 2 10YR3/2 黒褐色粘質土 (ベースブロックを含む)
- d,e
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn-粒径1cm程度のブロック土少量含む、炭化物・焼土細粒少量含む)
  - 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト (粒径1～2cmのブロック土やや多量に含む)
- f,g
  - 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト (Mn) を多く含む、炭化物・焼土細粒若干量含む、遺物多い)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn-炭化物・焼土細粒少量含む、粒径1cm程度のブロック土少量含む)
  - 3 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Fe-炭化物・焼土細粒少量含む、粒径1～10cmのブロック土多量に含む)
- h
  - 1 2.5Y4/3 オリブ褐色粘質土 (地山ないし灰オリブ粘質土 (SR01 埋土中層) ブロックを多く含む)
  - 2 2.5Y3/4 黒褐色粘質土 (灰オリブ粘質土 (SR01 中層) ブロックを少量含む)

図 81 SD1410 (1)

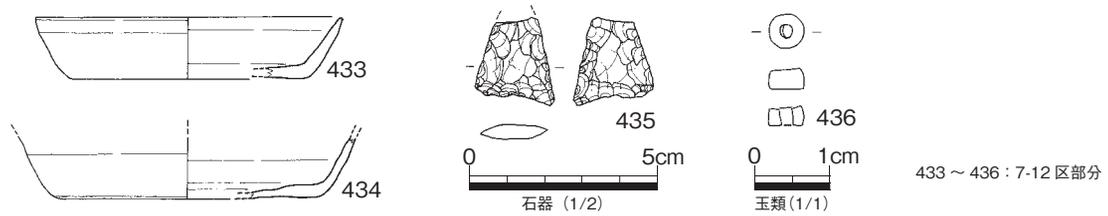
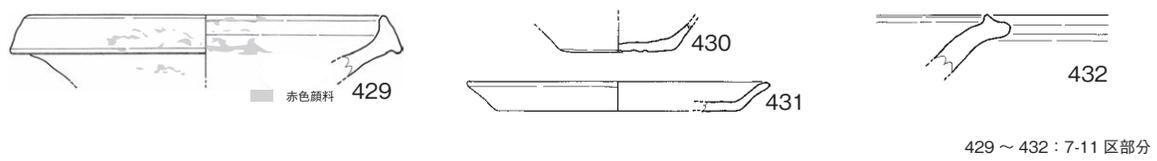
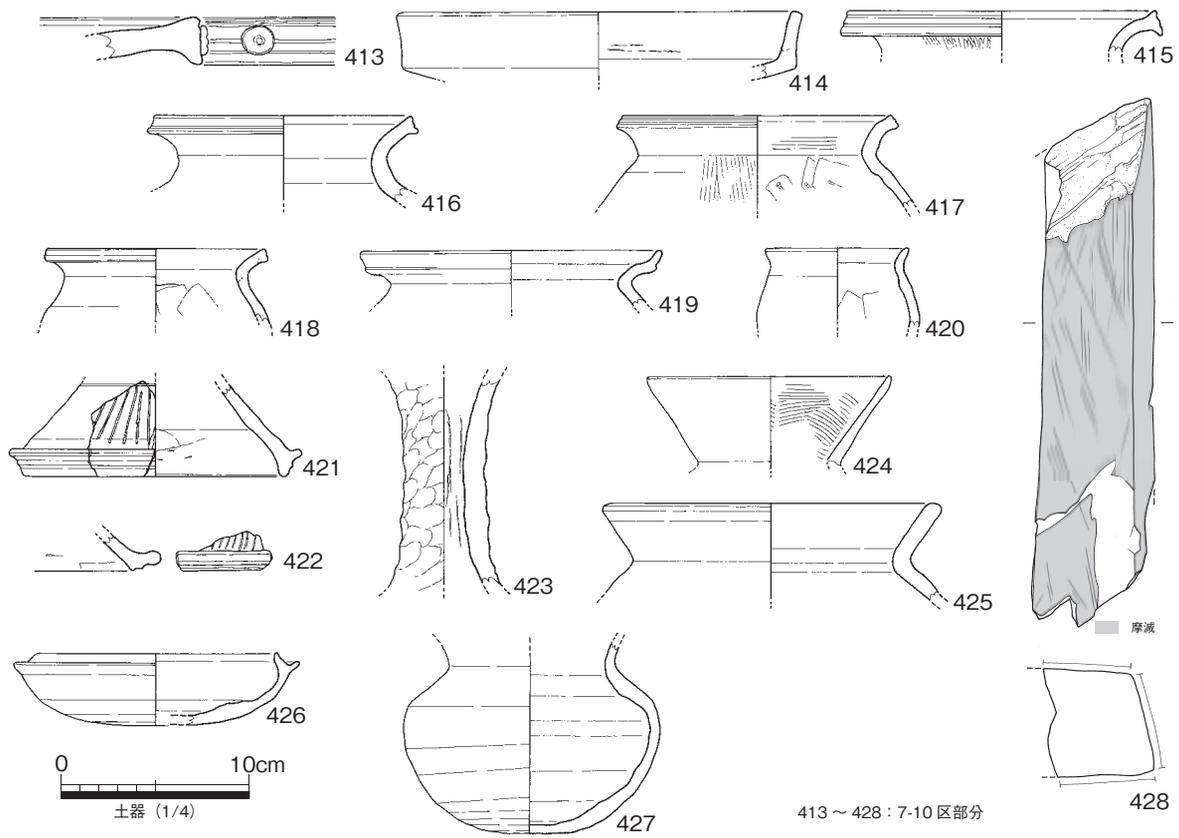


图 82 SD1410 (2)

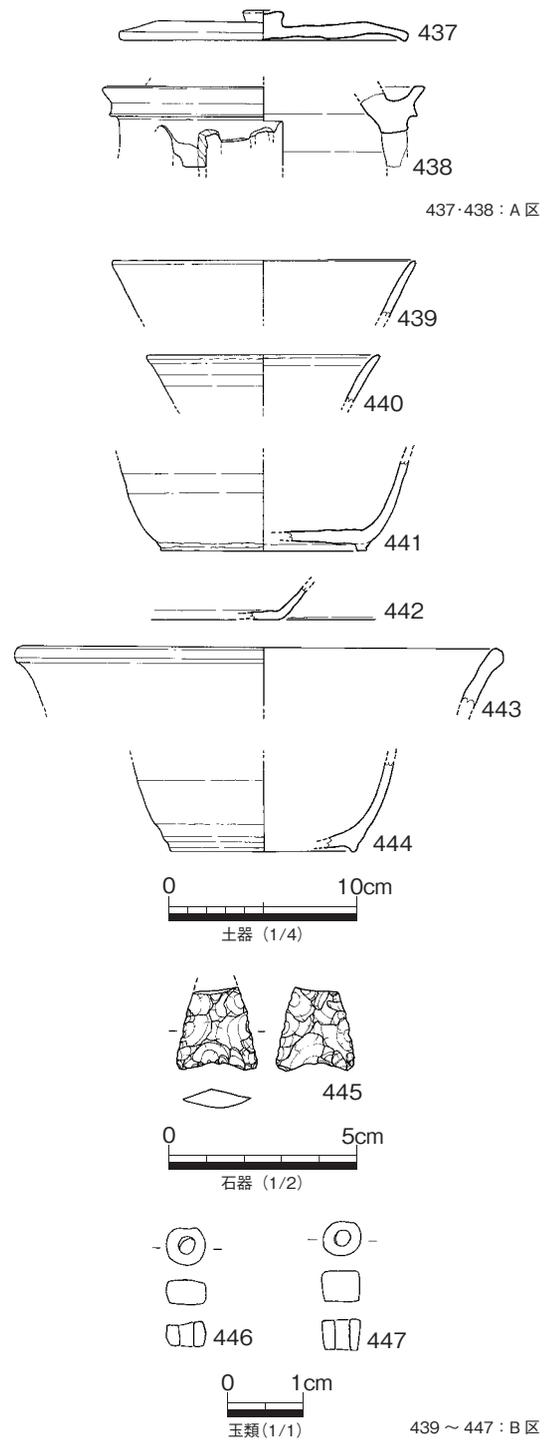
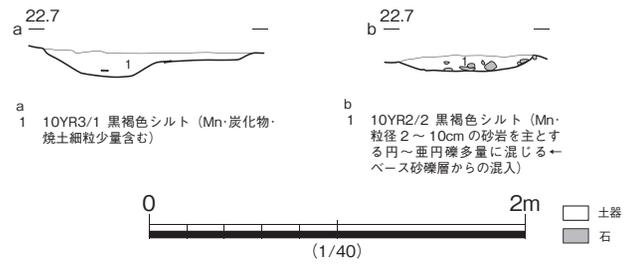
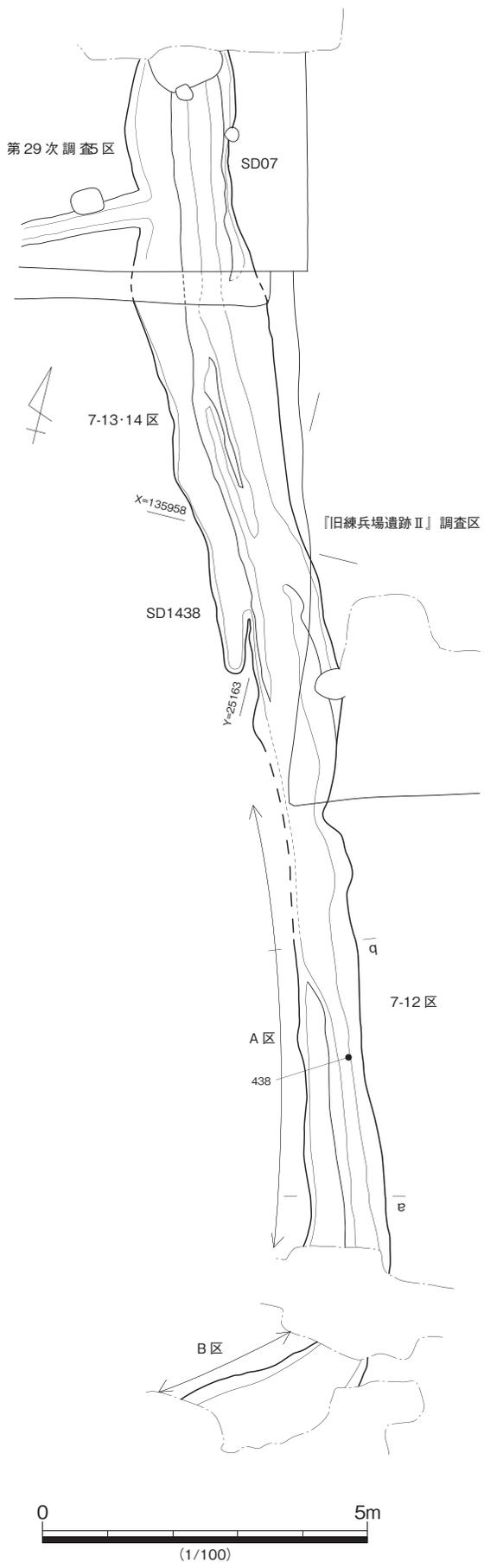


図 83 SD1438

7-10区・7-11区・7-12区で検出された溝である。南東から北西(W10° N)に向かい、7-14区で北に向かう。調査時の遺構名は7-10区ではSD07、7-11区ではSD05、7-12区ではSD10である。SD1410の東部は『旧練兵場遺跡Ⅳ』で報告された7-5区であるが、7-5区の西部には大きな攪乱坑がある。SD1410はこの攪乱坑の東にある7-5区SD01に連続すると考えられる。SD1410は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告された7-14区に入ると南から北方向(N-S)に走り、第29次調査5区に入る。なお、『旧練兵場遺跡Ⅴ』での報告遺構名もSD1410である。7-10区・7-11区・7-12区での検出長は33m、断面形はややいびつなU字形で、溝幅0.8～1.2m、深さ0.2～0.4mである。埋土は黒褐色粘質土を中心とし、砂の堆積はみられない。遺物は土器・須恵器などが多量に出土した。413～428は7-10区部分から出土した。413～422は弥生土器、423は土師器高杯、424は土師器壺、425は土師器甕、426は須恵器杯、427は須恵器甕である。429～432は7-11区部分から出土した。429は弥生土器壺で赤彩が施される。430は土師器杯、431は須恵器皿、432は須恵器甕の口縁部である。433～436は7-12区部分から出土した。433・434は須恵器杯、436は滑石製の白玉である。426は7世紀中葉、433・434は8世紀中葉、430・431は9世紀から10世紀に属する。SD1410は付近の条里地割とは異なる方向で、8世紀の掘立柱建物SB06・SB07とはほぼ同方向である。このようにSD1410からも8世紀の遺物は出土しているが、9世紀から10世紀の遺物も出土している。だが、この付近の9世紀から10世紀の掘立柱建物や溝はいずれも条里地割と同じ方向を向いていることから、SD1410から出土した9世紀から10世紀の遺物は混入した可能性が高い。これらのことから、SD1410は8世紀のものと考えられる。

#### SD1438 (図83)

7-12区・7-13区・7-14区から第29次調査5区にかけて検出された溝である。調査時の遺構名は7-12区ではSD22であるが、『旧練兵場遺跡Ⅴ』でSD1438の遺構名で報告したので、ここでも同名を使用する。SD1438は第28次調査の7-12～14区では14m検出されており、溝幅1.0～1.7m、深さ0.1～0.15mである。南東から北西(N20° W)に向かう。付近の条里地割と同方向である。なお、北端は第29次調査5区に連続するが、この部分は第2節で報告する。遺物は土器・須恵器が少量出土した。437・438は北部のA区、439～447は南部のB区から出土した。437は須恵器蓋、438は須恵器円面硯、439～442は須恵器杯、443は須恵器甕の口縁部、444は須恵器壺底部、446・447は滑石製の白玉である。437・438は8世紀、439～441は8世紀中葉、442は9世紀前半に属する。これらの遺物からSD1438は8世紀中葉から9世紀前半のものと考えられる。

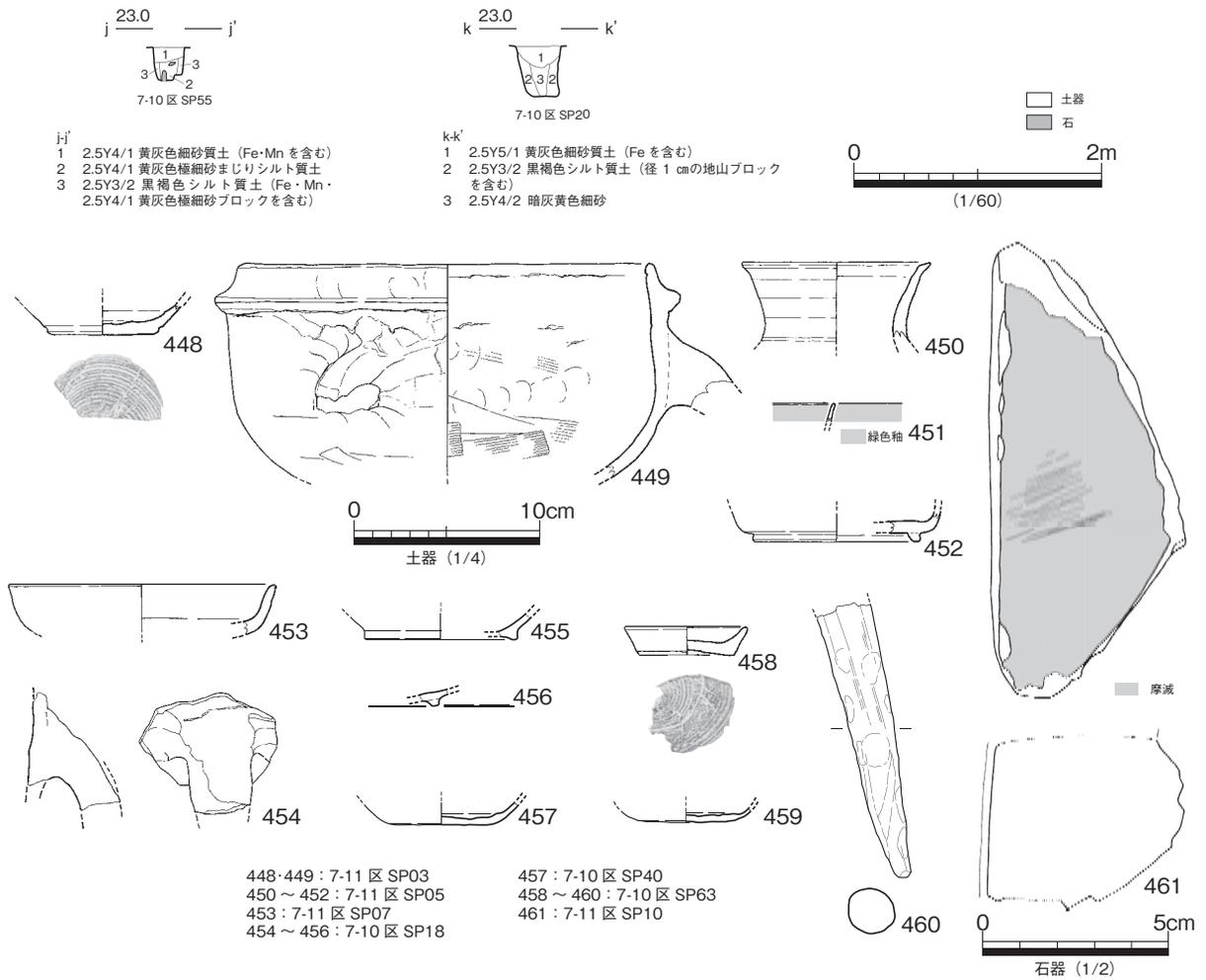
## 4. 中世

### 掘立柱建物

#### SB01 (図84・85)

7-10区から7-11区の東端の第1面(SR01上層上面)で検出された掘立柱建物である。桁行3間(6.6m)、梁間2間(3.3～3.6m)で、四周には庇が付く。桁行の方向はE32° Nである。庇を含めると、長軸7.5～7.6m、短軸4.8～4.9mである。建物の柱穴はいずれも円形で、径0.4～0.5m、深さ0.3～0.5mである。庇の柱穴も円形で、径0.3m前後である。7-10区SP20だけは深さ0.5mと深い、その他の柱穴は深さ0.2～0.3mで、建物本体の柱穴よりはやや小ぶりで、浅い。柱穴の埋土は灰白色～灰色シルトである。各柱穴からは土器片などが少量出土した。448は土師質土器杯、449は土師質土器羽釜、7-11区SP05から出土した450は須恵器壺口縁部、451は陶器の口縁部、452は須恵器杯の底部、7-11区SP07から出





448-449 : 7-11 区 SP03  
450 ~ 452 : 7-11 区 SP05  
453 : 7-11 区 SP07  
454 ~ 456 : 7-10 区 SP18

457 : 7-10 区 SP40  
458 ~ 460 : 7-10 区 SP63  
461 : 7-11 区 SP10

SB01 出土遺物

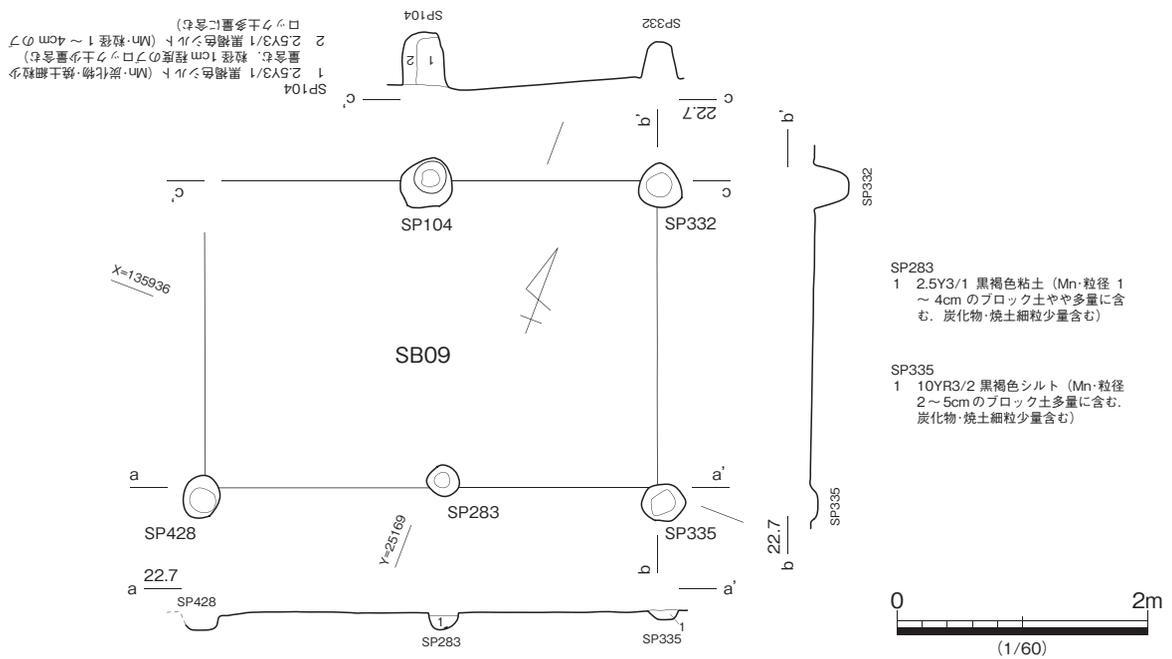


図 85 SB01・SB09

土した 453 は土師質土器杯、7-10 区 SP18 から出土した 454 と 7-10 区 SP63 から出土した 460 は土師質土器羽釜の脚部、7-10 区 SP18 から出土した 455 は須恵器の底部、456 は土師質土器碗の底部、457 は土師質土器小皿である。7-10 区 SP63 から出土した 458・459 は土師質土器小皿である。7-11 区 SP10 から出土した 461 は安山岩製の砥石である。451 は緑色釉のかかった陶器片であるが、近世陶磁器の可能性が高い。449 は 14 世紀、448 は 13 世紀に属する。小片の 451 は混入であろう。古代の遺物も含むが、13 世紀から 14 世紀の遺物がみられることから、SB01 は 14 世紀のものと考えられる。

#### SB09 (図 85)

7-12 区の南西端から 7-13 区の南東端にかけて検出された掘立柱建物である。古墳時代後期の溝 SD34 と重複するが、SD34 よりも新しい。北西隅に当たる柱穴は未検出である。桁行 2 間(3.7 m)、梁間 1 間(2.5 m)、桁行の方向は E30° N である。柱穴の平面形は円形で、径 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.4 m である。柱穴の埋土は黒褐色シルトを中心とするもので、炭化物・焼土を少量含む。各柱穴からは少量の土器・須恵器片が出土した。いずれも小片である。柱穴の規模が小さいことや、建物の方向が条里地割とほぼ同じであることから、SB09 は中世のものと考えられる。

#### SB10 (図 86)

7-10 区で検出された掘立柱建物である。14 世紀の掘立柱建物 SB01、13 世紀の掘立柱建物 SB11、8 世紀の掘立柱建物 SB03 と重複する。梁間は 1 間 (2.4 m)、桁行は 4.5 m で西側の桁行は 2 間、東側の桁行は 1 間である。建物の方向は N31° W である。柱穴の平面形は円形で、径 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.4 m である。柱穴の埋土は黄灰色シルトを中心とするもので、各柱穴からは少量の土器・須恵器片が出土した。SP44 から 462・463、SP45 から 464・465、SP54 から 466・467 が出土した。462～467 はいずれも須恵器杯である。467 は 12 世紀から 13 世紀に属することから、SB10 は 12 世紀から 13 世紀のものと考えられる。

#### SB11 (図 87)

7-10 区ほぼ中央で検出された掘立柱建物である。中世の掘立柱建物 SB10・SB01 と重複する。SB11 は桁行 3 間 (6.5 m)、梁間 1 間 (2.7 m) で、桁行の方向は N65° E である。北西隅に当たる SP147 は中世の柱穴 SP48 と重複し、削平される。SP166・SP23 の平面形は長楕円形、その他の柱穴は円形である。SP166・SP23 は 2 個の柱穴が重複していた可能性が高い。その他の円形の柱穴は径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m である。各柱穴からは整理箱 1 箱の遺物が出土した。大部分は土器小片である。SP25 から出土した 468 と SP155 から出土した 470 は土師質土器杯、SP147 から出土した 469 は須恵器杯である。468 は 12 世紀から 13 世紀、469 は 9 世紀から 10 世紀、470 は 13 世紀前半に属する。これらの遺物から SB11 は 13 世紀のものと考えられる。

#### SB12 (図 88)

『旧練兵場遺跡 V』で報告された 7-7 区北端から 7-11 区南部の第 1 面 (SR01 上層上面) にかけて検出された掘立柱建物である。桁行 2 間 (3.9 m)、梁間 1 間 (2.4 m) で、桁行の方向は N35° W である。柱穴の平面形はいずれも円形で、径 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.05 ～ 0.3 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。7-11 区 SP14 から出土した 471 は土師質土器杯、472 は土師質土器羽釜の脚部、473・474 は須恵器杯、475 は須恵器蓋、477 は弥生土器壺の口縁部、7-11 区 SP19 から出土した 476 は須恵器杯、7-11 区 SP24 から出土した 478 は土師質土器土鍋の体部、7-7 区 SP130 から出土した 479 は土師器高杯の脚部である。479 の内外面には赤彩が施される。7-11 区 SK01 から出土した土師器焼成失

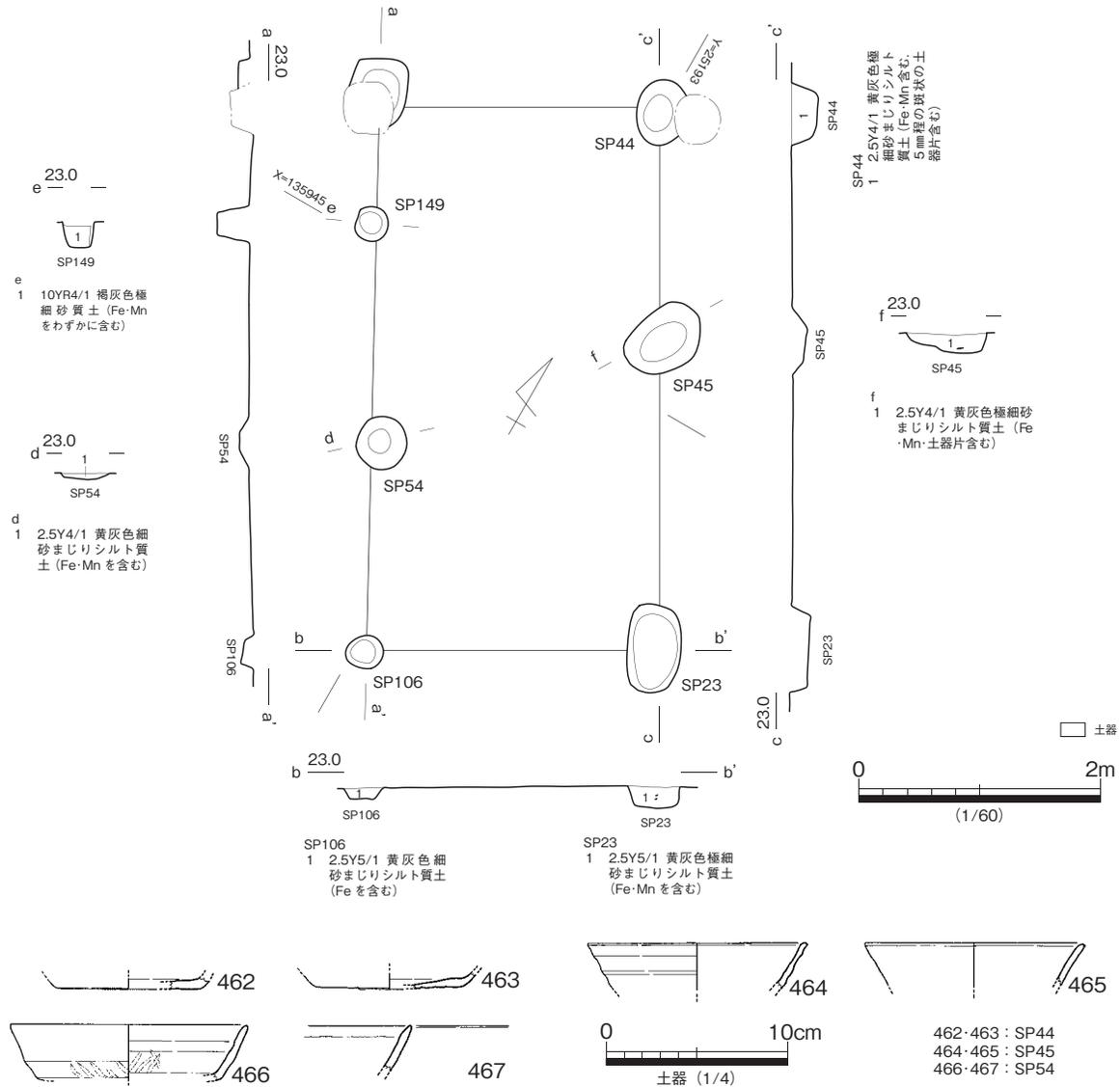


図 86 SB10

敗品の高杯と類似する。13世紀以降の土師質土器羽釜片が出土していることや、埋土の色調・土質からSB12は中世のものと考えられる。

SB17 (図 89)

7-11区の北部第1面 (SR01 上層上面) で検出された掘立柱建物である。南側の桁行の柱穴の一部は攪乱によって削平されており、未検出である。SB17は桁行3間 (10.5 m)、梁間1間 (2.7 m) で、桁行の方向はN60° Eである。柱穴の平面形は円形で、径0.3～0.6 m、深さ0.05～0.3 mである。各柱穴からは土器・黒色土器・須恵器小片が少量出土した。SP57から出土した480は黒色土器碗、SP65から出土した481は土師質土器杯、SP69から出土した482は土師質土器土鍋の口縁部である。480は外面には回転ヘラミガキ、内面には分割ヘラミガキを施し、11世紀から12世紀前半のものである。481は13世紀から14世紀、482は14世紀から15世紀に属する。これらの遺物からSB17は14世紀から15世紀のものと考えられる。

SB20 (図 90)

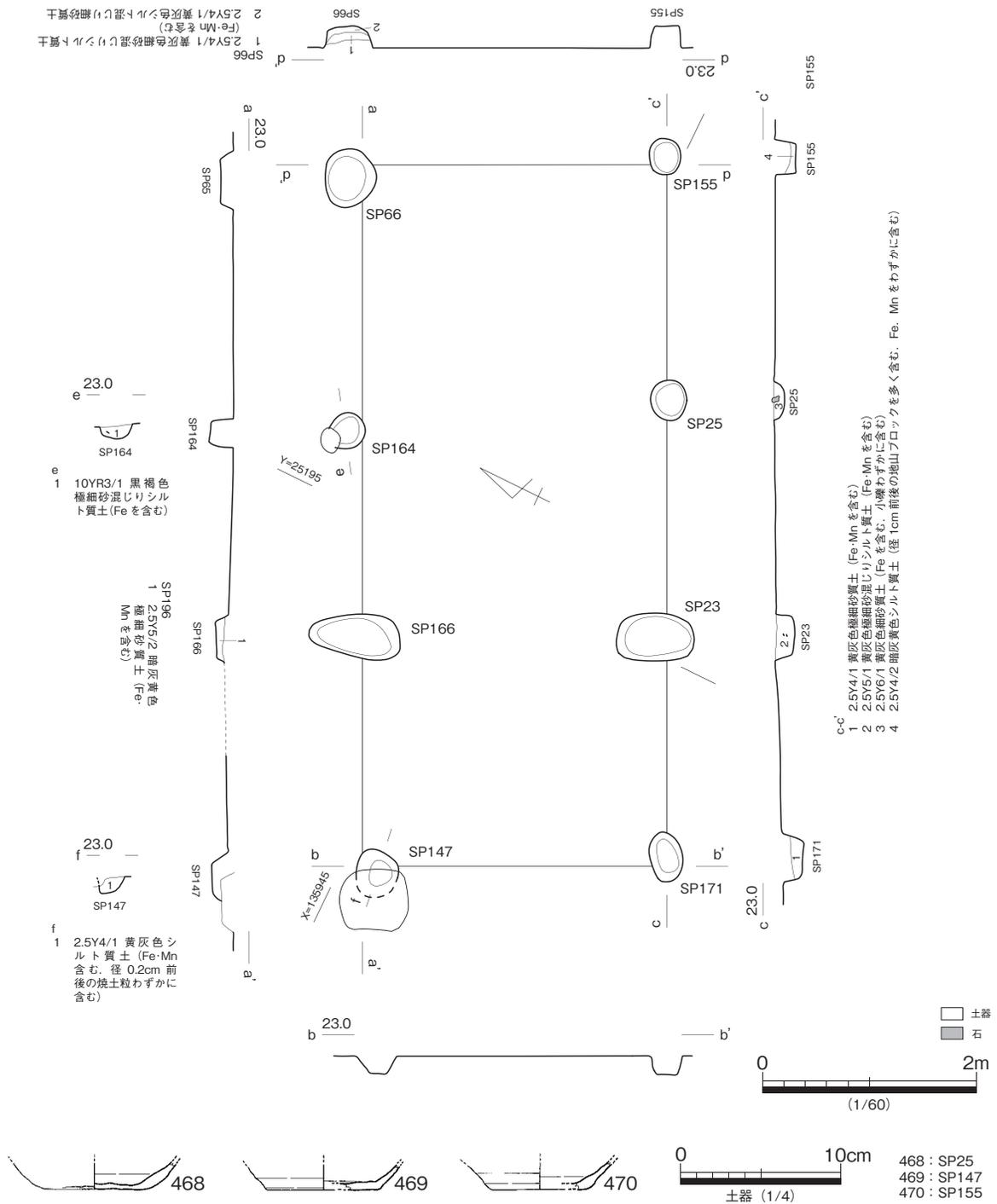


図 87 SB11

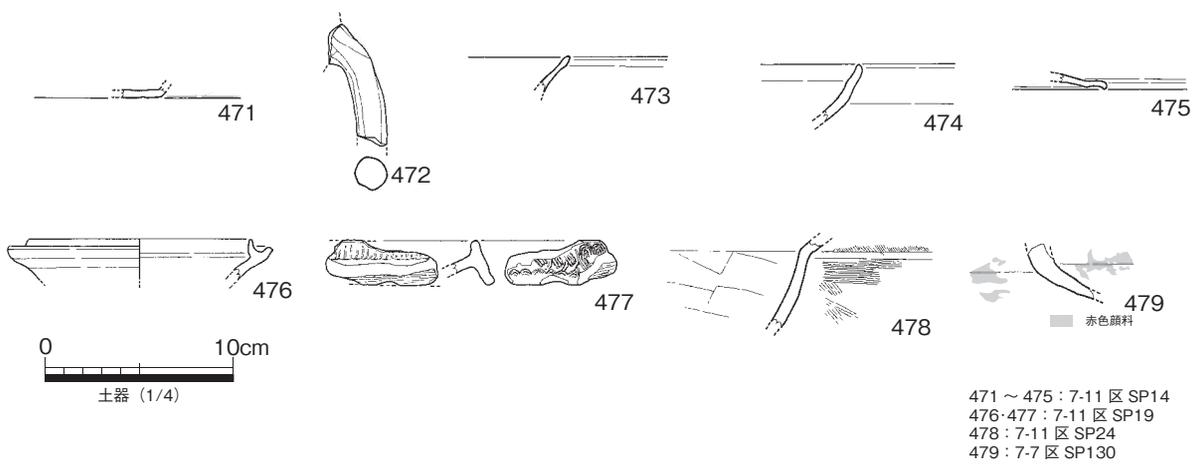
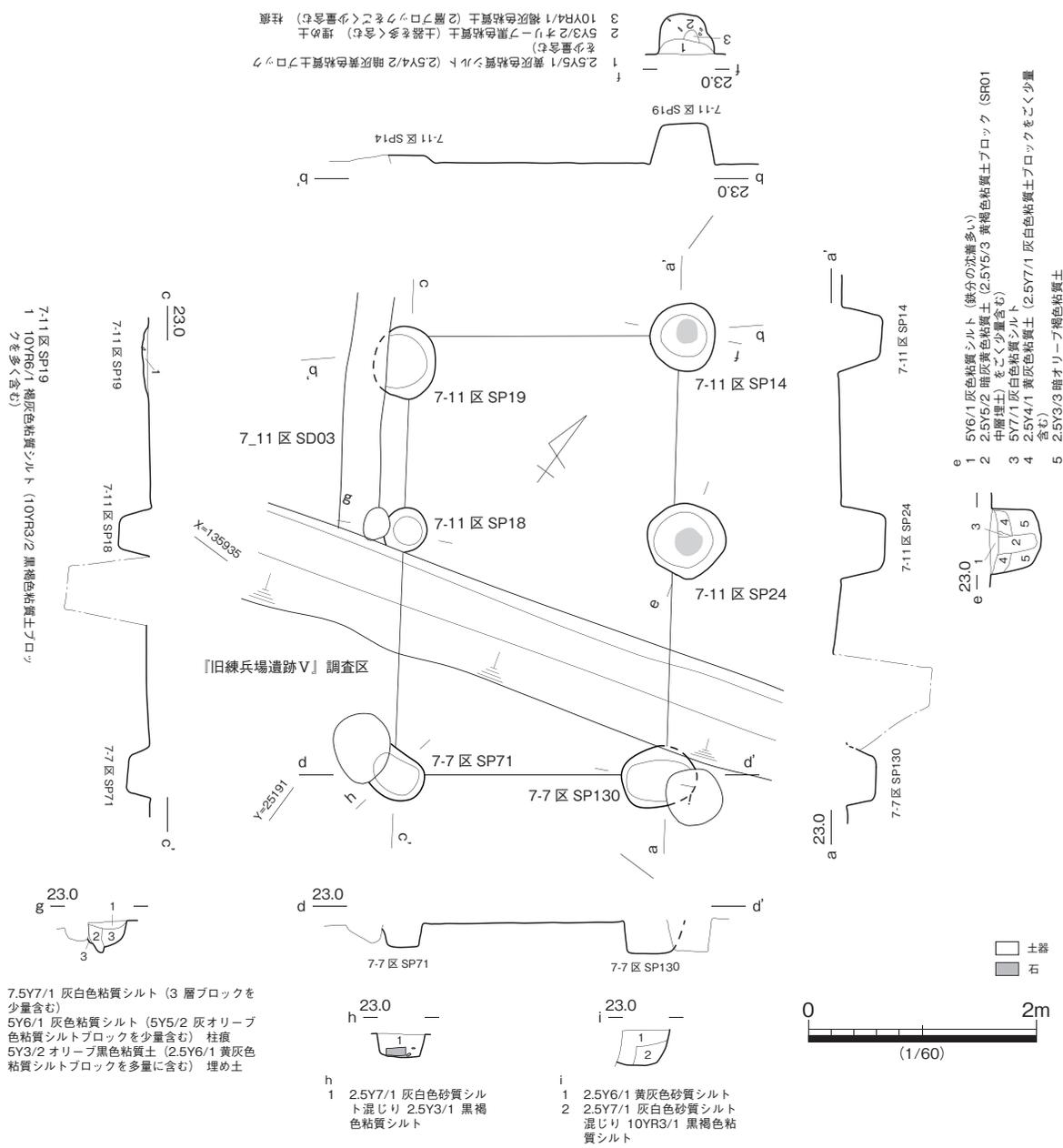


図 88 SB12

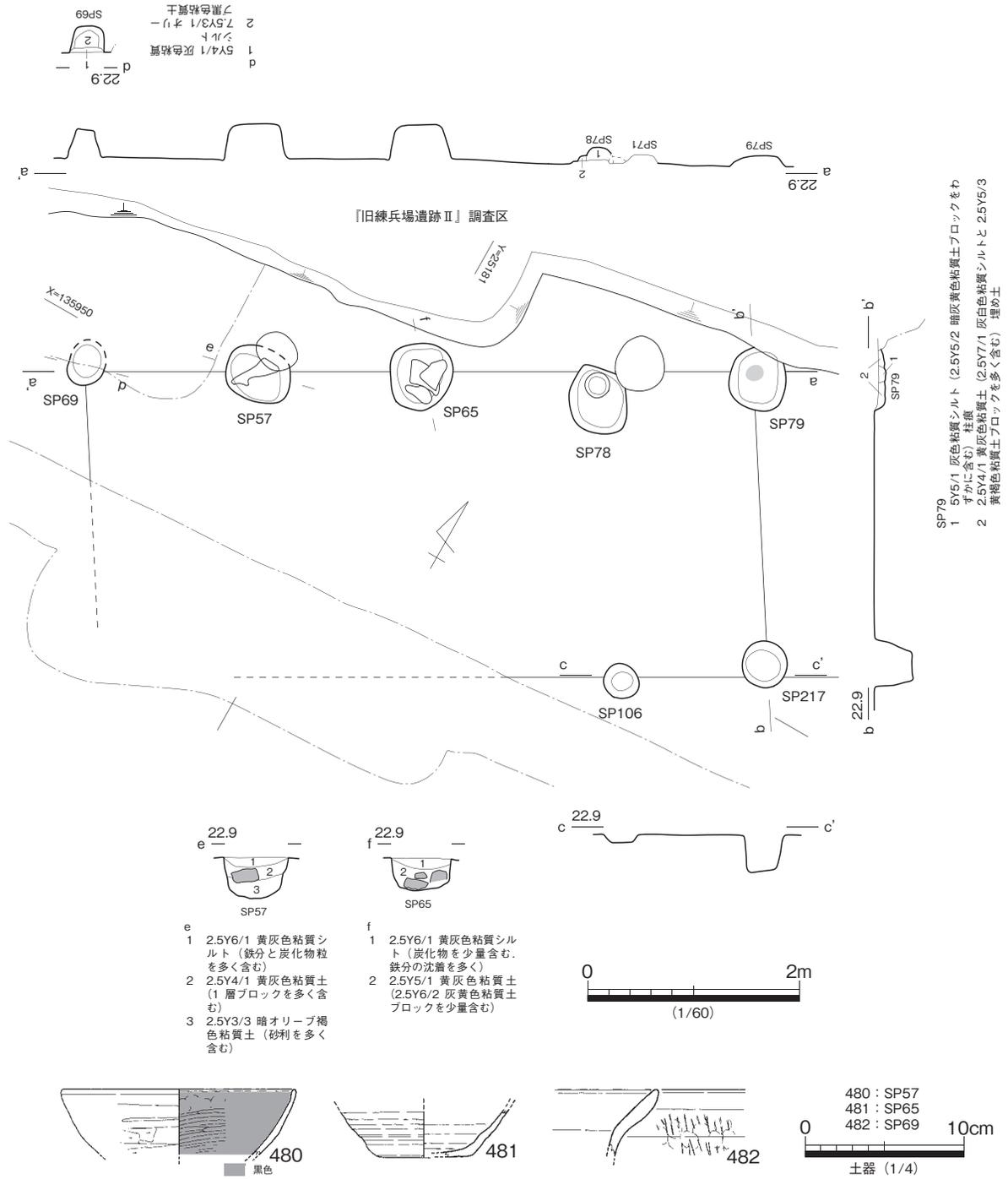


図 89 SB17

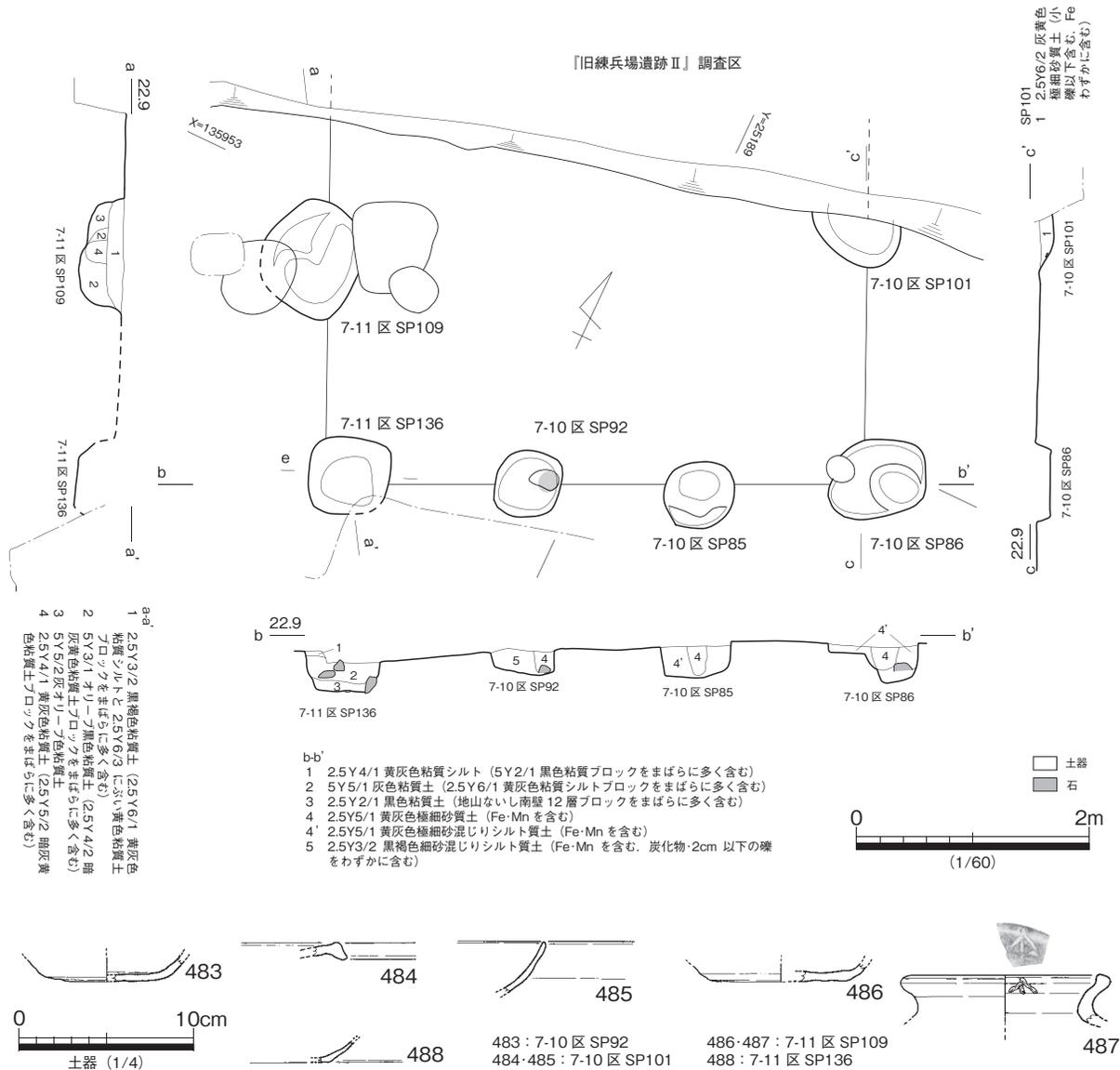


図 90 SB20

7-10 区の北部から 7-11 区の北部第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された掘立柱建物である。北端は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区であるが、この付近は大きく攪乱されており、北側の桁行は不明である。桁行 3 間 (4.8 m)、梁間 2 間 (3.0 m 以上) で、桁行の方向は N65° E である。柱穴の平面形はほぼ円形で、径 0.6 ~ 1.0 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m である。各柱穴からは土器・須恵器片が少量出土した。7-10 区 SP92 から出土した 483 と 7-11 区 SP136 から出土した 488 は土師質土器杯、7-10 区 SP101 から出土した 484 は弥生土器壺の口縁部、485 は須恵器碗、7-11 区 SP109 から出土した 486 は須恵器杯、487 は須恵器壺である。485 は外面にはヘラミガキがなく、灰白色で、焼成不良である。十瓶山付近で生産された須恵器で、13 世紀のものである。483 は 9 世紀から 10 世紀、486 は 9 世紀、488 は 12 世紀から 13 世紀に属する。柱穴の大きさが古代の掘立柱建物と類似しており、9 世紀から 10 世紀の遺物を含むが、13 世紀の須恵器や土師質土器片がみられることから、SB20 は中世のものと考えられる。

土坑

#### 7-10 区 SK01 (図 91)

7-10 区ほぼ中央第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された土坑である。平面形はいびつな円形で、長軸 1.8 m、短軸 1.6 m である。底面は平坦ではなく、凸凹しており、断面形はややいびつな浅い皿状で、最深部の深さは 0.2 m である。埋土は黄灰色細砂質土の単一層である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。499・500 は土師質土器椀、501・502 は土師質土器羽釜、503 は土師質土器土鍋である。これらの遺物から SK01 は 14 世紀のものと考えられる。

#### 7-12 区 SK07 (図 92)

7-12 区北東部第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された土坑または柱穴である。遺構の北西部は近世の土坑 SK06、遺構の北部は中世の土坑 SX02 と重複し、削平される。いずれも SK07 よりも新しい。平面形はややいびつな楕円形で、長軸は 0.8 m 以上、短軸は 0.7 m 以上である。埋土は灰白色シルトの単一層である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。いずれも小破片で、詳細な時期は不明である。埋土の色調・土質から SK07 は中世のものと考えられる。

#### 7-12 区 SK08 (図 92)

7-12 区北部第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された土坑である。遺構の北部は 10 世紀の掘立柱建物 SB23 の柱穴 SP347、奈良時代の溝 SD1410 と重複する。いずれも SK08 よりも古い。また、中世の柱穴 SP48 と重複し、削平される。SP48 のほうが新しい。また、遺構の中央には径 0.3 m の攪乱坑があり、削平される。SK08 の平面形はややいびつな方形で、長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.1 m である。遺物は土器・須恵器片が少量出土した。いずれも小破片で、詳細な時期は不明である。埋土の色調・土質から SK08 は中世のものと考えられる。

#### 7-12 区 SX01 (図 93)

7-12 区ほぼ中央部第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された土坑である。平面形はいびつな長方形で、長軸 0.65 m、短軸 0.5 m である。断面形は浅い皿状で、深さ 0.1 m である。遺物は土器片が少量出土した。504 は弥生土器壺である。弥生土器が出土しているが、第 1 面で検出されたことや埋土の色調・土質から SX01 は中世のものと考えられる。

#### 7-12 区 SX02 (図 94)

7-12 区北東部第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された土坑である。遺構の北部は攪乱によって削平される。また、中世の土坑 SK07 と重複する。SK06・SK07 よりも SX02 のほうが新しい。SX02 の平面形はややいびつな長楕円形で、長軸 2.1 m、短軸 1.6 m である。断面形は三角形で、最深部の深さは 0.6 m である。埋土には多量の円礫が含まれており、土器・須恵器・平瓦小片などが少量出土した。505 は砂岩製の砥石である。第 1 面で検出されたことや、埋土の土質・色調から SX02 は中世のものと考えられる。

#### 溝

#### SD0702・SD1103 (図 95)

7-7 区・7-11 区の西部第 1 面 (SR01 上層上面) で検出された溝である。SD0702 は 7-11 区での調査時の遺構名は SD02 であるが、『旧練兵場遺跡 V』で 7-7 区部分を SD0702 と報告したため、ここでも同名を使用する。東側の溝 SD1003 の調査時の遺構名は SD03 である。SD03 も 7-7 区部分に連続するが、7-7 区部分では浅い落ち込みとなる。これらの 2 条の溝は平行して南東から北西 (N 30° W) に向かう。SD0702・SD1103 とともに幅 0.3～0.7 m、深さ 0.1 m で、灰白色から灰色の粘質シルトが堆積する。両

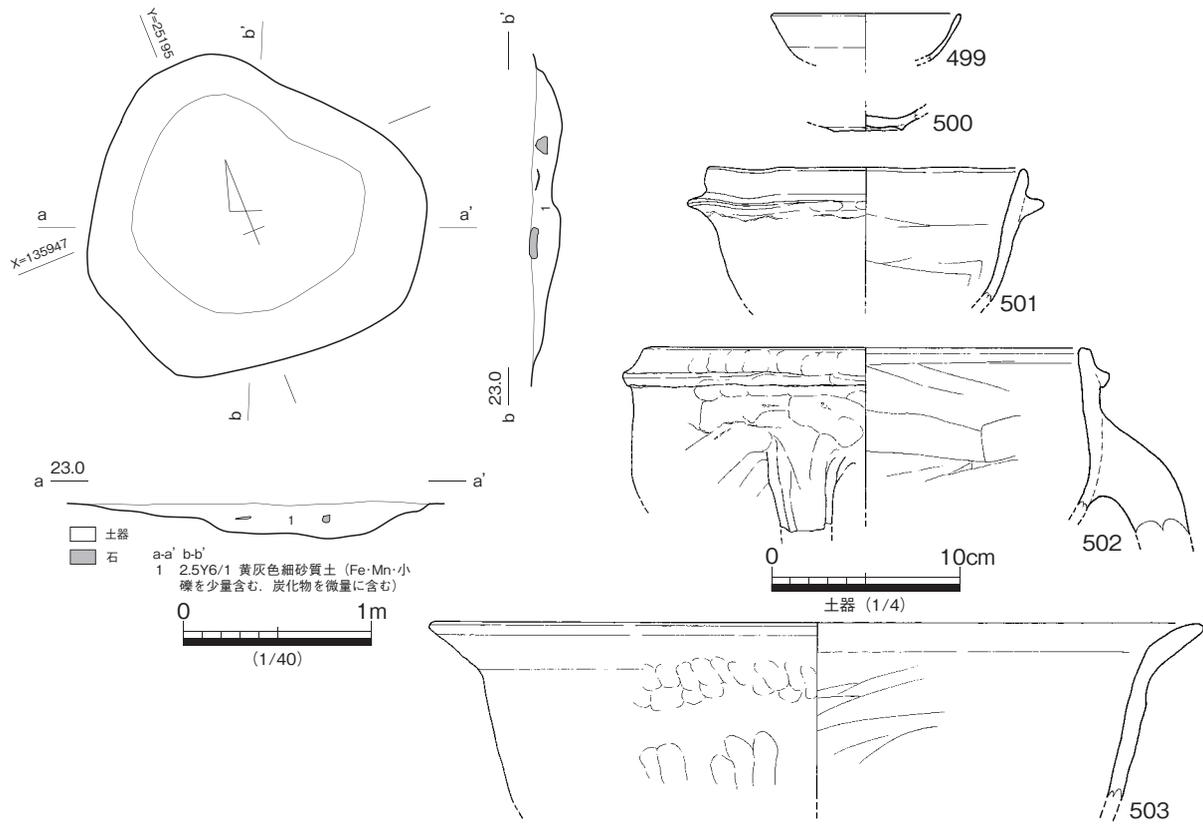


図91 7-10区SK01

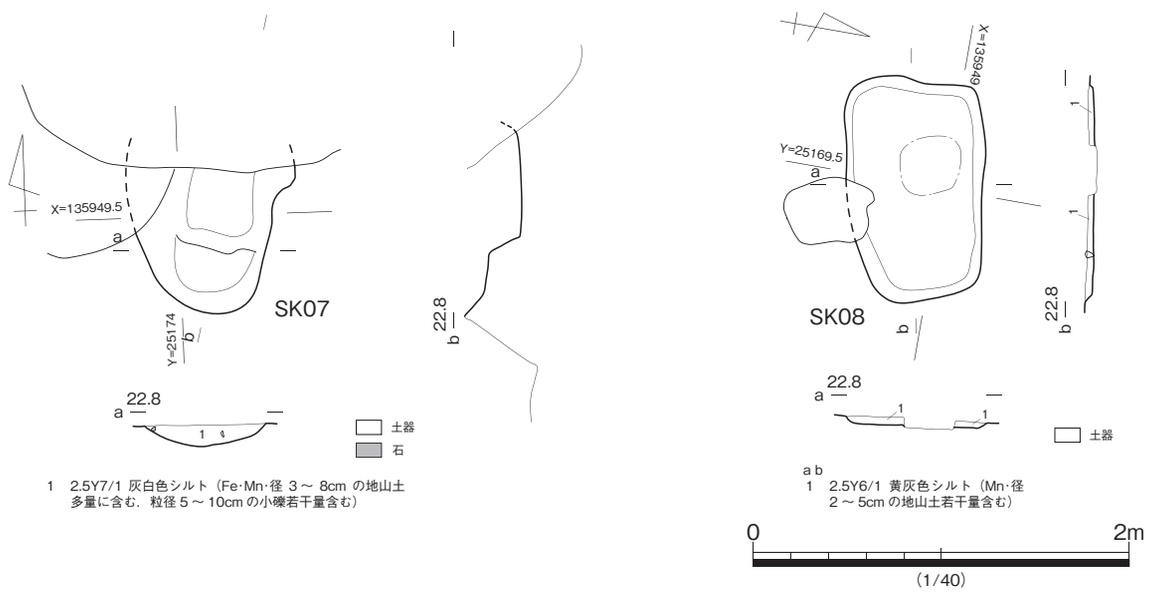


図92 7-12区SK07・7-12区SK08

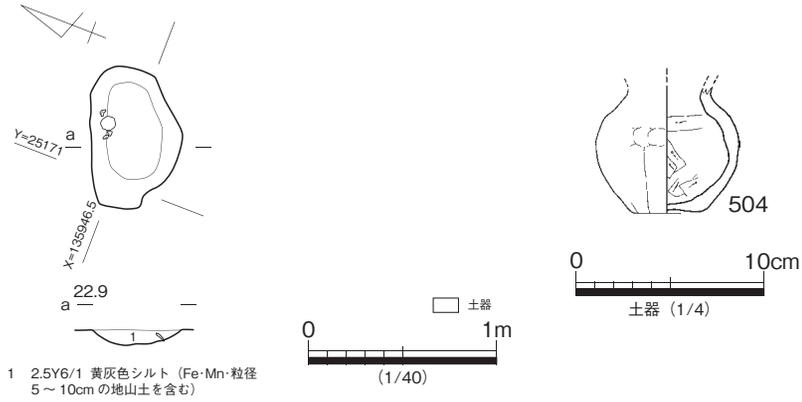


図 93 7-12 区 SX01

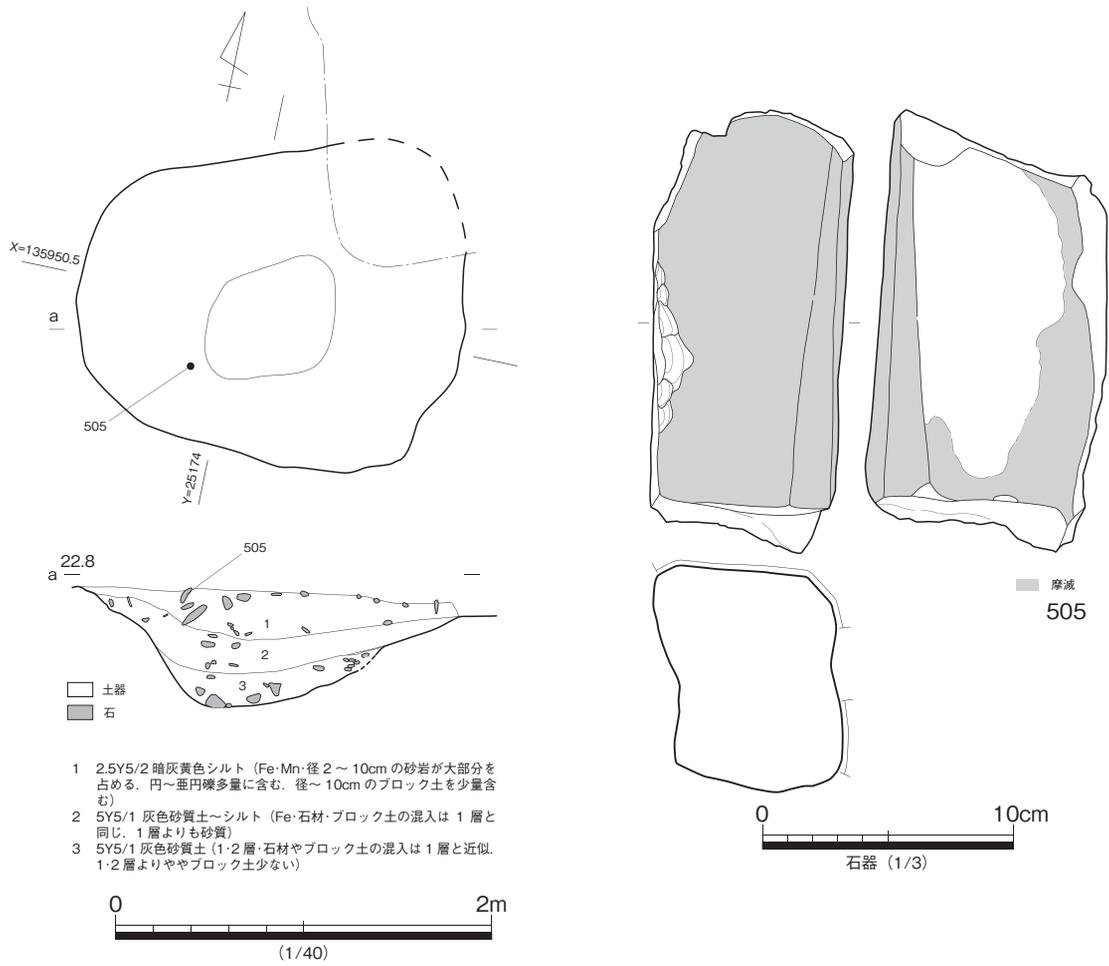


図 94 7-12 区 SX02

溝間の幅は1.0m前後で、両溝間には黄灰色粘質シルトブロックを少量含む黒褐色粘質シルトが薄く堆積する。遺物は少量で、土器・須恵器片が少量出土した。506は土師質土器杯、507は土師質土器甕、508・509は土師質土器羽釜、510は弥生土器ミニチュア甕である。509は13世紀以降に属することから、SD0702・SD1103は13世紀以降のものと考えられる。

#### SD1001 (図96)

7-10区東部第1面(SR01上層上面)で検出された溝である。南東から北西方向(N30°W)に向かう。北部は柱穴SP41と重複し、削平される。また、中央部では13世紀の掘立柱建物SB11の柱穴SP66、中世の溝SD1002と重複するが、これらの遺構よりもSD1001のほうが新しい。中央部で溝は途切れるが、検出長6.3m、幅1.8m、深さ0.5mである。遺物は土器・須恵器細片が少量出土した。第1面で検出されたことや、埋土の色調・土質からSD1001は中世のものと考えられる。

#### SD1002 (図96)

7-10区東部第1面(SR01上層上面)で検出された溝である。東側にある溝SD1001とはほぼ平行し、南東から北西方向(N30°W)に向かう。北部は『旧練兵場遺跡Ⅱ』で報告された調査区に連続するが、この部分は攪乱によって大きく削平されており、溝SD1002の北端は検出されていない。南部は幅広になり、東部に屈曲する。検出長5.0m、幅0.1～0.6m、深さ0.05mである。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは0.1mである。遺物は土器・須恵器・緑釉陶器細片などが少量出土した。第1面で検出されたことや、埋土の色調・土質からSD1002は中世のものと考えられる。

## 5. 近世

### 土坑

#### 7-12区SK04 (図97)

7-12区の東部第1面(SR01上層上面)で検出された土坑である。平面形はややいびつな台形で、長軸0.9m、短軸0.7mである。断面形は逆台形、底面は平坦で深さ0.3mである。遺物は土器・須恵器片などが整理箱半分程度出土した。遺物の中に近世陶磁器片を含むことから、SK04は近世のものと考えられる。

#### 7-12区SK06 (図97)

7-12区北東部で検出された土坑である。平面形は円形または楕円形で、径0.6m前後である。断面形は浅い皿状で、最深部の深さは0.25mである。遺物は土器・陶磁器細片が少量出土した。出土遺物から近世のものと考えられる。

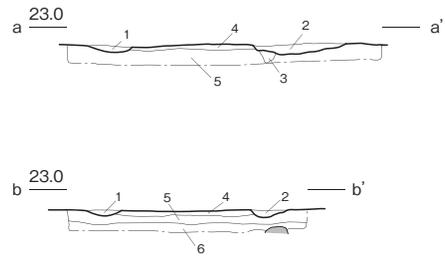
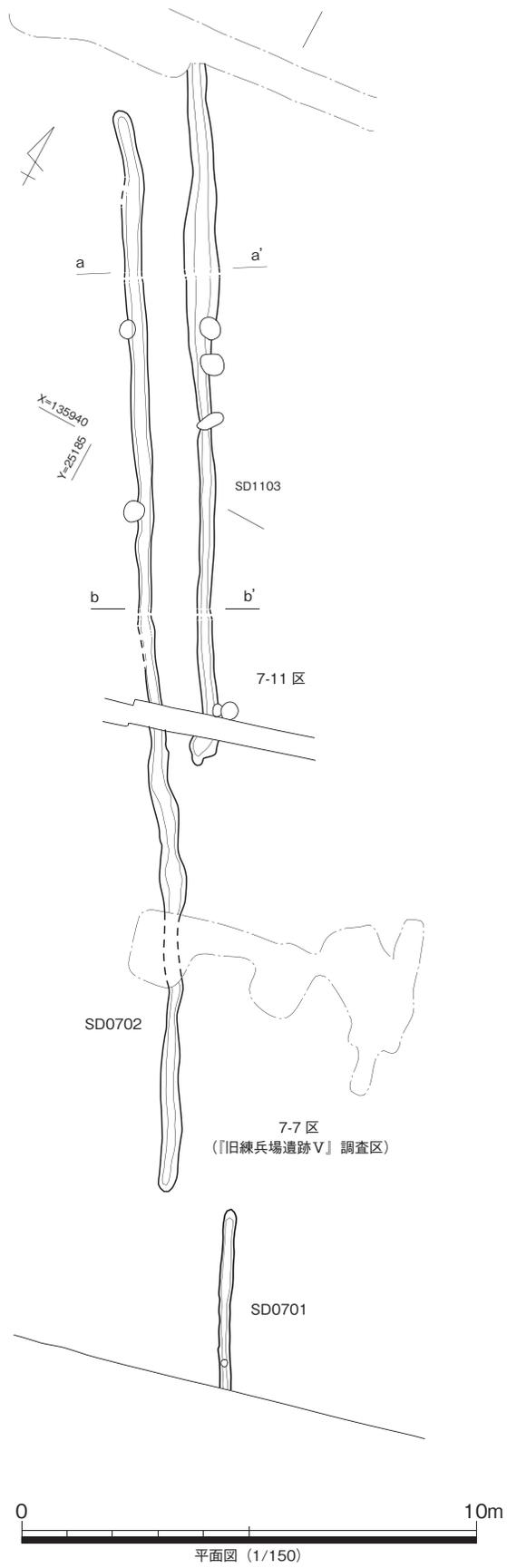
### 溝

#### SD1205 (図97)

7-12区北部で検出された溝である。調査時の遺構名はSD05である。南西から北東(E20°N)に向かう。溝の両端は攪乱によって削平される。検出長4.4m、幅0.4～0.9m、断面形は浅い皿状で、深さ0.05～0.1mである。遺物は土器・陶磁器片が少量出土した。出土遺物から近世のものと考えられる。

## 6. 柱穴・小穴出土遺物 (図98～100)

柱穴・小穴からは少量ずつではあるが、遺物が出土した。ここではこれらの遺物を遺構ごとに掲載した。図98は7-10区の柱穴・小穴から出土した遺物である。511・512・516・518・526・533・539は須恵器杯、517・519・532・537・546・550は須恵器蓋、527は須恵器皿、545・547は須恵器碗、535は須恵器



- a-a' b-b'
- 1 5Y7/6 灰白色粘質シルト (鉄分・Mgの沈着を少量含む)
  - 2 5Y6/1 灰色粘質シルト (鉄分・Mgの沈着を少量含む)
  - 3 7.5Y6/1 灰色粘質シルト (部分的なくぼみに堆積した埋土)
  - 4 10YR3/1 黒褐色粘質土 (2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトブロックを少量含む、よくしまる)
  - 5 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 (土器を少量含む)
  - 6 10YR3/1 黒褐色粘質土 (土器の細片を多く含む)

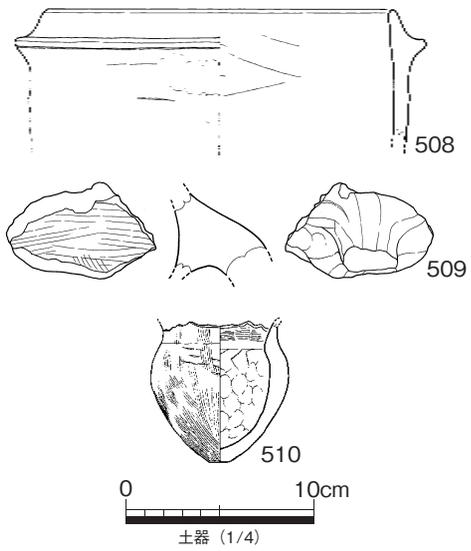
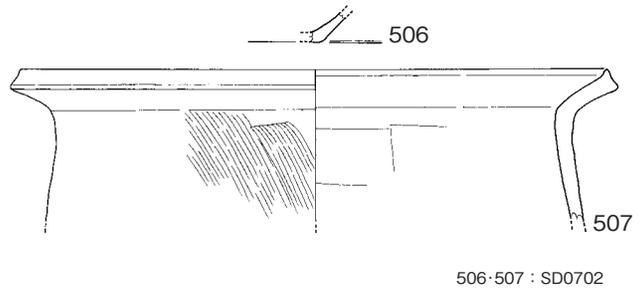
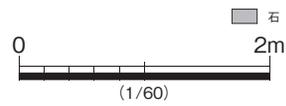


図 95 SD0702・SD1103

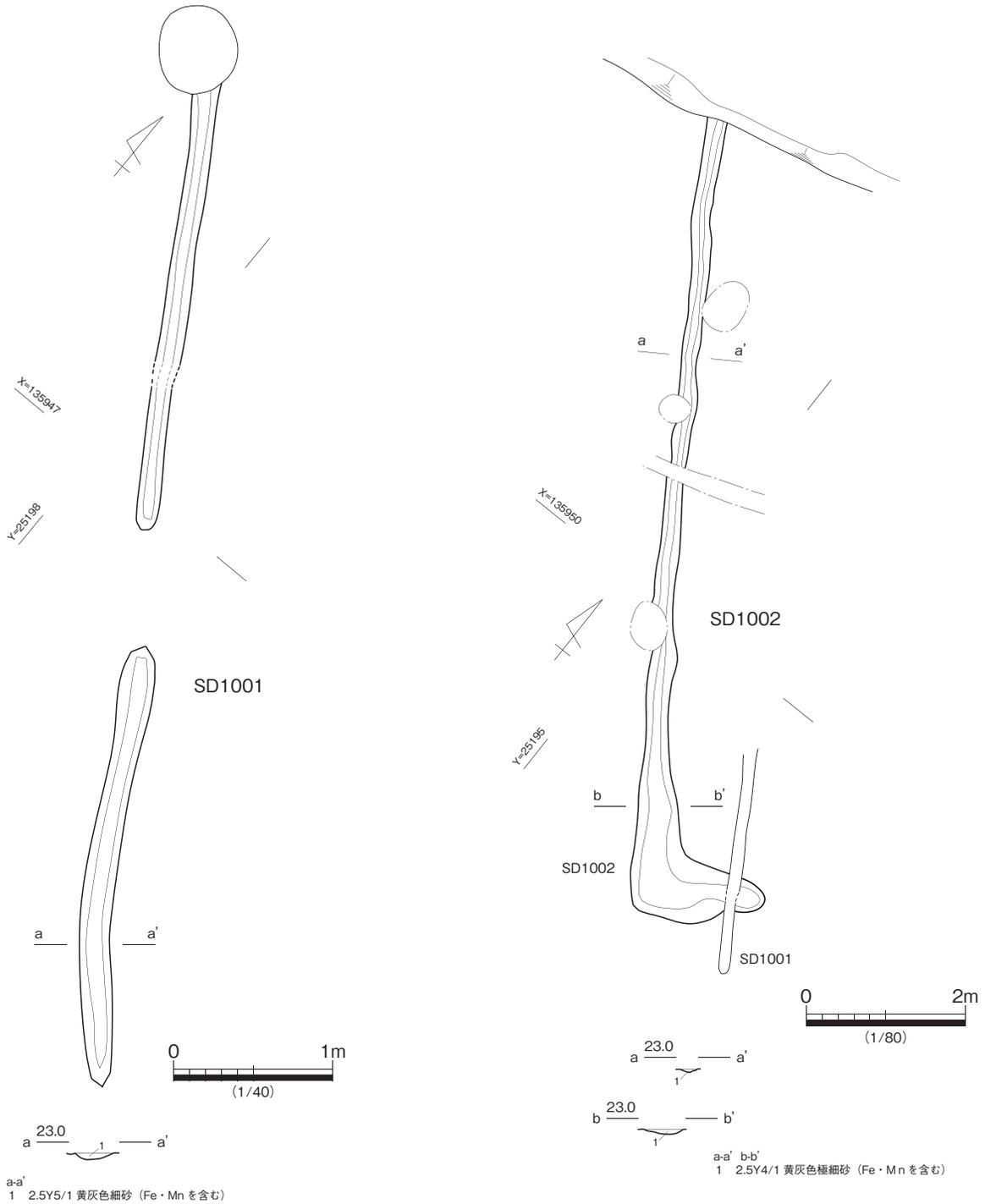
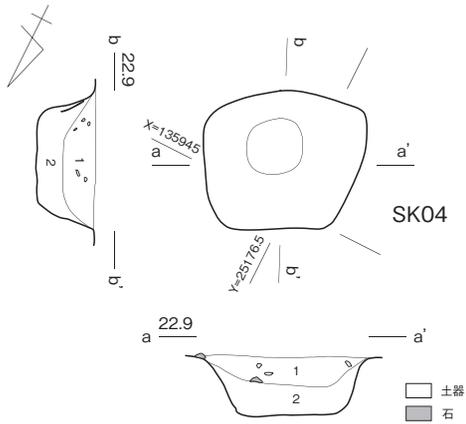


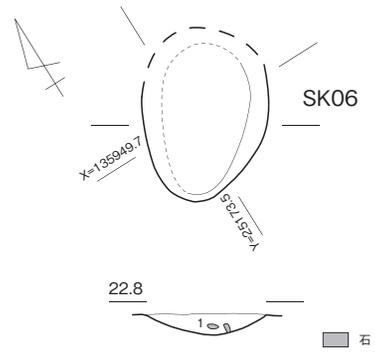
図 96 SD1001・SD1002

鉢、538 は須恵器甕である。522 は緑釉陶器皿で 10 世紀前半、529 は黒色土器椀で 10 世紀、528・534 は土師質土器椀で 10 世紀前半に属する。520・531・541 は土師器杯で、赤彩が施される。7-11 区 SK01 から出土した土器と同形態のものがあることから、8 世紀末から 9 世紀初頭のものと考えられる。540 は弥生土器壺、548 は弥生土器ミニチュア台付鉢、549 は弥生土器甕、551 は弥生土器高杯である。543 は平瓦で、凸面には格子目痕がある。514・523 は鉄釘、515 も鉄釘と考えられる。523 の断面形は円形、514・515 の断面形は長方形である。524 は銅鏃である。中央部には稜があり、断面形は菱形である。

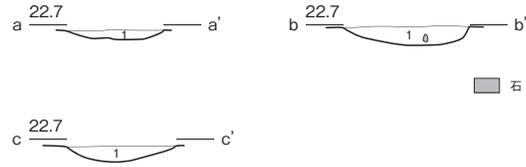
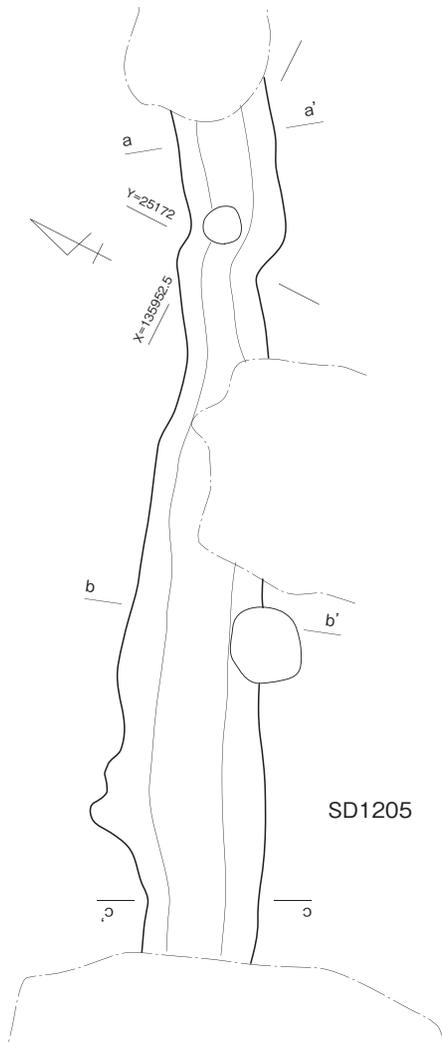
図 99 は 7-11 区の柱穴・小穴から出土した遺物である。552 は弥生土器支脚、553・570・583・584・



- a-a' b-b'
- 2.5Y5/1 黄灰色シルト (Fe・Mn・粒径2~4cmのベースブロックやや多量に含む。炭化物粒含む)
  - 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn・炭化物・焼土細粒少量含む。粒径2~3cmのブロック土やや多量に含む)



- 1 5Y7/1 灰白色シルト (Fe・Mn含む。径3~4cmのベースブロック少量含む。径2~5cmの小礫多量に含む。人為的な埋戻し土の可能性)



- a-a' b-b' c-c'
- 2.5Y7/2 灰黄色シルト (やや粘性あり。底面に厚さ5mm程度の中砂堆積。部分的に粒径3~4cmの小礫を含む)

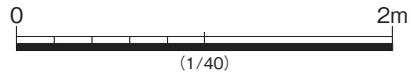


図97 7-12区 SK04・7-12区 SK06・SD1205

585・612・617は須恵器蓋、554は須恵器甕、556・557・559・560・562・565・567・569・572～574・576～578・580・586・589～591・593・613は須恵器杯、581は須恵器皿、563・579は緑釉陶器碗、561・575は土師質土器杯、571は土師器皿、558・596～598・616は弥生土器、599は須恵器鉢、594・604・606は須恵器甕、600・602・605・607・608は土師器杯、614・615は滑石製白玉、619は安山岩製の砥石である。558は脚部に櫛描沈線文と赤彩が施される。597は器台で、赤色顔料（ベンガラ）が施される。558・597はいずれも弥生時代後期に属し、岡山県備中地方産で、搬入品である。579は口縁部を欠損する。貼り付け高台で、体部外面には筋状のヘラ掘りがみられる。近江産である。

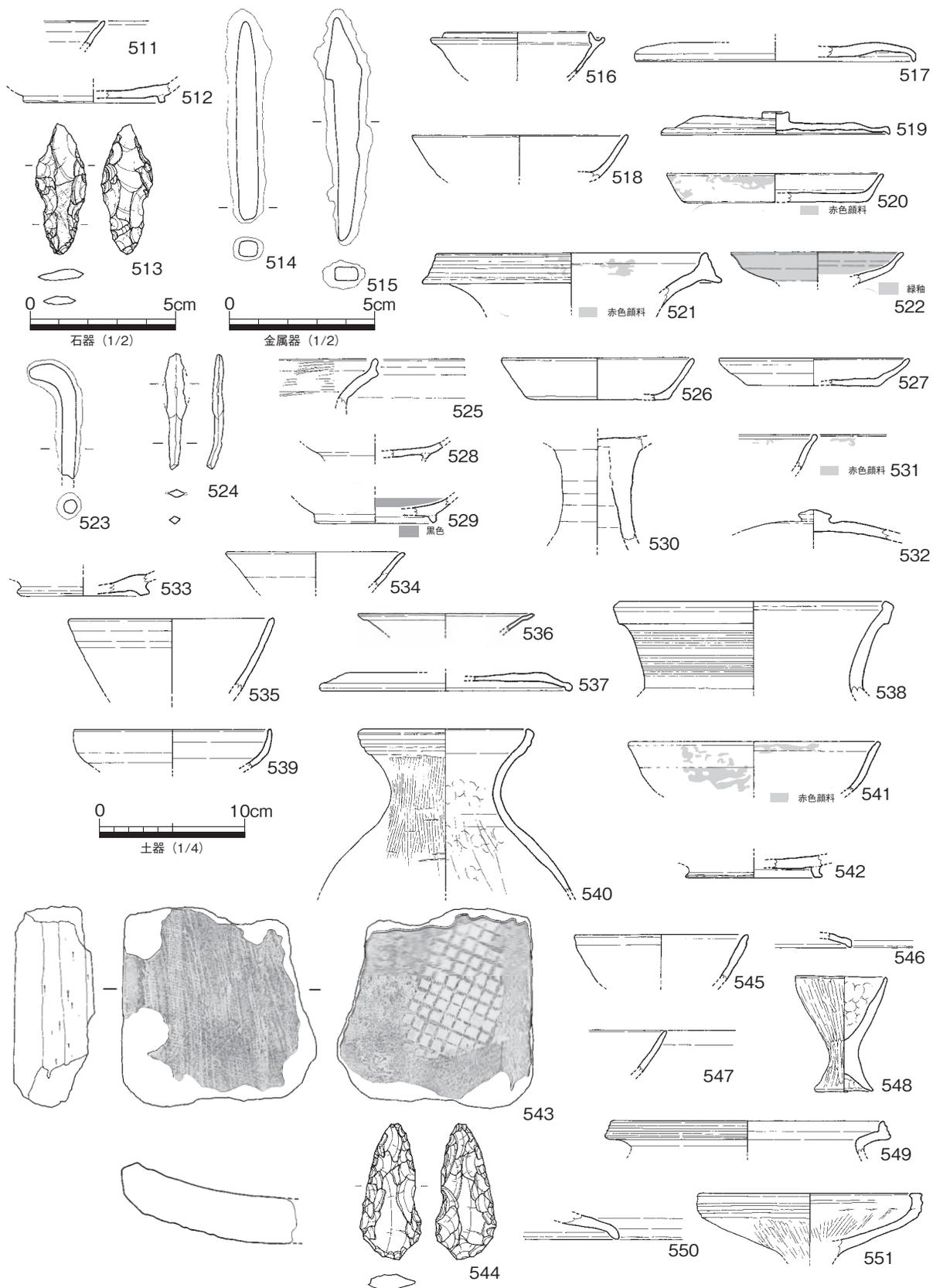
601は7-11区北西部のSP214から出土した軒丸瓦である。7-11区北西部にあるSP214の上面で検出された。SP214から出土した遺物は601のほかには土器小片が少量出土しただけである。601の瓦当の周縁は欠損する。複弁八葉蓮華文で、中房には9個の連子の痕跡があるが、4個は欠損している。周縁には鋸歯文があり、土師質である。

## 7. 遺構に伴わない遺物（図101）

620～629は7-10区、630～635は7-11区、642～651は7-12区から出土した遺物である。620～622は弥生土器壺である。623・624は石鏃、629は管玉である。621は小片で種類不明であるが、外面にはヘラ描きによる弧状の文様がある。623・624は石鏃、625・627は打製石包丁で、石材はサヌカイトである。628は磨製石包丁である。石材は頁岩で、刃部の一部は打ち割られている。630は弥生土器甕、631は弥生土器蓋である。631の外面にはヘラ状工具による列点文がある。632は石鏃、633～637は石包丁である。635は砂岩製で、厚さ2.5cmと分厚い。周縁には敲打によって成形される。刃部は両面からの剥離により作り出される。638・639は楔状石核である。640はスクレイパーの可能性が高い。641はガラス製の小玉である。642は弥生土器壺、643は土師器杯、644は須恵器甕、645～647は緑釉陶器碗である。645・647は削り出し高台である。畿内産で、9世紀に属する。646は有段輪高台である。近江産で10世紀後半に属する。648は軒平瓦で、7-12区で出土した。軒丸瓦（601）が出土した7-11区に西接する調査区である。土師質で、唐草文が施され、上外区には珠文4個、右外区には2個の珠文が残る。善通寺ZN203A<sup>(1)</sup>に類似する。651は滑石製白玉である。

652は7-11区南壁9層（図9）から出土した緑釉陶器口縁部片である。南壁9層はSR01最上層とした土層である。653～664は7-11区南壁10層（図9）から出土した遺物である。南壁10層はSR01上層上部に当たる。第7章で詳述しているようにこの層からはイネ属の植物珪酸体が検出されていることから、耕作土の可能性が高い。この層からは弥生土器（653・654）や赤色顔料が塗布された土師器（655～662）が出土した。655～662はいずれも焼成破裂痕がみられ。7-11区SK01から出土した土師器に類似する。おそらく、本来はSK01に伴うものであろう。なお、7-11区SK01は南壁10層の下部に堆積する南壁11層上面で検出された。663は緑釉陶器碗である。

665～673・675は南壁11層で出土した。665～669は弥生土器である。668の外面には櫛状工具による数条の沈線が施される。670は須恵器の把手、671は須恵器壺である。672はサヌカイト製の楔状石核、673は結晶片岩製の石斧である。基部は研磨されているが、刃部には敲打痕がみられる。674も結晶片岩製で、敲打痕がみられる。675は滑石製の白玉である。



- 7-10 区
- |                |                  |             |                 |                 |                 |             |
|----------------|------------------|-------------|-----------------|-----------------|-----------------|-------------|
| 511 : SP03     | 517 : SP59       | 524 : SP104 | 529 : SP97      | 535 : SP144     | 541 : SP183     | 548 : SP208 |
| 512 : SP04     | 518 ~ 520 : SP70 | 525 : SP84  | 530 : SP102     | 536-537 : SP150 | 542-543 : SP186 | 549 : SP219 |
| 513-514 : SP21 | 521 : SP71       | 526 : SP85  | 531-532 : SP103 | 538 : SP151     | 544 : SP193     | 550 : SP223 |
| 515 : SP23     | 522 : SP73       | 527 : SP89  | 533 : SP117     | 539 : SP158     | 545 : SP199     | 551 : SP230 |
| 516 : SP29     | 523 : SP81       | 528 : SP95  | 534 : SP125     | 540 : SP180     | 546-547 : SP200 |             |

図 98 柱穴・小穴出土遺物 (3)

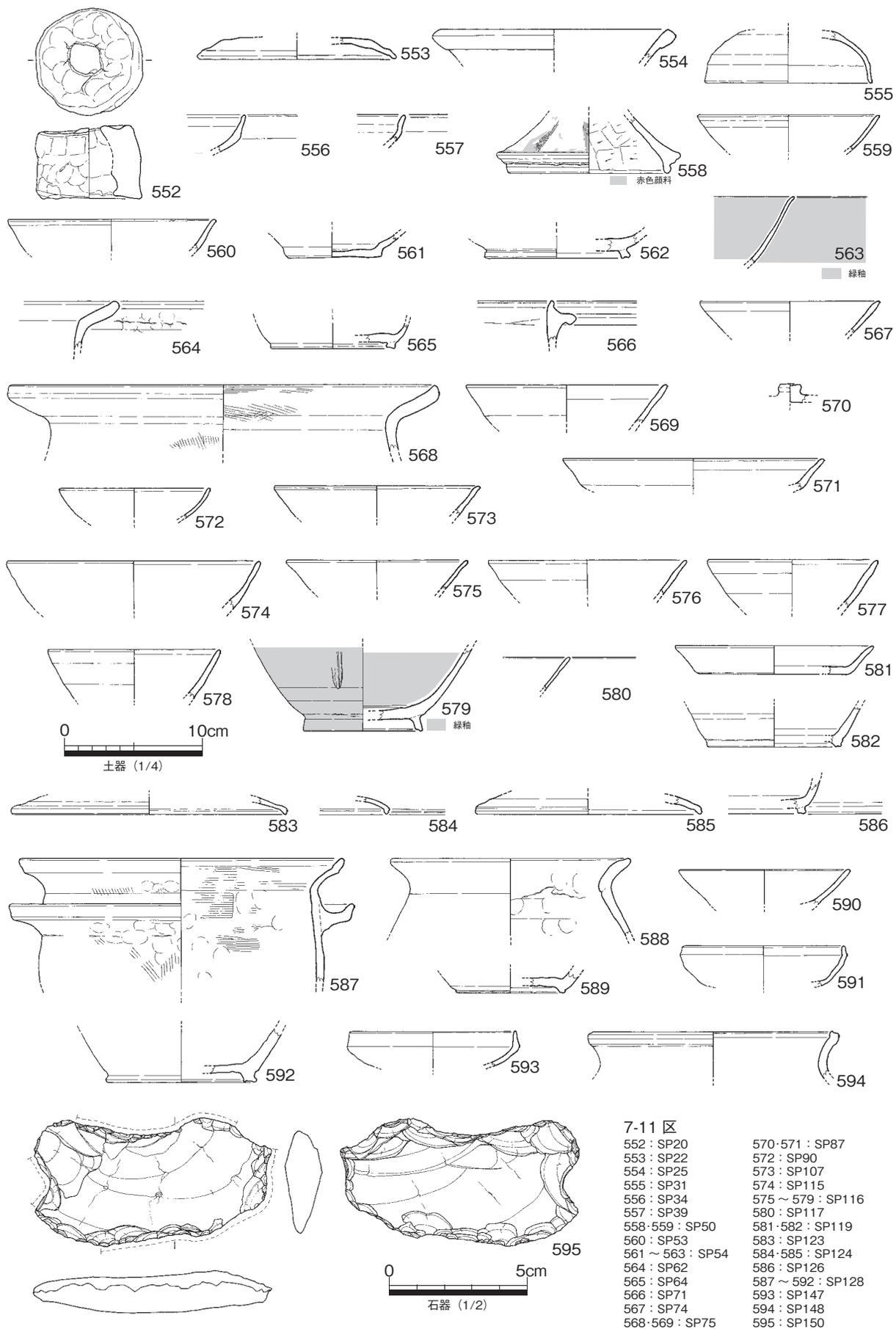
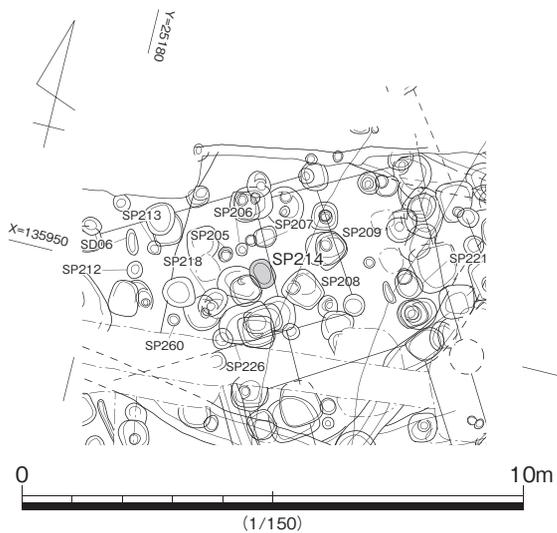
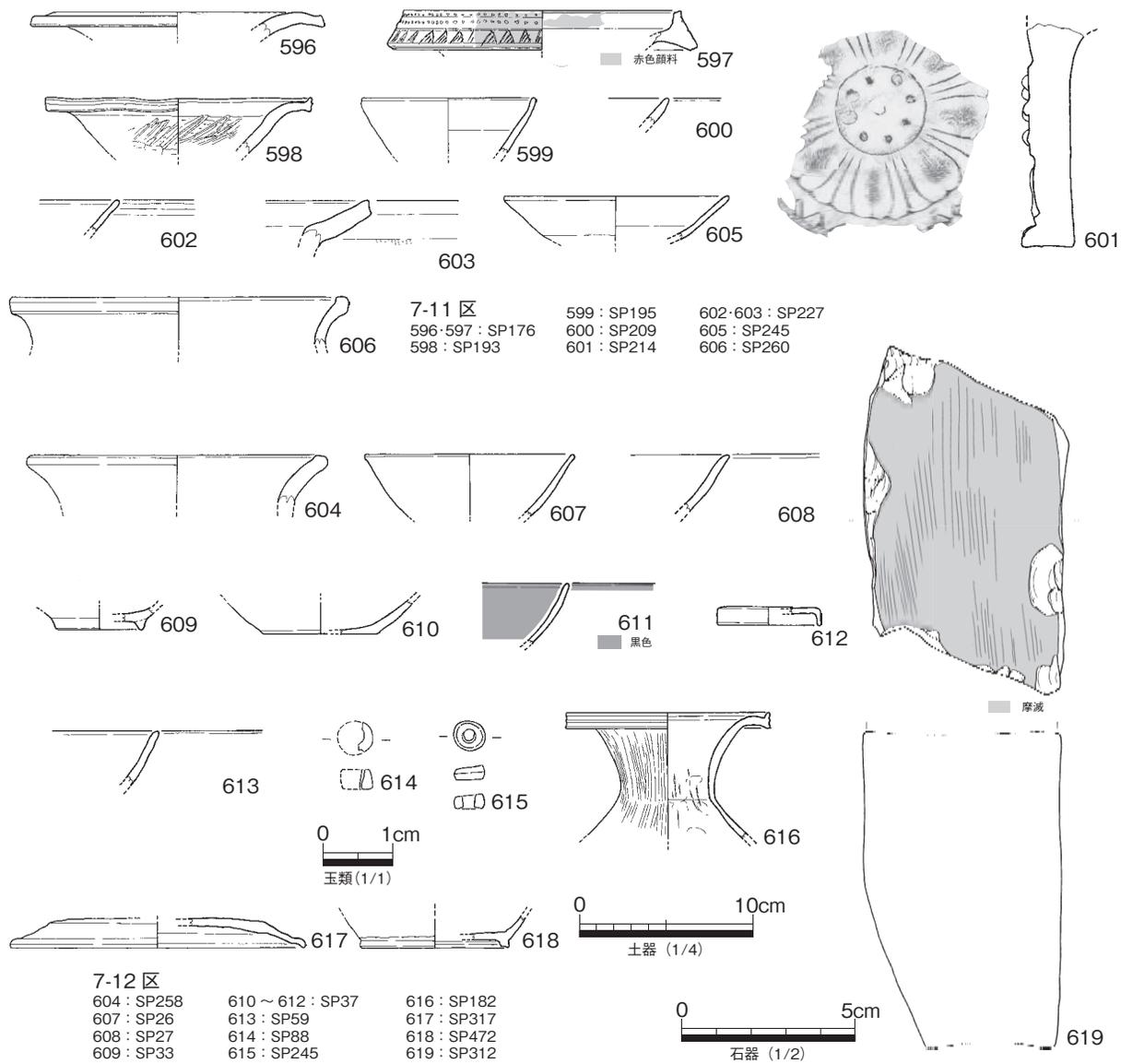
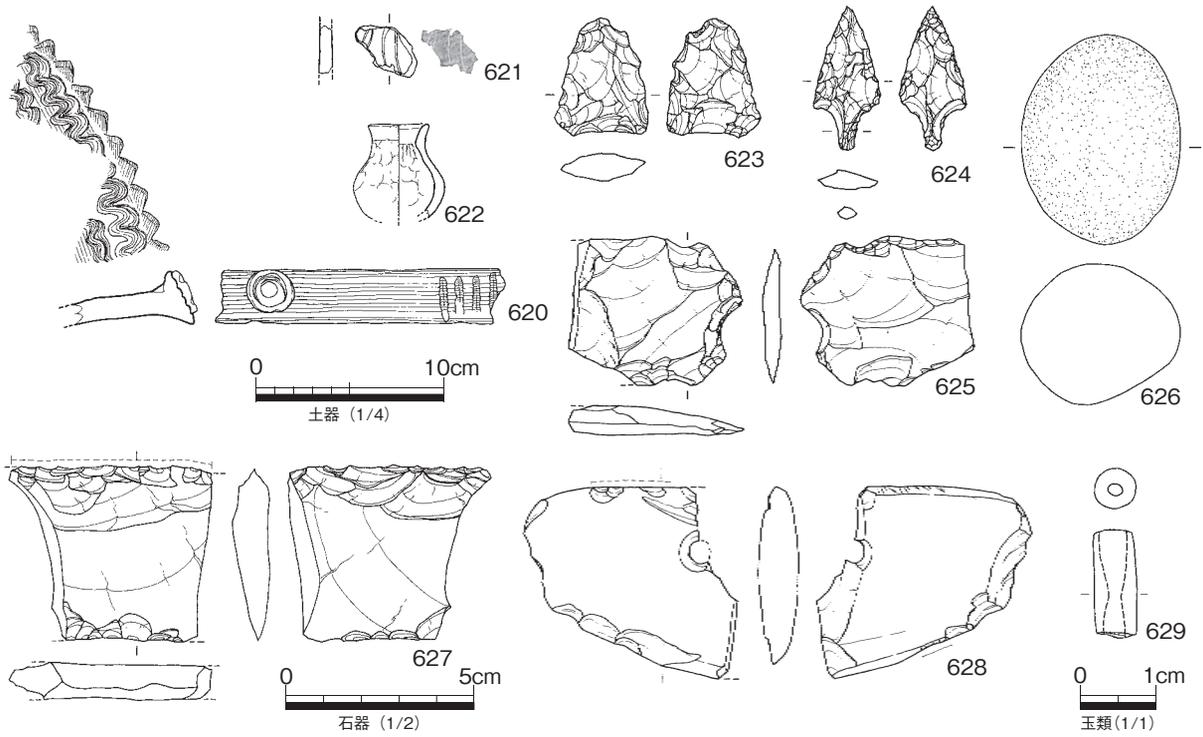


図99 柱穴・小穴出土遺物 (2)

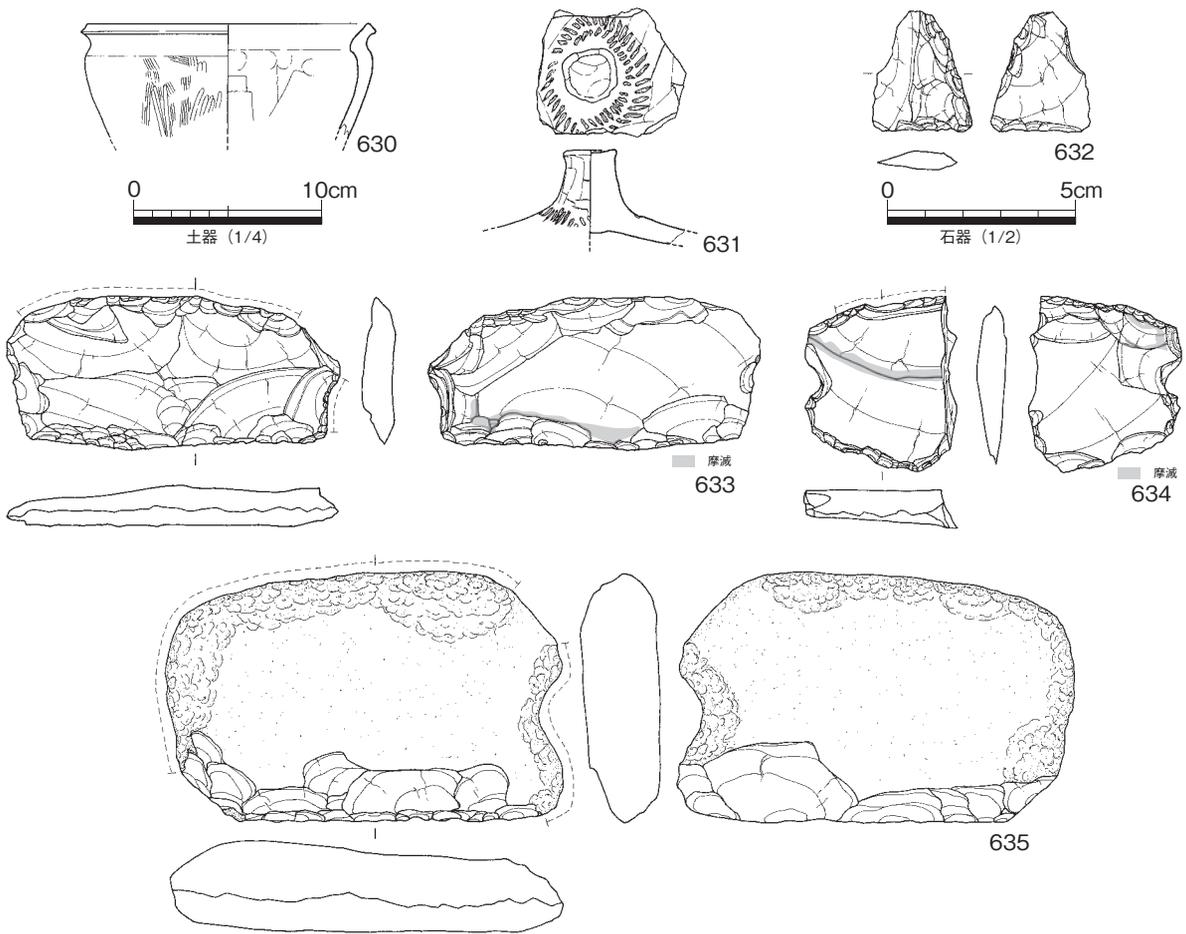


SP214 601 出土状况

图 100 柱穴・小穴出土遺物 (3)



620 ~ 629 : 7-10 区



630 ~ 635 : 7-11 区

図 101 遺構に伴わない遺物 (1)

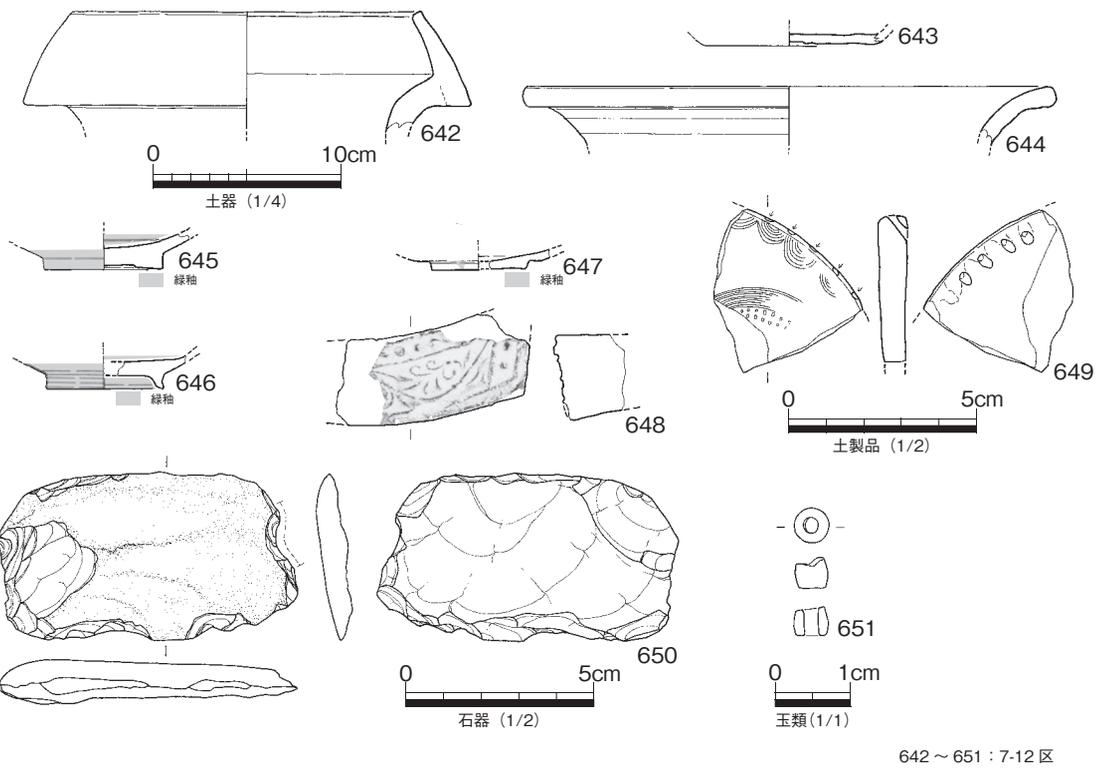
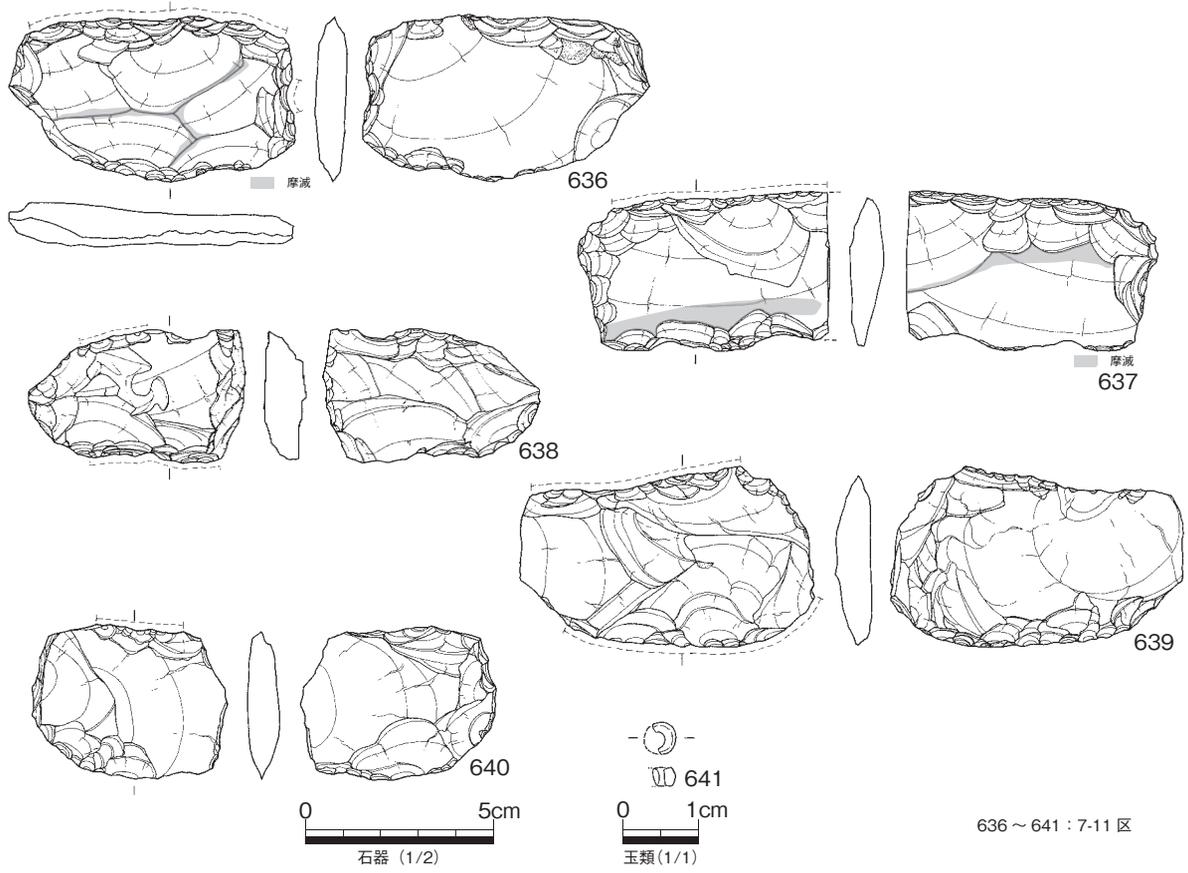
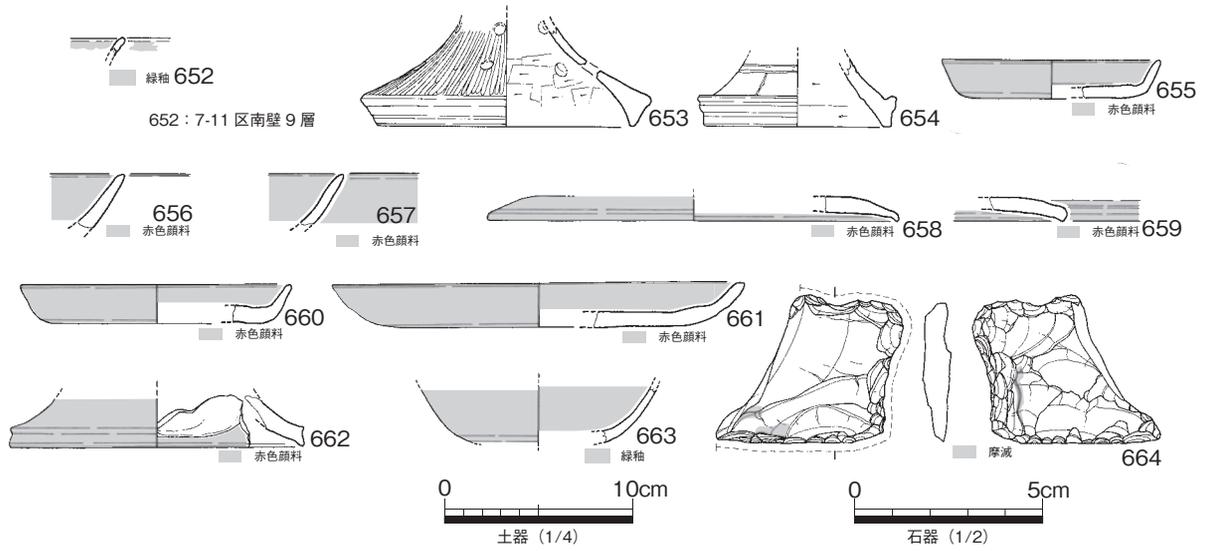
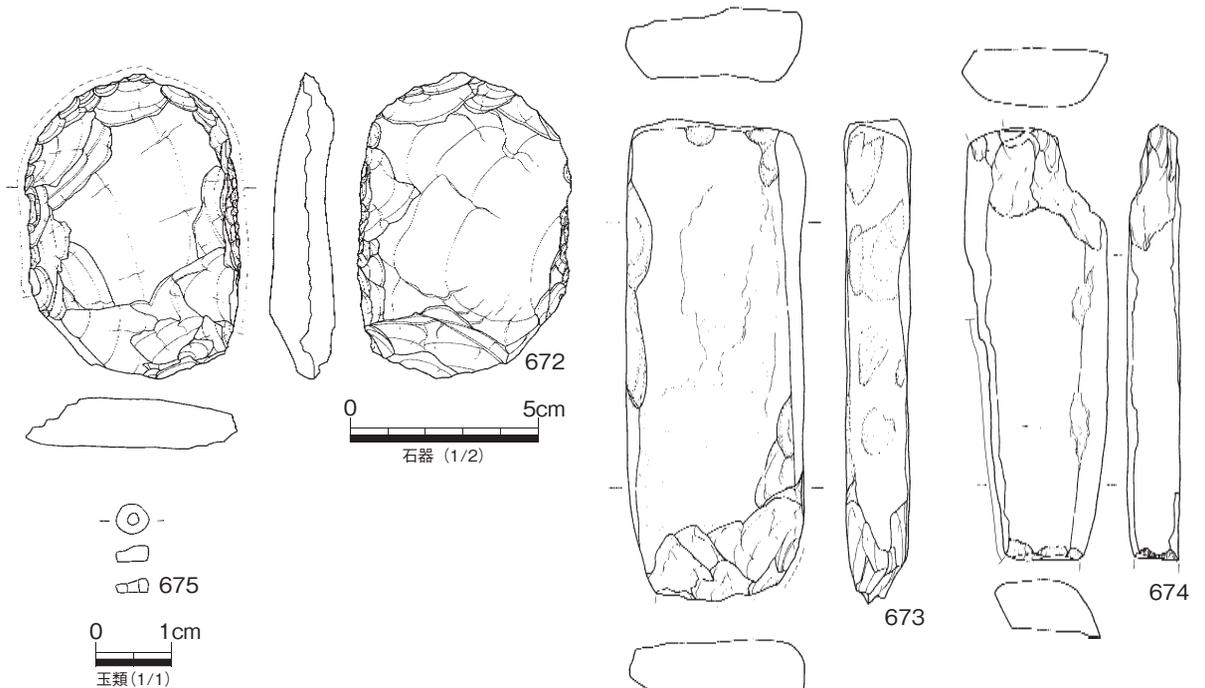
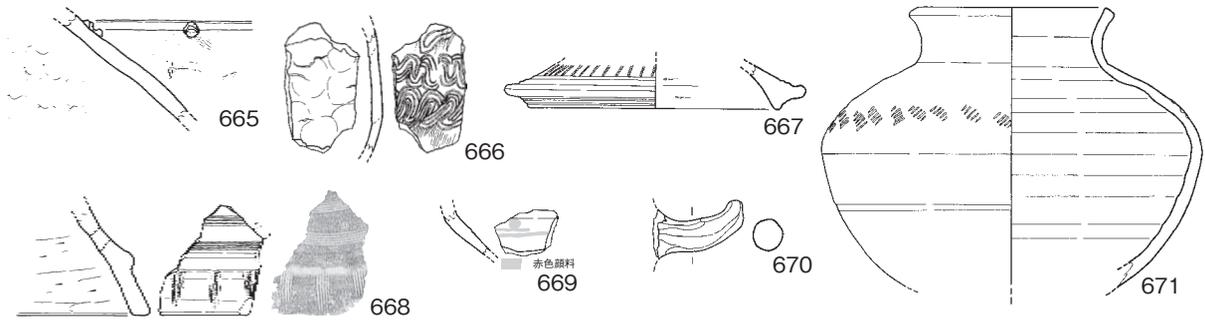


図 102 遺構に伴わない遺物 (2)

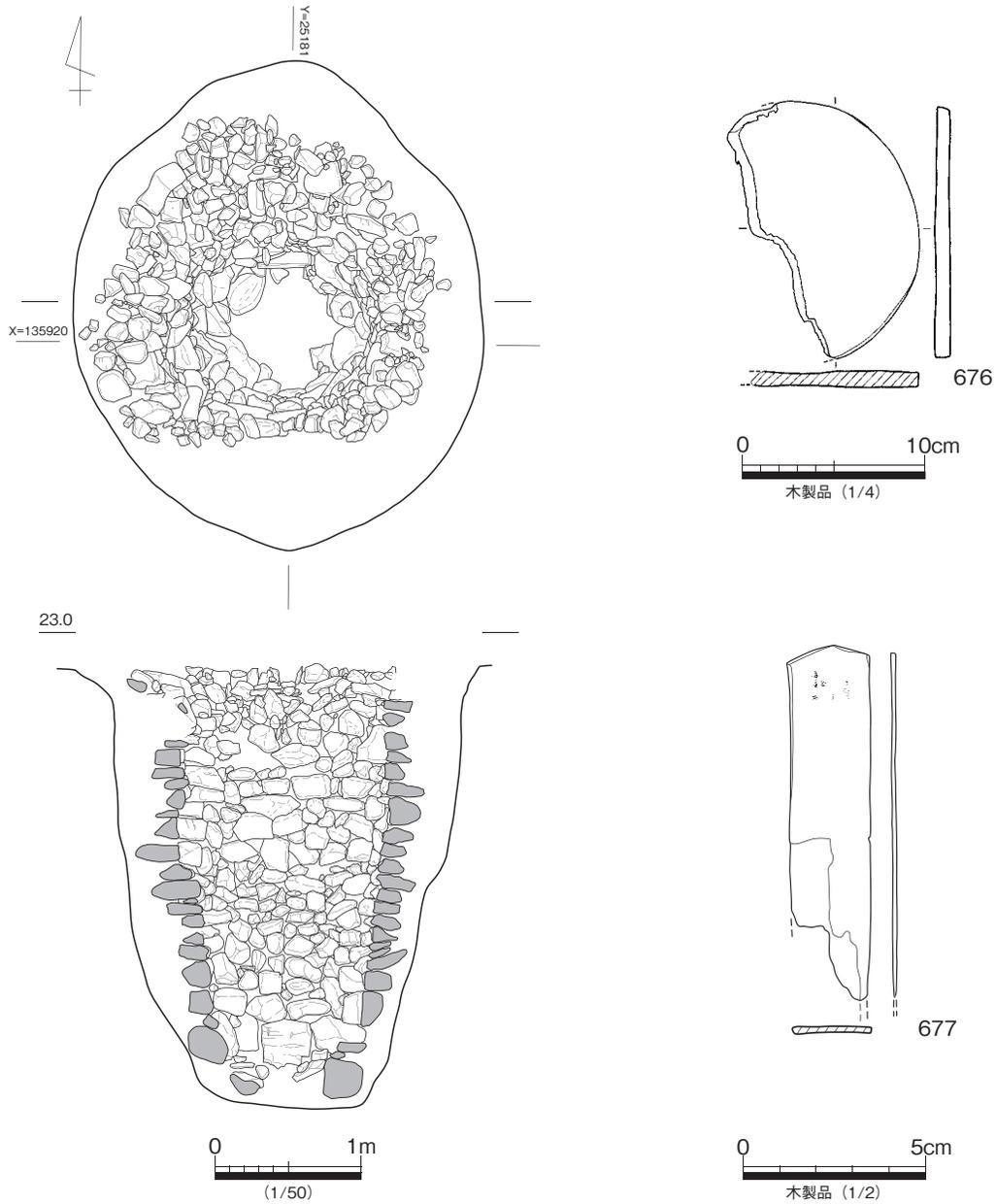


653～664：7-11区南壁10層



665～673・675：7-11区南壁11層  
674：7-11区南壁9～11層

図103 遺構に伴わない遺物(3)



『旧練兵場遺跡Ⅴ』177頁 図172 掲載

図104 7-8区 SE01

### 8. 7-8区 SE01 出土遺物 (図104)

676・677は『旧練兵場遺跡Ⅴ』で報告した井戸7-8区SE01から出土した木製品である。676は底板である。端部を欠損するが、本来の形状は円形である。677は木札である。先端の形状は三角形である。677の表面に黒色付着物がみられるが、文字を墨書きしたものと認めがたい。

註1 渡部明夫「讃岐国分寺の考古学的研究」2006

2 『熊山田遺跡』邑久町教育委員会 2004

## 第4章 第29次調査

### 第1節 層序

基本層序については、既刊の『旧練兵場遺跡Ⅱ』において詳説されており、本節でもこれを踏襲する。

調査は、Ⅱ層まで重機で掘り下げ、ⅢないしⅣ層上面において遺構検出・掘り下げをおこなった。Ⅱ層は、本調査区では最大16層に細分され、遺構埋土を除いて、いずれも水平堆積していることから、明治44年(1911年)の旧帝国陸軍第11師団司令部設置以前の旧耕作土ないし床土層と判断され、色・土質及び出土遺物より、近世以降の耕土層群と考えられる。

一方、Ⅱ層最下層(図107-33層)は、上位の近世以降の堆積層とは大きく異なることから、中世に遡る可能性がある。出土遺物から時期を特定することはできなかったが、SD60等本調査区で確認された中世溝群埋没後に堆積していることから、上限は13世紀中葉以降と判断される。調査区北部では、本層は南北長24.5m以上の広範囲において水平堆積が確認され、本層下面では弥生時代以降の遺構やⅣ層以下の堆積層が露出する。本層堆積、つまり遅くとも中世段階での旧耕地面の造成により、それ以前の旧地形の起伏は削奪・平準化されていることが判明した。

Ⅱ層最下層南端は、旧多度郡域で確認されている条里型地割りに合致する方向を指向する溝SD70によって切られ、より南では確認されない。また、Ⅱ層最下層下面の標高は22.20m前後ではほぼ一定し、SD70南側ではⅡ層下面の標高は22.40～22.50mと、0.2～0.3m高くなり、この位置に近世以降、練兵場造成時までの溝が繰り返し開削されていたことが、土層断面図より読み取れる。つまり、本調査区で確認されたⅡ層下面の段差は、棚田状に造成された耕地界を反映していると考えられる。

遺跡周辺は、練兵場の造成や市街地化により、地割りは大きく改変されており、条里型地割りは確認できない。残存地より地割り界を延伸して遺跡の上に表示すると、上述した耕地界のラインは、既説の条里遺構復原案(金田章裕1988「讃岐の条里遺構」『香川県史』第1巻通史編)の四条8里11坪と14坪の坪界に一致する。古代以降、溝が本位置を踏襲して開削され、後述する道路遺構が敷設されるのは、坪界としての場所を反映したものであったからであろう。その時期は、幹線水路SD60や道路遺構SD59の配置より、13世紀中葉以前に遡るものであったことが実証された。既述したⅡ層最下層の旧耕地面の造成は、この地割りを踏襲したものであり、条里型地割りの方向に合致した幹線水路SD55の開削や、道路遺構SD59の設置は、おそらくこうした大規模な土地の平準化作業を前提とするものと考えられる。(蔵本)

### 第2節 遺構・遺物

#### 1. 弥生時代中期

##### 掘立柱建物

##### SB06(図109)

4区の第2面(Ⅳ層上面)で検出された掘立柱建物である。桁行3間(5.4～5.7m)、梁間1間(2.6m)、深さ0.5～0.6mで、桁行の方向はN75°Eである。柱穴の平面形はややいびつな円形またはややいびつな隅丸方形で、長軸長0.8～1.4m、短軸長0.6～0.9m、深さ0.6mである。各柱穴からは少量

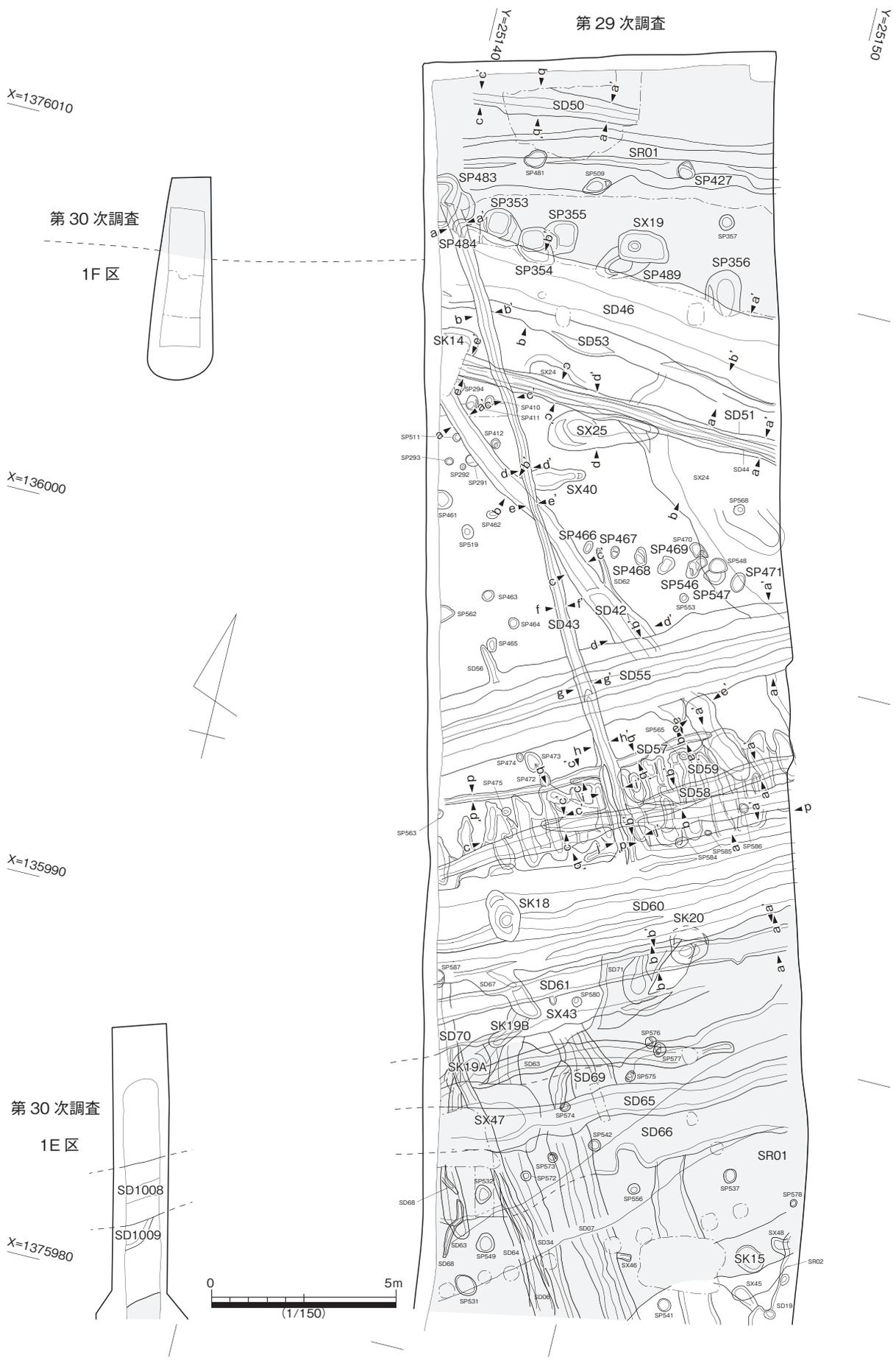


図 105 第 29 次調査 1・2 区平面図



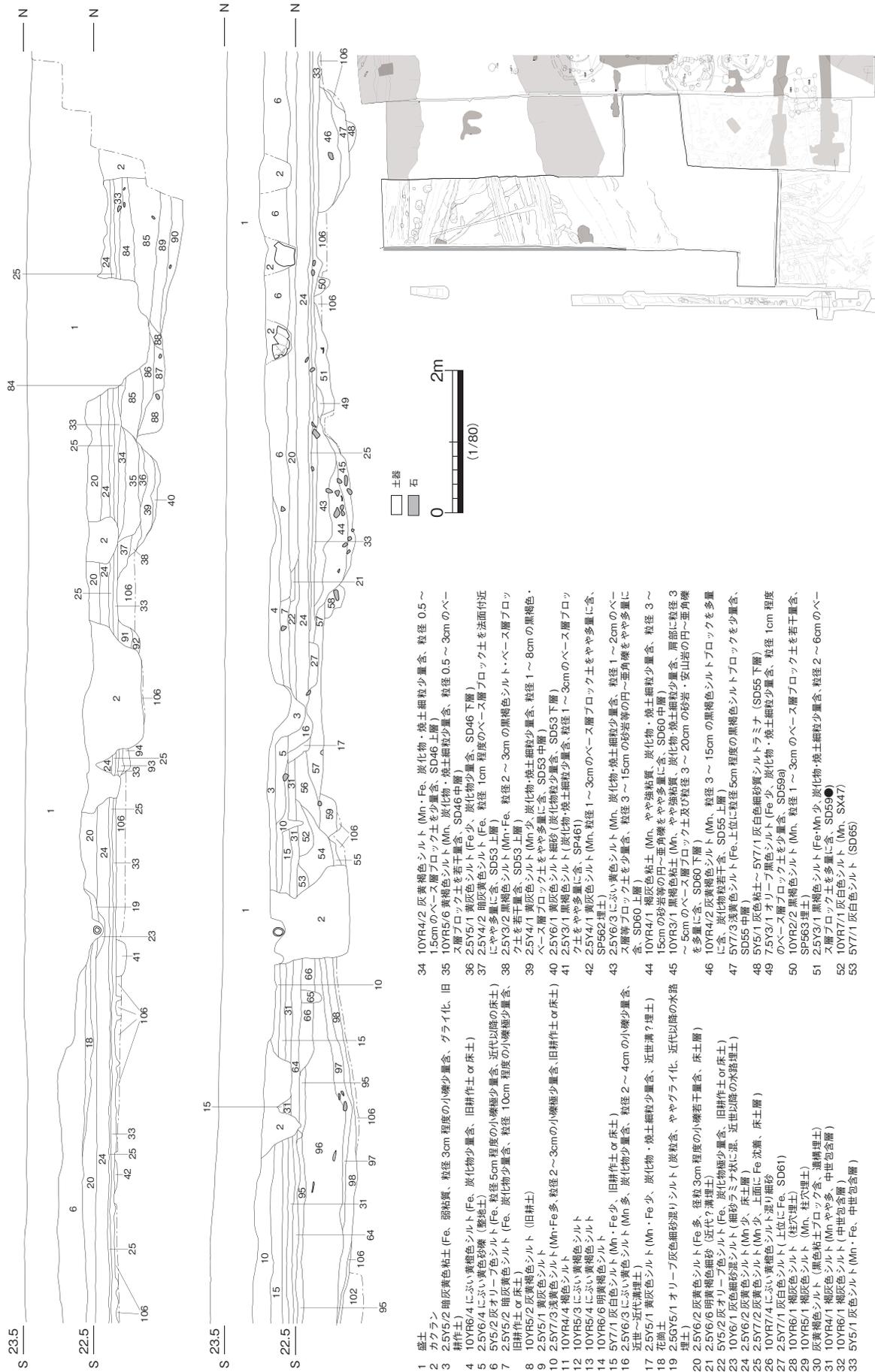
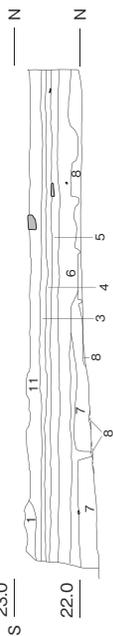
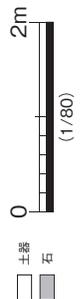
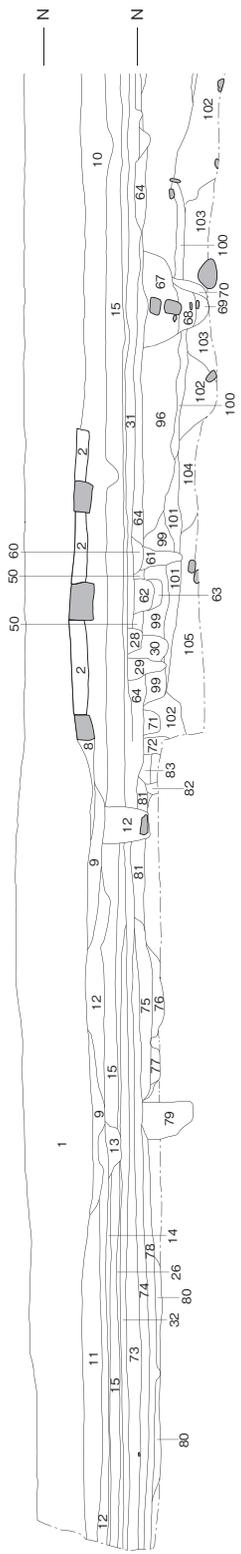


図 107 西壁土層断面図 - 1

- 1 盛土
- 2 カクラン
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土 (Fe、珪酸質、粒径3cm程度の小礫少量含、グラライ化、旧耕作土或床土)
- 4 10YR6/4 に近い黄褐色シルト (Fe、炭化物少量含、旧耕作土或床土)
- 5 2.5Y6/4 に近い黄褐色砂礫 (整地土)
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (Fe、粒径5cm程度の小礫少量含、近代以降の床土)
- 7 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (Fe、炭化物少量含、粒径10cm程度の小礫少量含、旧耕作土或床土)
- 8 10YR5/2 灰黄褐色シルト (旧耕土)
- 9 2.5Y5/1 黄灰色シルト
- 10 2.5Y7/3 浅黄色シルト (Mn・Fe多、粒径2～3cmの小礫少量含、旧耕作土或床土)
- 11 10YR4/4 褐色シルト
- 12 10YR5/3 に近い黄褐色シルト
- 13 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
- 14 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 15 5Y7/1 灰白色シルト (Mn・Fe少、旧耕作土或床土)
- 16 2.5Y6/3 に近い黄灰色シルト (Mn多、炭化物少量含、粒径2～4cmの小礫少量含、近世～近代清埋土)
- 17 2.5Y5/1 黄灰色シルト (Mn・Fe少、炭化物・焼土細粒少量含、近世清?埋土)
- 18 花崗土
- 19 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂混リシルト (炭粒含、ややグラライ化、近代以降の水路)
- 20 2.5Y6/2 灰黄色シルト (Fe多、径粒3cm程度の小礫若干量含、床土層)
- 21 2.5Y6/6 明黄褐色細砂 (近代?清埋土)
- 22 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (Fe、炭化物少量含、旧耕作土或床土)
- 23 10Y6/1 灰色細砂混リシルト (細砂ラミナ状に混、近代以降の水路埋土)
- 24 2.5Y6/2 灰黄色シルト (Mn少、床土層)
- 25 2.5Y7/2 灰黄色シルト (Mn少、上面にFe沈着、床土層)
- 26 10YR7/4 に近い黄褐色シルト混リ細砂
- 27 2.5Y7/1 灰白色シルト (上位にFe、SD61)
- 28 10YR6/1 褐灰色シルト (Mn、柱穴埋土)
- 29 灰黄褐色シルト (黒色粘土子ロック含、遺構埋土)
- 30 灰黄褐色シルト (黒色粘土子ロック含、Mnやや多、中世包含層)
- 31 10YR4/1 褐灰色シルト (Mnやや多、中世包含層)
- 32 10YR6/4 褐灰色シルト (中世包含層)
- 33 5Y5/1 灰白色シルト (Mn・Fe、中世包含層)
- 34 10YR4/2 灰黄褐色シルト (Mn・Fe、炭化物・焼土細粒少量含、粒径0.5～1.5cmのベース層ブロック土を少量含、SD46上層)
- 35 10YR5/6 黄褐色シルト (Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径0.5～3cmのベース層ブロック土を若干量含、SD46中層)
- 36 2.5Y5/1 黄灰色シルト (Fe少、炭化物少量含、SD46下層)
- 37 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (Fe少、炭化物少量含、SD46下層のベース層ブロック土を法面付近にやや多量に含、SD53上層)
- 38 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn・Fe、粒径2～3cmの黒褐色シルト・ベース層ブロック土を若干量含、SD53上層)
- 39 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～8cmの黒褐色・ベース層ブロック土をやや多量に含、SD53中層)
- 40 2.5Y6/1 黄灰色シルト細砂 (炭化物粒少量含、SD53下層)
- 41 2.5Y3/1 黒褐色シルト (炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～3cmのベース層ブロック土をやや多量に含、SP461)
- 42 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn、粒径1～3cmのベース層ブロック土をやや多量に含、SP562埋土)
- 43 2.5Y6/3 に近い黄灰色シルト (Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～2cmのベース層ブロック土を少量含、粒径3～15cmの砂岩等の円～亜角礫をやや多量に含、SD60上層)
- 44 10YR4/1 褐灰色粘土 (Mn、やや強粘質、炭化物・焼土細粒少量含、粒径3～15cmの砂岩等の円～亜角礫をやや多量に含、SD60中層)
- 45 10YR3/1 黒褐色粘土 (Mn、やや強粘質、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1～3cmのベース層ブロック土及び粒径3～20cmの砂岩・安山岩の円～亜角礫を多量に含、SD60下層)
- 46 10YR4/2 灰黄褐色シルト (Mn、粒径3～15cmの黒褐色シルトブロックを多量に含、炭化物若干量含、SD55上層)
- 47 5Y7/5 浅黄色シルト (Fe、上位に粒径5cm程度の黒褐色シルトブロックを少量含、SD55中層)
- 48 5Y5/1 灰白色粘土～5Y7/1 灰白色細砂混リシルト (Mn、粒径1～2cm程度のベース層ブロック土を少量含、SD59a)
- 49 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト (Fe少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1cm程度のベース層ブロック土を少量含、SD59a)
- 50 10YR2/2 黒褐色シルト (Mn、粒径1～3cmのベース層ブロック土を若干量含、SP563埋土)
- 51 2.5Y3/1 黒褐色シルト (Fe・Mn少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径2～6cmのベース層ブロック土を多量に含、SD59b)
- 52 10YR7/1 灰白色シルト (Mn、SX47)
- 53 5Y7/1 灰白色シルト (SD65)



- 54 10YR7/1 灰白色シルト (SX47)
- 55 10YR7/1 灰白色シルト (ベース層ブロック土含)
- 56 10YR6/1 細灰色シルト (Mn多、SD70)
- 57 10YR3/1 黒褐色シルト (Fe・Mn多、層下半に粒径1~2cmのベース層ブロック土少量含、SD70)
- 58 5Y3/2 オリーブ黒色シルト (Mn少、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1cm程度のベース層ブロック土少量含、SP87)
- 59 2.5Y3/2 黒褐色シルト (Mn多、炭化物・焼土細粒やや多量に含、粒径2~5cmのベース層ブロック土多量に含、SK19)
- 60 10YR6/1 細灰色シルト (Mn、柱穴上層)
- 61 10YR6/2 灰黄褐色シルト (黒色粘土ブロック含、柱穴下層)
- 62 10YR6/1 細灰色シルト (柱穴上層)
- 63 10YR7/1 灰白色砂質土 (Mn、柱穴下層)
- 64 10YR3/1 黒褐色シルト (Mnやや多、炭化物・焼土細粒少量含、SR01上層)
- 65 5Y6/1 灰白色シルト (柱穴埋土)
- 66 10YR7/1 灰白色シルト (Mn、SD66)
- 67 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (柱穴埋土)
- 68 2.5YR3/2 暗赤褐色粘質土 (Mn、柱穴埋土)
- 69 10YR3/2 黒褐色粘質土 (Mn、砂質強、柱穴埋土)
- 70 10YR5/1 細灰色シルト (Mn、ベース層ブロック土含、遺構埋土)
- 71 10YR6/1 細灰色シルト (ベース層ブロック土含、遺構埋土)
- 72 10YR6/1 細灰色シルト (ベース層ブロック土含、柱穴埋土)
- 73 10YR5/1 細灰色砂質シルト (古代色含層)
- 74 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Fe沈着、SX02)
- 75 10YR5/2 灰黄褐色小味泥リシルト (SD19①上層)
- 76 10YR6/1 灰黄褐色小味泥リシルト (SD19①流路A)
- 77 10YR6/1 灰黄褐色小味泥リシルト (SD19①流路B)
- 78 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (SD16)
- 79 10YR3/2 黒褐色シルト (SP199)
- 80 2.5Y6/1 黄灰色シルト (粒径3cm程度のベース層ブロック土を多量に含、SD16下層)
- 81 10YR4/1 細灰色シルト (Fe沈着)
- 82 (柱穴埋土)
- 83 7.5YR3/2 黒褐色シルト (粒径0.5~1cmのベース層ブロック土を若干量含)
- 84 5Y3/1 オリーブ黒色シルト (Fe、炭化物・焼土細粒少量含、SR01上層)

- 5区
- 1 遺構土
- 3 5Y7/1 灰白色シルト (Fe沈着、床土層、近世~近代)
- 4 2.5Y6/1 黄灰色シルト (Mn、中井石含層)
- 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト (Mn、炭化物少量含、SR01上層)
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1cm以下のブロック土少量含、SD18)
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト (Mn、炭化物・焼土細粒少量含、粒径1~7cmのブロック土やや多量に含、シルト (Mn、ベース層)
- 8 2.5Y8/4 淡黄褐色シルト (Fe、炭化物少量含、床土層 or 旧耕土層、近世~近代)
- 11 2.5Y7/1 灰白色シルト (Fe、炭化物少量含、SD16)

図108 西壁土層断面図-2

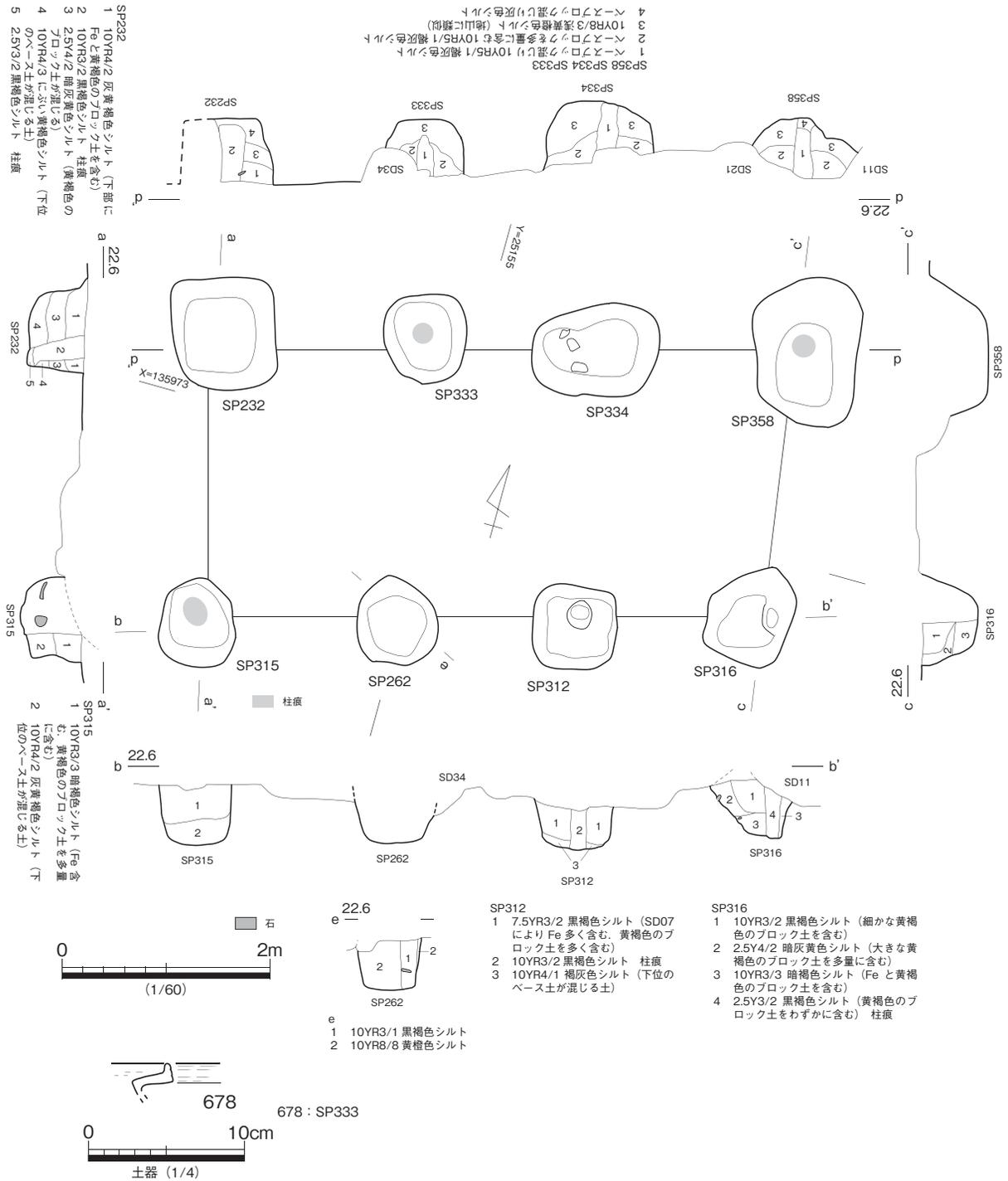


図 109 SB06

の土器片などが出土した。678 は SP3331 から出土した弥生土器甕口縁部片で、口縁部外面に浅い凹線を施し、頸部は強く屈曲する。弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SB06 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB07 (図 110)

3 区から 4 区の第 2 面 (IV 層上面)、『旧練兵場遺跡 I』で報告された Y 区にかけて検出された掘立柱建物である。桁行 4 間 (8.5 m)、梁間 1 間 (3.0 m)、桁行の方向はほぼ東西方向である。柱穴の平面形はややいびつな方形または円形で、長軸 1.0 ~ 1.2 m、短軸 0.7 ~ 0.8 m、深さ 0.4 ~ 0.7 m である。各

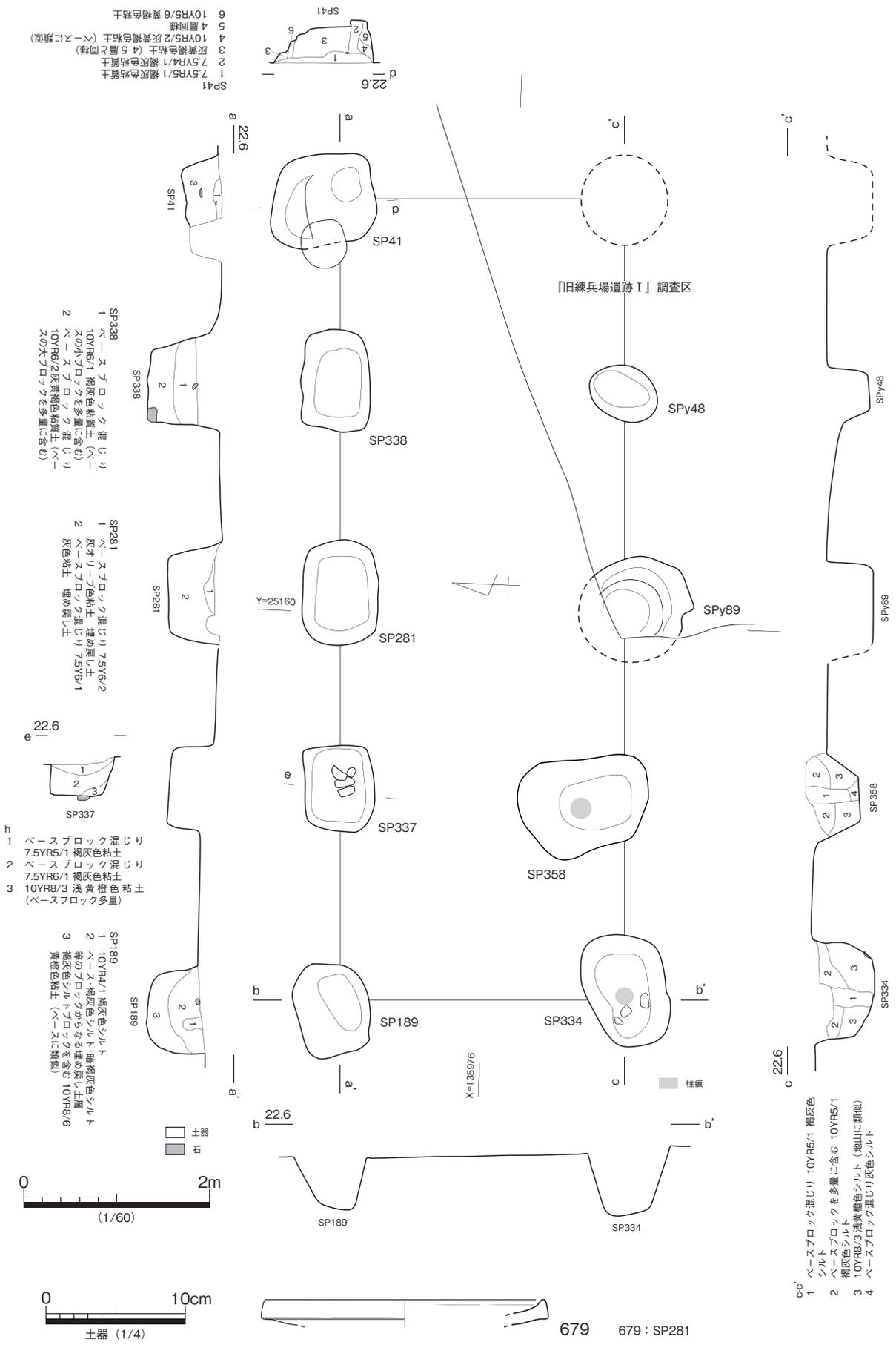


図 110 SB07

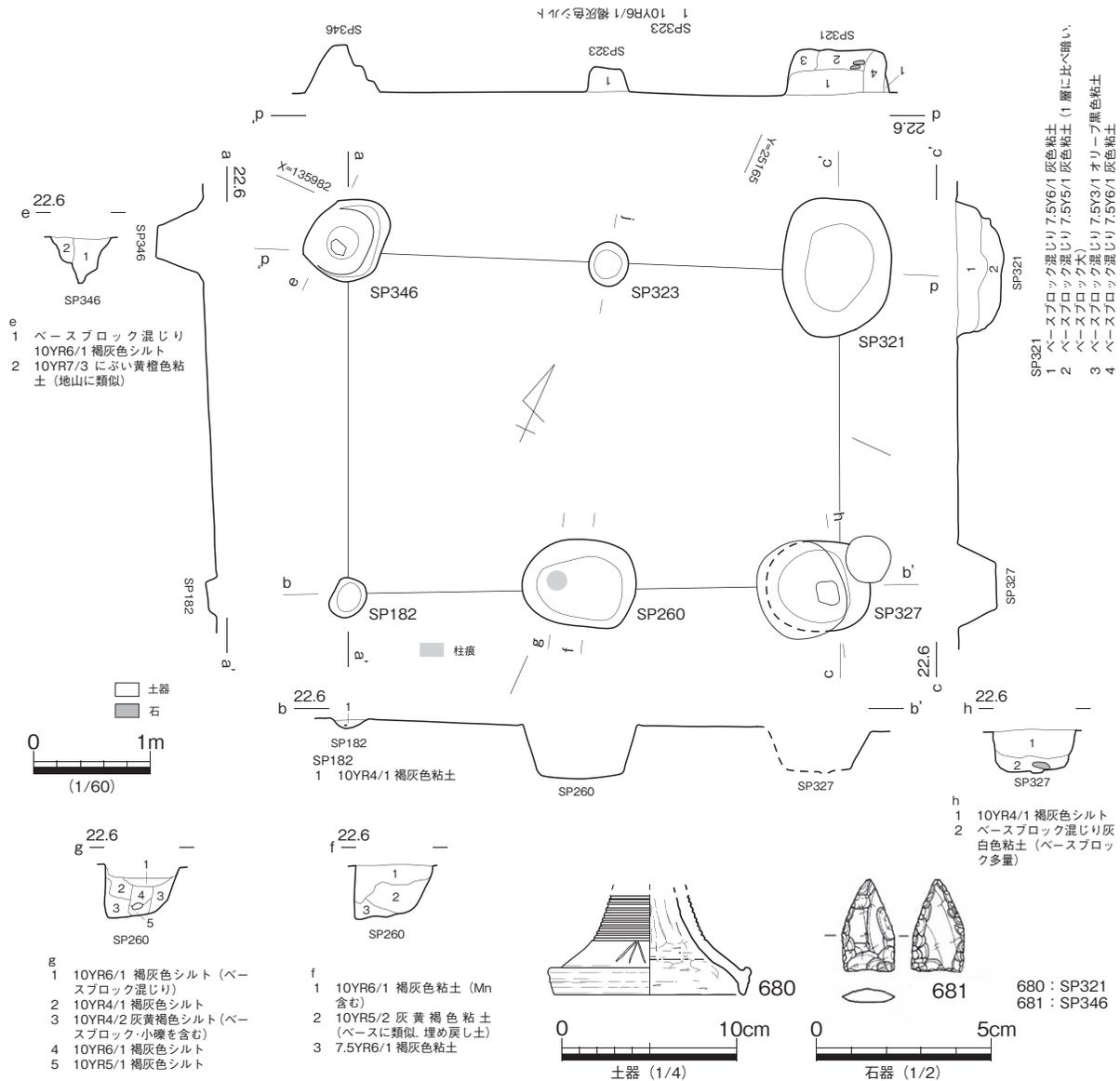


図 111 SB08

柱穴からは土器片などが少量出土した。679 は SP281 から出土した弥生土器壺である。ラップ状に広がる壺の口縁部片で、弥生時代中期後半のものである。出土遺物や埋土の色調・土質から SB07 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB08 (図 111)

3 区の第 2 面 (IV 層上面) で検出された掘立柱建物である。桁行 2 間 (4.2 m)、梁間 1 間 (2.7 m)、桁行の方向は N70° E である。柱穴の平面形はいずれも円形である。SP182・SP323 は径 0.3 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m と小さいが、その他の柱穴は径 0.7 ~ 1.2 m、深さ 0.4 ~ 0.5 m と大きい。各柱穴からは少量の土器片などが出土した。680 は SP321 から出土した弥生土器高杯、681 は SP346 から出土したサヌカイト製石鏃である。680 は外面に数条のヘラ描き沈線が施される。弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SB08 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SB10 (図 112)

4 区南部の第 2 面 (IV 層上面) で検出された掘立柱建物である。北側の桁行は検出されているが、南側の桁行は攪乱によって削平されており、未検出である。北側の桁行 2 間 (3.1 m) で、方向

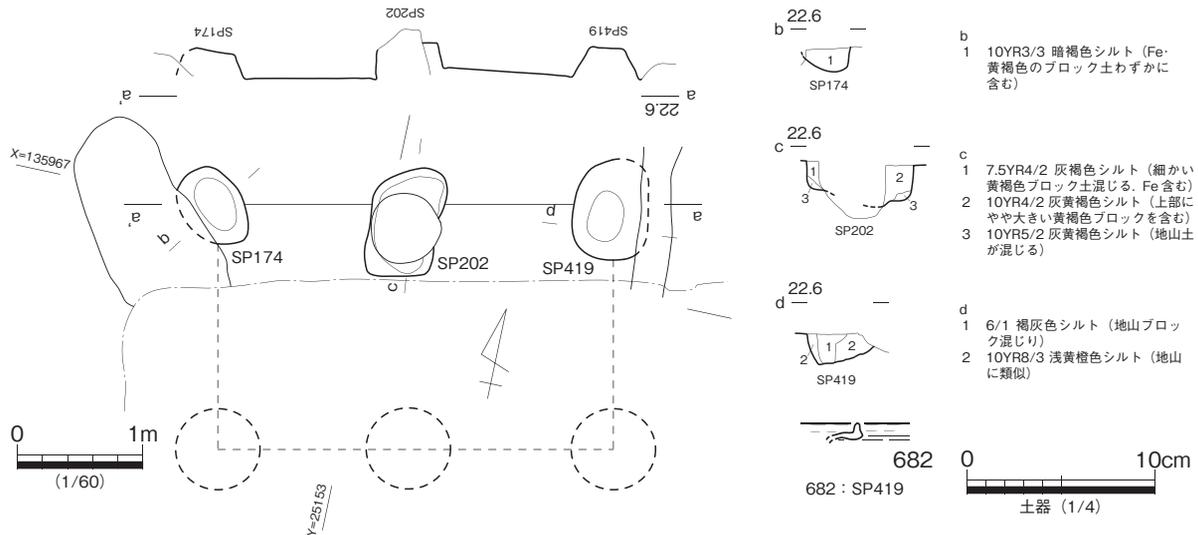


図 112 SB10

は N80° E である。柱穴の平面形は円形またはいびつな楕円形である。SP202 は長楕円形であるが、2 個の柱穴が重複している可能性が高い。径または長軸は 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.2 m である。各柱穴からは土器片が少量出土した。682 は SP419 から出土した弥生土器甕で、中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SB10 は弥生時代中期後半のものである。

柱穴・小穴・土坑

SP353 (図 113)

1 区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。南半部を SD46 に、東端部を SP355 にそれぞれ切られるため、全形は明らかではない。

南北・東西とも 1.0 m 以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は 0.39 m あり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 2 層に細分され、下位層を中心に多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器台付鉢 (図 113-683) 等の土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生中期前半新

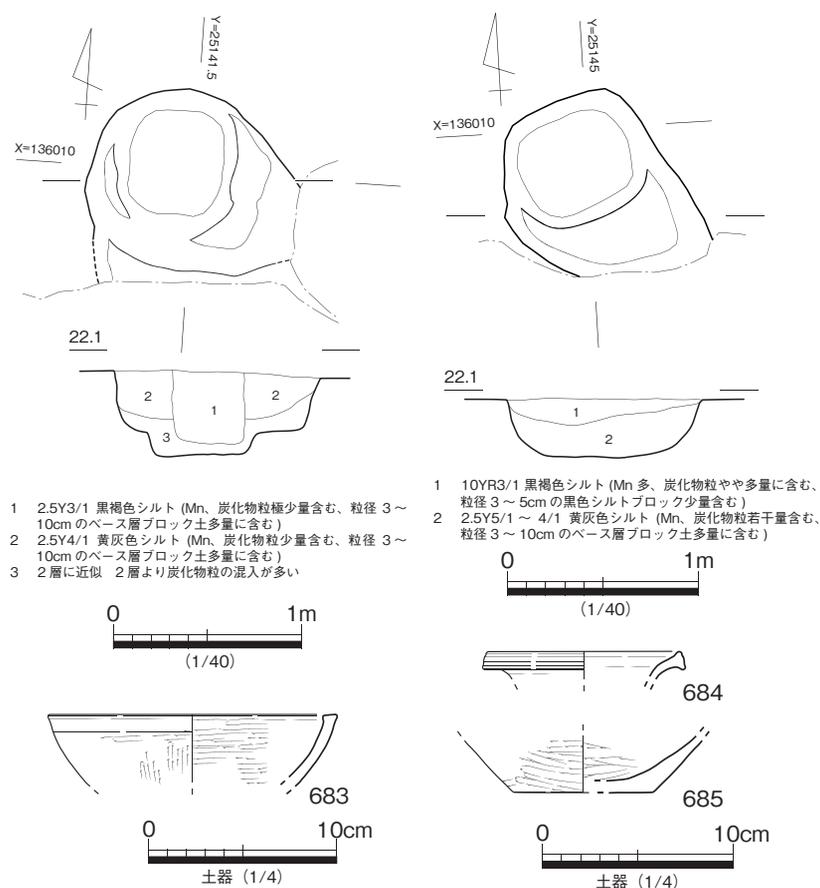


図 113 SP353・SP354

段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(蔵本)

SP354 (図 113)

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。南半部をSD46に切られるため、全形は明らかではない。東西0.88m、南北0.99m以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は0.15mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は黄灰色シルトの単層で、多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器壺(図 113-684.685)等の土器小片やサヌカイトチップが少量出土した以外に、器種不詳の須恵器小片1点が出土した。須恵器片は遺構南半部の上層より出土したもので、調査段階でSD46の遺物が混入したものとする。出土遺物より弥生中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(蔵本)

SP355 (図 114)

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。西半部をSP354に切られるため、全形は明らかではない。東西0.79m以上、南北0.89mを測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は最深部で0.4mあり、西側に浅いテラス面を伴い、北・東壁はほぼ直に近く掘り込まれ、南北断面は箱形に近い。

埋土は2層に細分され、両層とも多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。切り合い関係よりSP354に先行すること、検出位置等の情報より、弥生時代中期中葉を前後する時期に位置付けられるものと思われる。(蔵本)

SP356 (図 114)

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。南半部をSD46に切られるため、全形は明らかではない。東西1.02m、南北1.23m以上を測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は0.3mあり、断面形は逆台形状を呈する。

埋土は2層に細分され、下位層を中心に多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された

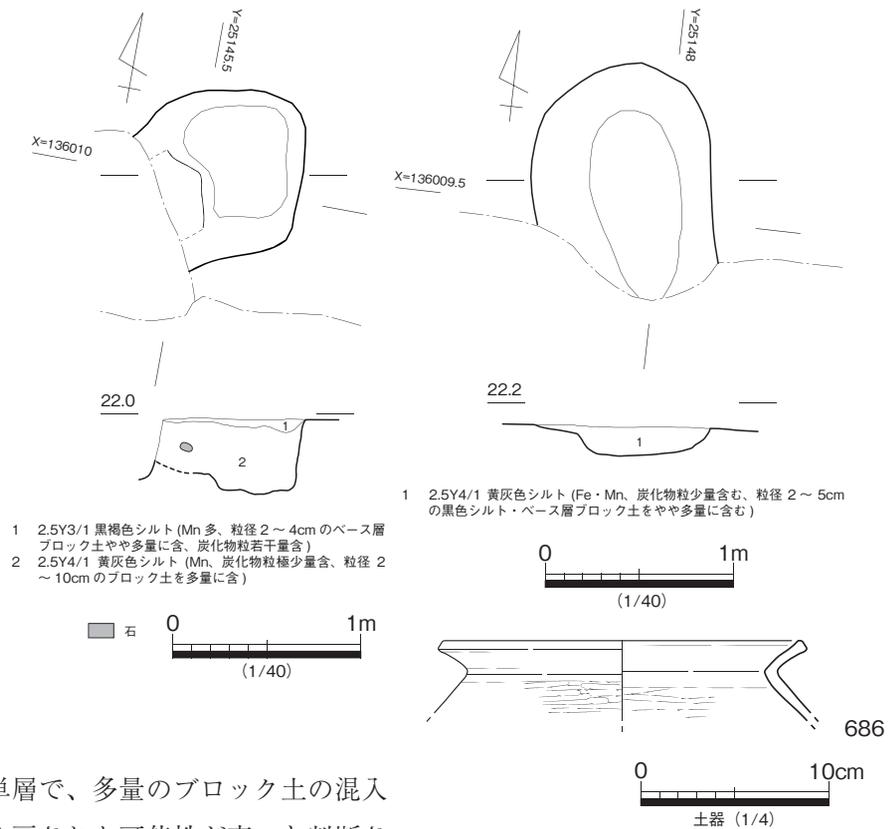


図 114 SP355・SP356

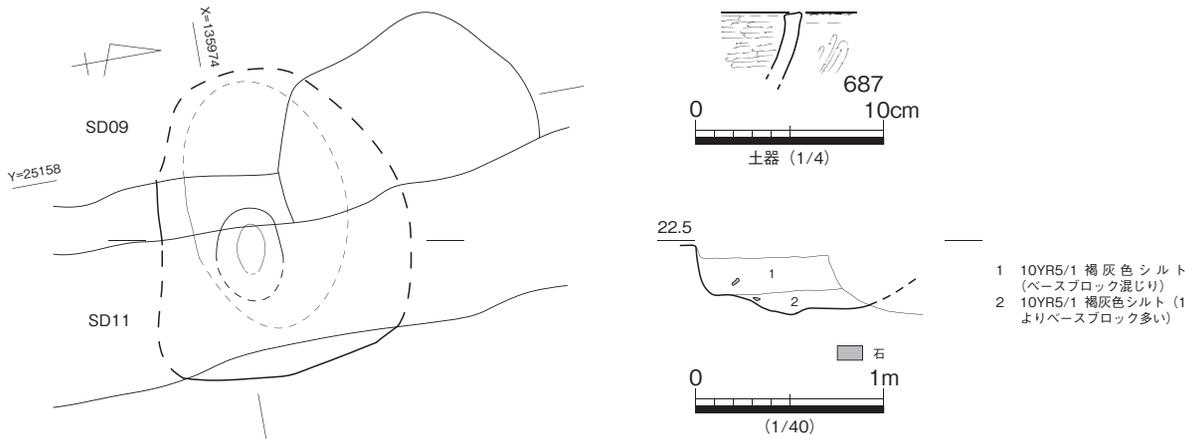


図 115 SP365

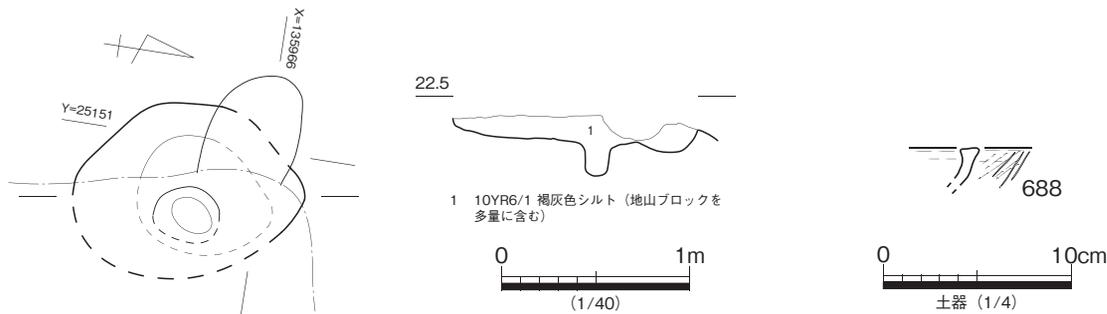


図 116 SP426

可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器甕（図 114-686）等の土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。（蔵本）

#### SP365（図 115）

4区南部の第2面（IV層上面）で検出された柱穴である。西部は古代の溝 SD09、西部は古代の溝 SD11 と重複し、北部は弥生時代中期後半の掘立柱建物 SB06 の柱穴 SP316 と重複し削平される。残存部分から SP365 の平面形はいびつな楕円形で、長軸 1.7 m、短軸 1.2 m と推定される。底面には径 0.4 m の凹みがあり、凹みの底面までの深さは 0.4 m である。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。687 は弥生土器鉢で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SP365 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

#### SP426（図 116）

4区南西端の第2面（IV層上面）で検出された柱穴である。東部は攪乱によって削平されており、底面付近だけが残存する。また、北部は中世の掘立柱建物 SB05 の柱穴 SP206 と重複し、削平される。残存部分から SP426 の平面形はややいびつな円形で、径 1.4 m と推定される。底面には径 0.3 m の凹みがあり、凹みの底面までの深さは 0.4 m である。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。688 は弥生土器鉢で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調・土質から SP426 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

#### SP427（図 117）

1区北端部で検出した土坑である。SR01 底面で検出したが、後述する SP353 等の近接する土坑群がいずれも SR01 上層下面より掘り込まれていることから、本遺構も本来は同様の位置より掘り込まれて

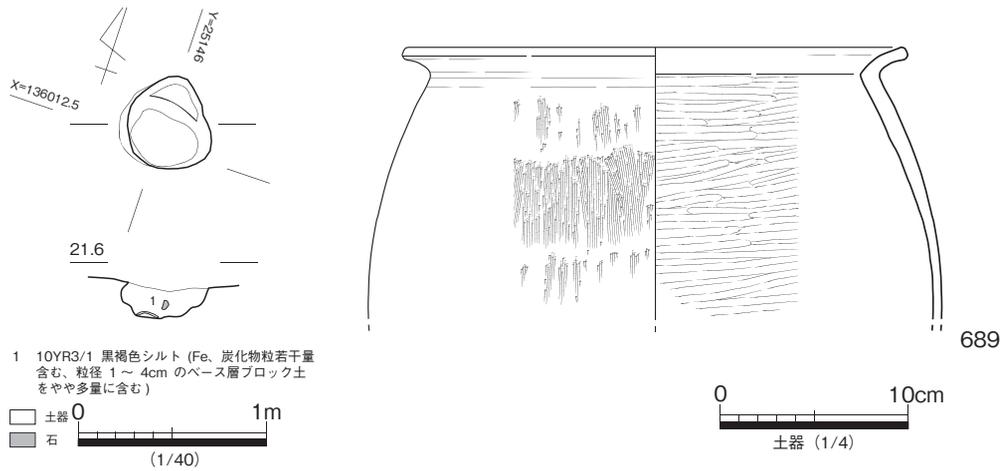


図 117 SP427

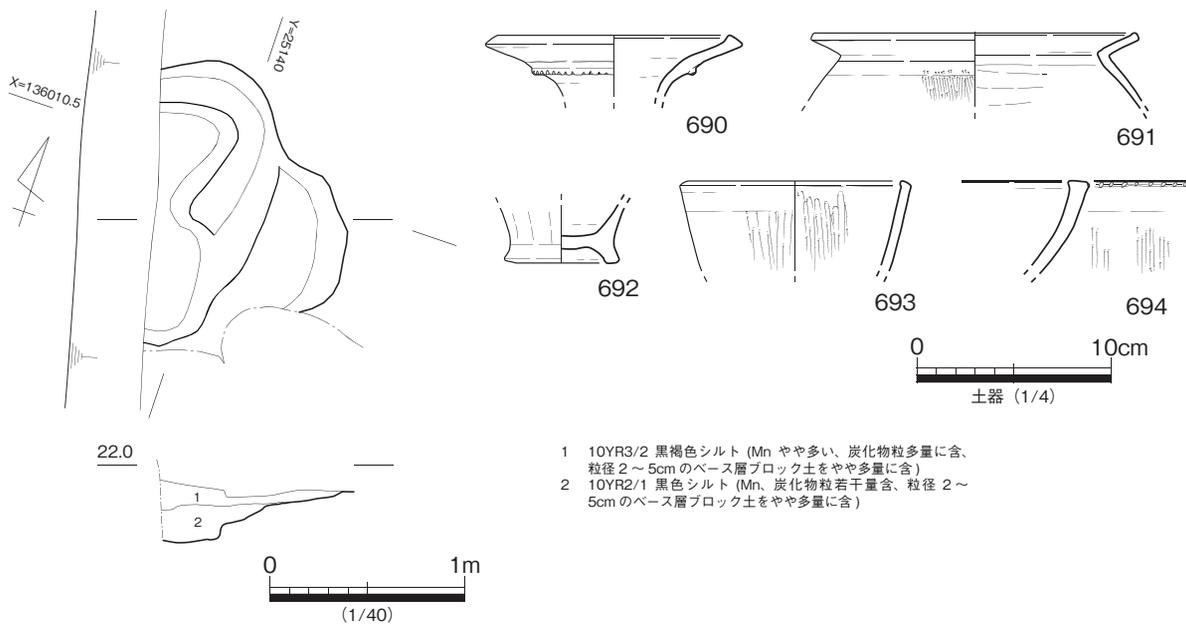


図 118 SP483

いた可能性が考えられる。検出位置で、東西 0.43 m、南北 0.48 m を測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を呈する。残存深は 0.18 m あり、断面形は概ね歪な箱状を呈し、一部袋状を呈する部分もある。

埋土は黒褐色シルトの単層で、埋土中に多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器甕（図 117-689）等の土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる（蔵本）

SP483（図 118）

1 区北端部 SR01 上層下面で検出した土坑である。南半部を SP484・SD46 に切られ、西半部は調査区外へ延長するため、全形は明らかではない。南北 1.48 m 以上、東西 0.98 m 以上を測り、平面形は不定形を呈するとみられる。残存深は 0.45 m あり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 2 層に細分され、両層ともやや多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器壺（図 118-690）、甕（同図 -691.692）、台付鉢（同図 -693.694）等の土器小片が出土

した。周辺に分布する土坑群の中では、やや遺物量は豊富である。出土遺物より弥生中期前半新段階を中心とする時期に位置付けられる。(蔵本)

SP484 (図 119)

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。南半部をSD46に、東半部をSP353にそれぞれ切られるため、全形は明らかではない。南北0.62m以上、東西0.75m以上を測り、平面形は現状で隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は0.33mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は2層に細分され、下位層を中心にやや多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。切り合い関係よりSP353に先行し、SP483に後出すること、検出位置等の情報より、弥生時代中期前半新段階を上限とする中期中葉頃に位置付けられる。(蔵本)

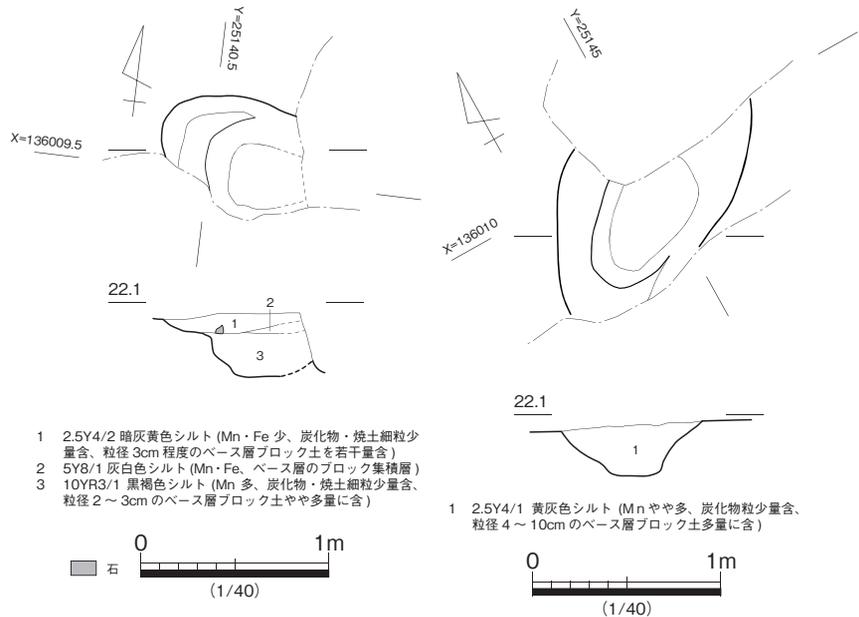


図 119 SP484・SP489

SP489 (図 119)

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。

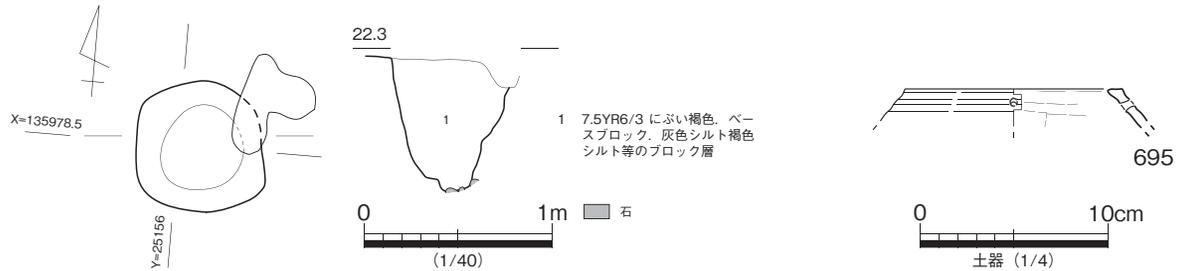


図 120 SP506

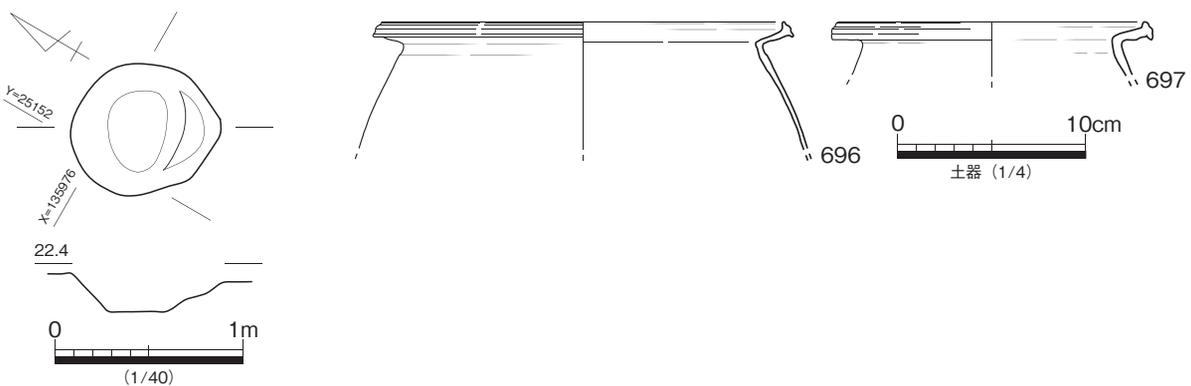


図 121 SP514

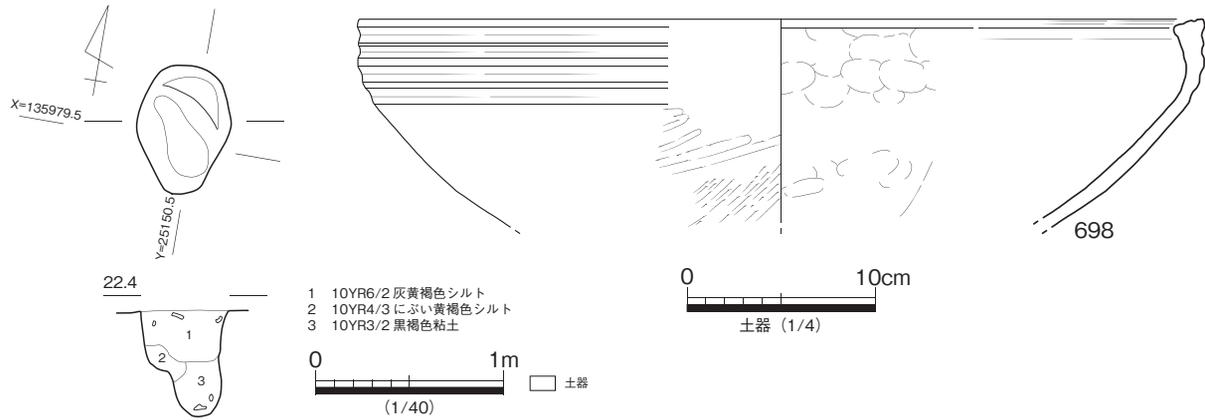


図 122 SP543

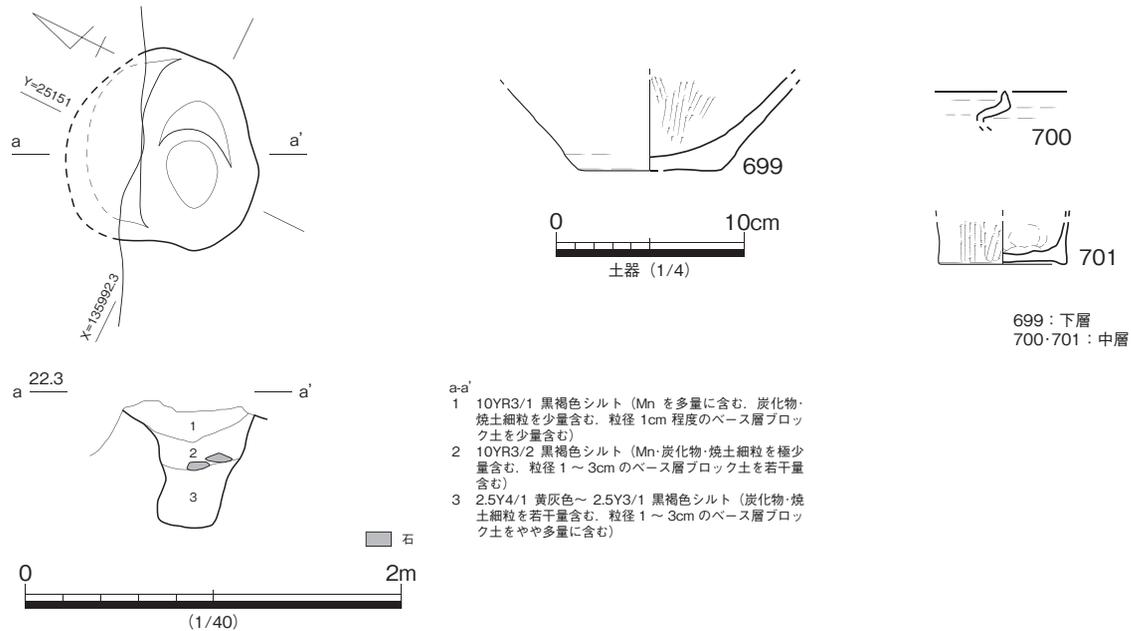


図 123 SK20

北東部を SX19 に、南半部を SD46 にそれぞれ切られるため、全形は明らかではない。長軸 1.09 m 以上、短軸 0.9 m を測る。残存深は 0.28 m あり、底面が若干深く掘り込まれ、断面形は 2 段掘り状を呈する。

埋土は黄灰色シルトの単層で、多量のブロック土の混入が認められ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。周辺の遺構配置や検出位置等の情報より、弥生時代中期中葉を前後する時期に位置付けられるものと思われる。(蔵本)

SP506 (図 120)

4 区東部の第 2 面 (IV 層上面) で検出された柱穴である。東部は古代の溝 SD09 と重複し、削平される。平面形はややいびつな円形で、径 0.7 m、深さ 0.5 m である。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。695 は弥生土器無頸壺で、弥生時代中期後半に属する。

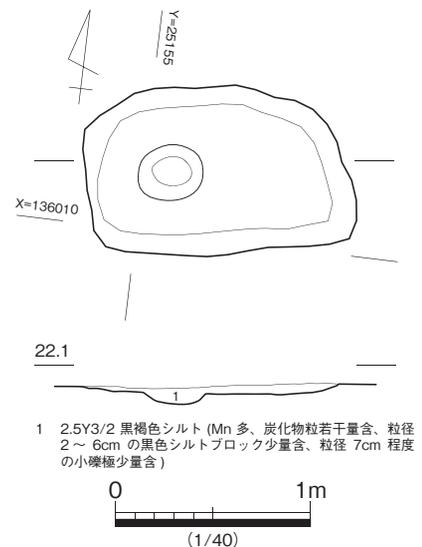


図 124 SX19

出土遺物や埋土の色調・土質から SP506 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SP514 (図 121)

4区ほぼ中央部の第2面 (IV層上面) で検出された柱穴である。弥生時代後期の土坑 SK04 と重複し、削平される。平面形はほぼ円形で、径 0.7 ~ 0.8 m、深さ 0.2 m である。遺物は弥生土器片が数点出土しただけである。696・697 は弥生土器甕で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物から SP514 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

SP543 (図 122)

4区北部の第2面 (IV層上面) で検出された柱穴である。平面形はいびつな楕円形で、長軸 0.7 m、短軸 0.5 m、深さ 0.6 m である。遺物は土器片数点とサヌカイト小片が出土した。698 は弥生土器鉢で、弥生時代中期後半に属する。出土遺物から SP543 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

柱穴

SK20 (図 123)

2区北端の第2面で検出された柱穴である。北部は中世の溝 SD60 と重複し、削平されるため全体は不明である。平面形はややいびつな円形、径 1.0 m、最も深いところで 0.9 m である。遺物は少量の土器片が出土した。大半が 2・3層からの出土である。699 は弥生土器壺の底部、700・701 は弥生土器甕である。これらは弥生時代中期後半に属することから、SK20 は弥生時代中期後半のものと考えられる。

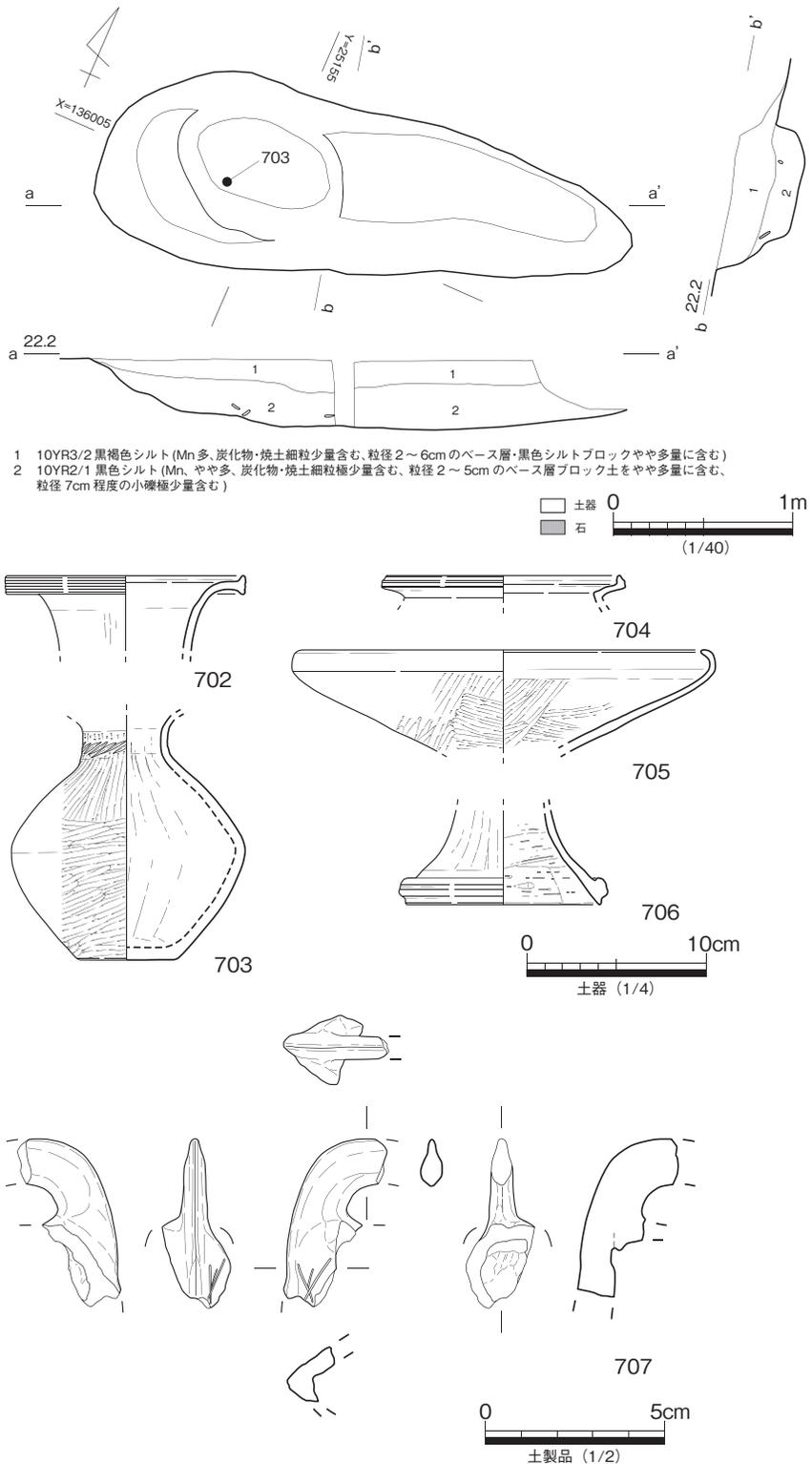


図 125 SX25

## 土坑

### SX19 (図 124)

1区北端部SR01上層下面で検出した土坑である。切り合い関係より、SP489より後出する。東西1.31m、南北0.84mを測り、平面形はやや歪な隅丸長形状を呈する。残存深は0.1mと浅く、断面形は皿状を呈する。中央やや西よりの底面で、長径0.3m程度の平面楕円形の落ちが認められたが、この部分に埋土の相違は認められなかった。

埋土は黒褐色シルトの単層で、自然堆積の可能性が高い。

遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。周辺の遺構配置や検出位置等の情報より、弥生時代中期中葉を前後する時期に位置付けられるものと思われる。(蔵本)

### SX25 (図 125)

1区北半部で検出した土坑である。SD51により一部攪乱を蒙るが、概ね全形はとらえられた。東西2.98m、短軸1.10m以上、平面形はやや歪な長楕円形を呈する。残存深0.38m、断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は、2層に細分された。いずれもベース層ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺(図125-702.703)、甕(同図-704)、高杯(同図-705.706)、銅鐸形土製品(同図-707)等がコンテナ1箱程度出土した。出土した土器類は中期後半新段階(古)にまとめ、本遺構の埋没時期を示す。銅鐸形土製品は、残存高4.9cm、正面幅2.2cmの鈕より身上端にかけての半載した小片である。鈕は平面隅丸台形状を呈するとみられ、断面は外縁部がやや薄く、内側がやや歪な菱形に厚みをもって成形されており、意匠的には外縁付鈕式もしくは扁平鈕式銅鐸を模した可能性が考えられる。供判する土器の年代観からすれば、扁平鈕式銅鐸を模した可能性が高く、本遺跡からも扁平鈕式名東型銅鐸の破片が出土している点は興味深い。鈕の外縁から連続する鱗の部分、身部と一体化してやや不明瞭である。身部は大半を欠損するため全形は不明だが、残存部から判断する限り、比較的実物に忠実に模されている可能性は高い。図右面にヘラ状工具による若干の線刻が認められるが、何を表現したものかは不明である。なお、身・舞部の型持孔の有無は、欠損により不明である。土製品の破断面は磨滅しており、破碎後埋没したことが想像される。土坑内からは、同一個体の可能性のある破片は確認されず、意図的に破碎・埋納した可能性は低いと判断される。また、胎土は長径約1~2mmの石英・長石粒が目立つ素地粘土が使用されており、色調の点でも供伴する在地産と考えられる土器類の素地粘土と近似している。(蔵本)

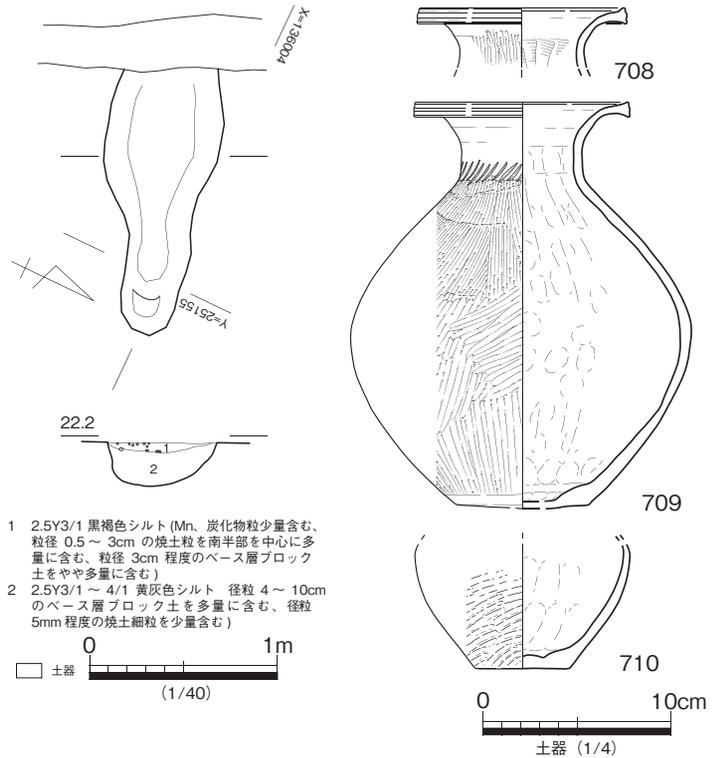


図 126 SX40

#### SX40 (図 126)

1区北半部で検出した土坑である。西端をSD43により攪乱を蒙るが、概ね全形は捉えられた。長軸1.43 m以上、短軸0.61 m、平面形は歪な長楕円形を呈する。残存深0.23 m、短軸方向の断面形は概ね碗底状を呈する。埋土は2層に細分され、両層中には多量のベース層のブロック土が混入することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、上位層南半部には多量の焼土粒が混入する。

遺物は、弥生土器壺(図 126-708～710)等がコンテナ1箱程度出土した。外面にタタキの施された710は、後期に下る可能性もあるが、口縁部内面の加飾がなく体部中央が強く張る広口壺709の形態より、中期後半新段階(古)に位置付けられると考える。(蔵本)

#### SK19A (図 156)

2区西部の第2面(IV層上面)で検出された土坑である。弥生時代中期後半の遺構であるが、SK19Bと同時に調査されていることから、SK19Bと同図で報告する。SK19A・SK19Bは1遺構として調査を行ったが、遺構の形状や出土遺物の時期を検討した結果、2遺構と考えた。SK19Aの北部は弥生時代後期の土坑SK19Bと重複し、削平され、南部は調査区外に連続するため全体は不明である。平面形は長楕円形で、現存長2.0 m、最大幅1.0 m、中央部が深く、最大深0.5 mである。埋土下部には炭化物・焼土粒を含む灰色粘土が堆積していた。上部には地山土のブロックを含む黄灰色シルトが堆積しており、人為的に埋め戻されたことがうかがわれる。埋土下部からは整理箱2箱程度の土器小片が出土した。960・961・963は弥生土器甕、962は弥生土器脚部片である。土器はいずれも弥生時代中期後半に属することから、SK19Aは同時期のものと考えられる。

#### SD70 (図 127)

2区西端の第2面(IV層上面)で検出された溝である。南から北に向かう。溝の南部は中世の土坑SX47、北部は中世の溝SD60と重複し、削平される。また、西部は調査区外に連続するため、不明であるが、幅0.5 m以上、深さ0.4 mである。遺物は弥生土器片、サヌカイト小片が出土した。711は弥生土器甕、712は弥生土器壺、713は弥生土器の底部で、これらは弥生時代中期後半に属する。出土遺物や埋土の色調や土質からSD70は弥生時代中期後半のものと考えられる。

### 低地帯

#### 1区SR01 (図 128～137)

1区北端部で検出した埋没旧河道で、19次調査区で大きく屈曲し、後述する2区SR01と一連の旧河道であることが判明している。本調査区では、流路南岸部を確認したのみで、北半部は調査区外へ延長する。流路幅6.37 m以上、残存深約0.9 mを測る。検出面よりベース層は緩やかに落ち込み、断面形は概ね逆台形状ないし碗底状を呈する。埋土は上・中・下層上位・下層下位の4層に分層され、いずれもシルトないし粘土層が堆積しており、明瞭な流水堆積を認めない。19次調査区で下層は3層に細分されているが、本調査区では2層に細分するに留まった。したがって、下層各層の分層単位は、本調査区と19次調査区とは対応しない。中層上端南縁は、ほぼ直線状に東西に検出され、以下南岸斜面部は数段の緩やかな雛段状のテラス面が確認された。人為的な自然地形の改変の可能性も考えられたが、調査範囲に限られることもあり、断定するまでには至らなかった。中層上面で、既述したSD50を検出している。また、上層を掘り下げたベース層上面で、SP483・489等を検出し、これらは中層の堆積より後出する可能性がある。

遺物は、各層毎に取上げを行い、全体でコンテナ約20箱の弥生土器・石器が出土している。大半は

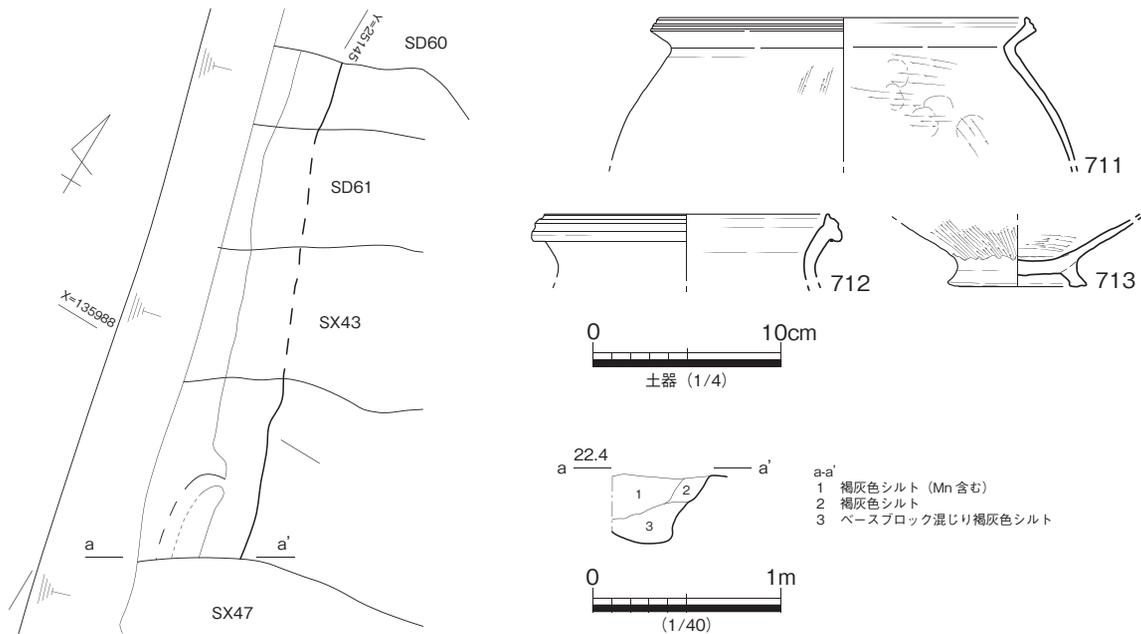


図 127 SD70

下層より出土した弥生土器で、上・中層からの遺物の出土は乏しい。

上層出土の遺物には、弥生土器広口壺（図 129-714）、鉢（同図 -715）、土製紡錘車（同図 -716）、緑色片岩製の柱状片刃石斧（同図 -717）がある。詳細な時期を特定するには資料不足の感が否めないが、概ね終末期前葉を前後する時期に位置付けられると考えられ、19次調査区での様相と矛盾しない。

中層出土の遺物は、弥生土器壺（同図 -720）、甕（同図 -718.719）を図示したのみである。出土遺物はいずれも中期後半古段階を中心とする時期に位置付けられると考えられる。なお、19次調査では、本層準出土遺物は弥生中期後半古段階から弥生後期前半新段階までの資料を含むとされる。

下層上位からは、弥生土器壺（図 129・130-721～742）、甕（図 130・131-743～760）、高杯（図 131-771.772）、台付鉢（図 131-761～770.773～778）、鉢（図 132-779.780）、蓋（同図 -783）、人形土製品（同図 -784）、サヌカイト製打製石鏃（同図 -785～787）、結晶片岩製（図 132-788.789）の両刃石斧が出土している。壺は、口縁部内面を中心に櫛描文で加飾する広口壺（721～724.726）、比較的長い頸部を有し基部に突帯を貼付する広口壺（727）、ラップ状に開く口縁部を有する広口壺（725）、直口壺（732.733）、短頸壺（728）、細頸壺（729～731）、無頸壺（734～737）、長頸壺（738）がある。この中でやや長頸化した広口壺（725）は、端部の下方への引き出しが強く、また頸基部に刺突文を有し、弥生中期前半新段階に下る。甕はくの字外反する口縁部を有するものと、頸部に押捺突帯を有するもの（755）がある。778は、774.775のジョッキ形鉢の把手となる可能性が高い。頂部に摘みを有し、径約7cmに復元される円盤状を呈する783の蓋は、2孔1対の小円孔を穿ち、無頸壺あるいは細頸壺の蓋と考える。人形土製品は、全長5.2cm、頭部と四肢を欠損する胴部の破片である。胴部中央で2片に割れて出土した。胸部に乳房と思われる膨らみがあり、女性を表現したと考えられる。臀部は破損し、性器の表現や衣類を示す線刻等はなく、裸身かどうかは不明である。両腕先端は丸みを帯び、破損後の磨滅の可能性はあるが、本来的に写実的な腕が表現されていたかは疑わしい。脚部についても同様なことがいえる。一方頭部は明瞭な破断面が残り、形状は不明だが、頭部が表現されていた可能性は高い。また、胎土は長径約2～3mmの石英・長石粒が目立つ素地粘土が使用されており、色調の点でも供伴する在地産と考えら

れる土器類の素地粘土と近似しており、出土位置からも当該期の土製品と考える。これらの資料は、中期後半古段階が多数を占めるものの、一部に中期後半新段階までの資料が含まれる。

下層下位からは、弥生土器壺（図 133-790～図 134-813）、甕（図 134-814～図 135-842）、高杯（図 136-845）、台付鉢（図 136-847～図 137-863）、分銅形土製品（同図 -864・865）、サヌカイト製石鏃（同図 -866）、結晶片岩製片刃石斧（同図 -867）、サヌカイト製敲石（同図 -868）、砂岩製砥石（同図 -869）が出土している。壺をはじめとする各器種の組成は、下層上位のものとはさほど大差はない。長頸壺 792 は、口縁部から体部上半にかけて 4～5 条の沈線をほぼ等間隔に描き、頸基部にヘラ状工具により線状の刺突を加えたもので、類出する器形ではない。甕は、体部内面をミガキによりケズリ等の調整を消し去るものを多く認める。ジョッキ形鉢 856.860 は、接合はしないが、胎土・調整等より同一個体の可能性が高い。分銅形土製品 864 は櫛描原体による列点文が、865 にはヘラ状工具で曲線を描いたのち、その両側に 2 列に棒状原体による刺突文で加飾し、側面から裏面にかけて多数の小円孔を穿つ。叩石 868 は、周縁を中心に顕著な敲打痕を、表裏面中央部には磨滅痕をそれぞれ認める。砥石 869 は大きく欠損するが、不定形な板状砂岩垂円礫を利用したと考えられ、表裏面及び側面に使用痕を認める。出土遺物より、本層は弥生中期前半新段階から中期後半古段階の時期幅の中で捉えられる。（蔵本）

## 2区 SR01（図 138～140）

2区北端部で検出した旧河道で、既述したように1区 SR01 と一連のものである。幅 7.8 m 前後、残存深 0.85 m、断面形は概ね碗底ないし逆台形状を呈する。埋土は1区同様4層に細分された。本区では、下層下位層中の比較的広い範囲で、多量のベース層の小ブロックの混入が確認されたが、人為性を含めた混入の要因について明らかにすることができなかった。

下層を中心にコンテナ約 10 箱の遺物が出土した。上層からは、重複する遺構により大きく削奪されたこともあり、図化可能な遺物は出土していない。

中層出土の遺物も乏しい。掲載した細頸壺（図 138-870）は中期前半新段階の特徴を示し、本来は下層に帰属した遺物と考える。分銅形土製品（同図 -871）は、接合はしなかったが、表面の文様より同一個体と考え図示した。櫛描き直線文や弧状文の周囲を刺突文で飾り、側面から裏面に多数の小円孔を穿つ。

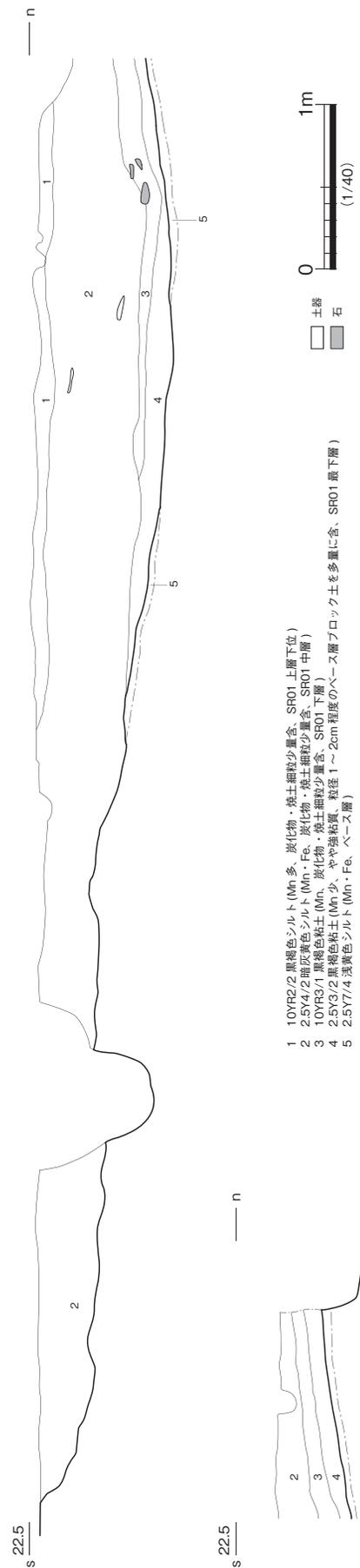
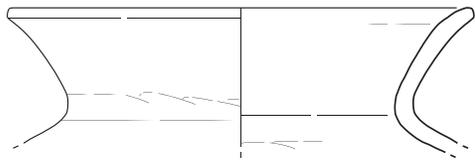
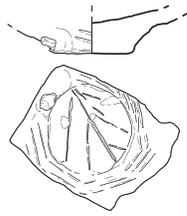


図 128 SR01(1)

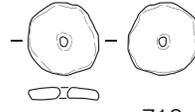
上層



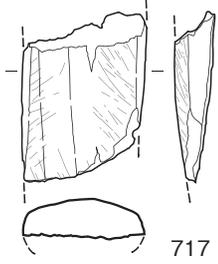
714



715



716

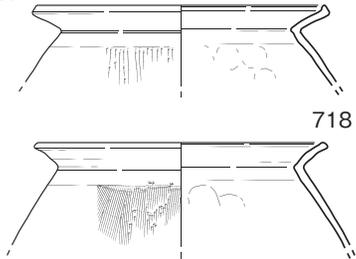


717

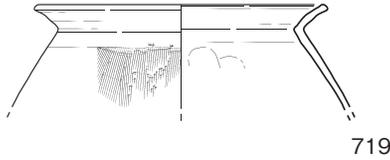


石器 (1/2)

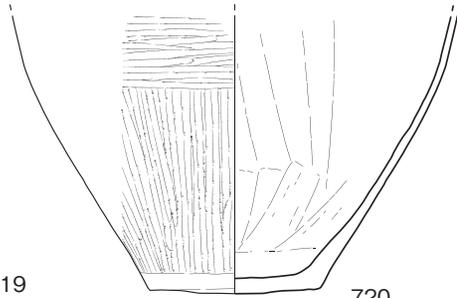
中層



718



719

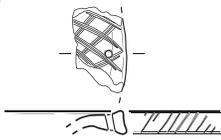


720



土器 (1/4)

下層



721



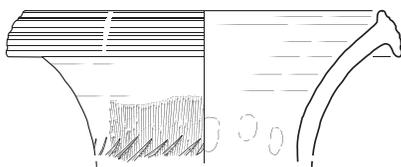
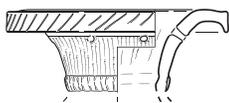
722



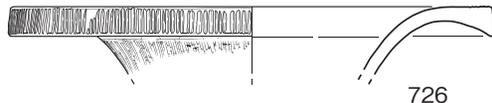
723



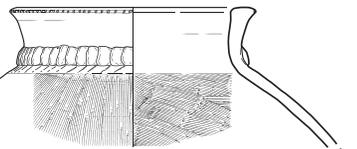
724



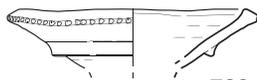
725



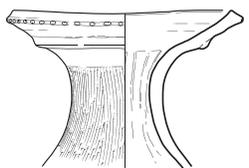
726



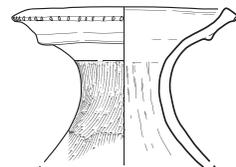
728



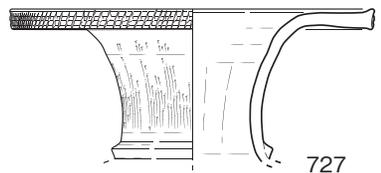
729



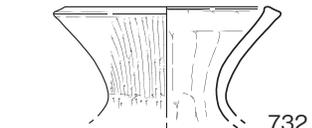
730



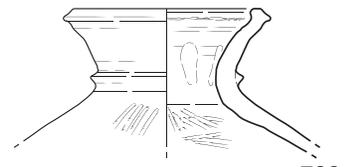
731



727



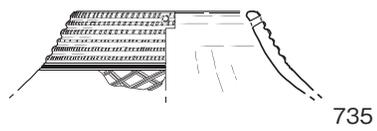
732



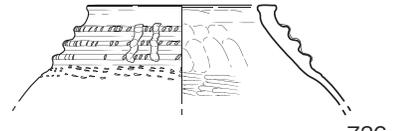
733



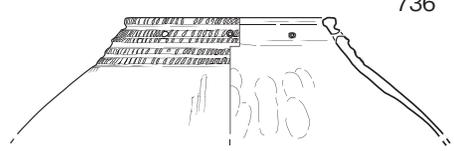
734



735



736



737

图 129 1 区 SR01(2)

下層

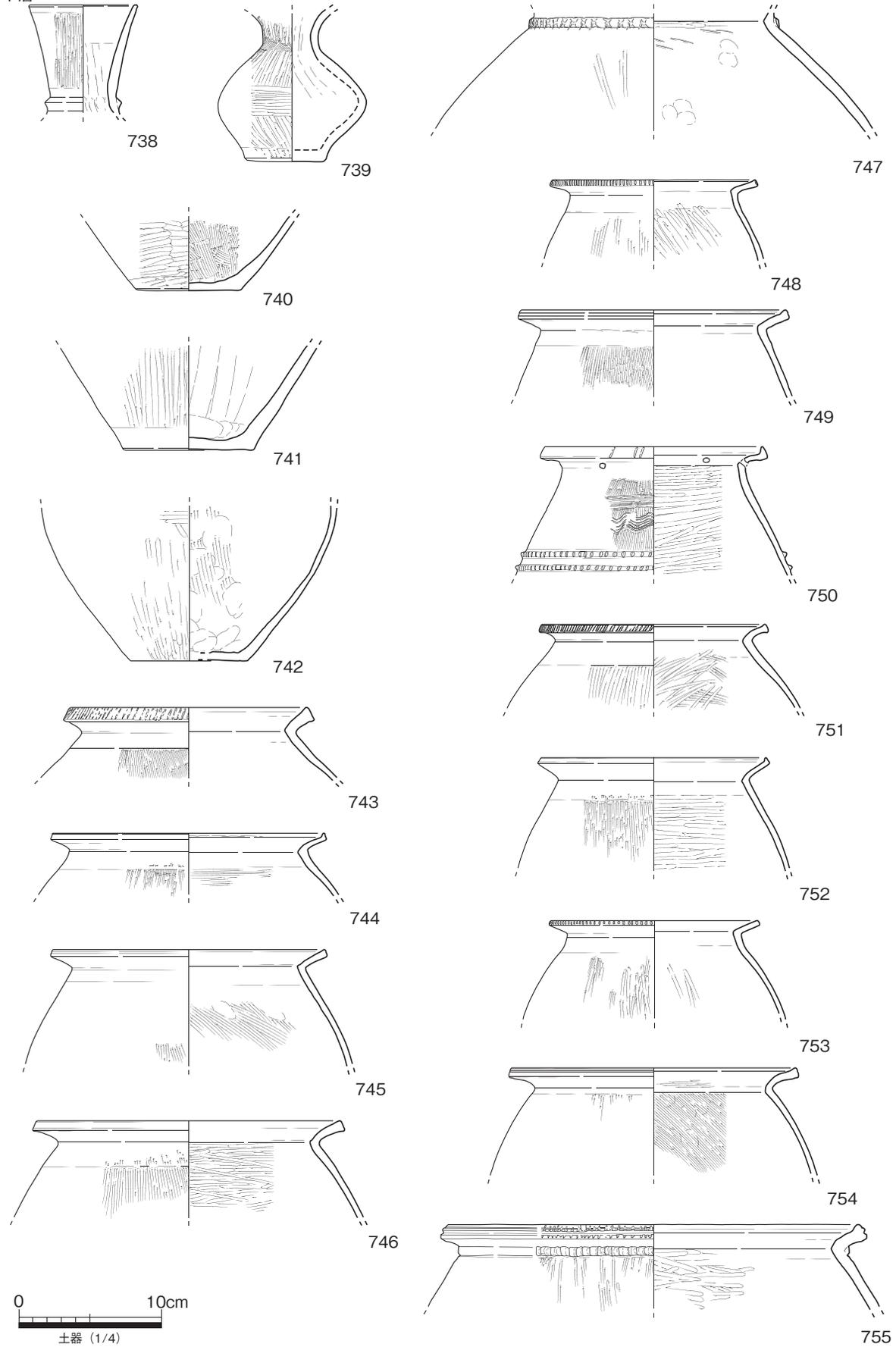


图 130 1区 SR01(3)

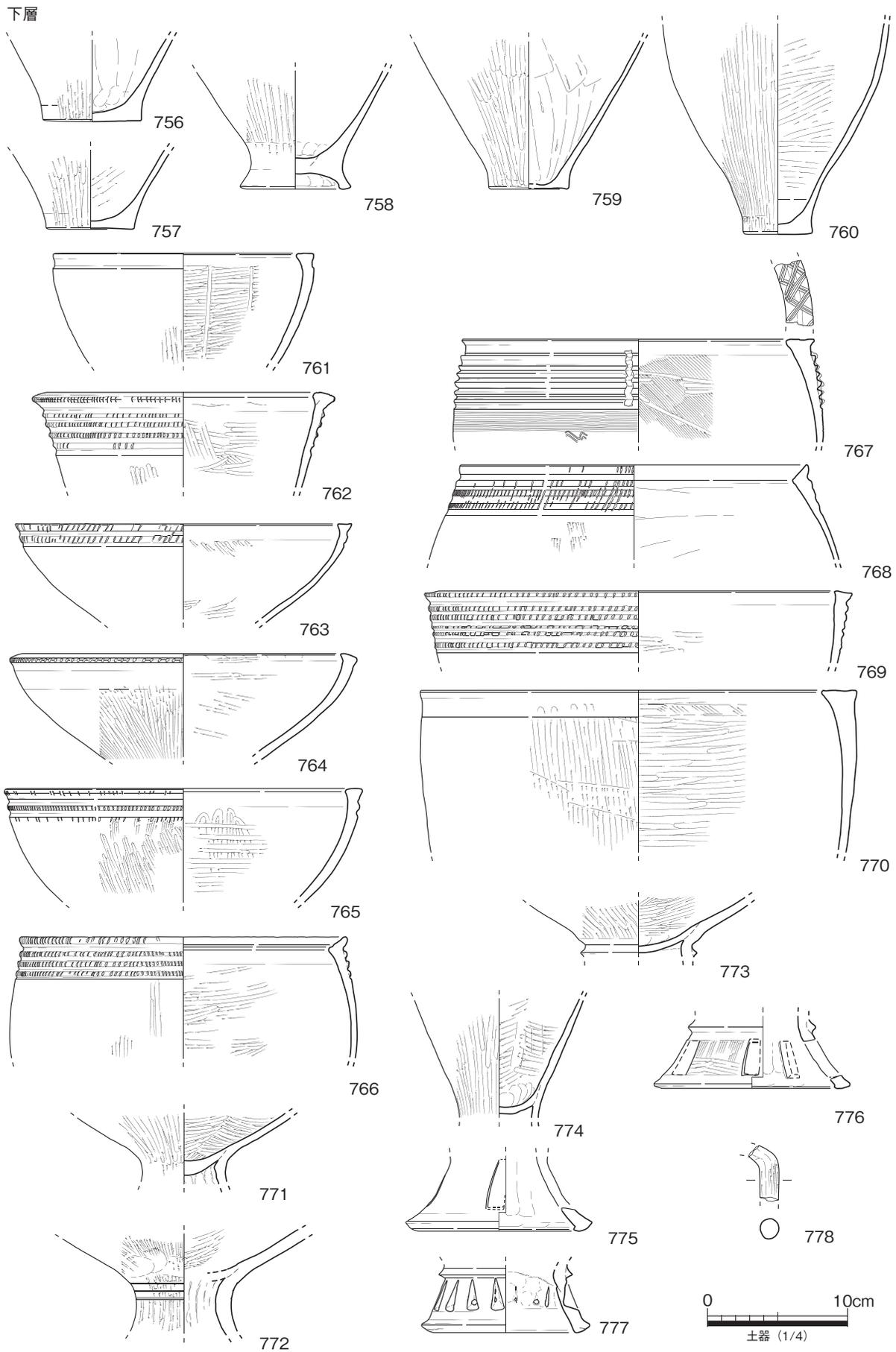
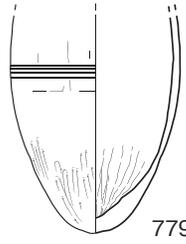
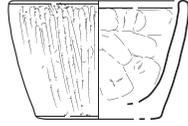


图 131 1 区 SR01(4)

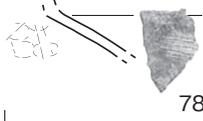
下層



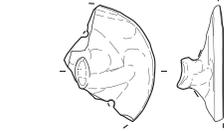
779



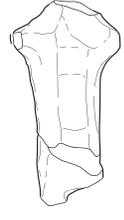
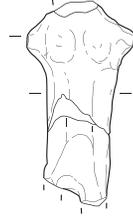
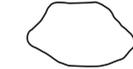
780



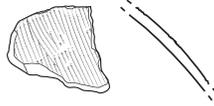
782



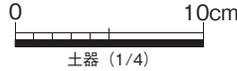
783



784



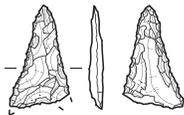
781



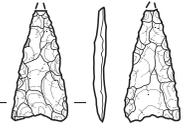
土器 (1/4)



土製品 (1/2)



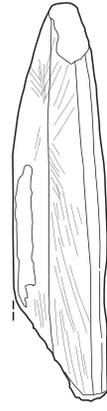
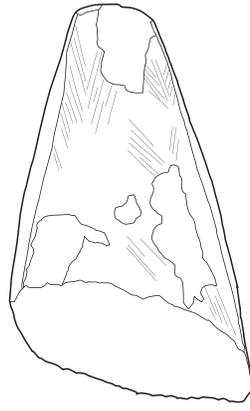
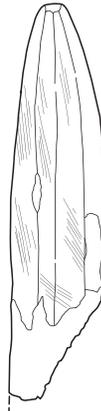
785



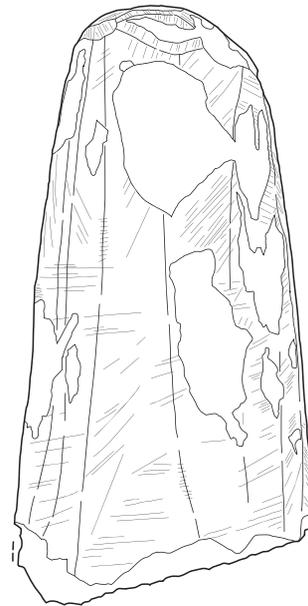
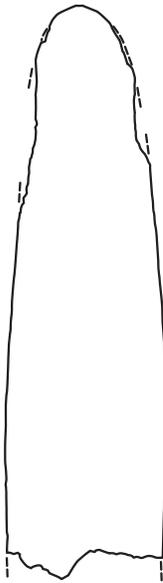
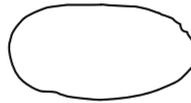
786



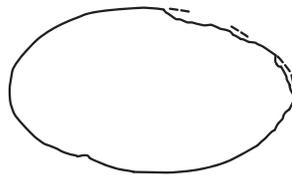
787



788



789



石器 (1/2)

图 132 1 区 SR01(5)